

八、乾山焼

陶法書とその伝播

はじめに

I 陶法書・伝書への道

一、秘伝と伝授

二、往来物・辞書・事典・全書・陶法書

II やきものの秘伝書

一、有田焼

二、乾山焼

三、やきものの製作

III 乾山焼陶法書

一、『陶工必用』

二、『陶磁製方』

三、『陶器密法書』

四、乾山・猪八陶法書の伝播

五、陶法書の比較

おわりに

はじめに

知る者と知らない者、教える者と教えられる者がいる。

分離が明確になったところから伝授・伝受、秘技・秘伝、型の伝承が唱えられるが、技を身につけ、心を練り、内面の充実を遂げて師となる。師は随う者に、悟りを証して允可、奥義を与えるが、その根本は宗教にあるとされる。

密教における法伝授の儀式の秘伝化、禅宗における師弟相承など、師は自らの体験を秘密裡に伝法する。法を継いだ証拠には三衣(袈裟)・一鉢を与え、弟子の能力を承認する。

日本では学問、技芸、武道においても同じ理念が適用された。権威化、神秘化、形式化が必要となり、伝統と称し、それはやがて商人、職人の道へと広がる。が、職人は「からだ」と「かん」で修業を積む。親方の傍らにあつて師の技・呼吸・意気を見・習い、身につける。以心伝心、もとより技芸は師に随つて技を習得、心を練ることが「道」であつた。他者ではなく、受ける己れにすべてがかかる。ことばを用いて秘技・秘伝を伝える極意書など、さらにそれを後生大事に秘蔵する態度などは無意味に近い一面も具えている。

Ⅰ 陶法書・伝書への道

一、秘伝と伝授

近世封建時代、商人は身分制度の最下位に置かれていた。

が、農民から町人、さらに公家・武家・寺社へと、衣・食・住、その他一切の生活必需品を売り、財を成した。

刀に代わり金・銀・銭が力をもった江戸時代、ものを売り利益を得る、その意識・態度・気構えは、商人ばかりか、統治・支配階級の宮廷人・武人・僧侶・神職者へと波及する。公家は久しい伝統に培われた権威・名誉・学問・芸事を売る。武家は武芸を売り、藩における興産奨励、交易ほかに利潤を求める。寺社は神仏を商品化、さらに身分を売るなどの行為に奔走。

日本には、天智天皇代学校が創られていた。唐制を模倣、奈良朝時代には大学となるが、経学・音楽・書学・算学を教導。が、平安期になりそれらは廃退、家学が興り、医学・陰陽道・書学・筆道・絵画・雅楽を修める家が台頭する。私学も始まり、漢詩・漢学・儒学・仏学を以って古道を探り、穢れを去るなど、性情を養うものとして芸能が取り入れられる。女子教育も開始されるが、和歌・書・筆の巧みなことが求められ、僧侶による学問所、図書館の創設も歴史に残る。

鎌倉期は武人の世であった。公家は衰退、武家が政治を掌るが、儒学・仏学を借りて武家独特の生活倫理を成立させる。武士の一族は惣領制に

よって堅く結合。武士道の名のもと、主従関係、御恩と奉公の道を定めるが、それらは理論、知識に裏付けされたものではなく、生活を基盤としてその風習を本居とした。村に居り農民を支配。が、実権はあるものの、背景となる教養に乏しい。平安末期の内乱後、世上には精神的な救済を求め新たな宗教が動きをみせる。貴賤の別なく念仏を唱える、静かに坐す、民間信仰が盛んになるなど活動が活発化。僧籍者の力を借り、武家の教育も始まるが、学問は啓蒙的な儒学・朱子学が軸となり、専ら詩・文は寺院の力を中心に広められた。が、古典、有職故実などの研究は公家文化に依存。なかでも和歌の道は公家社会の特権となるが、特殊な家の伝統であることを誇りとし、権威を守るためには神秘性を加えるなど、秘密化することが行われる。歌道伝授を一例として、和歌、音曲、その他家学・家芸の伝承には興義、家伝などが成立する。極意・極技などを保護、維持することが秘伝となり、「家元」などの呼称はないが、その思考・しくみ・実体は平安末期のこれらの動きに遡る。

秘伝の成立は、宮中を中心に貴族間に伝授を乞う人々が集まったことに起因する。知る者・知らない者、教える者・教えられる者の道が分かれば、専門家・名家・名人と称する人々が出現する。型がつくられ、やがてそれを文章化・文書化することへと進むが、鎌倉期になり口伝・口授と称し、師から弟子へと密かに口頭で伝える伝授法が始められる。基盤は仏教の師弟相伝、武家の惣領制など家族制度に置かれたが、武家では

家の相続は血統によるものとした。口伝には「その家のみの特色」とした精神が盛り込まれるが、室町期、世阿弥元清（一三六三？—一四四三？）は『風姿花伝』に以下のように述べる。

秘すれば花 秘せずは花なるべからず

家は家にあらず 次ぐをもて家とす

秘することの真意と真実、道の真髓の続くことこそ家であるとしたが、花とは申せ、特別に指し示すことではなく、自然の風体にも学べと結ぶ。猿楽がまだ他座との真剣勝負、競演に勝利して王座を手に入れる時代のことであったが、子への伝達、一座の結束、新たな創意・工夫を生み出すための力となることを願ったものである。秘伝とは子孫、同流の限られた血縁者に対して残されたものであった。

秘伝書は、一つに限られた人々・血縁者、二つに不特定多数の人々に向けられたものに大別。求める人々とそれを売り物とする人が絡むが、筆録・覚書の類いから、大勢の人々を対象とする印刷物の類いである。

秘伝の波及・分派は、権門に出入りし、地下の人々との交渉を深めた連歌に始まるとされる。飯尾宗祇（二四二—一五〇二）は半生を旅に過ごすが、越後・関東・九州へと足を延ばし、地方の武家、教養人に京都の文化を伝える。『古今集』を講釈し「古今伝授」を広めるが、江戸時代、それらは宗祇門人、連歌仲間を中心としてさらに地方・民間へと分散。秘伝の意味はなお神祕化、形式化の傾向を深めることになる。

江戸期、文化・芸能活動は、支配階級に加え、富裕町人の参加を得て急激な発展を遂げる。如何なることも人々の関心が高くなければその価値は高まらない。秘伝の価値は大衆が参加、その関心を得たことからさ

らに高められるが、当時秘伝とする芸事には能・謡・茶の湯、花道、料理ほか、絵画、工芸種々があった。時世を反映、儒教道徳、政治制度に従って、家父長的な権力を拡大。組織化・制度化・権力化が図られ、家柄を重んじ、継承・継続、伝統と称するものを尊重する風潮が強化される。学問、技芸にも波及するが、そこに奥義・允可を与えるなどの手立てが生まれ、教える者は知識、技、時間を売り、免許を売る。伝統を保持、正統を伝え残す精神が大事となり、流派の正統を伝える本家本元、家元制度が成立する。

秘伝の類いは、そこに関心が集まれば集まるほどに威力を増す。門人が門人を生む制度も調えられ、伝授を受けた者は他流を習わず、他言せず、伝書の他見も許さないなどの態度が求められる。家元は一切の免許の相伝権を握り、秘技の特権化を図るが、心の表現、秘技において究極などはない。秘伝書などにも決まりはないが、江戸後期、三〇余種の記録が伝承、神道・儒道・仏道、医道・陰陽道、和歌・連歌・俳諧、申楽・舞・音曲、花道・茶道・香道、書道・画工・蹴鞠・囲碁・将棋など、その折流行した文芸を含めれば多種多様な分野が挙げられる。世襲・家伝・血統に固執、その精神は系譜・印譜の尊重へと拡がるが、一子のみには伝える相伝は、流儀においては最も神聖なものと考えられた。別して宮中・貴族間、「みやこ」において流行した芸事・文事、様式・技術は、地方大名、文化人・教養人、何より商人、職人らの憧れの的となる。

「みやこ」は単に都市の代表ではない。天子、王者の住む所、随う貴族、属する人々の活躍する場所であった。権威の象徴、文化の蓄積、手工業では技術・技法、趣向・様式、生産においてもその先端を往く処であり、

文化は「みやび」、洗練された教養、磨き上げられた表現の美へと繋がりますが、そこに居（ま）することは衆（しゅう）にすぐれた者の意が付属する。

京都は古代以来、政治・文化・経済においても独占的な地位を保持していた。都（みやこ）の意識は、政治が関東へ移った江戸期を通じて、高貴性、規範性、優越性を保つが、体制は原則として町組による自治組織が基盤であった。町奉行も行政には干渉しない所であり、下京（しもぎやう）・上京（かみぎやう）地域を軸として町組を組織、町年寄（じしよ）五人組などが取り仕切る。中世以来、町人による自治行政は受け継がれるが、江戸前期まで京都は王朝以来の伝統を蓄積、文事・芸事、宗教、商・工業の中心都市であった。地方の人々からはつねに羨望・憧憬（しょうけい）される町であり、京都を模倣、町並み・風俗・習慣を借り、小京都などの意識も生まれた。

江戸はかつて「鄙（ひな）」（田舎）であった。が、家康の入府以来、慶長から寛永期に涉り町づくりも完成、京都を凌駕（りやうが）する都市に成長する。衣食住、すべてに京都・大坂を凌ぐ町となるが、貴族性を底辺におく町人主体の上方文化は、江戸文化、武家とそれに伴う町人の文化・制度へと移行する。乾山は、選り抜かれた都人（みやこびと）の誇りを胸に江戸下向を決したものである。文人としての自負、年を重ねて具えた見識もあり、陶工としては、御所・仁和寺など権門に出入り、希代（きだい）の「みやこ」のやきもの師であった野々村仁清の陶法を継ぐ自信と優越心。心地よく江戸に生き、人と交わり、その生涯を終えたものと推量する。短い期間に佐野へも渡り、地方の数寄者・文化人に陶技・陶法を伝授する。

萬古（ばんこ）焼の祖となった沼波弄山（ぬなみろうざん）は京都に滞在、みやこにおける千家流の茶の湯を習得。実技を修め、茶事を学び、道具知識を蓄えるが、その行

動も地方人のみやこへの憧憬に直結する。地方の富裕町人は、当時足繁く京都間を往来。文化・芸能を鑑賞、翫（くわん）ぶなど、みやこの意識・美意識を吸収するが、乾山の江戸下向、佐野訪問を鑑みて、実技を学ぶ、陶法書を受理するなど、同じ認識の上に立つものである。知識は行動・実践へと結びつくが、技術書・手引書などの出版が促され、秘技・秘伝、免状の受理へと繋がってゆく。

やきものの伝書は、土合わせ、釉薬（ゆうやく）、絵具（えのぐ）の原料・顔料（がんりょう）を秘とするものが大半である。人物より技の伝承を尊重。江戸期以前には見出し得ないが、現存する秘伝書では寛文八年高取焼「上々御薬帳次第」、元禄三年有田焼「涌井田柿右衛門家文書」が古い。元文二年乾山陶法書はそれに次ぐが、遡（さかのぼ）って京焼祖（おしこうじ）押小路焼・楽焼、様式の典型を築いた仁清焼（にんせいやき）に触れ、自らの秘伝を記す。西鶴も述べるように当時は金の世の中、金さえあれば何事も可能となる風潮が強く支配。数寄者・好事家は伝書を求め、印刷物を手に入れるなど、経済力は知識の蓄積を助け、茶の湯・俳諧の精神に則（のっと）って、自ら楽しみ、実践するとした道が開かれる。

乾山を佐野へ招いた大川頭道の『陶器傳書』には、乾山焼に関し、秘伝（内窯焼孫兵衛伝）の到来、庭焼用に詭（か）えた素焼（すやき）の品々・窯のこと、江戸における材料店の所在地などが記されている。このたびさらに同手控には『和漢諸道具古今知見鈔』（『万宝全書』）、『大平広記百工秘術』、『楽焼秘囊』など、出版物からの抜萃・書写を見つけた。

学びの道は多く出版物が切り開く。「字書」（文字典）・「辞書」によって文字を知り意味を学び、その蓄積は「事典」によって導かれるが、「全書」はあらゆる方面の学説・文献・著述を教えるなど、ここに至り自作・

自演の門が開かれる。当時の情報文化の構造を把握。伝書は単に秘技・秘伝、技術と相伝を伝えるのみならず、実技・習練の域を超越、知識・認識の資源としての役割も担ったことに気付かされる。

二、往来物・辞書・事典・全書・陶法書

民衆の教育は寺子屋から始まった。

儒教倫理・道徳を基盤として、読み・書き・算盤など、手習いから読もの、躰・芸能・学文、女子は裁縫なども教えられた。日常生活、諸事万般を習い、年齢に合わせた嗜み、専門的な知識を身につける。教科書は往来物が主体であり、往来物は正倉院にも中国書の影響下、それを倣った書物があると伝承。書簡形式、文章例として用いられた。

(一) 往来物

① 『明衡往来』（雲州消息）…平安後期、藤原明衡（九八九頃—一〇六六）選。書簡・模範文例集。最古の往来物であるが、貴族の日常、故実、儀礼などを伝える。

② 『十二月往来』…鎌倉期、撰者不明。一二月、月ごと時宜折々の消息を伝え、模範文例を示す。歴史物語、行事、季節感などが取り入れられ、のちの往来物の手本となる。

③ 『庭訓往来』（二巻）…南北朝期、至徳三年（一三三六）本が伝承。撰者不明。月毎の消息文に要語を挟み、文例と語彙集、双方の知識を与える形式。武家社会に即した家庭教育、生活に関する実用知識を集成。往来物の代表となり、必要な実用知識を身につけることを教導。

④ 『尺素往来』（二巻）…室町中期、一條兼良（一四〇二—一四八二）著と推

定。一通の消息に依り構成、衣食住・教養・遊芸などに関する語彙を集成。中世における公家・武家文化を伝える。

江戸期の往来物は目的に応じ著される特色がある。

公家・武家対象の既成往来物に比し、幕府の施策に従って士・農・工商、身分や目的に合わせたものが現れる。無智は危険、が、有能も危険である。為政者・支配者らは政治・専制に都合の良い教化を図るが、民衆には分相応の生活に即した基準を提示。教化政策の根本を忠孝・勤勉・節約に置くが、風俗を正し、礼儀を守り、人としての心得こそ第一とすることを説く。文章は簡潔、実利的。日常生活の知識、意義、責務を教え、それぞれ大衆の自覚を促すが、子女には『女今川』『女用訓蒙図彙』（貞享四年刊・二六八七）、商人には『商売往来』（元禄六年刊・一六九三）、職人には『諸職往来』（享保五年刊・二七二〇）、農民には『田舎往来』（宝暦八年刊・二七五八）、『百姓往来』（明和三年刊・二七六六）など、夥しい数の出版をみるが、体裁は語彙集、類聚形式。いずれにしても儒教倫理に基づいて忠孝、奉公、禁制を説いて民衆を抑制、従順な民となることを目的とした。農工商の立場を認識、衣食住から生産・経済に関する実用知識を与えるが、刊行物の盛行は全国万民の知識・智慧となり、作法、躰となって拡散する。やがて旺盛な知識欲は百科事典、百科全書の到来を招くが、江戸期、学びの道はそれらによって開かれた。

(二) 辞書

日本では天武十一年（六八三）最古の辞書（消失）『新名』（四四巻）が編纂。現存するものでは平安前期『篆隸万象名義』（三〇巻・空海著）が古く、中国『玉篇』（顧野王・五四三年成立）を模倣・引用、漢字字形の資料

となる。偏と旁を分別、発音・意味などを加えた『新撰字鏡』(二二巻・

昌住著・平安前期昌泰年中)。物名の意義を分類、出典・意味などを加えた

『倭名類聚集』(二〇巻と二〇巻の二種類・源順著・承平年間九三一―三三八に成

立)、『類聚名義抄』、『色葉字類抄』などもあるが、鎌倉期には『名語記』

『塵袋』。室町期には以下の三大辞書が成立した。

① 『倭玉篇』…室町期の漢和辞典。成立年代、編者は不明。漢字・漢語の画引き、難訓な漢字を列挙、片仮名による訓読があり、江戸期から明治期に至るまで漢和辞典の Handbook となった。

② 『下学集』(二巻)…室町期の国語辞書。文安元年(一四四四)成立。東麓破衲編。天地・時節に始まり、生活語彙・一八語義に従って意味の近い語を纏めるが、茶の湯関係の言語もあり、百科語彙集の形式である。

③ 『節用集』…室町末期・文明年間(一四六九―一八七)の国語辞書。『下学集』の語義を下地に成立、いろは音に合わせて分類。図説、百科事典形式の節用集が多く、平易な文体、仮名交じり、読み仮名がつけられる。

(三) 事典

学術・技芸は、事典・全書・技術書によって広められるが、百科事典はあらゆる科目の知識を集成。江戸初期の代表には以下がある。

① 『訓蒙図彙』(二〇巻)…寛文六年(一六六六)刊。中村惕斎著。図入り百科事典。天文・地理から人物・衣服・器用、畜獸・禽鳥・龍魚・米穀・菜蔬、樹竹・花草へと、版紙を上下に分別、大きく図を描き、事物の名称を漢字・仮名ふり、和文・漢文による説明が入る。知識とともに意匠・文様の Handbook にもなり、のちには訓蒙図彙の名を冠し種々の類書が刊行された。

② 『万物絵本大全調法記』(二巻)…元禄六年(一六九三)刊。下村房

供画。『訓蒙図彙』を簡潔化、版を縮小、袖珍本としたものである。掲

載順序・画の構成・名称なども同じくするが、連歌・俳諧師などが懐中。

萬古焼森有節家に蔵される陶法書には同書「繪具製法」の抜萃がある。

③ 『和漢三才図会』(二〇五巻)…正徳三年(一七二三)刊。寺島良安(医者)著。江戸時代百科事典の代表である。医を業とすれば上は天文、下は地理、中は人事を知らなければならぬとあり(自序)、挿図を活用、天部から中国・日本図など膨大な資料を解説。実用的、啓蒙的。明代『三才図会』を範とするなど、大著にして文体は漢文、読者は限定され、民衆

がらくに手にできる書物ではなかった。が、のちに百科事典は節用集が代行。国語辞典の形式をとり、ことばの語源・語釈を示し、簡便なところから江戸期の実用辞書として広く普及。往来物も仮名交じり、文体も簡潔、図説・様式説明、やがて重宝記の出現となり深く民衆間に浸透する。

(四) 全書(茶道具・やきもの類に限定)
全書の特徴は、あらゆる方面の説・述・作を集成。分野ごとに限定、体系化し、学術・文学・技芸などを項目別に分類する。茶道具、絵画、

やきものなど、種類・生産地・使用方法から様式・形式などの知識を与え、図を用いて解説。過去・現在のすぐれた知識が集積し、専門家には不可欠の書、手にとって楽しい書物であった。

① 合冊本『茶器弁玉集』(三巻)…寛文一二年(一六七二)刊。栗水居主人編。『画工印章弁玉集』(二巻)を合わせた五巻の内の三巻。画工は江戸中期の画人が中心、茶器は瀬戸茶入・唐物茶入などが主体であり、図を用いて解説するなど、種類・特色、来歴を明示し、後世の同類出版

『画筌』(六卷)・正徳二年(一七二二)序。享保六年(一七二二)刊。筑前直方林守篤(生没年不詳)著。狩野探幽門下、探元門人による絵画、狩野派画法の公開である。和漢の画本を参考に、初心者向け、絵画制作の基本を示すが、実技のための図様を描き、理論を重ねる。絵画を志す者には手本となり、画本としても鑑賞されたが、画法六法、「畫論傳受秘事口訣」ほか、あらゆる画題(草木から禽獸、聖賢から和歌三神・源氏・衣冠など)、絵画における秘伝を公開。絵師による絵手本版行の先駆けとなる。享保年代には橘守国(一六七九—一七八四)による『繪本写宝袋』(一七二〇)、土佐・狩野派古画の模写『繪本通宝志』(一七二九)、画譜として『扶桑画譜』(一七三五)などがあり、大岡春卜(一六八〇—一七六三)は狩野派に学び、大和絵・漢画風、『画本手鑑』(一七二〇)・『画巧潜覽』(一七四〇)などを刊行、画(絵)本作家として活躍する。

―やきもの―

1、中国

文人は文にすぐれ書・画にも通ずることが求められた。が、工芸は工人・細工人の仕事と解釈、文房四宝を例外とし、やきものは低いものとみなすなど、文人の知識に組み込まれることはなかったのである。文章に著されることは少なく、戦国時代に『考工記』はあるが、技術関係の哲学書に分類、工作の過程に関する記述は乏しい。

やきものの技術・工技を伝える書物は、南宋末元初期に『陶記』(蒋祈著)がある。景德鎮陶務官の立場から同窯に関する製作・生産・経営などを抄録。明代には風土記的な扱いとして景德鎮窯、官窯・民窯などを

纏めた『江西省大志』(王宗沐著・一五五六)が著された。製陶では明代末期崇禎一〇年(一六三七・日本では寛永一四年)頃刊行された『天工開物』(宋應星著)を嚆矢とするが、欧州の天文・数学・医学書などの科学技術・書物などが輸入、翻訳書が盛行した折とされる。在来の技術を対象、初自然科学書(二八卷)であったが、原本は見出し出されず、二種類の刊本があるという。日本では貝原益軒(一六三〇—一七一四)が元禄七年(一六九四)刊『花譜』、宝永五年(一七〇八)刊『大和本草』に同書を参照(三枝博章著・一九四三)、元禄期以前には舶載されていたかと推定するが、明和八年(一七七二)和刻版が版行。材料・産地・製法などを記し、簡略ではあるが、瓦・磚・甕・白磁・青磁・付記・窯変・回青などを図示、製作工程が解説された(82頁絵図参照)。

清代には『陶治図説』(唐英著・一七四三、883頁参照)が出版、日本では『陶説陶治図説証解』(太田能壽述・昭和三年刊・一九三八)に詳細がある。著者唐英は景德鎮督陶官(内務府員外郎)、景德鎮窯における磁器の製造工程を二〇条に分別。採石に始まり、それを泥にする方から、泥土の練方・灰と釉薬・匣鉢の造り方・ロクロ細工による鉢・皿・碗・壺・杯などの製方・青料(呉須・呉洲)の産地・絵具・畫の描き方・糸底の削り・窯積と焼成、西洋絵具の使い方・錦窯・荷造り、焼成後には神を祀り、御礼参りをするなども記述した。

日本において知られるやきもの製作書に『陶説』(朱琰著・一七七四また六)、『景德鎮陶録』(藍濱田著・一八一五)がある。『陶説』は文化三年(一八〇六)葛西質が翻刻、青木木米(一七六七—一八三三)は文化元年官許を得て、三二年後子息周吉が出版した。

中国は科挙による官僚社会であった。やきものも多くは官僚の筆によつて記録されたが、抄録、風土記的な記述など、南宋以後に官窯を中心に専門的な製作に関する知識が記される。が、官僚の筆は生産主体、窯の管理・経営・運搬などの実利が主眼。紙・筆・墨・硯(文房四宝)を除く工芸は、彼らの知識からは除外された。

秘伝・秘法、製作技法を求められるまま知識人・好事家に伝えた日本は、己れを磨く術は実践にこそあるとした茶の湯、俳諧などの精神を根底に、その心構え、楽しみ方は文化・芸能の根幹として貫かれる。

2、日本

日本では、享保頃から技法書、手引書類が刊行される。画事は『画筌』、やきものでは『百工秘術』が早く、趣味者間には席画・席焼など、即興的な簡略画、楽焼・内焼などの類いが親しまれた。絵画、陶磁器における伝書の商品化であるが、その道を志す人々に限らない。印刷をして広く伝える。江戸後期には「伝書」としたものは二〇〇〇種があったという。

① 『大平広記百工秘術』(三巻)・・享保九年(二七二四)刊。入江貞庵著。智工・器工・食工・女工・附録・磁工・雑工の七部門から成り、生活全般に渉る知恵・知識を提供する実用書である。簡潔・平易な文章、ふり仮名があり、総体として一般向けの生活実用知識、常識を教える書である。乾山を佐野に招いた大川頭道の手控には同書楽焼に関する抜萃書写がある。

磁工門(磁器は広くやきものの意)には、磁器下地土こしらへの秘術并土の出所(磁器土ごしらへの秘術并ニ土の出所)・茶碗諸道具つくる秘術并手製の法・素焼の秘術・磁器上葉かくる秘術・磁器葉の秘術・

水葉随珠方・秘傳上葉水海方(氷海玲瓏方)・上葉をかけて後焼たつる秘術・上葉土によりて変ずる事・赤色の磁器の秘術(赤楽焼等是也)・黒色上葉の秘方・秘傳黒葉・飴色葉・秘傳本焼葉・磁器くわんにうを出す方・磁器絵の具つかひやうなどあるが、各部門の目録には次のようにある。

智工門・・十路盤を用いず手のうちにて寄算をおく智工

中西流の秘術、数乗加倍は是なり

器工門・・諸の角を煮て糊のごとく又は餅のごとくして器物に作る法

食工門・・夏日生魚を三日貯へる法

女工門・・金固宮中洗面八白散の秘法 あらひこの方也

附録・・着物の長を聞て惣絹の尺を積る方

磁工門・・磁器下地土こしらへの秘術并土の出所

雑工門・・汗拭薬の法 汗手ぬぐひに此薬を包み摩れば汗をとどむる妙方也
自汗盗汗にも妙なり

② 『楽焼秘囊』(二巻)・・享保一八年序、元文元年(二七三六)刊。中田潜龍子編。楽焼製陶書では最古とされるが、器物作り、素焼・土の製法・内窯・色見・絵具・本焼・楽焼(上巻)、唐土・日ノ岡石・生瀬石・加茂川石・玉など陶家必須の土や石、楽茶碗図式・楽家統譜、附録に茶寮料理・菓・菓子・餅・利休傳薫物ノ方・香具(下巻)とあり、楽焼陶家の用いる薬、原料となる種々土・石の説明がある。

同じく大川頭道は手控に「楽やき秘のふ書之内と写」として同書赤楽関係の法を写すが、乾山を招請する以前の記録である。『楽焼秘囊』『百工秘術』『万法全書』などの抜萃書写は、陶器製作への深い関心を表すが、頭道は享保一七年(二七三二)には「乾山焼秘傳武刃より申來候」と、江戸の乾山からはその秘伝の絵具・釉薬の調査を受理。が、焼成作品は乾山を招き作製した菓子器・火入が残る程度である。『陶磁製方』には

席焼に関する記述がある。席焼・庭焼は数寄者らの社交の一つ。顕道は乾山没後、京都より黒楽の陶法を受け取るが、同じく楽焼作品は見当たらず、実際は製作よりも知識の蒐集、それを披露することを喜びとした地方の趣味人、好事家の類であつたかと推定する。

③ 『陶器焼附画工秘伝新書』（二冊）：明治一七年（一八八四）刊。江藤時太郎編。梅亭鶯叟序。明治期、新政府は世界万国博覧会へ日本陶磁器

II やきものの秘伝書

一、有田焼

やきものには伝記はあつても伝法書は少ない。古来、陶工は実技、経験の上に秘術を習得。各窯元は独自の技法・特色を守るべく、それらは公表するべきものではなかつたからである。秘伝書は、製作上の土・釉薬・絵具の原料と配合を伝えるものが大半である。陶工の控え、覚えなど、公に人目に触れる刊行物とは異なり、内容の伝播には時間を要した。さらに実技者の「かん」と「こつ」に頼る性質上、陶技・陶法・焼成などの詳細はなく、秘技・秘伝書は文化・文政期以後、町人文化の中心が江戸へ移り、趣味人・数寄者の活動が活発化する折に多く現れる。

自筆伝書と述べたところで、自筆か否かの判断を要し、災害・事故によって焼失・消失することも避けられない。書写であれば誤字・誤読、加筆される場合もあり、転写によつては文字・文章、意味・解釈の変わることもある。一方、出版物は、広く同時に多くの人の目に触れる利点

を出品。結果、パリ博覧会以後、世界第一等の決定を得たりとある。国産を富まし、盛代ならしむるべく同書を刊行。秘伝とあり、図を入れ、模様、焼付、製法を纏めるなど、絵具の練器、絵付け用の機械、西洋絵具の混入、近代化の知識が加えられる。絵具の製方・筆の用法・金箔消費の法・彩色の法、模様附内釜外釜の図（内窯・錦窯）、仕揚の次第などを確認するが、幕末から明治期に活躍した三浦乾也の動きが重ねられる。

がある。師から弟子への域を超えて興味ある万人の助けとなるが、出版に至るためには、それなりの需要、人々の支えがなければならぬ。

色絵に関する文書類は酒井田家伝「酒井田柿右衛門家文書」が古い（『有田町史』）。近年の発掘調査からも有田焼は寛永末期一六四〇年代には生産体制も整いつつあつたことが判るが、積み出し港の伊万里から通称伊万里焼、「有田」の呼称は元禄元年（一六八八）「鹿島藩日記」に見い出される（『有田町史』）。中国でも彩絵磁器を造る店を「紅店」と称したが、赤絵の始まりは以下の正保四年（一六四七）「覚」が証左となる。

一、赤絵は、東嶋徳左衛門（伊万里商人）が長崎において「しいくわん」（周辰官）なる唐人から技法を伝習。喜三右衛門（初代柿右衛門）へ伝授

二、喜三右衛門は「こす権兵衛」とともに正保三年（一六四六）頃それを完成。同四年長崎に持参し、加賀前田家御買物師塙市郎兵衛に販売した

以上のことが判明、のちに金銀の焼き付けに成功。万治元年（二六五八）佐賀藩二代藩主鍋島光茂に対面、柿右衛門の襲名は同家許可によつて行われるが、享保年代から將軍家月次献上品、公家・大名への贈答・進物品として用いられる。佐賀藩では類似のやきもの製作を厳しく禁止、別して赤色基調、黄・緑・青・紫絵具の調合法は、もらすことなく、家伝として後継者のみに伝えられた。元禄三年（二六九〇）、五代柿右衛門（一六六〇—九二）は幼い六代のために『土合帳』を認め^{した}た。大鉢土・御道具土・青磁土・御道具白焼土・ごす土などの土合わせ、「土赤絵具合覚書」には濃赤絵・中赤絵・唐もよぎ・きび・紫・こん絵具の配合などがあり、「らく焼覚」とした記録も残る。

乾山は赤色絵具に關し、仁清は金珠・上々弁柄丹土を用いたことを記す。丹土は「につち」と称し、古来赤色顔料として使われていた。鉄分を多く含む赤土、縄文土器の彩色、古墳時代の壁画にも用いられたが、江戸中期には緑礬を焼成、弁柄として活用するなど、乾山も同じく緑礬を焼返し^{こうし}て用いており（水に居させ滓を捨て、また水に入れて一昼夜おき、乾かし、素焼き碗に入れて焼く）、有田焼の秘伝赤絵顔料に同じくする。秘伝赤絵の情報は、乾山時代、すでに京都にも拡散していたかと考える。

二、乾山焼

乾山焼関係の陶法書は、今日までに以下のことが分明する。

(一) 初代乾山自筆陶法書二冊・写本四冊

自筆書は、元文二年（二七三七）三月江戸において認めた『陶工必用』、同年九月佐野において著した『陶磁製方』の二冊である。『陶磁製方』

には写本四冊が伝世。全ては栃木県佐野、足利地方に限られる。

(二) 初代口述二代筆記陶法書写本一冊

「内竈秘書」とあり、合冊本『樂燒秘傳』中の一書である。宝曆一〇年、明和三年の紀銘がある。

(三) 二代猪八関係陶法書写本四冊

猪八陶法書の自筆本は一冊も残らない。写本は『陶器密法書』を代表とするが、同書原本は萬古焼三世浅茅堂三阿^{あさじどうさんあ}（至玄）が所持（寛政四年跋文）。伝世する『密法書』は写本の写本、同じ内容の写本はさらに仙台・埼玉にも伝承、仙台堤焼針生家伝書によれば三阿は「至玄」と称したことが分明する。

(四) 記録はあるが実存不明。「光悦より空中より乾山伝来の陶器製法」。

「伊八乾山ノ藥法ノ直書」（『陶器密法書』の原本か）

(五) 三浦乾也関係陶法書写本一冊・証書一枚

緒方流三浦乾也とあるが、原本は初代口述二代筆記、三代宮崎富之助妻はる相伝、酒井抱一から貌庵^{かほあん}へと伝えられた陶法書である。内容は「乾山焼秘傳武刃より申來ル」とした佐野の大川頭道に送られた乾山秘伝に同じであるが、関東大震災によつて焼失したか。このたび写本を発見。猪八伝とは絵具などの調合に相異がある。彦根藩主井伊直弼筆による写本一冊が伝世する。

また伝書ではないが、乾也門人浦野繁吉からイギリス人バーナード・リーチへと伝えられた伝授証書「樂燒傳授書」があり、内窯絵具の調合を一紙に纏めたものである。

(一) 初代乾山(尾形深省) 自筆陶法書

1、『陶工必用』尾形乾山から武江・蘭溪勝任か、のち池田成彬(大和文華館)

寸法二六、七×一七、九^セ。美濃紙罫紙四五枚(追加含む)。冒頭に乾山深省と印「深省」(白字方印)。奥書に元文二年巳三月五日 乾山深省と爾字型花押がある。受理者名はない。が、同年八月武江蘭溪勝任、「勝任之印」(長方朱印)。蔵書印「矢田陪氏」(変形方印)。さらに末尾に水上蘆川、「陶煙居蔵書記」(長方朱印)。各綴じ合わせには「飛龍在天」(楕円朱印)の認印がある。「勝任之印」は輪王寺坊官進藤周防守藤原勝任かと考える。「矢田陪氏」印も同じく同寺坊官中にその名を発見。進藤氏、矢田部(陪)氏ともに公寛・公遵法親王に近仕。進藤氏は乾山終焉に際し坊官中相談し金一両、葬儀・墓所を配慮した人物である。矢田部氏も同じく輪王寺坊官、矢田部豊前守と推測、進藤氏とともに乾山伝書の方子に関わる人物と推定する。

2、『陶磁製方』尾形乾山から佐野・大川顕道か、のち鐵竹堂瀧澤記念館

寸法一六、二×二三、八^セ。美濃紙三〇枚(追加含む)。元文二年巳九月十一日 乾山七十五翁深省と爾字型花押。元文二年巳九月十二日 京兆乾山陶工紫翠老人深省と爾字型花押がある。受理者名はないが、栃木県佐野市において書かれており、同地で焼成した鮑貝形菓子器の落款に照合、好事家大川顕道に宛てられたものと考ええる。巻末には顕道、所蔵者瀧澤鐵竹堂による追記がある。写本には以下の四冊がある(篠崎源三)。

① 足利市丸山瓦全曾祖父丸山清右衛門貞憐(乾斎・一七七七一八五三)の妻大川ツルが丸山家に伝えたもの。丸山家写本奥書には「文政十丁亥年十一月吉日寫之丸山清右衛門貞憐」とある

② 佐野市某家から骨董屋へ渡るとされ、桐箱入

③ 題箋なく「内窯焼之夏」とある。奥書には「元文二巳年重陽 雍州乾山陶工紫翠深省」「文政十二丑年末秋日写壺桂楼月弓」とある

④ 緒言・奥書なし

(二) 初代口述二代筆記陶法書写本

「内竈秘書」二代目乾山から三代富之助・抱一・藐庵・乾也(都立中央図書館)

寸法一九、二×一六、〇^セ。美濃紙一〇枚。合冊本『樂燒秘傳』(好古樂記 淇水軒)中の一書。奥書に「乾山燒法」「明和三丙戌年七月廿四日近藤安治郎写之 是ハ又傳之也」とあり、巻末に「千時宝曆十年七月乾山省占」と花押がある。

(三) 二代乾山(尾形猪八) 陶法書写本

1、『陶器密法書』猪八から清吾、清吾から沼波弄山・萬古堂淺茅堂三阿(国会図書館)

寸法二六、七×一七、九^セ。美濃紙三八枚(追加含む)。奥書に乾山。跋文には寛政四壬子夏五月 萬古堂三世淺茅生隠士三阿誌と花押・印「萬古堂」(朱字方印)とあり、「山水有清音」(丸朱印)の押捺がある。原本は猪八自筆と推定するが、猪八から清吾、清吾から沼浪弄山、萬古堂三世三阿至玄(生没年不詳)へと渡り、三阿は「尊命」によってこれを書写。写本を尊命とする同人へ贈呈する。当写本は文化四丁卯年九月に喜之なる人物が書写したものである。尊命により贈呈した写本はその後如何なったか。仙台針生家伝写本巻末には佐野宗達なる人物が「萬古三阿至玄」に法うとある。三阿は至玄と称しており、書写に関しては沼波家本

の伝播なども考慮しなければならない。

2、『本竈并内竈乾山秘法』尾形猪八伝書写本（伝東京美術研究所）

寸法二三、一×一四、八五セ。三三葉。跋文、内題はなく、書写年代も不明。奥書に乾山。蔵書印に「静勝文庫」とあり、印は襲用、掛川藩五代藩主太田備後守資始（一七九九―一八三四）の文庫と推定。内容は『陶器密法書』に同じであるが、脇本十九郎蔵。昭和三八年（一九六三）東京芸術大学図書館に寄贈と伝承。が、今回、同書を同図書館に見つけることができず、同年脇本家は火災に遭遇、焼失したことも想定される。

3、『他傳不許乾山秘書』堤焼針生乾馬（針生乾馬家）

寸法二九、〇×一八、二セ。紙本墨書一冊。跋文はなく、奥書に乾山。宮城県泉市上谷刈字赤坂、堤焼針生乾馬蔵。書者不明。内容は『陶器密法書』に同じくするが、奥書に「右庭焼土薬繪具の合方乾山秘法 他見無用也 乾山」とあり、裏面に「根津傳心庵より焼方作り様五ヶ年の間 其外秘方を傳へられたる也 是ハ手続に申置也 色々口傳有り 私師被成古人候後萬古三阿至玄と云ル人に法ひ 焼物の道ニ至ル 佐野宗達真義」（花押）とあり、別紙に「花洛紫翠深省緒方乾山六世三浦乾也門人 杉山陶古千年竈 乾馬」とある（傍線筆者）。

4、『乾山樂焼秘書』根岸武香「冑山文庫」（国立国会図書館）

寸法二四、八×一六、八セ。紙本墨書一冊。跋文はなく、奥書に乾山。書者不明。内容は『陶器密法書』に同じくする。埼玉県大里郡吉見村字冑山「冑山文庫」旧蔵、同文庫は国文学者根岸武香の文庫である。昭和六年（一九三一）国会図書館に寄贈。同家には幕末・明治初期、陶工三浦乾也（一八二一―一八九）、乾也門人奥村乾升らによって内窯が築かれた。

(四) 光悦より空中乾山伝来・猪八乾山薬法ほか

佐原菊塙（一七六二―一八三三）所持、「光悦ヨリ空中ヨリ乾山伝来の陶器製法」（『梅屋日記』）。同じく菊塙所持、浅草古美術商芳村観阿（一七六五―一八四八）より譲り受けた直書とされる「伊八乾山の薬法」一冊（すみだ川やしき）。ともに不明であるが、百花園は洪水・関東大震災・東京空襲に遭遇、消失した可能性もある。

(五) 三浦乾也に関係する陶法書・証書

1、緒方流『陶術秘法書』三浦乾也から井伊直弼（彦根城博物館）

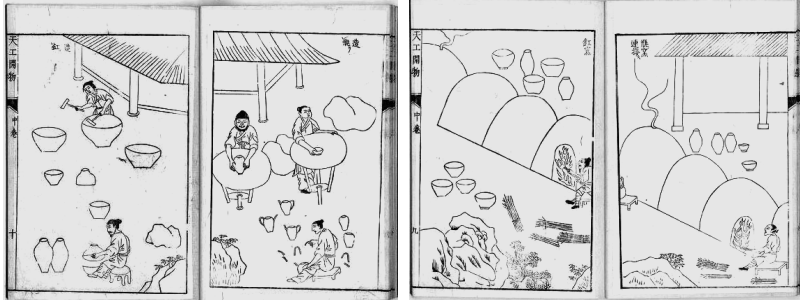
寸法は一三、三×一九、八セ。紙本墨書一冊。奥書に緒方流陶工乾也と花押・印があり、嘉永元年申年（一八四八）四月、井伊直弼（一八一五―一六〇）による書写である。三浦乾也の伝える所、釉薬・絵具・素焼・本焼に関する調査であるが、乾也名があり、乾山陶法書の流れを汲み、独自の工夫を加えたもの。同三年（一八五〇）直弼は江戸において乾也の席焼を見物（彦根藩医上田成伴宛書状）、交流を深めるが、席焼用絵具には白玉（ガラス）を入れており、白玉は器物と絵具の密着性を高めるなど、焼成の失敗を防ぐ工夫である。奥書には「右乾山青緑焼秘傳并真製上薬之義 此度貴殿御執心ニ付傳受致候」とある。

2、『楽焼傳授書』乾也門人浦野乾哉からバーナード・リーチ（イギリス）

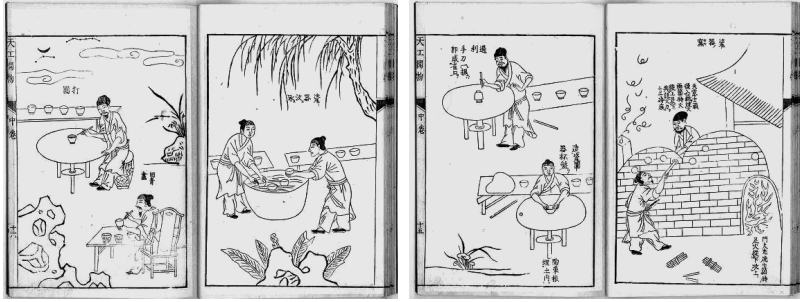
大正八年（一九一九）九月、六世乾山浦野繁吉がバーナード・リーチに与えた伝授書である。内容から乾也陶法の流れを汲み、楽焼・内焼陶法の釉薬（上薬）・絵具（白・黒・赤・青・紺青・黄・岱赤・上薬を要せず青薬）の調査を記すが、同じものは富本憲吉の記録にもある。

『天工開物』 宋應星著 一六三七年頃刊(部分)・寛永一四年頃の刊行

『天工開物』(部分) 卷中之一
 龍窯・缸窯はともに登窯。その左は小物類、大物類の甕・鉢などを成る様子を成る。



瓷器窯・成形・削り・泥漿を施す。回青などの絵具を用いて絵付けをする様子を描く。



絵図は『天工開物』『陶冶図説』に描かれたやきもの製作図である。上図は『天工開物』、『龍窯連接』(りゆうようれんけつ)、『缸窯』ともに登窯であり、龍窯は碗・甕などの小物、缸窯は甕・鉢・甕など大物製品を焼成。下図は瓷器(磁器)窯、成形・削り・絵付けには陶車(ロクロ)を用いるが、碗・甕などの小物、大甕・大鉢などに分業、釉薬掛けの作業に入る。

左頁は『陶冶図説』である。採石・泥土造りから匣鉢造り、鉢皿などの丸物製作には手また紐を用いてロクロを廻す助手の姿がみられる。呉須の採取と顔料屋の作業も記載。呉須は黒緑色、光沢のあるものを上等とするが、絵具は鮮やかさを出すため工人は一カ月をかけて掘り続けるなど、極細末にして用いる。葉掛けは大小丸物は浸潤法、大物は多く吹付法、全て作業は各々専門とする工人の分担である。



施釉図

三、やきもの製作

土と釉薬、火の絡み合いがやきものを造る。

人類が定住し、日常の煮炊き、保存用の煮沸・貯蔵容器から、神仏に捧げ、祀るための祭祀・儀式用器まで、世界には、各国それぞれの特徴を具えたやきものが造られ続けている。大別して軟質と硬質、無釉と施釉陶器・磁器に分かれるが、明確には区別できないものもあり、例外もある。日本では以下のような発展が認められる。

- 一、軟質・低火度焼成のやきものは、
 無釉…縄文式土器・弥生式土器・土師器など

- 施釉…奈良三彩・緑釉(畿内・尾張・周防・九州出土の瓦ほか)
 押小路焼・楽焼(京都) など

- 二、硬質・高火度焼成は、
 無釉…須恵器―常滑・渥美・備前・越前・丹波・信楽焼など

- 施釉…灰釉陶―猿投(尾張・美濃)―古瀬戸・美濃、唐津など。京焼(粟田口・清閑寺・八坂・清水・音羽・修学院・御菩薩・野上焼など)。磁器(有田・九谷・清水など)

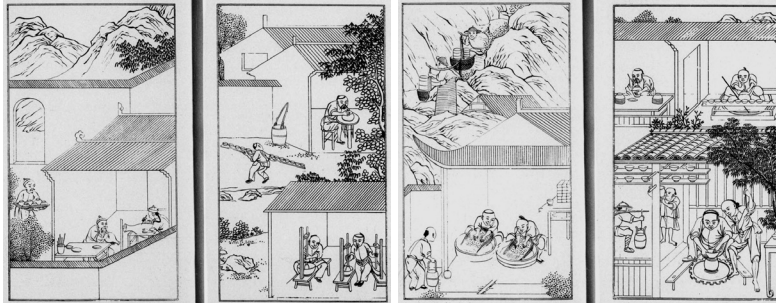
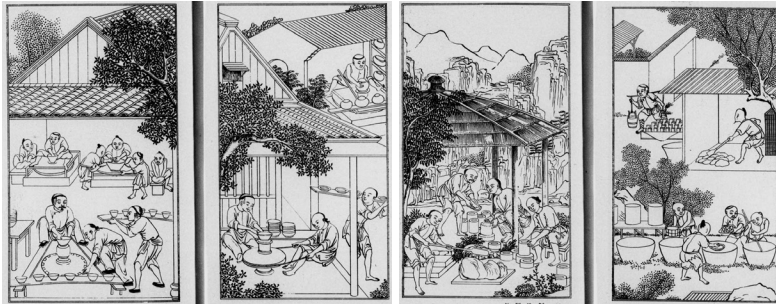
ここでは乾山焼を中心とし、低火度・高火度焼成の施釉陶器を基本とするが、施釉とは、成形後、素焼をした素地に上薬を掛けることである。時には生素地(素焼前)に施すこともあるが、浸す・流す・塗るなどの方法がとられ、焼成によってガラス状の薄い膜をつくる。器物を硬く、強

『陶治図説』 唐英著 一七四三刊(部分)・乾山没年の刊行

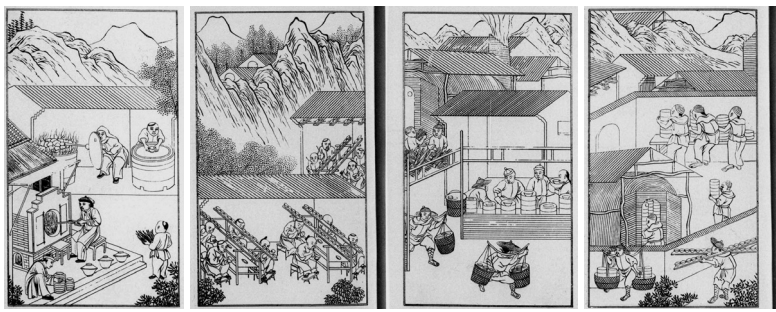
『陶治図説』(部分)



採石・泥土造り・窯詰用の匣鉢造り。ロクロ成形には足を使うが、助手が手また紐を引くなどの姿が描かれ、呉須は採取後窯底の砂中に埋め、熱し、水簸してから売物とする。絵具はよく播り、絵付けをして、施釉、匣鉢に入れ、窯詰、焼成をする。



窯出し後、器物の良否を選別。紙に包み桶に入れる。専門の荷造人の作業である。



く、汚れ難くし、色・艶・透明性を与えるためであるが、低火度焼成・内焼釉薬(鉛に灰を混入)、高火度焼成・本焼釉薬(長石に石灰質の木灰、石灰を混入)がある。

— 製法 —

(一) 土

はじめに、原料となる土を選択。土は岩石(火成岩・堆積岩・水成岩・変成岩他)が風化したもの、細かな粒子の集合体である。数種の鉱物から成り、山土は美濃焼、田土は備前・常滑焼などに代表され、各々土の性質を活かしたやきものが造られる。原土を砕き、用途に応じ他土を混入。篩にかけ、水を加えて居させ(水簸)、一定の固さ、切れや歪みを防ぐために土を練り、成形をする。成形したものを素地というが、土には以下の性質が必要である。

- 1、形を造るための可塑性、粘土質(粘土質)
- 2、窯に入れ、亀裂を防ぎ、収縮の調整が可能(石英質)
- 3、熱によって焼きしまり、ガラス質をつくる(長石質)

(二) 成形と削り

- 1、手造り…皿・碗などの小物
大きな甕・鉢・壺などは輪積み
- 2、ロクロ・陶車…蹴りロクロは九州地方
手ロクロは京都に多い
- 3、型もの(内型・外型)…片面型・両面型

- 4、たたたら・板起こし・指物成形・薄い土板を造り貼り合わせる
- 5、削りだし・土塊をくり出す。削りは、陶器では三―五分^ぶ乾き、磁器では七分乾きの折に削る

(三) 裝飾

1、生素地上には、

- ① 化粧土・素地の色を変える・表面を調え下絵付けをし易くする・水漏れを防ぐなど。惣地・刷毛・部分目塗りなど
白化粧・白土・粘りのあるもの（必ずふりを入れる）
色化粧・黄土による赤色、白化粧に着色剤を交ぜるなど
- ② 彫り（沈み彫り・浮き彫り）・印花・象嵌・削り・掻き落とし・貼り付け・練込み・櫛目・縄目・布目・いっちゃん（筒描き）・面取りなど

2、素焼上には、

- ① 白化粧・生素地上ではしつとりとした色合になるが、素焼上では濃く仕上り、象嵌など沈み彫りの部分を埋め込む時などに適する。乾山は素焼上に施す白化粧は土も焼き返した白土を用いる
- ② 絵付け・下絵付け・上絵付け

(四) 下絵付け

素焼後、高温焼成によつて溶けない絵具を用いる。基本は、

- 鉄絵具・黒色・茶褐色・柿色。水下（赤土・黄土・黒浜・弁柄など）
呉須絵具・紺色・青色。マンガン・コバルト・鉄分などを含むもの

(五) 上葉・施釉

上葉は釉葉ともいう。上は「のぼす」、釉葉を掛けることの意である。素地を包む薄いガラス質の膜をつくり、素地に密着、色・艶・光沢を与える。透明釉葉、また着色剤を入れ着色釉とするものもある。

1、低火度焼成・内焼には、鉛釉と無鉛釉葉の二種が基本

- ① 鉛釉・日岡石（珪石・珪砂など）・藁・もみ灰など珪酸質のもの
楽焼釉・珪酸鉛が基本成分。唐土（鉛白・白粉）に日岡石を配合。
その他原料を溶かしガラス状にしたもの（フリット）
- ② 無鉛釉・硼酸釉・ソーダ釉の二種が基本

2、高火度焼成・本焼には、長石に石灰石などを調合したものが基本

- ① 長石釉・石粉など長石質のものに木灰・藁灰混入（唐津焼・萩焼など）
- ② 石灰釉・石灰石・木灰・胡粉・骨灰など石灰質のもの
- ③ 灰釉・天然の草木を用いる木灰（自然釉・燃料の灰に始まる）・土灰（囲炉裏の灰・雑木灰）・藁灰（藁などの灰）・紺屋灰（糠染剤灰汁のかす）など

④ 釉葉に着色剤を混入・銅（たんぱん）を加えた織部釉、鉄分を加えた天目・青磁・黄瀬戸釉などがある

3、方法は、浸し掛け・流し掛け・回し掛け・塗る・吹き付けるなど

- ① 内焼・素焼・絵付けをして上葉を掛け内窯に入れる（乾山焼など）
錦窯・素焼したものの上葉を掛け本焼した素地に絵付けをし、色絵具・金・銀彩などを焼き付ける（仁清焼・乾山焼など）
- ② 本焼・素焼、ときには生素地に下絵付けをし、透明釉葉・上葉を掛けて（仁清焼・乾山焼など）、本窯に入れる。下絵付けには高温焼成することから堅牢な絵具が必要。基本的には白土による白色、鉄を主成分とした黒色・柿色、呉須を主成分とする紺色（青色）の四色である

(六) 上絵付け

1、色をつける着色剤・弁柄・酸化銅など

2、着色剤を溶かし素地に密着させる融剤・白粉（唐土・鉛白）

3、上絵具のガラスを作り、貫入などを調整する骨剤・日岡石

以上着色剤・融剤・骨剤の三種から成り、低い温度で絵具を安定させる。

焼付温度は六三〇―八五〇度ほど、調節は融剤、骨剤の加減によるが、密着性を考慮、白玉を入れることもある。白玉はフリット・ガラス粉、和絵具の主原料である。和絵具は絵画用、顔料と白玉、珪石粉と唐土を調合するが、孫兵衛伝の内窯絵具には白玉はなく、乾山一流の内窯白絵具・黒絵具にみられる。猪八も応用、乾也の内窯絵具へと続くが、乾山は光琳の影響か、和絵具からの応用があり、独自の工夫を加えたものと考えられる。絵付け方法は下絵付けと同じである。筆の動きを考慮、はじめに下地にふのりを塗り、膠にかを塗る。膠は一五分ほど煮出し、布に浸して拭き取るように塗布するが、和絵具は幾らか厚く塗る必要がある。

金・銀の焼付は、色絵付けの後、箔を切り取り貼り付ける、また金・銀泥を絵筆にとつて塗りつけるが、はじめに金・銀の箔を消すなど、磁器の平皿に水を少し入れ、指頭を使って磨り潰す。これを箔を消すと称し、それに礬砂を加え、よく磨り、膠を加えて繰り返し練る。

(七) 焼成

素焼・内焼（錦窯・楽窯）・本焼などの別がある。

1、素焼は、成形後、釉薬を掛けずに八〇〇―一〇〇〇度ほどの温度で焼成。水分を除き、器物に強度を与え、扱い易くするが、素焼窯を設置せず、登窯のぼりかまの最上部、内窯の蓋上を活用することもある。

2、内窯は、七〇〇―八〇〇度ほどの温度で焼成。低火度焼成の鉛釉陶を焼く小規模な窯である。錦窯は、上絵付けの絵具・金・銀泥などを焼き付ける窯、内窯と同じである。楽焼窯では赤楽・白楽、黒楽はふいご窯を用いて高温焼成、焼き上がるとともに窯から取

り出し急冷する。

3、本窯は、一一〇〇―一三〇〇度ほど、釉薬を溶かし素地を焼締める。

内窯・耐火煉瓦のない時代、粗土を叩き上げて構築した。円形、屋内に設えるが、大きさに定まりはなく、内径一尺五寸から四尺ほどの大小があり、高さも同寸に設定する。窯は内外二重構造、内側に設置する内窯、外側の外窯との間に燃料の薪また炭を入れ焼成する。本抛は中国交趾焼の形態にあると伝承。色絵付け用の錦窯、伊万里焼の赤絵窯も同じであるが、伊万里では量産のため大窯であり、正保年間（一六四四―四八）にはすでに生産体制も整いつつあった。赤絵も完成。小物作品の窯積みは三段積み、大物作品の焼成には間に小物を詰めるなど、色見は絵具を付けた陶片を針金の先にくくりつけ内窯内に吊す方法が取られていた。

本窯・多く登窯、山の斜面を利用して構築するが、乾山時代は未だ耐火煉瓦はなく、枠を作り、その中へ耐火粘土・粗土あらつちを流し込み、叩き上げて窯体を構築。ことによると仁清窯の古材を応用した可能性もあり、下方から焚き口・燃焼室・焼成室・最上部に煙出しを設置、長い焼成室の側面には燃料を投げ入れる差木孔さしきあなを開け、温度調整が図られた。

登窯の歴史は古い。中国では商代・春秋時代、朝鮮では高麗時代、日本では一六世紀末期肥前地方に開始されるが、窯の興りは、平地に窪みくぼみを作り草木を燃料として焼成。五世紀頃から窖窯あながま、一五世紀後半には瀬戸・美濃地方に大窯が築かれ、一六世紀後半島からは技術が移入。肥前に連房式登窯れんぼうしきが出現、やがて各地へと伝播する。

III 乾山焼陶法書

一、『陶工必用』

『陶工必用』は、尾形深省乾山自筆による陶器の製法・技法書である。三部から成り、仁清による本焼山窯陶法、孫兵衛による内窯陶法、両者を合わせ、長年にわたる自らの工夫、習得した乾山の知識・技術を纏めたものである。小書きによる朱註を加え、自らの見解を添える。

(一) 仁清伝・本焼山窯陶法

高火度焼成、本焼山窯陶法は仁清家伝、元禄七年二代仁清によって伝えられた。乾山の陶法書がなければ世に出ることのなかった陶法であるが、それを譲り渡した二代仁清は乾山窯の本焼を担当。茶人好みの茶道具、国内外の写しもの、光琳意匠のやきもの化に力を注ぐ。仁清陶法はそのまま活きるが、二代仁清は仁清焼始祖野々村清右衛門（生没年不詳）の嫡子。弟には清次郎、清八郎の名が残り（「金子借用証文」他）、ともに乾山窯に移ったことも考えられる。

初代清右衛門は、仁和寺門前御室堅町に御室窯を開窯、乾山によれば、同寺の「仁」に、自らの名を合わせ「仁清」を銘としたが、専ら茶匠金森宗和（一五八四―一六五六）の好み道具を製するという。宗和は寛永期中頃の茶匠であるが、武家の出自、飛騨高山城主出雲守金森可重長子重近である。勘当を受け、京都に住まいし、大徳寺伝双紹印に参じ剃髪、宗和を号とした。「きれいさび」に代表される小堀遠州（一五七九―一六四七）亡き後、都に在って上品な茶趣を志し、後世「姫宗和」と称されたが、茶室・茶庭、茶道具・懐石道具などに好みが残し、仁清焼の

指導、斡旋も記録にみられる。

仁清は丹波野々村の出自と伝承。丹波焼清右衛門とあることから（仁和寺『御記』）、丹波焼に拘わりがあつたものか。瀬戸修業のことは自ら乾山に語っているが、言語、表現、伝世する茶入・壺・茶碗などに瀬戸窯特有の技術・技法、釉葉の特徴が現れる。

瀬戸窯は貞応年間（一二三二―三四）、道元禪師（一二〇〇―一五三）に従い入宋した加藤藤四郎景正（生没年不詳）が福建省建窯の陶法を習得、帰国後祖母懐に窯を築いたことに始まるという。伝承であるが、歴史は古く、瀬戸地方からは新石器・縄文・弥生式土器、土師器・須恵器片が出土。平安期には灰釉陶器の生産、猿投窯の活動、拡散もあり、一一世紀末年には山茶碗を生産。一四世紀には文様、釉葉に色をつけた陶器が造られる。一五、六世紀頃から茶の湯の盛行に伴って茶道具製作が盛んになるが、瀬戸窯は天目茶碗、和物・唐物写茶入製作では不動の地位を築き、伝世する仁清焼茶入には瀬戸様式の技の巧みさ確かさが光る。

茶入は茶道具中、最上位に置かれる道具である。信長時代は一国一城の手柄にも替えられたが、ロクロ技術の技が見せ所となる壺・茶人の製作は仁清の得意とした技である（ロクロを不得意とした乾山の作品には茶入はない）。やがて瀬戸から京へ上り、粟田口焼窯場に移ると推定。さらに京焼の技術、美意識を取り入れるなど、巧みな陶工としての実績を積み（丹波から京都へ。京都から瀬戸、そして京都へとした説もある）。

粟田口一帯は、もと瓦製造地帯であつたという。瀬戸の陶工、三文字屋九右衛門が開窯した窯であるが、茶道具焼成を専門としており、仁清

は、磨き上げたロクロの技術に、みやこの意匠、装飾、陶技などを加える。宗和に見込まれたその腕は、正保四年（二六四七）仁和寺門前、御室堅町に自窯を開くまでになるが、領内仁和寺の御用を勤め、仙洞御所、公家・武家・町人の需めに応ずる。造形・意匠、釉薬・絵具いずれも秀逸、その構成は華麗・品格ある形状・色彩・装飾様式に現れるが、茶道具・懐石道具・建築用飾り道具・置き道具へと広がりを見せる。堂上人の栄覧もあり、將軍家への献上もあった。寛文から延宝年間には仁清焼全盛期であったとされるが、評判を得て江戸においては町売りなどの記録が残る（『森田久右衛門日記』）。仁清焼は装飾陶器の極致を示すか。

仁清は東福門院の御用を勤めた。乾山父宗謙（二六二一―一八七）も同じく女院の装束を担当。両者に面識はなかったものか、宗謙の茶道具中に、乾山への遺産道具のなかに、仁清焼はなかったろうか。

元禄二年、父の没後、乾山は御室「習静堂」に隠棲した。

御室門前村堅町、習静堂は仁清窯場の隣りであった。やきものに興味をもつ乾山はそれを承知で選択したのか。折々工房を訪い、仁清の技にじつと見入る。窯焚きの折には手伝いもしたのではなかったか。自ずと親しみは深さを増し、二代仁清ともことばを交わし、弟らとの交流も生まれてゆく。道は一〇年後へと続き、乾山窯の開窯、仁清陶法の受理へと繋がる。

元禄七年、乾山は師の独照禪師（二六一七―一九四）を失った。推定では同じくその年、初代仁清も没したとされる。初代に比して技量の劣る（『前田貞親覚書』）二代清右衛門は、生業である仁清窯の経営、継続に苦しむが、京焼の体制も変化、彩色磁器、色絵・赤絵・金欄手を製して肥前・伊万里焼の台頭も試練となった。

仁清窯は疲弊する。が、あれほど名声を博し、天下に知られた仁清窯

が捨て置かれるはずはない。仁和寺も案じたことに違いない。隣家に居つてそれを直接見聞きした乾山は、事態に接し、己れにできる道を探る。仁清陶技は乾山窯に引き継がれた。

初開窯の鳴滝窯は同じく仁和寺の領内にある。二條家山屋敷跡であったが、独照、仁清の没した同年八月二日乾山へと譲渡された（『永代被下置候山屋敷之事』）。二條家説得に難はなかったろう。むしろ光琳の画才、乾山の能書を知る二條綱平は、志を知り、後押しに側に入ったものと考え、綱平・中榮子内親王は仁和寺宮寛隆法親王の妹でもあった。

乾山は開窯までに五年の歳月を費やした。

二代仁清には借金、また仁和寺との約束事があったかも知れない。仁清窯の職人・工人、兄弟の身の振り方も考えねばならない。初代ほどの修業、経験を積み重ね二代であれば、時間をかけて準備を調べ、窯の整理をする必要もあつたであろう。乾山とは仁清焼、その技術・陶法の継続、生業の行方などを話し合ったものと推考するが、仁清焼の陶法は乾山窯の本焼山窯作品に活かされる。茶の湯に合わせ香合・茶碗・皿・鉢などの茶道具類、写し物から、琳派様式の作品の種々に活用された。

一方、乾山にも望みがあった。絵師、工芸意匠家として活動する兄光琳の助言も大きく、両者はともに構想を練り、方向を定める。

一つに、光琳画、乾山書、両者の才能が発揮できる道である。紙・絹上の表現を土面に移し、墨に見立てた黒絵具を活用する。画と書、和漢の画譜様式の選択であるが、専門絵師の協力を求め、光琳、渡邊素信の付け立て画が絵付けとなり、得意の乾山書が趣きを添える。

二つは、本焼物の素地を飾る彩色・装飾、写し物の工夫である。三つは、土面における漆芸・染織など、光琳意匠の表現である。

本焼は、仁清焼二代清右衛門の技術が基本。登窯を構築する。

内焼は、押小路焼孫兵衛の技術が基本。内窯を設置する。

孫兵衛は、釉下色絵陶法の熟練陶工であった。乾山の意図を知り、鳴滝窯への参加には、初代以来栗田口焼に所縁のある二代仁清の力添えを考へるが、粘土・釉薬、種々の原料・顔料、窯焚人や人足に至るまで、二代仁清、孫兵衛の助力のもと、仁清焼、栗田口焼、それぞれの陶工の知識、助成を獲得。役所への届出を済ませ、仁和寺への挨拶、綱平への報告を終え、乾山焼が始まった。

(二) 孫兵衛伝・内焼内窯陶法

孫兵衛は、押小路焼祖一文字屋助左衛門の縁者という(『陶工必用』)。京焼は安土・桃山時代、自由に商工業者が営業の許された信長・秀吉時代に始まるが、茶の湯が流行、経済力をもつ町衆の台頭に結びつく。栗田口焼、仁清と同じくして、専ら茶の湯者・数寄者・富裕町人の賞翫品、茶道具・懐石道具を焼成するが、民間需要に応えた生活用品を生産した窯場ではない。

天正年間(一五七三―九二)、利休の活動期、押小路焼が興り、楽焼が生まれた。両窯はともに唐人の技術が基盤、中国華南の低火度焼成、釉・軟質陶器の交趾焼陶技を基本としたが、花樹・生類などを地紋に彫り、器物全体に黄・紫・緑・紺色の鉛釉を掛ける。押小路柳馬場東(『陶工必用』)に窯場があり、近年の発掘調査によれば、三条通また御池通柳馬場東入ル、中之町・八幡町からは鉛系の釉薬を掛け、低火度焼成の軟質施釉陶器・素焼陶片が出土した。白化粧緑彩碗・織部風向付など、窯道具、釉薬の顔料を溶かすための埴堦(わらひ)なども発見。釉下色絵陶片の出土とその絵付けの巧みさから専門絵師の参加も推測される。

孫兵衛は、細工、焼方巧者。乾山からは内窯熟練陶工として全しの信

頼を得るが、結果、その陶法は色絵定家十二ヵ月和歌花鳥図角皿類、鏝絵漢詩山水・草花・人物・禽獣図角皿・額皿類に現れる。乾山の最も造りたかつたやきものであつたらう。紙・絹同様、陶器の上に光琳の絵筆、自らの書が活かされる。

細かな工夫は、用いる釉薬に始まった。

角皿表面は用紙の如き肌理、手触りをつくり出し、絵具は本絵師(専門絵師)の用いる和絵具を応用、書・画作品の風合・味わいが滲み出る。基本は孫兵衛伝の内窯絵具であるが、押小路焼の伝統を軸として、釉下色絵の技法が発揮される。乾山の内窯焼作品は、本焼仁清の色絵、錦手様式とは一味異なり、乾山窯の一代特色を築くが、画題、意匠、構成に文学性が含まれる。形状は額・掛物・巻物からの構想が基盤となるが、器形・釉薬・絵具の工夫においても仁清焼とは趣きを異にし、本焼上絵付けでは表し切れなかつた絵画的な風趣が表出。暈かし、濃淡、盛り上がりのない絵具が工夫された。

鳴滝窯は乾山焼の土台である。丁子屋町では鳴滝様式の簡略化、新たに流行する琳派様式を本格化させるが、聖護院門境では二代猪八が活躍、自らの表徴となる惣地塗り、黒染に白絵を入れる技法を売りとした。乾山様式は初代も用いた光琳・渡邊氏の絵手本が基本となった。

―『陶工必用』の特色―

乾山の陶法書がなければ、近世陶磁器の知識は不足。現在も多くの人々が同書を活用。京焼に関する歴史・様式・製法、押小路焼、楽焼などの興りと創始者、仁清焼の開窯と名の由来、陶法・特色・作品、また金森宗和との繋がりなどが明らかとなる。

乾山焼に関して名称、開窯年代、仁清陶法の受理とその後の仁清焼、

楽焼、押小路焼と孫兵衛の繋がりなど内窯陶法の伝授が判明。

何より乾山の江戸下向と作品が確認されるが、同書は元文二年江戸において認められた。小書、朱書の註解は、乾山の創意・見解、体験に基づき実践的な働きを呈示。朱註による書き込みは中国において仏典解釈、問答方式などに行われていた。文人が応用、やがて知識人の定法として用いられたが、漢本に親しむ乾山はそれを承知。陶工としての経験と見解、文人としての知識・見識を著すが、仁清伝の長所・短所を明確に評し、己れの出来・不出来を述べる。正確な理解を促すための一助となる。

江戸前期、鹿苑寺住持鳳林承章の著した『隔莫記』は、近世陶磁器研究には不可欠の書物である。寛永から寛文期まで(三三年間)、公家・武家・寺社から道具商までその交流、陶磁器産地・窯場・輸入器物他の流通と動向を伝えるが、製作上の陶技・陶法にまでは至らない。

『陶工必用』は、仁清伝、孫兵衛伝など、乾山焼の背景を述べ、京焼に関する歴史的な伝承、その中における乾山焼の立場を表明する。歴史とした自らの正統性を明示し、三窯各々の成り立ち、特質、技術を記すが、はじめに京焼様式の典型を築き上げた仁清焼の陶法を述べる。

(一) 仁清伝は本焼である。瀬戸焼・粟田口焼・楽焼の三要素を包含、茶の湯道具、茶碗、茶人製作に絞り、各々の土の調合、釉薬との関わり、それを如何に京焼の土・原料を用いて表現するかの工夫が主軸。

① 土の調合では、黒谷土を基本として山科藤尾石、遊行土を交ぜること。胎土となる土の割合と割合、産地と名称、働ぎと応用

② 釉薬は、生瀬石に灰を加えた本焼上薬(透明釉薬)が基本。それに酸化銅を交ぜた瀬戸青薬(織部釉)、呉須を交ぜたるり・青磁薬、また楽焼薬など

③ 絵具は、下絵付けに黒(酸化鉄と呉須)・青(呉須)・薄柿色(鉄)。上

絵付けにはビードロを混入、赤・萌黄・紺・黄・紫・白・金・黒色(二) 孫兵衛伝は内焼である。華南三彩を基盤とし、釉薬・絵具の調合。絵具にはビードロを用いることはなく、水彩画的な風趣をもつ。

① 土は本焼使用の土、工人の居する処の土。内窯土としては無し

② 釉薬は、白粉(唐土・鉛白)・日岡石(珪砂)が基本

③ 絵具は、ビードロなしの黒・緑・紺・赤・黄・紫色

(三) 乾山陶法は、仁清・孫兵衛伝に学び、よきを用い、否を省くとする。本焼土・釉薬は仁清伝、内窯釉薬は孫兵衛伝を踏襲。本焼・内焼用白絵具・黒絵具、種々の絵具の工夫、惣地塗り技法、窯の造り方・据え方、焼き方などに心を配る。鳴滝窯から丁子屋町への移転も知らせる。

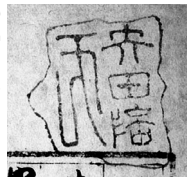
(四) 受理した人物は、やぎものに興味をもつ輪王寺坊官進藤周防守ではないかと考える。京都を承知、乾山とも懇意、京焼の背景・伝統、それに繋がる乾山焼の成立を語るが、朱註を入れ、解釈を加え、読む者により正確に内容を伝える努力が窺われる。朱註は当書のみの特徴である。中国文人の用いる書法の一手。朱註が無ければ、陶法書は単に土や石、金属・硝子などの調合書に過ぎないだろう。読み手の理解、興味を引く乾山の筆は力強く、巧みである。独自の言い回しと解釈。文字は大小自由に組み入れ、横画・冠などの筆の波状、漢字・仮名・片仮名の使い分け、当て字を含め、ふりがなは仮名、片仮名、左右にふり分け、行間は文意に添って適当な空間をとる。罫紙欄外も活用、書き足しには○印を入れ右側に小さく書すが、濁点は用いる所、用いていない箇所がある。

弟子でもなく、工人でもない相手に与えた書である。相伝でもなく、秘密裡にしたものでもなく、公に刊行したものでもないが、丁寧な言葉遣いは宛人の立場を知らせ、乾山の出自を伝える。

『陶工必用』に認められる印章



①「勝任之印」
白文方印



②「矢田陪氏」
朱文蔵書印



③「陶煙居蔵書記」
朱文長方印



④「飛龍在天」
朱文楕円印

『陶工必用』には次の四印がある。

- ①「勝任之印」…末尾に「元文丁巳杵八月武江蘭溪任」とあり、同印を押捺
 - ②「矢田陪氏」…冒頭・末尾に押捺
 - ③「陶煙居蔵書記」…「水上秘書にして他見をおそるゝものなり水上蘆川」・印
 - ④「飛龍在天」…各綴じ合わせに押捺
- 以上であるが、「飛龍在天」を除き全ては蔵書印である。

「勝任」は進藤周防守。乾山没して二年後、延享二年「東照宮百三十年御記」に「上野諸大夫進藤周防守從五位下藤原勝任」とある。「矢田陪氏」は宝曆二年八年「妙法院日次記」に輪王寺宮使者「矢田陪前守」とあり、進藤周防守、矢田部豊前守両者の揃う記録は「東叡山坊官諸大夫中江御音物覽」に認められ、「尊勝院僧正參府日記」(『多賀大社叢書』)に現れる。ともに輪王寺坊官、進藤は公寛・公遵法親王、矢田部は公遵法親王に近任していた。輪王寺は徳川家菩提寺寛永寺本坊の称。天海、公海ののち三代守澄法親王代に父後水尾院の院宣により輪王寺と改称、門主を輪王寺宮と称し、江戸座所・日光山・比叡山の三山管領を法務とした。六代公寛法親王は乾山と懇意。その崩御に際して乾山は頭六文字に想いを込めて追善の和歌を詠むが、乾山の死にはその坊官進藤氏が携わる。

矢田部(陪)氏は進藤氏の同僚、おそらく両者はやきものを好み、同書は進藤氏のために書され、やがて矢田部氏の手へと渡ったものではなからうか。確証はないが、軽々に陶工が陶法書を認めることにはないであろう。輪王寺坊官であり、時には入谷窯を訪れたか、朱註も入れ、主観・客観、随所に細かな配慮を見せるが、「勝任」とはその任にたえるに足るの意である。『易経』『史記』に例をみるが、勝任は乾山の文人意識にゆえ得る教養人でもあったであろう。丁寧なことば遣いには敬意が籠り、京焼仁清伝、孫兵衛伝、金森宗和の茶趣にも触れる。相手を認識、纏めた陶法書であるが、門人でもなく、専門陶工でもなく、乾山が親しく関わった人物に宛てたものである。

水上蘆川は矢田部氏懇意の数寄者・俳人か。同じく工人ではないと推量するが、全く後世の人物であった可能性もある。

「飛龍在天」は飛竜天に在り。『易経』乾卦。龍がそのところを得て天にいる意、聖人が天子の位にあって、万民がその恩沢を受けるの喩えとなる。

才徳ある君子の喩でもある。

―用語例―

陶治…火力を要するものに発し、ここでは陶器を造ること
 顔料…着色原料である。金属の酸化物に安定剤・着色補助剤を混ぜたもの。素地・釉薬の着色、下絵具・上絵具に使う
 いせ土…水箴した土・沈殿させた土
 茶碗薬…南京呉須・南京茶碗薬。唐紺青・花紺青はスマルト・回青、鮮やかな青色
 白薬…水薬・透明釉薬・上薬
 ハネ…割られる・剥げる
 けす…削りつぶす
 底切れ…高台などのひび割れ

―凡例―

乾山名、乾かすなどの軋はすべて「乾」、緒方は「尾形」に纏めたが、旧漢字は原文のままを使用。読みは原則として現代語を用いている。

- 一、異体字・略字・難読語
 - ち…より
 - メ…ベ…として…しめ
 - 江…え…へ
 - 二而…にて
 - 之…の…これ
 - 宜…よく…よろしく
 - 尹…之…辱…書
 - 斗…と…ばかり
 - 者…は
 - 扱…倍…さて
 - 造…迄
 - 二、乾山の書き間違いと推測する文字
 - 堀…掘 希…稀 隨…随
 - 三、新版名づかいを用いた例(乾山自らの片仮名ふりもある)
 - 故…ゆえ(ゆゑ)
 - 合…あわせ(あはせ)
 - 猶…なお(なほ)
 - 上水…うわみず(うはみず)
 - ひい…ひい(ひい)
 - 四、尺貫法
 - 体積…一斗Ⅱ一八〇、一升Ⅱ一、八〇、一合Ⅱ〇、一八〇
 - 質量…一貫Ⅱ三七五、一匁Ⅱ三七五、一分Ⅱ〇、三七、五、伝書中(伝、云々)としたものは佐野における『陶磁製方』、(江・云々)は江戸において認めた『陶工必用』を表す。



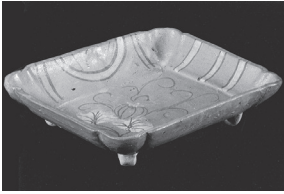
仁清焼 仁寧寺 銹絵水仙文茶碗



仁清焼 曼殊院 唐津写建水



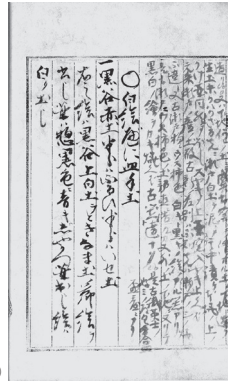
仁清焼 いらば写茶碗陶片 東京国立博物館



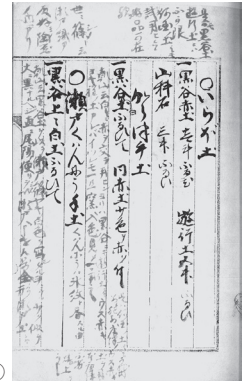
赤織部向付 (赤色素地に白・黒絵具) 大和文華館



乾山焼陶片 (赤色素地に白・黒絵具) 法蔵寺



④



③

③ ○いらば土
一 黒谷赤土壺斗ふるひ 遊行土五升ふるひ
山科石三升ふるひ
(上) 是モ黒谷土 遊行土ニハ不可限 何國ノ土ニても試用ヒ候
ハ、好品可在歟
*からつ手土

一 黒谷白土ふるひて 同赤土少色ヲ赤ク付候
是ハ何國ノ土ニても可然内 別て肥前唐津ノウス赤キ土ヲ用ハ
本唐津不劣焼上リ可申候
乾山云、白キニ赤ヲ交テ用ヒンヨリハ 黒谷ニモ遊行土ニモウス
赤キヨキ程ノ土アレバ イツレモ一旦窯へ入 色見メ可用之

○瀬戸*
一 黒谷土上々白土ふるひて
(上) 世ニ篠ト云 瀬戸織部殿好ミノ陶器ノ内ニアリ
乾山云 黒谷土ヲ以テ 瀬戸篠ヤキノ白色ヲ寫シタル斗ニテハ
少ク似テ大ニ異ナルベシ 直ニ尾陽ノ便リヲ以テ 瀬戸へ申遣 取
寄全形瀬戸土にて

④ 造り候 又ハ下地何レノ土ニテ成共 本窯ニテ澁サル土ニテ下地
ヲ造リ 生土未カハかざる先ニ 瀬戸白土ヲ泥ニメ 其中澁ケ
本焼ノ上ノかけ藥同然ニメ ぼし スヤキメ 上藥カケ窯へ入 ヤ
キ上候へば 元來瀬戸ノ産ノ土故 古新ノ差別ハ不知 先ハ瀬戸ノ
シノ焼に不違候 又古瀬戸物ニ ウス柿色ニ白キト黒キノ繪ノア
ル器アリ 是モ瀬戸ニ ウス柿色ノ土ニテ直ニ造ルカ 又外ノ土
ノ下地ニヌリテ 黒白ノ繪ヲカキ 候候へバ 古器ト違ナク候 是
古織英土ノ好ミノ道具 香合 皿 盃 臺ニアリ

○白繪*
一 黒谷赤土半分ハふるひ 半分ハいせ土
右の繪ハ 黒谷上白土ヲとき なま土ノ節 繪ヲ申
候 藥ハ惣黒色ニ青キシヤかつ藥 才申候繪ハ白ク出申
候

*いらば・伊羅保。高麗茶碗の一種。砂混じりの素地に緑色を帯びた釉薬、口縁ヘラ目。黒谷土・遊行土・山科石に限らず、乾山は何國の土も試してみるところを勧める。
*歟・疑問、未定の助詞。
*からつ・唐津焼。桃山・江戸初期に発展。古・絵・斑・朝鮮・瀬戸唐津などがある。唐津淡赤土は勿論であるが、鉄分を含む黒谷・遊行土の淡赤土も良いという。平安後期に碗・杯などを焼成。伝承では鎌倉期に加藤藤四郎が中国に渡り陶法を習得、施釉陶器の起源となり、室町期茶湯の流行とともに茶入、天目茶碗の製作が知られる。
*くはん丹う手・貫入・貫乳。釉薬のひび割れから水紋ともいう。素地より熱膨張率の高い釉薬に現れる亀裂。宋代官窯青磁の特色。乾山は貫入手土に關し、志野焼を例にあげる。
*篠・岐阜奥美濃焼・志野焼。織部好みの一類。桃山から江戸初期茶人が愛玩。鉄絵具の絵付け、半透明の厚い長石釉に特色があり、日本における初の白釉陶器。白釉には孔があり、鉄分の加減によって火色が浮かぶが、乾山は土は何なりとし、黒谷土を用いた場合は、生乾きの折、瀬戸白土の泥中につけ、釉薬を施し、素焼窯に入れる。が、相異のあることが避けられず。土は瀬戸から取り寄せる素地の応用は乾山特有のもの。
*織部・古田織部(二四四三一一六一五)の好尚による織部焼。赤土・白土、鉄絵具・青釉・黒釉・透明釉などに特色があり、古くは篠・柿・黒釉、抽象的な文様などに特徴がある。
*古瀬戸・鎌倉期一室町末期迄の瀬戸焼。
*古瀬戸かと推定されるが、素地の鉄分に反応させると生土上に絵を描く。
*しヤかつ・乾渴釉。黒地に白く斑な文様を呈する。

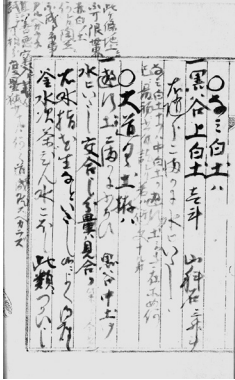


乾山焼
色絵花唐草文水注
妙法寺

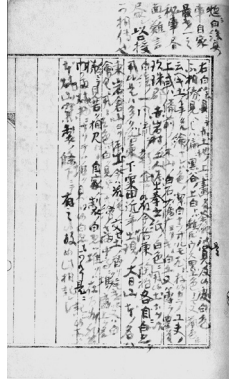
仁清焼 立鼓形花入
平瀬家旧蔵



瀬戸焼 伯庵茶碗
五島美術館



⑥

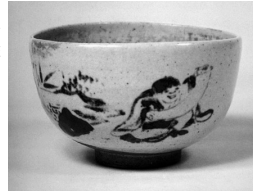


⑤

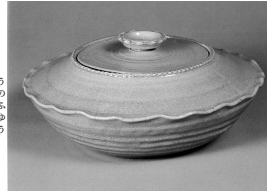
⑤ (上) 惣テ 白繪具ノ事 自家最第一の秘事 昼面二難言盡シ
以口授可相傳也
右白繪具ニテ 赤土地ノ上ニ晝タル茶碗 彼は見及候處 白色不
相勝 見へ申候ハ 偏ニ黒谷ノ上白トハ雖モ ウス黒色トモ 又鼠
色ト云ヘキ土ニテ 尹タル繪ナレハ 色ノ潔白ナラサルモ 尤ト
存候カラ 工夫ノ上 或ハ備前ノ八木山ノ白石 薩摩ヨリ出候 白
土 又ハ専ラ豊後玖珠郡赤岩村ノ土人堀出 奉之紙ノ白色ニ用候土
等ヲ以 白繪ノ一風流ヲ新ニ企て候故 今洛東ノ陶治 各自ニ 白
ろヲ用候 是ハ 多クハ洛東下栗田 近年出現ノ大日山 本ノ名ハ
東岩倉山ヨリ堀出シ 今ハ藤尾ノ交セ土ノ替リニモ遣ヒ 又ハ白繪
具ニ用候 尤色ハ白ク見江候へ共 繪ノさま中高ニ堆ク盛リ上ケ
タル様ニテ 見苦ク相見え候 自家ノ製白ろハ 堆クハ在間敷
然共 内かま焼物ニナリテは 堆ク見え候白ろも可有候 是ニ記シ
候所々本焼山窯製ノ條下ニテ有之候故 如此相記シ申候

⑥ ○なミ白土ハ
一 黒谷上白土 壹斗 山科石 三升斗
右随分こまかに 水ヒいたし候
なミ白土ナラハ 中白土カ 遊行土ニても可在所 如何 己ニ最
初二七付訖レリ 若ハ惣文ナルカ
○大道具土拵ハ
一 遊行土こまかにふるひ 黒谷中土ヲ水ヒいたし
交合申候 分量ハ見合カ 此朱ノ分今案也
右水指 花生などいたし候ニよく御座候
釜 水次 茶びん 水こぼし 此類ニつかひ申候
(上) 此ケ條ノ地土ニハ不可限 世界赤白ノ土 何レカ陶器ニ
不成ト云事アルヘカラス 其善惡 窯ハ入レ ヤキ候て試ミテ
可相分 度量 狭少ナルハ 何の道ニモ 成就スベカラズ

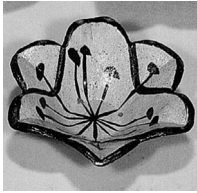
*白繪具…乾山焼自家第一の秘事。特色は豊後赤岩村出土の白土を混入すること。
*備前…和氣郡八木山の白石。黒谷土に混入し、素地をより白く見せる工夫をする。備前焼は岡山備前市伊部(いんべ)周辺産の焼く陶器。古くは香々登(かがと)と称された。
*薩摩…備前白土に同じく薩摩白土もよいとする。薩摩焼は鹿児島県大隅において朝鮮陶工が開始。寛政頃には京都より錦手技法が伝播するなど、豊後薩摩が興る。
*豊後土…豊後赤岩村産白土。奉書紙の精白・強度のために用いる陶土(石)である。白粉の原料として大坂方面へ出荷、文化年間(1804-1818)に認められた白土完渡覚書・極書などが残る。
*奉之紙…上意を奉じた命令・下知などを書するきめの細かな純白紙。
*大日山…左京区栗田口大日山町、神明山西方東岩倉山。名の起りは山上に大日如来石像を安置したことによるという。栗田口・五条坂の細工人は同白土を藤尾石の代用、白繪具として活用したが、内窯にはよいが、本焼では白絵は盛り上り、ハネが起るなど不適。乾山窯ではそれに豊後土、日岡石を混入するなどの工夫を施し、防いだという。
*水ヒ…水箆。土を水に漬け、漉し、細粗を分離。雑物などを取り除く。遊行土は手触り、味わりなど、肌理を整え、焼成における組織・構造に関与。割れを防ぐ。
*訖り…終える・とめる。
*惣文…けんぶん・誤りの文。
*大道具…主要茶道具以外の道具。
*水指…点茶道具の一つ。水を貯え置く器。
*花生…花を入れる容器。床に置く・柱に掛ける・釣るなどの方法がある。
*釜…湯を沸かす道具。多くは鉄製。が、聖護院には二代猪八の惣地塗り釜が伝世する。
*水次…点茶道具。水指に水を注ぐ容器。
*水こぼし…建水。湯・水を捨てる器。
*茶びん…茶を煎じ出す土瓶。煎茶道具。
*水量狭少…受け入れられる心が狭ければ何事も成就せずなど、やさしさの中に乾山の芯の強さ・厳しさ、自信の程が窺われる。



仁清焼
鑄絵寒山拾得図茶碗
鹿苑寺



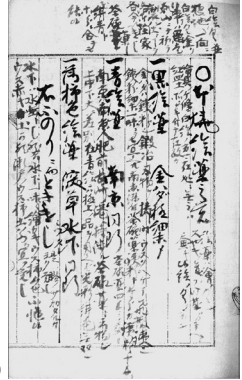
仁清焼
卵斑袖水指



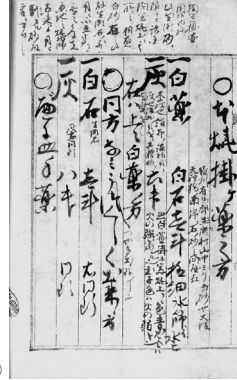
乾山焼
鉄絵百合形向付



乾山焼
鑄絵染付春草蓋茶碗
湯木美術館



⑦



⑧

乾山焼における薄柿色絵具である。十筆を描くが、数少ない用例である。

⑦

○本焼繪藥の覚 繪藥ハ繪ノ具也
スヤキノ後 かけ藥方まへニ昼キ候繪ノ具ノ方也 繪具ノケ條ニ
白繪ノ方可在処ニ無之ハ 紅皿土ノ所ニカキ付テ在故カ
(上) 白繪具並 惣地へ一向ニ白繪具塗り候事ハ 愚老乾山ニテ
初テ製シノノヲ 洛東ノ陶家 各今以遣申候

一 黒繪藥 金ハダ極細末メ
金ハダハ鉄粉也 鍛治刃物ヲ搗候時 ウスクヘゲテ飛散鉄也
鉄粉細末一味ニテモ宜候へ共 南京染付茶碗藥 鉄粉ト等分カ
粉十匁ニ 茶碗藥四匁にても交候

一 青繪藥 南京同斷
(上) 茶碗藥申候 花紺青ト 等分ニ合テモ能候
南京ハ 南京人肥前長崎ノ港へ持渉ル 茶碗藥ト云物也
上中下大ニ差別在 青繪ニハ極上ノ品ヲ用候へば 光彩紺色無双也

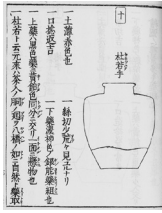
一 薄柿色繪藥 (佐・なし) 濃草水下同斷
右ふのりニてとぎ遣申候 是ニ膠少加タルカヨク寛申候
水下ハ水垂ト申候 然共 水下一味ニテ繪カキ ウス柿色不燼候
ウス赤キ土可然 瀬戸ノウス柿土別て宜ク寛申候

○本焼掛け藥の方
攝州 有馬郡生瀬村山中ヨリ白砂也 大坂天神橋ノ南岸ニ 右ノ
砂の間屋在
(上) 陶器掛藥ニ用候白砂ハ 此生瀬砂ニ限ラズ 諸國陶器焼出候
其所々ニ 相應ノ白砂有之候故 生瀬石ノ外ハ用ニ不立申事ニテハ無
之候へ共 先京地之燒物師 古來方用ヒ馴タル砂故 爰ニ之付申候

一 白藥 白石老斗 極細水篩ニて水ヒ
一 灰* 木灰也 絹布ノ染物ニ用候灰也 染物ノ用ニ遣候其糟粕
ヲ乞受 遣申候 六升 惣ニ白藥掛候器 焼上り候色青ク見へ候
ハ火の強ク當レル也 玉子色ハ火の弱キ也
右ハ上々白藥ノ方

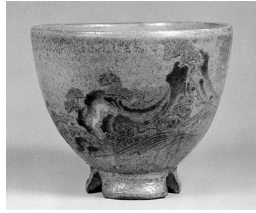
○同方なミウつくしく出来候方 つや多出候様ノ方也
一 白石 生瀬石 老斗 右同斷

一 本窯・繪具、釉藥
*本焼繪藥・繪具は絵具、素焼後上薬を掛け
る以前に用いるが、書・画、裝飾を施すため
の釉下絵具を用いる。
*惣地へ一向に白繪具・エンゴローベ、白繪具
の創案に加え、文様ぬり、惣地ぬりは乾山独
自の工夫であったが、京都では徐々に広まり、
洛東の陶家では今以て同技法を模倣。京焼
の一つの様式、特色として定着してゆく。
*金ハダ・鍛治にて生ずる鉄粉。中国渡來の
南京茶碗藥(唐具須)と等分に交ぜ、黒絵具
の材料とする。
*搗・トウ、うつこと。
*青繪藥・中国人の伝えた茶碗藥、呉須をい
う。極上品の使用、又花紺青を交ぜる法。
*花紺青・スマルト鉱。コバルトを含む青色
顔料。中近東から中国へ渡來した回青かと推
定。呉須の発色は鈍く、回青は純度が高く鮮
やかな青色を呈する。乾山は唐紺青とも称
する。
*ふのり・布海苔。紅藻類の一種。板状に干
し、固め、煮て糊として用いる。
*にかわ・膠。魚類・獸類の骨・皮・腱など
を煮てその液を固めたもの。ゼラチン。接着
材として活用する。
*水下・水垂・水打ち・水落ちともいう。鉄
分を含む黄色粘土。昔は自然に生じ、今日では
横土を水篩。稲荷山の黄土が知られる。
*槌・確かの意。言行の一致すること。
*本焼掛け藥・摂州・生瀬村山中の白砂が良
いが、それに限ることはないという。
*生瀬・長石である。古來からの本焼掛藥の
原料とされる。大坂天神橋には同砂を扱う問
屋があつたという。乾山はナマセともなまぜ
とも、生瀬石、生瀬白石とも記す。
*灰・染色に用いる木灰。灰を水に浸し上澄
みの灰汁(あく)を媒染剤として藍染などの
染色に用い、下に溜まつた滓をやきものに使用。
白薬は火が強い場合は焼成後に青味を帯
び、弱い場合は玉子色になるという。
*糟粕・酒などのかすをいうが、不用、取る
に足らない意。

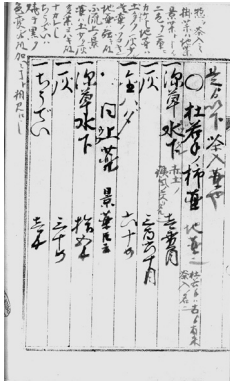
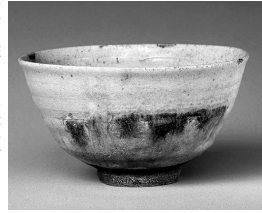


杜若手茶入
『茶器便玉集』 第四卷
寛文二年（一六七二）刊

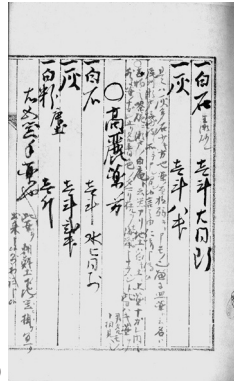
仁清焼 色絵松島図茶碗
（呉器手形）大樋美術館



瀬戸焼 伯庵茶碗
サンリツ服部美術館



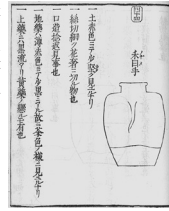
⑩



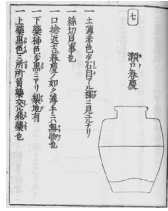
⑨

- 一 灰 灰石同断 八升 同断
- ^{*}べに皿手薬
- 一 白石 生瀬砂也 壹斗右同断
- 一 灰 壹斗八升
- 一 是ハ灰多石少キ方也 薬ノ至極弱キト申モノ也 べに皿薬ト云名ハ尾州瀬戸焼物致候所ニテ申シ習シ候言之由 仁清申傳候
- 古物の茶碗ニ 瀬戸ノ白庵ト云器アリ 地土ハ白キ土ニ 上薬ナガレ 内ニも外にも 薬ノナガレ止リタル 青色ノタマリ在ルヲ海風申候ナラハシト 此ヨハキ薬ヲ用タルモノト相見ヘ候
- 高麗薬の方
- 一 白石 壹斗水ヒ同前
- 一 灰 壹斗式升
- 一 白粉 唐土 壹升
- 右五器手薬也 此薬ヲ 朝鮮土ノ下地ノ器ニ掛ケ 宜ク出来申候 則相試申候
- ⑩ 是以下茶入薬也
- （上）惣テ 茶入の掛薬ハ 地薬 景薬ト申候て 二色ヲ二重ニカケ申候 地薬ハ土多ク 灰少シ 是薬ノツヨキ也 地薬ハ強キ故不流上ノ景薬ハ土少ク 灰多 薬ヨハキ故ナカレ申候 ちうでいハ 焼テ黒ク色変シ候故 加ヘ候トト 相見ヘ申候
- 杜若手ノ 柿薬地薬也 杜若手ハ 古ハ有來茶入ノ名也
- 一 深草水下 赤土ノ 鉄氣ノ交リタル也 壹貫目
- 一 灰 三百六十目
- 一 金ハダ（佐・鍍粉） 六十め
- 同上薬 景薬ト云
- 一 深草水下 拾五奴
- 一 灰 三十め
- 一 ちうでい 壹匁

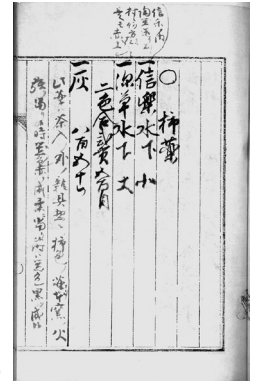
*べに皿手…べに皿手薬は黄瀬戸釉と推定。仁清の伝える所、瀬戸の言い習わしとされるが、灰多く生瀬石少ないとは、火に弱い釉薬である。白い素地に釉薬が流れ、止まった箇所に青色のなまご状の流れが生ずる。
*白庵…医師とされる曾谷伯庵（そやほくあん・一五九一—一六三〇）所持の茶碗。枇杷色釉・海風釉・竹の節高台に特徴があり、朝鮮また瀬戸、唐津産とする説もある。
*海風…墨灰釉など、青味を帯びた失透明の白濁釉。流れた釉薬が海風のような色を呈する所から生じた名称。瀬戸茶入にもあり、中国では元代の均窯に代表される。
*高麗薬…高麗茶碗に用いる掛薬。五器手用。試してみたが、朝鮮の下地によく適合すると乾山は述べる。粟田口焼陶器の性格を決定づけた基本釉である。
*唐土…白鉛・鉛白。粒子の細かい炭酸鉛の白い粉。媒溶剤。上絵具にも使用する。灰を安定させ、卵色のやわらかな色・細かな貫入を作り、絵具の密着度を高める。
—茶入薬—
*茶入薬…ここからは茶入薬の処方である。茶入に用いる釉薬は基本的に二色二重掛け、地薬と景薬に分けられる。
*地薬…土台となる基本釉薬。水も多く、灰少なく、器物に密着し流れにくい。
*景薬…茶入の景として地薬上に掛ける釉薬。土少なく灰多く、流れ易く、茶入の景色をつくる。
*ちうでい…鑪泥。真鍮。仁清はちうでいを始め、金ハダ・金のるかす・少平など、種々の鉱物、灰、石、溶剤などを混ぜる。窯中における種々の変化に興味をもっていたことを示すか。
*杜若手…瀬戸茶入の一種。肩から流れる柿色・鉄釉が「八橋」に似るとした意。
*深草…京都市伏見区深草では一世紀頃頃から赤・茶褐色土器を生産。鉄分を含む赤土が使用された。施釉陶器はないが、「和漢三才図会」には山城国の土産、瓷器（やきもの）として御室・乾山・清水・深草とある。



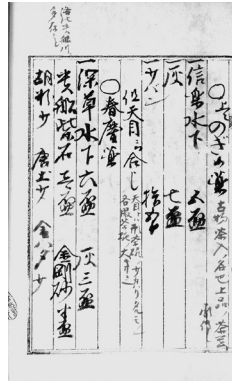
『茶器便玉集』 第四卷
寛文二年刊
禾目手茶入



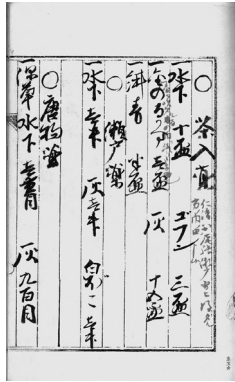
『茶器便玉集』 第四卷
寛文二年刊
瀬戸春慶茶入



- ⑪ ○柿薬（上） 信樂ノ内 陶器造り出候村々 何方（なほ）ニも在之候 是モ赤土也
信樂水（下） 小
一 深草水（下） 大
一 二色合（下） 式貫五百目
一 灰 八百五十め
一 此薬ハ 茶入ノ外ノ雜具惣（下）テノ柿色ノ薬ナリ 本窯ノ火強ク當リ候時 器ノ色赤ク成 柔ニ當リ候時ハ 器色黒ク成候
一 信樂水（下） 上々（下）ノぎめ薬 古物茶入ノ名也 上品ノ茶器ト承傳候



- ⑫ ○七（下）ノぎめ薬 古物茶入ノ名也 上品ノ茶器ト承傳候
一 信樂水（下） 上々（下）ノぎめ薬 古物茶入ノ名也 上品ノ茶器ト承傳候
一 灰 七盃
一 少バン（下） 拾五匁
一 但天目（下）ニテ合申候 天目トハ 形茶碗ノ少カハリタルモノ也 各服茶碗ノ大キサニ也
○春慶薬
一 深草水（下） 六盃 灰三盃
一 貴船紫石（下） 壹盃 金剛砂半盃
一 胡粉（下） 洛北貴船川ニ多在之候
一 茶入薬 仁清（下）於尾張瀬戸ニ 習ヒ得タル方ノ内ノ由申候
一 水（下） 十盃 残リタル物也
一 金（下）ノるかす 壹盃 灰 十五盃
一 紺青 半盃
一 瀬戸薬
一 水（下） 壹升 灰 壹升 白（下）ぼこ 壹升
一 唐物薬
一 深草水（下） 壹貫目 灰 九百目



- ⑬ ○茶入（下） 仁清（下）於尾張瀬戸ニ 習ヒ得タル方ノ内ノ由申候
一 水（下） 十盃 残リタル物也
一 金（下）ノるかす 壹盃 灰 十五盃
一 紺青 半盃
一 瀬戸薬
一 水（下） 壹升 灰 壹升 白（下）ぼこ 壹升
一 唐物薬
一 深草水（下） 壹貫目 灰 九百目

*柿薬・鉄釉の一種。中国北宋代定窯において完成。磁州窯では文様描きに用い、日本では瀬戸茶入に活用、茶色・茶褐色を呈する釉薬である。

*信樂土…滋賀県甲賀郡信樂町一帯から出土する粘土。周辺山々からは窯業に適する木節・蛙目粘土などが産出。水は水酸化鉄を含む黄・赤土である。

*灰…合わせる・応ずる。

*柔…火の当たりに弱い場合。酸化・還元の場合もある。

*のぎめ…禾目。瀬戸茶入の一種。天目茶碗にもあるが、釉薬中の酸化鉄が結晶となり細かい筋状を呈すること。釉の外殻に似て、中国では兔毫という。

*少バン…硝鑊。釉薬を熔けやすくする。

*天目…抹茶茶碗の一種、碗台に乗せて使用。貴人、神仏の献茶・儀礼に用いる。江西省吉州窯、福建省建窯などで焼成。浙江省天目山の禪院では喫茶に使用。鎌倉期日本に移入、同形碗を天目と称したが、漏斗形・口辺のすぼまり・低い高台が特徴。乾山は各服茶碗の大きさであり、計量に應用する。

*春慶…古瀬戸茶入。瀬戸・加藤藤四郎景正の剃髪後の法号、製作した茶入を春慶という。赤土・柿釉・釉薬の重なりが特徴。黄薬の掛かったものが朝日手である。

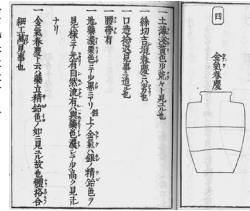
*貴船紫石…左京区鞍馬貴船周辺の石か、鴨川石と同種とされる。

*金剛砂…石榴石。奈良金剛山脈の火成岩が風化・堆積したもの。

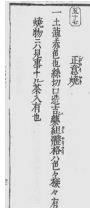
*胡粉…白色顔料。絵画にも使用。貝殻を細砕、水酸で溜させたため用いる。釉薬の冷却中、結晶化を起させるために用いる。

*のるかす…鍍金。金属を入れて溶かし、鍍金の材料をとる器。金のるかすは金鍍の鍍に残った滓。不純物を含む。

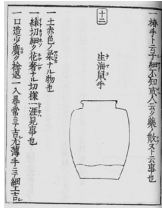
*白ぼこ…湿り白土。瀬戸地方の言い習わしとされ、叩くまた握ると指の間から水の滲むような土という（加藤唐九郎・満岡忠成）。力をかければ柔らかく、放置すれば固い珪砂質の石粉かと推測（田賀井秀夫）。



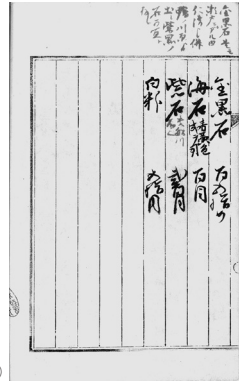
金氣春慶茶入
『茶器便玉集』第四卷
寛文一二年刊



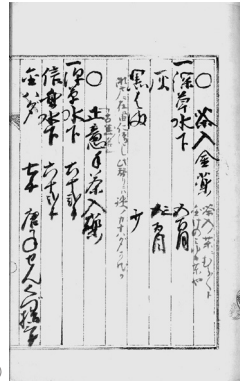
『正意焼』『茶器便玉集』
第四卷 寛文一二年刊



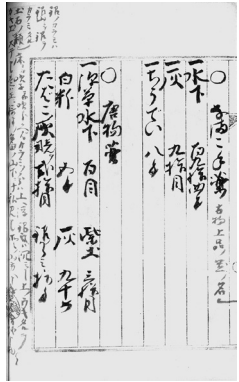
生海鼠手茶入
『茶器便玉集』第四卷
寛文一二年刊



14
*金黒石 百五拾め
海石 青黄色成^{なま}ヲ用 百目
紫石(佐・紫土) 貴船川石也 式百目
白粉 五拾目
(上) 金黒石 是毛瀬戸ニハアル由 仁清申候 併^{あわせて}鴨ノ川原方
出候紫黒ノ石 可宜ト存候

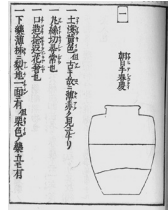


15
一 深草水下 五百目
○茶入金薬 茶入ノ薬ニ むら／＼ト金けのミゆる薬也
灰 三百目(佐・三百八十め)
黒はま 少
瀬戸ニ在ル由 仁清申候 此替リニハ鉄ノカナハダ可然可^{しからべき}
古器ノ名也
○正意手茶入薬^{*しよい}
深草水下 六十式匁
信薬水下 六十式匁
金ハダ(佐・鉄粉) 七匁^{*}唐かねせんくづ 拾三匁
(灰の分量の記載なし)
○なまこ手薬^で 古物上品ノ器ノ名也
水下 百九拾四匁
灰 九拾目
ちうでい 八匁



16
一 唐物薬
一 深草水下 百目 紫土 三拾目
白粉 五匁 灰 九十め
たばこノ灰志んヲ用 式拾目 銀ノからミ 拾匁
(上) 銀ノカラミハ 銀山ニテ銀ヲカラミタル土石ノ類也 床ニ
て吹子ニテ吹分候へば カラミノ分ハ上へ浮 銀氣ハ沉ミ申候 上
ノウキタルカキ出システ申候 是ハ正二攝津ノ多田ノ山下ニテ
私見申候 所々ノ山方へ申遣候へは 持越^{もちこ}申物ニテ候

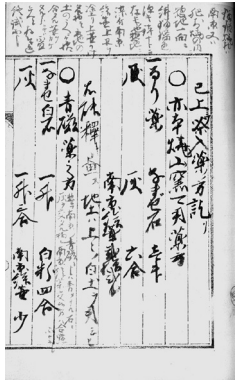
*金黒石・鉄分を含む二酸化マンガンの礦石。鉄分は釉薬の着色剤となり、含有量によつて黄褐色・褐色・黒色を呈するが、仁清は金黒石も瀬戸・紫石は如何かと考える。
*海石・海から出る石。珊瑚か。
*黒はま・鉄砂の一種。呈色剤。瀬戸にある。
*正意手・利休時代、堺の医者正意の製作した茶入とされる。乾山は「古器ノ名也」とするが、瀬戸における茶入製作が伝承。正意は京都室町四条に任したとされ(『万宝全書』、『茶器便玉集』(寛文一二年刊)には「正意焼」土は薄赤色、見事なる茶入とある。
乾山は「陶磁製方」『正意手茶入薬』項目において、灰ノ量目「江戸ノ宿テ寫候魁失念、ネラトシ申候、跡方ネ付可進候」と述べるが、同じく『陶工必用』にも灰の項目はなく、乾山の失念か、原本である仁清伝書に書き落としがあったものか。いずれにしても乾山は江戸下向に際し、仁清陶法書を携えていたと考える。
陶法書とはいえ、綴本ではなく、単に用紙を重ねて調合を纏めたものかも知れず、「陶工必用」は乾山の朱註を以つて形式を整えた。仁清の原文は何処に消えてしまったのか。乾山焼後継者となつた猪八も『陶器密法書』を纏めた。が、仁清焼、本焼色絵陶に関する記述はなく、専ら本焼ものは栗田口、五条坂の借寮を基本としたもの考へる。
*唐かねせんくづ・青銅(銅錫との合金)の削り屑。
*なまこ手・瀬戸茶入。藍・紫・緑色など矢透明釉薬に特色がある。
*たばこの灰・芯を用いるとあるが、煙草の茎の灰か。
*銀ノカラミ・銀の鍍(かん(からみ))。熔錬・精錬の折、炉の上に浮く滓(かす)。灰の鉛が酸化鉛に變じ、不純物が混入したもので。着色原料となる。
*多田・摂津多田銀山。乾山は実際に訪れ、工程を見学。入手の可能性も確認する。
銀山・銅山の開発は秀吉時代に本格化、江戸期へと継続した(『日本永代蔵』)。



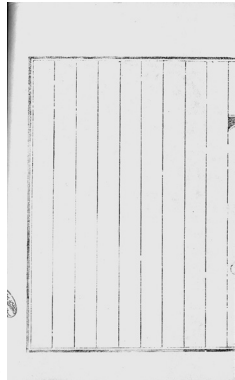
朝日手春慶茶入
『茶器便玉集』第四卷
寛文二年刊



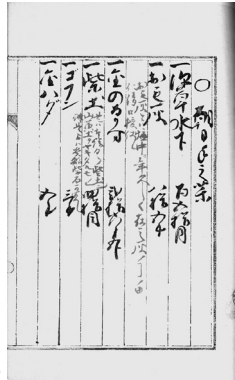
肥前焼
瑠璃釉色絵花鳥文徳利
出光美術館



19



18



17

17 ○朝日手の薬

- 一 深草水 百五拾目
- 一 おも灰 八拾五匁
- 一 おも灰とハ 爐中二年久しく在之灰^{（五）}ノ由 仁清口授仕候
- 一 金のるかす 貳拾六匁五分
- 一 紫土 四拾目（佐・四十五匁）
- 一 是ハ本繪具ノ紫土也 山黄土ヲヤキタルモノ也 併^{（六）}是ガハ貴船紫石可宜候
- 一 ゴフン 三匁
- 一 金ハダ（佐・鉄粉） 五匁

18 （白紙）

- 19 己上ニテ茶入薬ノ方訖^{（一）}
- 亦本燒山窯可用薬方^{（二）}
- 一 るり薬 なまぜ石 壹升
- 一 灰 六合

右の釋ヲ屋ス 地土ハ上々ノ白土ヲ用云々
（上）瑠璃燒物ハ 南京又ハ肥前燒ノ内ニ 惣地一向ニ 紺瑠璃色ノ深キ鉢ナトニ在モノ也 惣地ニ染付 南京繪薬上品ヲ塗り 上薬^{（三）}かけタル物ニテ候 京地^{（四）}の土のうへニ ケ様ニ合タル薬ヲカケタル分ニテハ 不宜^{（五）}候ハんと存 今迄終ニ試不申候

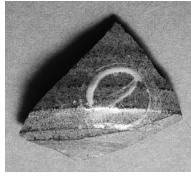
○青磁薬の方 惣テ南京ノ青磁ト申候ハ 青メナル石ニ 灰ヲ交タル物也 南京繪薬交候方ハ 合點不參候
一 なまぜ白石 一升 白粉 四合
一 灰 一升三合 南京繪薬 少

20 ○瀬戸青薬

此方宜 御座候
（上）此青薬ハ 瀬戸燒物ノ惣白薬カケ候上へ 所々ニカケ候青

*朝日手・古（ふる）瀬戸茶入の一種。朝日手春慶。加藤藤四郎春慶が晩年美濃國朝日において焼成。薄手、肩が大きく、柿油に暗褐色。黄白濁の斑釉に特徴がある。
*おも灰・重灰。爐中に久しく置かれた灰。仁清口伝。
*口授・口伝えに教えること。
*紫土・本繪具は絵画、絵師の用いる和繪具。山黄土を焼き、茶色を帯びた紫色の土。
*山黄土・黄・浅黄色の土。焼返したものが紫土。鉄釉の原料となる。乾山は鉄分、マンガンを含む貴船紫石はなお良しと述べる。
一 本窯・山窯に用いる釉薬
*るり薬・酸化コバルトを用いた紺青繪具。二手があり、低火度釉薬（イースラム圈に始まる）。高火度釉薬（元代後期景德鎮において完成。濃藍は民窯、淡藍は宮廷用）に分けられる。瑠璃は日本における美称。惣地一面に紺繪具を施すなど、伊万里焼において発展。白磁器・肥前燒素地には適するが、陶器・京燒素地には不適であり、乾山焼にはみられない。但し鳴滝窯址からは分厚い磁器素地に染付文様を施した漳州窯模倣の破片が出土。
仁清のるり薬・青磁へのこだわりは磁器への意欲を示唆。日本における瑠璃・青磁釉薬の模倣であり、萬古焼にも見い出せる。呉須は鉄分・マンガンを酸化コバルトを含む。
*南京繪薬・中国渡来の唐呉須。
*釋（わけ）・解の意。解き明かす。
*南京燒・日本における景德鎮窯磁器の總稱。南京薬は中国渡来の着色剤コバルトであるが、乾山という南京上々茶碗薬（呉須）は染付用に、マンガンを含む下ノ呉州は鉄絵具に用いられた。

肥前燒一七世紀初頭有田を中心に朝鮮・中国の技術を以って開始。江戸期には肥前燒、出荷港に因み伊万里燒と称された。
*青磁薬・青色の石に灰を混ぜた灰釉。高火度還元焼成に因り鉄分が酸化第一鉄に変化。淡青・淡緑色を呈し、鉄分が少ないと青味、多い場合は緑味を帯びる。以上、青磁の真作を知る乾山は、仁清の南京繪薬・呉須を交ぜて発色させる法に合点がゆかぬと述べる。



仁清焼 いらぼ陶片

さび薬・仁清焼 壺
フリア美術館



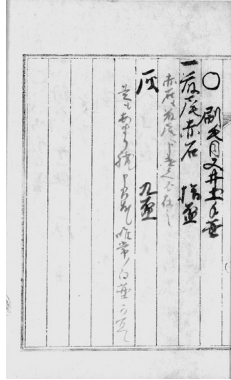
織部青薬・仁清焼 色絵
織波文茶碗 北村美術館



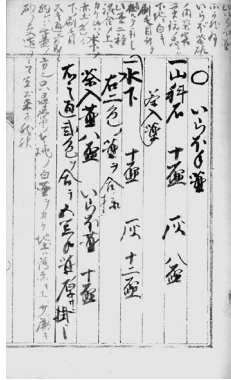
織部青薬・仁清焼 水指



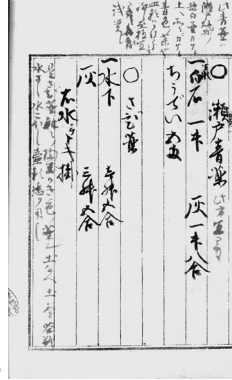
23



21



20



23

(白紙)

一 藤尾赤石 拾盃
赤石も藤尾へ申遣候へば在之
灰 九盃
是もあまり勝レ申間敷候 唯常ノ白薬可宜候

22

○刷毛目又井土手薬
右之通 式色ヲ合テ 五器手薬ノ厚サニ掛申候
茶入薬 八盃(佐・十盃) いらぼ薬十盃(佐・八盃)

一 水ノ下 十盃 灰 十二盃
右二色ノ薬ヲ合様

一 山科石 十盃 灰 八盃
(上) 此いらぼ薬 不可然存候 いらぼ茶碗ノ内 茶客賞玩ノ品
ニハ 下地ニ白キ刷毛目付テ有ルヲ用申候 此薬二種混合又 上二
カケ候ハ、水ノ下ノ赤土ノ色ニテ 下ノ刷毛目スキ通ル間敷候 然
レハ無益ノ方也 只尋常ノ本焼ノ白薬ヲカケ 地土ハ薄赤キ土ニ少
シ鹿キ砂ヲ交 造り候ハ、宜出来可然敷

21

○いらぼ手薬
一 山科石 十盃 灰 八盃
(上) 此いらぼ薬 不可然存候 いらぼ茶碗ノ内 茶客賞玩ノ品
ニハ 下地ニ白キ刷毛目付テ有ルヲ用申候 此薬二種混合又 上二
カケ候ハ、水ノ下ノ赤土ノ色ニテ 下ノ刷毛目スキ通ル間敷候 然
レハ無益ノ方也 只尋常ノ本焼ノ白薬ヲカケ 地土ハ薄赤キ土ニ少
シ鹿キ砂ヲ交 造り候ハ、宜出来可然敷

20

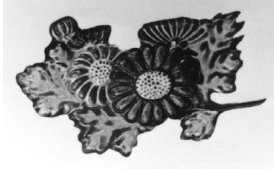
一 水ノ下 十盃 灰 十二盃
右水ニテトキ掛候
是さび薬 雑々ノ陶器 かき色ノ薬也 土なへ 土釜 茶瓶
水さし 水こほし 壺類 悉ク用申候

一 水ノ下 壺升五合
灰 三升五合

○さび薬
一 水ノ下 壺升五合
灰 三升五合

色ノ薬也 皿類ハかけ分ニも致候 至極宜御座候 毎度試覚候
一 生瀬 白石 一升 灰 一升八合
ちうでい 五匁(佐・二十め交)

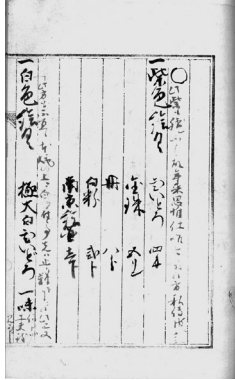
*青薬・瀬戸青薬。透明釉薬を掛けた上に所々、又掛分けるなど、織部焼青・緑色(銅緑釉)をいう。
織部青は、透明釉薬に酸化銅を交ぜることによつて緑・青の発色となる。乾山は皿類の掛け分けなど、幾たびも試用、至極よろしいと述べる。
*白釉・透明釉薬のことである。『百工秘術』には水薬とある。
*さび薬・銹薬は鉄薬の一種。水ノ下など鉄分を含み柿色を呈するもの。
中国後漢代越州窯に始まり、一三世紀朝鮮の高麗時代、日本では鎌倉・南北朝期に瀬戸において発展した。搦鉢・土鍋・壺など雑多な容器に用いられるが、さびは茶の湯の理念を示し、古気、いよいよその物らしい味意とする。
*いらぼ手薬・伊羅保。釉薬は鉄分多く、黄味を帯びた薄褐色の発色となる。条件により諸々の変化が生ずるが、茶人好みの刷毛目、片身替わりなど、二種の混合釉薬を掛けた場合は、水ノ下によつて下の刷毛目が透き通らない。乾山は代わりに薄赤土に砂を交ぜ、常の本焼釉薬を掛ければよいのではないかと述べる。仁清伝では水ノ下が多いのではないかと推考(田貫井秀志)。
*伊羅保は侘びた風情が茶人に好まれた。
*鹿・粗い・雑。
*刷毛目・高麗茶碗の一種。器物に刷毛を用いて白泥を塗るが、粗雑な素地を化粧、白磁にみせる工夫である。無造作な刷毛目を茶人が賞翫。仁清伝は山科藤尾赤石に灰を交ぜるが、乾山は常の白薬が適するのではないかと
*井戸手・高麗茶碗の一種。茶の湯茶碗の筆頭に挙げられるが、名の由来は不明である。朝鮮慶尚南道東洞洞里において製作。批把色・口クロ目・竹の節高台・高台周辺のかいらぎ(釉薬鯨状のちぢれ)などを見所とする。大別して、大振りの大井戸、青色を呈する青井戸、それ以外の小井戸、小井戸のうち貫入の目立つ小貫入に分けられる。



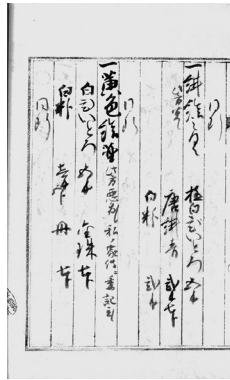
赤・萌黄・紺・紫・金絵
具・仁清焼 色絵釘隠
京都国立博物館



紫絵具・乾山焼
色絵紫陽花図透し鉢



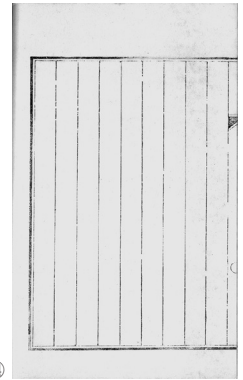
27



26



25



24

(白紙)

24 ○錦手繪具の方

一 赤 金珠(佐・上々弁柄丹土) 壹匁金珠ハ上々弁柄丹土ノ糸を用いた織物であるが、やきものでは上絵具・彩色を施した色絵陶磁器をいう。赤絵の意もあり、磁器では有田焼が最も早く、正保四年(一六四七)頃には柿右衛門家文書に「赤絵初(はじまり)」とある。鍋島家へ書の錦手と称され、やがて赤絵の用語は消えてゆき、金彩を交えた多彩な絵具による装飾磁器を錦手というが、京都では一貫して有田焼色絵磁器を錦手と称している。

極白びいどろ 貳匁

白粉 壹匁

ほう砂 透たるがよし 三分

右細末メ ふのりにてとき中申候

ふのりハ入不申が宜候 膠斗少入候

一 萌黄繪具(佐・記載なし) 白粉 八分

此方宜候 萌黄びいどろ 五匁

岩緑青 六分

25 同断

一 紺繪之具 極白びいどろ 五匁

此方宜候 唐紺青(佐・花紺青) 貳匁七分

白粉 貳匁

26 同断

一 黄色繪藥 此方悪敷候 私ノ家傳ニ委置候

白ひいどろ 五匁(佐・拾匁) 金珠七分(佐・なし)

白粉 壹匁五分(佐・四匁) 丹七分(佐・なし)

同断

27 ○此紫も勝レ不申候故 年來思惟仕 唯今用候方私傳ノ内ニ記

一 紫色繪具 ひいどろ 四匁(佐・拾匁)

金珠 五リン(佐・なし)

丹 八分(佐・なし)

白粉 貳分(佐・四匁)

南京繪藥(佐・南京下ノ二す藥) 壹分(佐・五分) 此方も不宣候 本焼の上ニ白ヲ付候事 先ハ止リ難キニ候 此上又何トゾ工夫致 見可申候

— 錦手(内窓・繪具)

ここからは仁清伝、上絵付け用の色絵具。

*錦手・上絵付け。錦は五色・金彩・多彩色の糸を用いた織物であるが、やきものでは上絵具・彩色を施した色絵陶磁器をいう。赤絵の意もあり、磁器では有田焼が最も早く、正保四年(一六四七)頃には柿右衛門家文書に「赤絵初(はじまり)」とある。鍋島家へ書の錦手と称され、やがて赤絵の用語は消えてゆき、金彩を交えた多彩な絵具による装飾磁器を錦手というが、京都では一貫して有田焼色絵磁器を錦手と称している。

赤色はむすかしく、不純物によつて発色が妨げられるなど、良い顔料をよくよく揃り、薄く塗ることが秘訣とされる。

*金珠・極上の弁柄丹土。丹は酸化鉛。正倉院にも伝承、ガラスの原料に用いたものと推測されている。

*貴・つとめて・義務の意。

*びいどろ・ビードロ。ガラス・玻璃。白びいどろはガラス粉。室町末期にオランダ人が製法を伝えたと伝承。江戸期には輸入されていたか。

*ほう砂・硼砂。接着剤に用いる。無色の粉末であるが、空気中では白色、鉛系白玉の融剤となる。透(すき)とは焼返しをしない硼砂。焼返しては精分が減退、月日を経て剥落してしまふ。ふのりではなく膠にて溶く。

*萌黄・青(緑)と黄の中間色。葱の芽の出始める頃の色。

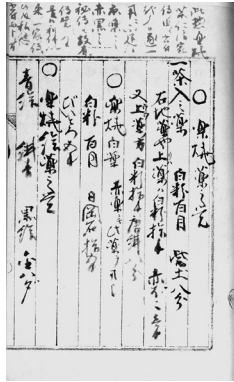
*岩緑青・緑青。白緑ともいう。天然炭酸銅。緑色絵具の原料となり、高価とされる。比して奈良緑青は人工的に製されたもの。安価であり、真鍮・銅板などを塩水につけ、よく攪拌。上部の緑色部分を水洗して用いるという。

*唐紺青・上絵付け用青色絵具。江戸期中国より渡来したと伝承。乾山は花紺青ともいう。

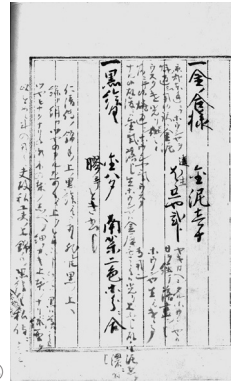
*黄・紫・白繪具・仁清伝は優れずとして、乾山伝を後述する。乾山は黄色に唐白目を入れる。

*南京繪藥・紫の呈色剤として用いる。

赤・萌黄・黒・金・銀絵具・
仁清焼 色絵金銀菱文重
茶碗 MOA美術館



29



28

一 白色繪具 極大白ひいどろ一味

28 一 金ノ合様 金泥(佐・金の消泥) 壹匁(佐・壹分)

(佐・上々透ホウシヤ) 透生ほうしや 式分(佐・三厘)
ヤキカヘシタルホウシヤハ 日ヲ經テ落盡シ申候 ホウシヤ生
ニテ遣候事 専用也

京都東邊ニテ ホウシヤヲ焼返シ用候時ハ 金泥ウスク遣
リ有之候爲ニテ候 焼返シ ホウシヤ氣ウスクナル候故 後ニハ
金氣落申候 生ホウシヤハ 金厚ク無之候テハ 光り出申候故
金泥ノ多ヲ濃ニ付申候

一 黒繪具 金ハタ 南藥(佐・鍊粉(才藥) 二色等分ニ合
ニテとき々申候 仁清傳ノ錦手上

ノ黒繪ニテ御座候 然レモ 黒ノ上ヘ緑カ 紺カツヤノアルもの
ニテ 上ヲとめ申候テハ 黒ハ落 其上ツヤモナクナリ候 漸
木の葉ノしべヲ細クカキ 上ヘ葉ノナリニ 緑藥ヲ以テ候斗の用
ニテ候 夫故私工夫ノ上 錦手ノ黒繪具 私傳ニ記置候

29 一 樂燒藥の覚

(上) 此惣 樂燒藥仁清家傳ノ由ニテ 之付越候へ共 逐一用ニ
不足候 京樂の赤黒の秘傳も 故有テ傳覚候へ共 是ハ利体以來
ノ一家ノ傳ニ候故 私態ニ之付不申候間

(次頁上) 御所望ニ候ハ、口授ニ可申上候
一 茶入の藥 白粉 百目 紫土 八分
右地藥也 上藥ハ白粉 拾匁 赤ばこ 壹匁

又上藥ノ方白粉 拾匁ニ唐紺八分
○樂燒白藥 赤藥ニモ此藥ヲ用申候
白粉 百目 日岡石 拾五匁(佐・二十五匁)

びいどろ 五匁(佐・卅五匁)

○樂燒繪藥の覚

青繪 紺青 黒繪 金ハダ

*金ノ合様・金彩は、金の粉末に礬砂を生
(なま) で用いることを第一とする。焼返し
ては礬砂の精度・濃度が落ち、日を経て剥落。
仁清伝にも透生とあり、生礬砂を使用する。
一般に東山陶工は焼返して使用。高価な金
泥を少量なく用い、薄く塗るための工夫である
が、一時的に光沢は保つものの、焼返しに因
り礬砂の氣は失せ、時を経て金は剥落してしま
う。生礬砂では艶、光沢を保つために金泥
を厚く塗らなければならぬ。金泥は高価
が、絵付け・裝飾には濃く厚く塗ることを仁
清・乾山窯では行っている。

*黒繪具・仁清伝の黒繪具である。鉄と呉須
による黒繪具は、焼付けるための媒溶剤がな
い。艶もなく、剥げやすいが、それを防ぐた
め、この黒繪具の上には緑・紺などの釉薬を
掛け、付着させなければならぬ。一例であ
るが、葉を描き、葉脈を入れ、上に緑釉を掛
けて絵具を止めるが、先の葉形・葉脈は透き
通り現れるなど、乾山はこの工夫を好まし
いとす。一方、自らの黒繪具を創案する。
乾山焼の第一秘伝は白繪具にあった。別し
て内窯では処方、用法、かつてなかった試み
であるが、黒繪具にも創意があり、後述する
が、無駄な光沢を避け、陶面に書を入れ、絵
画的描写を実現させる技法である。

*漸・徐々に・漸くの意。

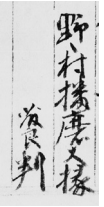
― 樂燒(内窯) ―

*樂燒・作品はみられないが、仁清の樂燒陶
法である。茶入の鉄薬を活用、白粉・鉛を加
え、ざんぐりとした風趣を工夫、白薬・赤薬
には日岡石を入れる。余り有益ではないと
し、乾山は自らの樂燒記述も省略するが、樂
燒は京都に本家がある。利休以来の伝統を有
し、乾山は四代一人以来懇意であった。佐野
において記した『陶磁製方』には詳述がある。
相手の興味を考慮した故か。

*態・有様・姿。わざわざ・ことさら。

*樂燒釉・樂燒釉薬は白玉(ガラス)・日岡
石(珠砂)・白粉(唐土)が基本。

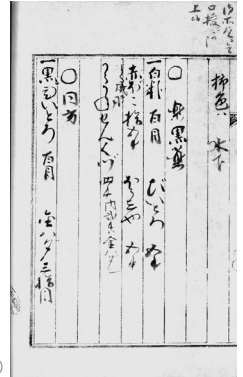
*繪藥・樂燒に用いる絵具。青は紺青、黒は
金はだ、柿色は水下である。釉薬の基本は、
既述の白玉・日岡石・白粉である。



初代仁清の名のり・野々村播磨大掾 藤良判

右図は初代仁清の名のりであるが、初代仁清没後、一旦返上、二代仁清が改めて受理したか。受理は律令時代の国司に始まり、大和・河内・伊勢・武蔵・上総・下総・常陸・近江・上野・陸奥・越前・播磨・肥後、以上大國一三国である。朝廷から受けることを原則とするが、鎌倉期には武家社会の身分階級を表し、江戸期には品階を代償として商人・職人・芸人らの名のり、権威づけに用いられた。仲介は多く門跡寺院、仁清の場合は仁和寺がその労を執つたものと考ええる。勅許による受領は天下一が冠されたという。

東八幡町遺跡
押小路焼陶連の陶片・窯道具などが出土



柿色 水

○ 樂黒薬 (佐・なし)

一 白粉 百目 びいとり 五匁

赤ぼこ 拾五匁 ほうしや 五匁

よく焼テ用 からかねせんくづ 四匁 内式匁ハ金ハダ也

○ 同方 黒びいとろ 百目 金ハダ三拾目

一 奈ら緑青 廿匁

○ 同方 一 全ハダ 壹匁 ぶきだま 式匁

白粉 式匁五分 ほうしや 八分

右樂焼の方

右仁清樂の方ハ 指テ論スルニ不足方組ニ候故 判断ニ不及
私ノ今案モ致省者 候

右本焼樂焼 繪藥 錦手繪藥 諸事 土の合様まで具ニ尹
寫遣 申候 必々他見他言 被成間敷候 拙者家秘傳に
て候へ共 御所望ニ應申候所也 以上

野々村播磨大掾
藤良判

元禄十二年卯八月十三日

緒方深省老 参 傳申 候奥之寫也

(上) 是ハ仁清の 乾山方ハ焼物ノ方

○ 朝日手の薬

一 深草水下 (消) 八拾五匁 (消)

おも灰 (消し)

(白紙 左頁)

*赤ぼこ・白ぼこ・黒ぼこなど、仁清は瀬戸地方にあるという。「ぼこ」は同地方陶工の呼称とされ、湿りによつて叩けば染み、握れば指の間から漏れるような土と解される(加藤藤九郎説・満岡忠成)。
*からかねせんくづ…唐銅(からかね)は青銅。中国より製法が渡来、唐銅の文字が当てられたと伝承。銅線・銅板などを作る折にできる屑。

*奈ら緑青・緑青の一種。伝統的な緑色原料。天然ではなく人工的に真鍮・銅線・銅板などの屑を塩水につけ攪拌、分離した上の緑の部分の水洗いしてつける。
*ぶきだま…吹玉・ビードロ・白玉。ガラスを吹いて玉にしたもの。白粉は唐の土。

*拙者家秘伝…乾山の伝書受理当時、仁清陶法は既に自家の秘伝。初代仁清から二代仁清の証拠となる。乾山は江戸下向に際し同秘伝を携帯。京焼を代表する野々村仁清との関わりを明示。乾山焼が由緒正しき京焼の伝統下に成立したことを誇りとしたものと考ええる。京都に残り、乾山焼を踏襲、聖護院門境に本焼。内焼と祖父の伝統を如何に思つたものであろう。流行には限りがある。時代も移り、嗜好も変わり、仁清焼は既に過去のものと考えられたか。時のうねりは江戸を中心に、公家・武家・寺社の支配から、文化は庶民町人の手へと移りつつあった。

*大掾…初代仁清の受領号。長官を意味するが、任地・任国とは拘わりなく称される。すべし、一旦返納、次代も允可を受けることができたという。藤良は二代仁清の名。
*奥書…末尾につける由緒書。諸芸伝授の証文、記載事実の真正を証明する。

仁清家の本焼・樂焼。本焼絵葉・錦手絵葉、土拵えの全てを書写。当家秘伝故、他見他言なきようにとある。野々村播磨大掾、藤良判が認められ、宛人は緒方深省、日時は元禄二年八月一日とある。

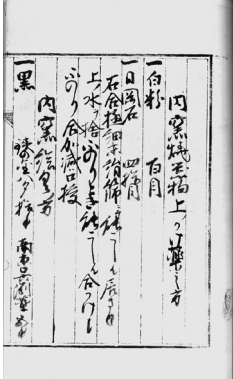


伝楽長次郎作 三彩瓜文平鉢 東京国立博物館

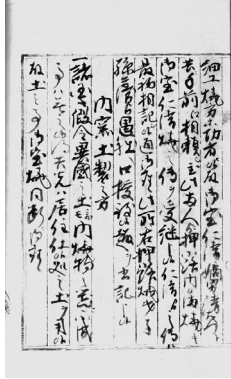
素地に描かれた楼閣山水図陶片 京都・東八幡町遺跡出土
京都市埋蔵文化財研究所



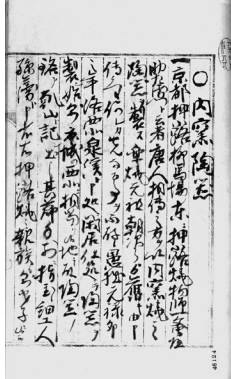
京都大絵図 元禄九年押小路柳馬場周辺 丁子屋町・東八幡町の位置を
確認



37



38



39



40

○内窯陶器

京都押小路柳馬場ノ東二丁目小路焼物師 一文字屋

助左衛門ト云者 唐人相傳の方ヲ以 内窯焼の陶器ヲ製ス 樂焼元祖 朝次郎 方舊キ由 申傳 候へ共何レカ先なる事ヲ不存候 愚拙元禄卯の年 洛西北泉溪申処 一閑居仕 候処ニテ陶器ヲ製シ始 則 京城の西北二相當り候地ニ候故 陶器ノ銘ヲ乾山ト記シ申出候 其節 手前ニ指置候細工人 孫兵衛ト申者 右押小路焼の親族ニテ則弟子ニ候て

内窯・土・釉薬・繪具

○内窯・室内・庭内に設置する低火度焼成の小窯。樂焼・錦窯・赤絵窯があり、高火度焼成・本焼本窯・登窯に対する称として用いられており、外側の窯と内側の窯の二重構造に成っており、中国では景德鎮窯・官窯焼に錦窯を發見 日本では唐人の指導による押小路焼が古い例とされる。

*押小路焼・近年の発掘調査によれば、京都市柳馬場東八幡町・元本能寺町などより、桃山から江戸初期作と推定する低火度焼成、軟質施釉陶器片・素焼陶片他が出土した。押小路焼は花崗、生類などを地紋に彫り、緑・黄・紫色の色絵を付けた器とあるが（陶磁製方）、延宝六年（一六七八）には黒谷土を用い、焼成は清水・しる谷に借窯するなど、本焼物にも着手していた（森田久右衛門日記）。

*一文字屋助左衛門・押小路焼の祖である。詳細は不明。唐人より内焼陶法を学んだとされ、樂焼祖朝次郎（長次郎）より古いと伝承。初期樂焼には鉛釉による平鉢などが残る。

*朝次郎・樂焼創始者樂（田中）長次郎。天正年間（一五七三—九二）茶の湯者千利休創意の茶碗などを作製、代々継続し今日に至る。時代とともに光悦・空中、大燗焼・玉水焼などの脇窯が成立。低火度焼成、軟質施釉陶器、一碗ずつの手捏ね・焼成することに特色がある。黒・赤・白釉に代表される。

*泉溪・乾山初開窯、右京区鳴滝村泉谷町。一一九〇坪、二條家山屋敷跡であった。

*孫兵衛・乾山焼鳴滝窯細工人、押小路焼一文字屋助左衛門親族・弟子。内窯土下絵陶法を得意とし、当時は粟田口焼陶工と推測。

*仁清嫡男清右衛門・二代仁清・清右衛門。乾山は明確に御室仁清嫡男と記し、伝書を譲り受ける。自ら乾山窯の本焼陶工として活躍するが、御室焼の技法、特質は粟田口焼陶工において異国物写し、琳派様式、その他本焼色絵陶に活かされる。仁清家の伝統は継続、その子猪八は乾山の養子となり、聖護院窯に工房を設置する。

*居させ・水中に沈殿させる。水簸。

諸國假令 異國の土にてモ 内焼物の器ニ不成事ハ無之候得共 先ハ居住仕候処の土ヲ用候 故土の御室焼同断ニ御座候

内窯土製の方

一 諸國假令 異國の土にてモ 内焼物の器ニ不成事ハ無之候得共 先ハ居住仕候処の土ヲ用候 故土の御室焼同断ニ御座候

事 御室焼同断ニ御座候

一 白粉 百日

一 日岡石 四拾目

右合極細末 絹篩ニテ能こし候て 居させ 上ノ水ヲ捨 ふのりとき 能こし候て 合かけ申候

内窯繪具の方

一 黒 鉄の金ハタ拾匁 南京呉洲藥五匁

一 黒 鉄の金ハタ拾匁 南京呉洲藥五匁



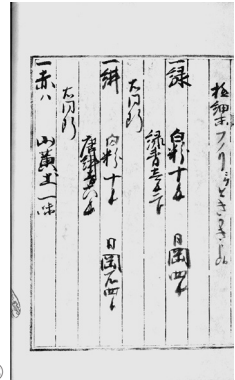
黒・緑・紺・赤・黄・紫
絵具・乾山焼 色絵水紋
皿 京都国立博物館



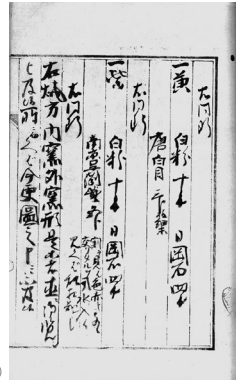
黒・緑・黄・紫絵具・乾
山焼 色絵十二月月和歌
花鳥図角皿
MOA美術館



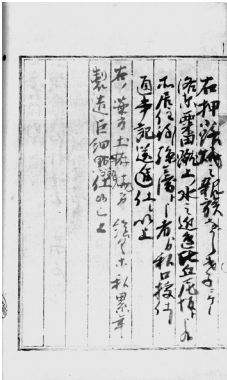
黒・緑・紺・黄絵具・乾
山焼 色絵六歌仙図額皿



38



39



40

③⑧ 極細末 フノリニテとき かき申候
一 緑 白粉十匁 日岡(石)四匁
緑青壹匁二分

右同断

一 紺 白粉十匁 日岡石四匁

右同断

一 赤八 山黄土一味

③⑨ 右同断

一 黄 白粉十匁 日岡石四匁

唐白目三分 極細末

右同断

一 紫 白粉十匁 日岡石四匁

南京呉洲薬 五分 割ヲ見候て 色赤きもの、
交リタルヲ用 水ニ入候て
見候へば 能相知レ申候

右同断

右焼方 内窰外窰形 是等者直ニ御覽シ被及候所ニ
て候へば 今更圖の申ニハ不及候

④⑩ 右押小路焼の親族ながら弟子にて候 洛東粟田躰上ノ
水の近邊 比丘尼坂ト申候所居住致候孫兵衛ト申者方
私口授仕候通 尹記送進仕候 以上
右ノ薬方 土拵 焼方 繪具等 私累年製造 巨細 點頭仕候
已上

*白粉・鉛白。唐土(とうのつち)ともいう。
*日岡石・珪酸。鉛とともに緑青に反応、緑色を青くする。
*唐紺青…唐呉須。
*唐白目…白色粉末。黄色顔料となる酸化アンチモン。錫の酸化化合物。
*内窰外窰…内焼用の内側及び外側の窰。設置方法は後述するが、ここでは窰の形は「直に御覽じ及ばれ」とあり、乾山は窰の見学、焼成なども充分承知。図示はしないとする。
*粟田口…粟田地域は上下に分離。下粟田は東に白河、北に鴨川、北は二条東を限りとする。上粟田は北へ進み北白河に至るとあるが、平安期には粟田殿・花山院亭など貴族の山荘、亭が築かれ、江戸期には躰上を過ぎて刑場に至るとある(御役所向大概見書他)。
*比丘尼坂…三条通りから神明山の入口に至る道にある。比丘尼が住し勸進を行つたと伝承。孫兵衛は粟田口躰上の近辺、比丘尼坂に住しており、同町、粟田口焼の陶工であつたと推測する。
*粟田口焼は、寛永元年(一六二四)、瀬戸陶工三文字屋九右衛門(生没年不詳)が青蓮院領内今道町に開窰したことが始まりと伝承(本朝陶器攷証)。遊行・神明・東岩倉山産の土を活用し、將軍家御茶碗師となるなど、すぐれた陶工の活躍が伝えられる。
*丹波国出自、初代仁清は丹波焼に關係するか。瀬戸修業後、瀬戸に所縁のある粟田口窰へ移動。茶匠金森宗和との所縁を得て、仁和寺門前に開窰するまでになるが、二代仁清は伝書を譲渡、乾山窰へと移転をする。
*孫兵衛の招請にも関与するか。内窰陶法、絵圖の表現を試みる乾山の意圖を考慮、孫兵衛の技を知る二代仁清の助言であつたとも推考される。内窰陶法は釉薬・土拵・焼方・繪具など、全ては孫兵衛からの伝授、乾山累年の努力が實を結ぶ。
*進…贈る・勧める・捧げるなどの意。
*巨細…大きな物と細かな物。一部始終。
*點頭…頷く・承知の意を示し頭を下げる。



「新」遊行土
(東大路五条出土)



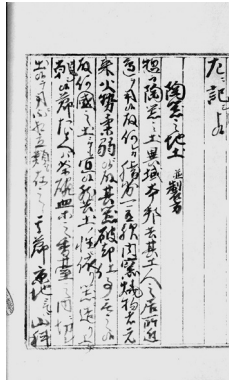
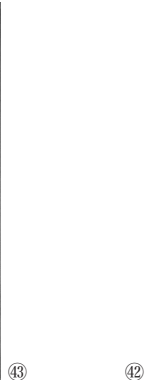
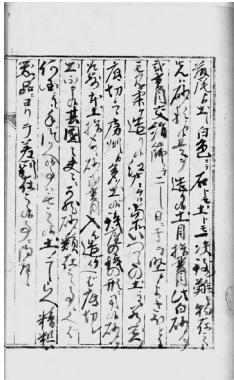
東山土 (將軍塚出土)



藤尾石 (山科区藤尾出土)



鳴滝村『城池天府京師地圖』(部分) 森幸安
寛政二年頃 国立公文書館



④1 (上) 是ヨリ末迄 乾山私一流の方 先々 今日迄試覧候分ヲ相
記シ致進覽候 向後又珍敷藥方致方等候ハ、逐て之付上可申候

愚拙 最初 於華洛西北隅之乾山ニ 陶器製造之
初年凡四十年來及申候 其間ニ
仁清ト押小路號

右両方方 相授 候藥方の外 種々工夫ヲ以て 其方ので
不相勝所ヲ省キ 又新ニ方ヲ組合 乾山一流の方相立
候段 左ニ記シ申候 併 茶入藥一通り之事ハ數十年
來ノ内 未得ト相試不申 作定之事不分明候故 暫闊キ
今年方相考焼上 能々相試候上ニて 新方ノ茶入藥
等ヲハ尹付上可申候 先今般迄の内ニ能々相試 點頭
の亘計ヲ

④2 左ニ 記シ申候
陶器の地土並 製方

惣て陶器の土 異域本邦共 其工人の居所近邊ヲ用候
故 何レカ勝劣可有歟 内窯焼物は 元來火勢柔弱ニ
候故 其器破却仕事無之候故 何國の土ニても宜候
然共 土ノ性ニ依り器ニ造り上ゲ 乾シ候節 たと
へバ茶碗 皿等の香臺(高台)の内ニ二切レ出候テ 用ニ
不相立類も在之候
其節京地ニてハ山科

④3 藤尾石出候 白色ニテ 石トモ土トモ一決致シ難キ物
在之候 先ハ砂類ニて候是ヲ 造り候土目 拾貫目 此
白砂ヲ式貫目交 絹篩ニテこし 日ニ干テ 堅メ よき
ほとにもみ 柔ケ 造り候 江戸ニテハ當所いつかたの
土ニても 若器ノ底切候ハ、房州方多ク出シ候錢座の

ここからは乾山独自の陶法である。

— 乾山独自の陶法 —

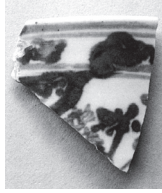
* 乾山私一流の方…仁清伝、孫兵衛伝の両手
立てを習得、自らの創意・工夫を加えた処法
を記す。累年試み覚えた今案は朱書を用いて
加えるが、鳴滝泉谷に開窯してから四〇年
仁清伝、孫兵衛伝の良きを取り入れ悪しきを
省き、新たな組み合わせも吐露するが、
茶入製作の無かつたことも吐露する。乾
山焼の目指した方向を呈示、用の器を、樂し
む器へと、新たな試みに挑戦。作者を明示し、
平面、紙糊の芸術を、炎を借りて陶に移すつ
書家、絵師同様の働きを実現。受け身であつ
た工人仕事の領域を広げ、造る側の意思を明
確にする。

窯主であり、豊かな教養、経済力、乾山個
人の能力・才覚が柱となつたが 実現するに
は絵師・意匠家として実力をもつ兄光琳の助
成が大きき、初期の絵は皆々光琳 乾山焼は
新たな陶芸へと出発した。

* 進覽…進めて御覧に入れる。上の人に一覽
を請う意。
* 暫闊…暫闊(さんか)。一時中止の意。闊
は宮殿・高殿。止めるなどの意もある。
— 地土・製法 —

* 地土…土は工人居所近邊の土を第一とする
が、乾山焼も京焼仲間と同様に、京都に産す
る黒谷土・山科藤尾石・遊行土を基本とした。
一方、製作する器物に合わせ、白土は大日山
(東岩倉山)・近江比良・豊後赤岩村・備前八
木山・薩摩白土など、黒土・石には鴨川石・
貴船紫石、また瀬戸土、信楽土も取り寄せる。
* 香臺切レ…高台内の亀裂。避けるためには
細土に砂を混入、京都では山科藤尾石を使
用。

* 絹篩…土石を粉砕、それをふるう極細目の
篩。
* 房州砂…千葉県館山市北条辺りの砂。加熱
による縮みが少なく鋳型・研磨に使用される。
江戸では切れを防ぐために同砂を用いれば良
く、材料は所々にそれぞれ異なるべきもがあ
ると乾山は述べる。



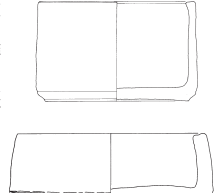
乾山焼 染付磁器片 (雲堂手) 法蔵寺



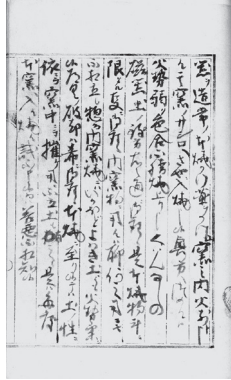
乾山焼 赤絵写し蓋茶碗 (磁器) 根津美術館



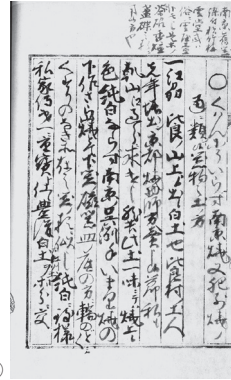
乾山焼 漳州窯青花模倣磁片 鳴滝窯出土



乾山焼 匣鉢 法蔵寺



45



44

錢の形二用候砂ヲ取寄 本土拾めめニ砂式貫目入候て造り候へば 底切レ出申候 其國々夫々ニ可然砂類在之事ニ候へば 何國ニても手づかへ候事ハ無之候土ノこしらへノ精粗ハ器ノ品ニヨリテ 差別在之候事ニ御座候

44 ○くはんにういららず南京焼 又肥前焼ノ通ニ類シ候

器物の土ノ方

(上) 南京舊器染付 松竹梅 雲堂 或ハ俗ニ雲屋臺トモ申候 是等ノ茶碗 香爐 蓋 碟ノ類ニ用候方也

一 江苧 比良ノ山上方出候白土也 比良村ノ土人先年掘出し 京都焼物師方へ賣申候節 私も乾山へ過分ニ求遣申候 然共 此土一味ニテハ焼上 候色純白ならず

南京ノ吳洲手 此土一味ニテハ焼上 候色純白ならず 皿ノ底の方ニ 輪のごとくにてくすりのなき所在之器ノ類ニ似申候 純白ニ致様 私家傳第一ニ重寶ト仕候豊後白土ヲ 等分ニ交

45 器ヲ造 常ノ本焼かけ藥ヲかけ 山窯の内 火前ト申候て其窯ノサシ口へ さやニ入 焼申候 奥ノ方へつめてハ 火勢弱ク 色合不勝焼上り申候 くはんなしの磁器土ノ致方 右の通ニ御座候 是本焼物斗ニ限タル 二御座候 内窯物ニ用候てハ 聊何の用ニモ不相立候

惣て内窯焼ニハ いかほどよハき土ニても 火勢柔ニ候 道具ノ破却ハ希(稀)ニ御座候 本焼ニ至り候テハ 土ノ性ニ依ニテ 窯中ニテ摧ケ 用ニ不立土も有之候 是ハ毎度本窯へ入候て焼候て 試不申候てハ 善悪不相知候

*底切レ・器物の底、高台内などのひび割れ。極細土、土の軟らかな内削ることに因り起るが、防ぐためには京都では珪砂(石英)、江戸では房州産を混入するという。土は加熱によって焼け縮み、亀裂が生ずる。防ぐ手立てに山科藤尾石、房州砂を使用するが、内窯での破却は稀である。

*南京舊器・南京焼は、江戸時代中国磁器の総称であり、古くは日本の磁器も含まれた。南京旧器は明代末期景德鎮民窯産南京染付・古染付をいう。清代の新渡戸に対し古染付・厚手・虫食い・亀裂のある侘びた風情が好まれたが、注文による花入・香合・水指・皿・鉢などがあり、貫入いらずは亀裂のない景德鎮窯、伊万里焼などを用いる。

*雲堂・雲屋臺・古染付。青銅器・漆器・織物などの中国古来の文様であったが、雲・霞などその組み合わせを図様化・意匠化したもの。

*香爐・元來は仏事用、香をたく器。金属、陶磁器、唐物・和物、茶席では床の間に置き、座の清めとする。

*蓋・碗・杯(盃)など中国において酒・茶を飲む器。

*碟・セツ・セチ、皿の意。碟子は小皿。

*比良白土・近江比良山出白土。磁土として肥前・南京焼素地には適するが、一味では純白にならず、乾山は豊後白土を加えることを家伝とした。

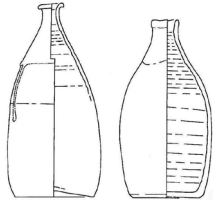
*吳洲手・明末清初の福建省漳州窯・広東省産の粗製青花・五彩磁器。

*いまり焼下作・土物ではない意。皿山焼。

*輪のごとく・蛇の目高台の削りなど、高台の無袖部分。

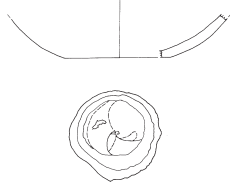
*火前・窯の最前部。温度が高い。

*さや・匣鉢。耐火性粘土を用いて造る。焼成に際し器物を入れる容器であるが、炎が直接器物に当たると、歪み・ひずみ、灰や不純物の付着することを防ぎ、積み重ねて使用できることから、一時に多くの器物を焼成、窯詰めには有益である。

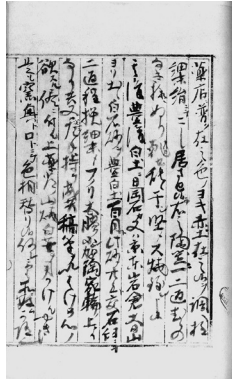
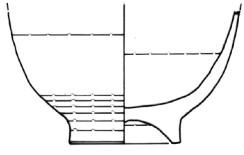


志戸呂焼 徳利 江戸遺跡出土 一七世紀後半
東京大学埋蔵文化財調査室

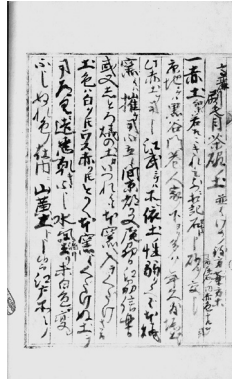
乾山焼 高麗写し茶碗片
石水博物館・法蔵寺



乾山焼 五器写し茶碗片
法蔵寺



④7



④6

④7 薬店ニ普ク在之 色ノヨキ赤土在之候ヲ調へ 極細末
絹ニテこし 居させ候て 右の陶器ニ二返むらのな
き様ニぬり 乾セ 能々干シ 堅メヌ焼致シ申候
其後豊後白土ニ 日岡石カ 又ハ京東岩倉大日山ヨリ
出候白石砂ヲ 豊白土(豊後赤岩村白土) 百日ト此砂甘
ト交 石白土ニ二返程挽 細末メノリ大ニ 膠小シ加
陶家輪(ロクロ)ノ上ニてなり共 又ハ器ヲ左手ニ持
テ成共 稿筆ヲ以ははけめ 心ノ欲スル俣ニ付候て 上薬
常ノ山焼白薬ヲ用 かけ候て やき申候 是も窯奥ト口
トニテ 色相替り候 何レニても所ニレ好ム(好む所に
可随也)

④6 高麗刷毛目茶碗ノ土並ははけめノ致方 薬方等
藤尾石ノ内赤色ナルヲ用
一 赤土細末 若そこぎれの前ニ相記 石ト申砂ヲ交申
候 京地ニテハ 黒谷門巷人家ノ下ヨリ 多ク年久敷
堀出候此赤土ヲ用申候 江武ニテハ 所ニ依土ノ性弱ク
候へば 本焼窯ニてハ摧ケ 用ニ不立候間京都か 又尾
笈か 江笈信樂か 或又志とろ焼の土カ いつれニても
本窯へ入テくたげざる土 色ハ白ク托 ウス赤ク托 と
かく本窯ニてくたげぬ土ヲ用道具ニ造 悉乾キ不申候
水氣滴り去り 未白色ニ変シ不申候 ぬれ色ノ在ル内
ニ 山黄土ト申候て江戸所々ノ

―高麗茶碗 刷毛目・こよみ手―
*高麗…高麗茶碗の製作には、京都では土の
ひび割れを防ぐため黒谷赤土に藤尾石を混入
する。が、江戸の土は性弱く本焼を不適
京都・尾張・信楽・志戸呂焼の土を試し活用
するなど、成形後 生乾きの折 山黄土(赤
土・江戸の店々にある)を一、二回塗り、乾燥
させて素焼をす。刷毛目では豊後白土に日
岡石、また大日山白土を交ぜて用いるが、稿
筆に含ませ左手・ロクロに乗せ、好みに随い
刷毛目などを描く。釉薬を掛け、窯に入れる
が、本焼では窯の入口、窯奥では温度が異なり、
色相にも変化が生ずる。趣向に応じた調
節が必要になる。
*門巷…家門と街巷。ここでは京都市左京区
黒谷町吉田山南周辺をいう。金戒光明寺が
あり、黒谷は寺の別称ともなるが、比叡山を下
りた浄土宗祖法然(一一三三―一二二二)が草
庵を結んだ所である。
*江武…江戸と武蔵国。今日の東京都と埼玉
玉・神奈川県の一部とされる。
*志とろ焼…静岡県榛原郡金谷町・土志戸呂・
島田市神座一帯で焼成したやきもの。一五世
紀中頃に成立。出土品には瀬戸・美濃窯系の
施釉陶器、天目茶碗・平碗・壺・小皿・鉢・
搦鉢などがある。一旦途絶え、江戸期になり
家康の保護によって、碗・皿・壺・甕・香炉
など日常具を焼成。鉄分の多い赤土、鉄釉・
灰釉、瀬戸系器種に特色がある。
*陶家輪…ロクロ。輪車・陶車。成形のため
の回転道具。発達は古くエジプトでは紀元前
二〇〇年、同三〇〇年中国、日本では天平年
間(七二九―四九)の記録が残る(正倉院文書)。
手ロクロ・蹴ロクロがあり、大物製作には蹴
ロクロを使用。水挽き成形、絵付け・装飾
施釉などに活用する。桃山時代朝鮮から渡
来、以後窯業の発達に伴い各地に普及した。
*稿筆…わら・やからを材料とした筆。やき
ものでは化粧掛け、釉薬の掻き落としなどに
用いるが、稿筆には下描用の筆の意もある。

④7 薬店ニ普ク在之 色ノヨキ赤土在之候ヲ調へ 極細末
絹ニテこし 居させ候て 右の陶器ニ二返むらのな
き様ニぬり 乾セ 能々干シ 堅メヌ焼致シ申候
其後豊後白土ニ 日岡石カ 又ハ京東岩倉大日山ヨリ
出候白石砂ヲ 豊白土(豊後赤岩村白土) 百日ト此砂甘
ト交 石白土ニ二返程挽 細末メノリ大ニ 膠小シ加
陶家輪(ロクロ)ノ上ニてなり共 又ハ器ヲ左手ニ持
テ成共 稿筆ヲ以ははけめ 心ノ欲スル俣ニ付候て 上薬
常ノ山焼白薬ヲ用 かけ候て やき申候 是も窯奥ト口
トニテ 色相替り候 何レニても所ニレ好ム(好む所に
可随也)



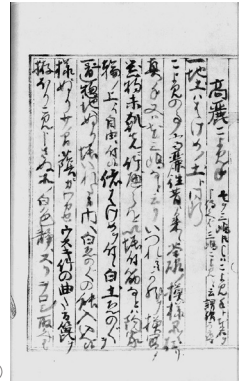
高麗・仁清焼 三島文茶碗陶片 錆絵
京都市埋蔵文化財研究所



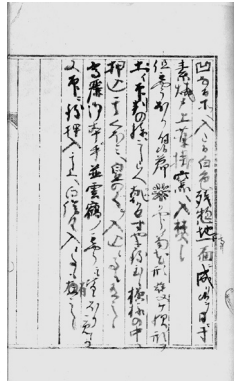
高麗・仁清焼 三島文輪花口細水指



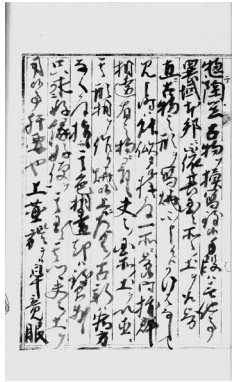
高麗・乾山焼 絵高麗写し向付



48



49



50

48 高麗こよみ手 是ヲ三嶋任申候ハ こよみ手ト本名ヲ申傳候へば 三嶋こよみト云謂歟 可尋

一 地土ハはけめノ土ト同断

こよみの事 高麗往昔 方來候茶碗ノ模様 品々在リ 眞ノ手 又ハ花三嶋など云リ いづれニても可然ヲ模寫メ 器物 未乾先ニ 竹べらを以て堀付 筋などハ陶家輪(ロクロ)ノ上ニて自由ニ付候 偕ははけめヲ付候白土

ゑのぐヲ一ニ返惣地へぬり 堀いたる内へ 白ゑのぐの能入込候様 二ぬり 少ノ間 蔭ニカワカセ ウスキ竹の曲たる篋ヲ拵 ほりこみ申さぬ所ノ白色靜ニスリヲロシ取候へば

49 凹なる所へ入たる白色殘 惣地ト一面ニ成り候ヲ 日干 素焼メ 上薬掛 窻へ入焚申候

但モやうほり付候節 (菊花形図) かやうノ菊花形(星

形図) 又ケ様ノ形ヲ 土ニて印判の様ニこしらへ 乾かセ すやき致置候 模様の中へ押込 其くほミ(窪み)

へ 白ゑのぐヲ入込候事も有之候

高麗御本手並雲鶴ノモやうニも 皆々ほりこみ候か 又印ニ致 押入 其上へ白繪具入候事も有之候

50 惣テ陶器古物ヲ模寫致候手段ハ 無他事 異域本邦

二不依 其國々所々ノ土ヲ取寄 直ニ古物の形ヲ寫焼不申候てハ かけはなして見申候時ハ 能似タル様ニ

候へ共 一所ニ寄候時 拔群相違有之物ニ御座候 夫々ノ國 所ノ土ヲ以 直ニ其形相ヲ作り焼候上ニハ 道具ノ古新ハ爲方なく候へ共 指て其色相○違却ハ致間敷候

*こよみ手・高麗茶碗三嶋手の一種。見込みの茶碗には種々の文様があり、眞の手、花三嶋と称されるかと乾山はいう。

成形後、生乾きの状態で、竹篋を用いて彫る、ロクロを用いて筋を付ける、印判を作製し、それを塗って押すなどの技法がある。白土(絵具)を塗り、周囲をぬぐい、乾燥させて素焼をするが、次いで上薬を掛け、乾燥させる。古物の模写も同じ方法を用いるが、古物と模写、両者の相異は隠すことができず、各々その国、その土地の土を用いることが肝要、古新の別はあるものの大差なく仕上がり、器物の生まれた国の土を用いることが最良であると述べる。

*往昔・古(いにしへ)・過ぎ去つた昔。
*御本手・高麗茶碗の一種。朝鮮釜山倭館内の窻において製作。日本からの手本(御本)をもとに注文品も焼成した。寛永期、釜山には対馬藩の館があり、館内の窻では贈答用として藩土、現地陶工らが御本雲鶴・三嶋・刷毛目・異器などの茶碗、花入・香炉などを作製した。

製家史料「御焼物注文摺」(泉澄一著「正徳・享保期の釜山窯と注文焼物」一九八一)によれば、元禄一四年から宝永二年、正徳三年からの詔物控が残り、日本からは手本とした切形、紙形のほか、寸法・色合・模様・文字・姿・手触りなどの指示が出されている。作品は茶碗が多く、次いで猪口・花入など、注文者は武家が主流。陶工は単に陶工ではなく、対馬藩の茶道方に属する武士などの記録が残る。

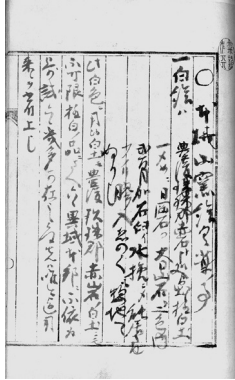
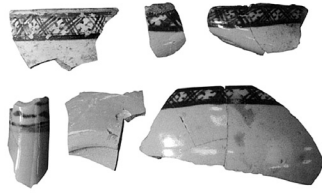
*雲鶴・高麗茶碗の一種。碗の外側に雲と鶴を印刷、印刻内に異なる土を塗り込めたもの。古くは金属工芸の技法であったが、やきものでは成形後生乾きの折に行われる。中国の磁州窯、朝鮮高麗時代の象嵌青磁、粉青沙器などに先例があり、日本へは唐津焼の陶工に伝えられた。

*形相・形・姿。
*違却・「いかく」ともいう。不都合の意。

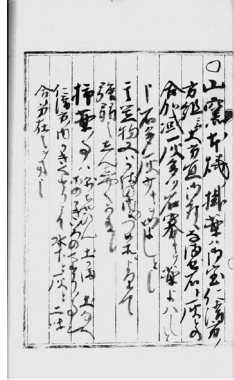
石臼にて水挽…富本憲吉
一九三〇年



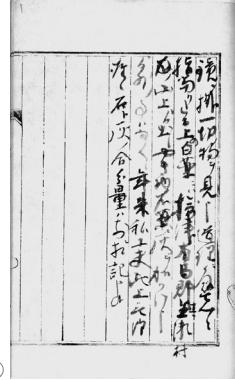
磁器・鳴滝窯出土
法蔵寺



53



52



51

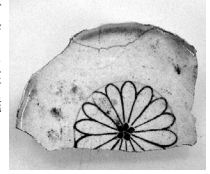
只求^た好縁^{こうえん}好便^{こうべん}ヲ一(好縁好便を求めて) 其國々 其郷 夫々
ノ土ヲ用候事 肝要也 上藥ニ於テハ 畢竟^{ひつじやう} 眼^め
鏡^{かがみ}ヲ掛^か 一切^{いっさい}ノ物ヲ見申候道理ニ候へば 先々指當^{さしあた}
リたる上の白藥ニハ 攝津有馬郡生瀬村ノ山上方出候^{より}
やき物石藥ニ 灰ヲ加^{くわ} かけ申候方外ノ事ハなく候
年來私工夫^{ねんねのわたくしぐわ} 此上無御座候 石ト灰ノ合分量ハ前二
相記申候

52 ○山窯本焼ノ掛藥ハ 御室仁清方ノ方組ニテ大方
宜御座候 なまぜ石ト灰との合加減 灰多ク 石寡キヤ
藥よハシ(弱)と申 石多灰少キヤツよし(強)と申候
其器物 又ハかまの内のつめ所ニよリて 強弱^{こゑ} 之し
んしやく(斟酌)可有候 柿藥ノ事ハ
則^{すなわ}ちやひん 土かま 土なへ等のかきいろのくすりノ事也
仁清方ノ内 かきくすりとして水下と灰とニ味合候方在之ヲ用申候

53 ○本焼山窯繪具藥ノ事
一 白繪^{しろえ}ハ 豊後玖珠郡赤石ト申処方出候極白土ニメ
二 日岡石^{ひのけいし}カ 大日山石^{おほひつやま}カ 二色ノ内式百
目加^め 石臼にて水挽ニメ 能居^よきセフノリ
膠入^か 糸のくにて惣地へぬり申候

此白色ニ用候白土モ 豊後玖珠郡赤岩ノ白土ニモ不可限 極白ノ
品ニさへ候ハ、異域本邦ニ不依取寄^た候ハ、幾多可^あ在之候へ
共 先ハ唯今^{いま}迄^{まで}用^{もち}來^{きた}候^ま 付上^{つきあ}申候

*畢竟…つまり、つまるところ・所詮。
—山窯本焼・釉藥—
*山窯本焼ノ掛藥・生瀬石と灰。仁清伝が良
く、交ぜ加減に因り異なるが、灰多いを葉弱
く、少ないを強しという。窯詰めの位置に
よつても釉藥には変異が起る。
*寡・少ない・まれ・弱い。
—本焼山窯・繪具—
*山窯繪具・釉下顔料・下繪具。素地に直接
文様を描く繪具であるが、高火度、低火度の
両用があり、高火度には鉄繪具、染付用の呉
須、釉裏紅などの銅酸化物、低火度には鉛釉
系、染焼などがある。素地との密着をよくす
るため、膠・ふのり・ゴム液などを混入する。
山窯繪具は高火度焼成の顔料である。種類
は少なく、白・黒・紺・柿繪具など。上薬
また酸化・還元などの焼成方法、温度、燃料
などによつても変化をするが、加飾法には手
描き・ゴム版・銅板転写などがあり、繪付け
効果には素地を白くする白化粧、濃色にする
鉄泥漿を塗る方法がある。下繪付けの歴史は
古く、エジプトに始まり、九世紀西アジア・
イスラム圏、一三世紀南ヨーロッパ・マヨリ
カ・デルフト窯へと進展。中国では九世紀釉
裏紅・鉄絵、一四世紀景德鎮において青花技
法が完成、朝鮮、東南アジア、日本へと伝播
した。
乾山焼の特質は、低火度焼成、透明鉛釉下、
色繪具を駆使、紙絹と同様、土面に絵画的表
現を成功させたことである。兄光琳の参加が
決め手となつたが、若白緑を主業とする黒繪
具、別して白繪具の創案は、処方、活用方法
産白土に、京都産日岡石、大日山石の何れか
を混入。石臼にて挽き、水籤、ふのり・膠を
入れる。
*赤石・赤岩。豊後玖珠郡出土の白土。乾山
自慢の白繪具の原料である。極白であれば、
赤若白土に限らなくても好いともいう。
*異域…ここでは純白、磁器用に用いられた
朝鮮渡來のカオリンをいうか。



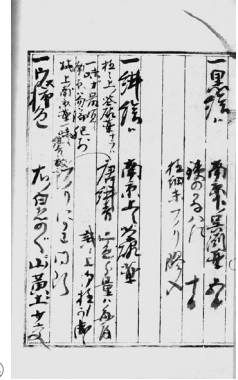
紺絵・仁清焼
染付菊文陶片
東京国立博物館



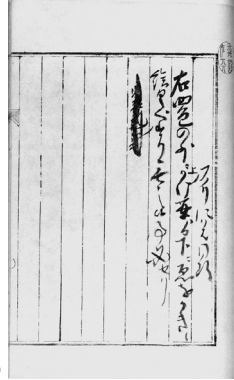
他作素地(肥前磁器)..
乾山焼 色絵春草図小鉢



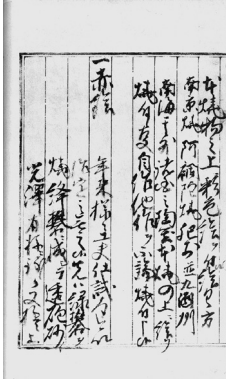
赤絵具ほか..乾山焼
色絵竜田川図型香合
ギメ美術館



54



55



56

54 一 黒繪ハ 南京下ノ呉州藥 五匁
鉄のかなはた(佐・鉄粉) 十匁
極細末 フノリ膠入

一 紺繪ハ 南京上々茶碗藥
極々上ノ茶碗藥ナラハ、一味ガ最宜候 南京ハ勿論 肥前焼上
ノ南京藥一味ニテ 紺青ハ交不申候

唐紺青 二色(分量ハ 毎度試候上御極メ
可成候
フノリにかわ同断

一 ウス柿色(佐・なし) 右ノ白多のぐニ山黄土少交

55

右四色の外ニ 上ノかけ薬方下ニををかき繪具
くすり無之候事 必せり
フノリにかは同断

56 本焼物の上ニ彩色繪ヲ付繪具方

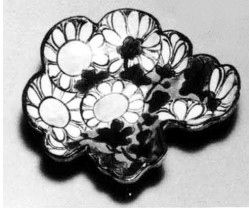
南京焼 阿蘭陀焼 肥前 並九州 南海 其外諸國の
陶器 本焼の上ニ繪ヲ焼付候夏 自作他作ヲ不論 焼付
申候

一 赤繪 年來様々工夫試候へ共、今以作定の
無之候 先ハ緑礬ヲ焼 絳礬ニ成シテ
透砲砂ニテ 光澤有様ニ致候か 又極上

57

(左頁上段) 弁柄丹土 再三水ヒ致シ
方組ハ仁清傳の通ニ仕候
(上) ホウシヤノ製ノ事ハ右ニ付置申候
一金 金のけし泥沓分ニ透ほうしや
生ニテ二分五りんか三分

*南京下ノ呉州藥・鉄とともに黒繪具の顔料となるが、中国渡来の呉須中、上等品ではないものを使用。
呉須は釉下染付繪具、また釉上給付けの黒繪具の原料として代表的な着色顔料である。
江戸前期には茶碗薬・青繪薬とも称されたが、中国渡来の唐呉須をいう。酸化コバルトを主成分とし、酸化焼成により黒味を帯びた青色。還元焼成によつて青色を呈するが、温度によつても変化があり、高温では鮮やかな青、低温では濃い青となる。
*紺繪具は南京茶碗薬に唐紺青を交ぜる。分量は試みた上で決めることを促すが、上々であれば茶碗薬一味がよく、南京・肥前焼(伊万里焼)の上等物も同前である。乾山は茶碗薬を南京薬とも称するが、染付に用いる中国渡来のコバルト・呉須のことである。唐紺青はスマルトである。下給付け用色繪具は紺・白・黒・柿(うす柿)に限られる。
*必・きつと・必至。確か。
*本焼物・上繪付用繪具。
*本焼物の上ニ彩色・上薬を掛け本焼した器物の上ニ彩色する釉上の繪具である。南京・阿蘭陀・肥前焼ほか、乾山焼では自作他作の素地を問わず裝飾に用いるという。
*阿蘭陀焼・一七世紀初期東洋貿易のため設立されたオランダ東インド会社に依り船載されたヨーロッパからの陶磁器の総称である。ファイアンス・マヨリカ・デルフト陶器などがあり、日本からの注文品として水指・花入・香合・向付などの茶道具、懐石道具が伝世する。
*赤繪・年來工夫をするが、よい処法はなく、緑礬を赤く焼き(絳礬、生砲砂を加えて光沢を出す。仁清は極上弁柄丹土を再三水煎、ビードロ・白粉・砲砂をまぜる。
*緑礬・ろくは・ろうはん。硫酸第一鉄の青緑色の結晶。焼いて絳礬とし、よく水洗い粉砕、上給付け用赤色顔料弁柄とする。
*弁柄丹土・弁柄は紅殻。インド・ガンジス川下流ベンガル地域に産する黄味赤土。鉄釉や上繪用赤色繪具の顔料となるが、丹土は赤土。縄文土器の繪具、古墳時代の壁画に使用。日本における最古の繪具。

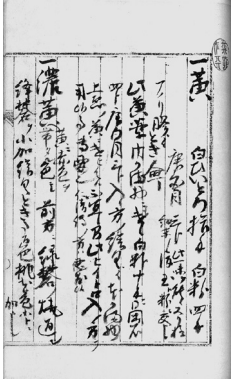


黄・緑絵具・乾山焼
色絵菊図型向け
五島美術館

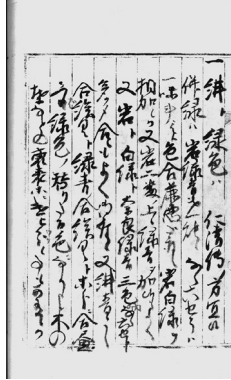
紺・緑・紫絵具・
乾山焼色絵菊図透し鉢
畠山記念館



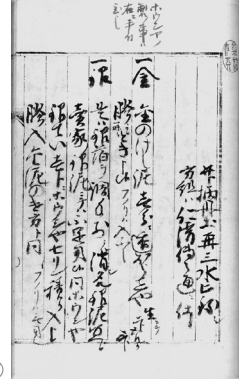
金彩・乾山焼
染付金彩菱流水図土器皿
根津美術館



56



58



57

一 濃黄*
黄二赤色ヲ帯タル色ニ候
前方二 緑蓉ノ焼返シ
きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

一 濃黄*
黄二赤色ヲ帯タル色ニ候
前方二 緑蓉ノ焼返シ
きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

59 一 黄*
白ひとところ拾奴 白粉 四奴

唐白目 三分 此一味ヲ能々スリ 極細末メ

後 玉(ビードロ)ト粉(白粉)ニ交申候 フノリ膠ニてとき屋候

此黄薬 内かま物ニも遣候 白粉十奴二 日岡

石四分 唐白目三分入候方ノ繪具ニて 本かま

物ノ上忍ノ黄二遣ヒ候てハ不宜候間 此ヒイ

トロ入ノ方ヲ用候事 専要也 仁清傳ノ方ハ

悪敷候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

58 一 紺*
緑ト緑色ハ 仁清傳ノ方宜候

併緑ハ岩緑青第一能候 なら六せうハ一味斗

ニテハ色合鹿悪御座候 岩白緑ヲ相加候か

又岩二番ノ上々緑青ヲ加候もよく 又岩ト 白

緑ト 奈良緑青三色内なら 六せう多クメ合候

もよく御座候 又紺青の合繪具ト 緑青ノ合繪

具ト等分ニ合屋候へば 緑色ノ替りたる色ニ

なり申候 木の葉などの裏表等二遣ヒ分候事も

可有候か

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

前方二 緑蓉ノ焼返シ

きたる色 桃花色ホト二加申候

濃黄 黄二赤色ヲ帯タル色ニ候

銀
膠ニてとき申候 フノリハ入不申候 一味ニて
是ハ銀箔ヲ調手前ニて消シタル銀泥宜候
賣家ノ銀泥ニテハ不足用候 同ホウシヤ 銀て
い壹分ニ ホウシヤやセリン積リ入申候
膠入 金泥の遣方ト同 フノリハ無用也

*けし泥・金・銀のつや消しをいう。ともに
売家のものは不適とし、自分で調えることを
勧める。

*紺ト緑色・紺・緑色の手立ては仁清伝が良
第一とするが、なら緑青(塩基性炭酸銅)を
く、岩白緑を交ぜるか、岩緑青の二番手物を
加えるか、三種を用いる場合はなら緑青を多
く入れてもよいという。

緑色は紺青・緑青、それぞれ調合し、そ
れを等分に混合すれば変化のある緑色とな
り、木の葉の裏表などに使い分けることがで
きる。

木の葉に関しては、仁清錦手絵具において、
黒絵具を用いて葉を描き、上に緑・青絵具を
施す工夫がある。艶を与え、黒線を定着させ
るためであるが、結果、下に描いた黒い輪郭
線、葉脈が浮き出るなどの効果が生ずる。が、
乾山創意の色絵具はあくまでも絵画的描写に
目的があり、直接画を描く工夫である。

仁清 乾山焼の着色剤は炭酸銅である。が、
織部焼では「ちうでい」など銅の削ぎもの、
酸化銅を使用。仁清・乾山も高火度焼成織部
焼模倣には「ちうでい」を用いている。

*併・ならびに・あわせて。

*岩緑青・マラカイト鉱、天然の炭酸銅。緑
色絵具の原料とされる。粉砕・水燻し、上の白
い部分が白緑とされる。

*なら六せう・奈良緑青。人工的に製した緑
青。真鍮・銅などの屑を塩水につけ、水洗い
するが、緑色の顔料には天然の岩緑青が最良
であり、奈良緑青一味では粗悪である。そこ
で岩白緑を加えるが、岩緑青・白緑・奈良緑
青の三味であれば奈良緑青を多く交せても可
であるという。

*黄・黄薬は本焼・内焼ともに用いるが、仁
清伝は錦窯用。乾山は唐白目、ビードロを入
れる。

*唐白目…錫の酸化物。低火度用の黄色原
料。釉薬の乳白剤としても活用され、伊予白
目ともいう。

*濃黄…赤味を帯びた黄色。黄に少量の緑蓉
焼返しを加え桃色状を呈したものを使用。



錦手窯 『京焼陶磁器説』

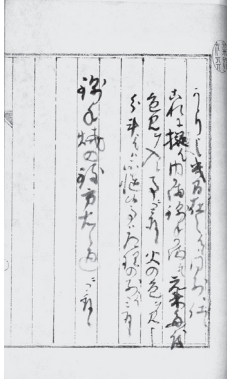
色味…九谷焼本窯・
錦窯 九谷焼窯跡展示館



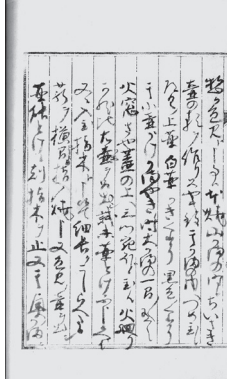
色味か…鳴瀆窯出土
法蔵寺



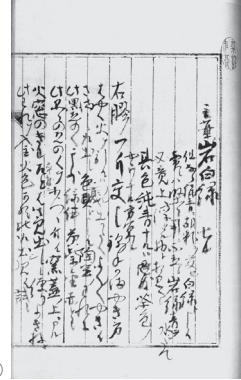
挿し木(本窯)
『京焼陶磁器説』参照
筆者作成



65



64



63

65 か、り申候 幾間在之候ても同前二仕候 これに擬候て 内かま 錦手かまニも元來毎度色見ヲ入候事ニ御座候 火の色ヲ見申候分斗ニテハ 不慥候事ハ 道理の前ニテ御座候
錦手焼の致方 右之通ニ御座候

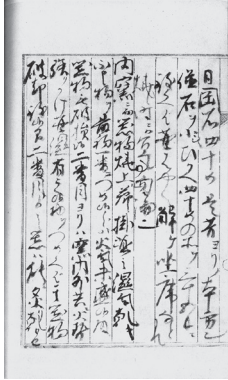
64 物て色見ト申事ハ 本焼山かまの時も ちいさき垂の類ヲ作り スヤキ致 其かまの内へつめ置候道具の上薬白薬かきくすり黒色ノくすり其小壺ニかけ かまやきノ時 大かまの一問ノ二有之火窓さや蓋の上へ三つ宛ほど置候て 火廻り可然比 右壺ヲ取出シ試未 薬とけ不申候へば 又々入置 指木ト申候て 細長クこしらへたる薪ヲ 横間ヲ指入焼申候 又色見ノ壺ヲ出シ 薬能とけ候刻 指木ヲ止 又其奥ノかまニ

63 主薬ハ岩白緑 七匁
但なら緑青ニ胡粉ヲ交せ 白緑ト申候て賣候ハ 堅ク用ニ不立候 岩緑青ヲ水ニたて 必竟上へ浮タル物ト相見へ候 其色純青ナルハ悪敷 茶色ノヤウナル方宜候
右膠フノリ交申候 錦手かまやき方
はやく火ヲ引候てハ つや出かた(難)く よくくやき候て さまし取出候 色見ト申候て 陶器ノわれに 此黒多のく 其外緑紺黄紫金赤とも 此品々のるのくヲ少つ、付候て 窯蓋ノ上ニアル火窓のきわそとはさみ出し候 便りよき(倒れなき)様ニ此われヲ入置 火色可然比取出シ 見候て試候

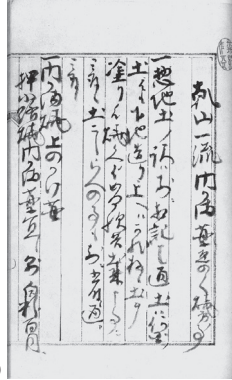
*岩白緑…黒絵具の主原料。岩緑青を水に入
れ、浮いた茶色を呈するものを使用する。
材料屋にもあるが、多くはなら緑青に胡粉
を交ぜたもの故、役に立たないという。
*必竟…畢竟、詰まる所。
*色見…本窯・内窯ともに用いる。焼成具合、
釉薬の溶解状態をみるため、小壺、素焼破片
などに絵具を塗り、色見穴・火窓などに置く。
よく焼くことが大事であり、早く火を止めて
しまつては思うような光沢が出ないとして注
意を促す。
*陶器ノわれ…小壺同様色見として応用する
素焼破片。黒緑紺黄紫金赤色など絵具を付け
火窓の際に置き、内窯では毎回入れる。
*火窓…色見穴。燃焼室の天井近くにある火
吹き穴の下方につける。
*一問…器物を焼成するための部屋。本窯で
は焚き口・燃焼室・焼成室と続き、各焼成室
を「間(ま)」と乾山はいう。
*指木…三・四寸中の松の割木。登窯では窯
の側面に差木孔があり、焼成室の温度調節な
ど、釉薬の解け具合により投げ入れる。幾間
あつても同様である。
*慥(そう)…まことあるさま。たしか・た
しかに。「不慥」は確かならざる意。
窯には素焼・本焼・絵付け・内焼用がある。
素焼窯は、成形後釉薬を掛けずに七〇〇―
一〇〇〇度ほどの温度によつて焼成、水分を
除き、器物の強度を高め、扱い易くする。
本焼は一〇〇〇―一三〇〇度ほど、釉薬を
溶かし、素地を焼締める。
絵付け窯(錦窯)は七〇〇―一八〇〇度ほど
の温度で絵具を焼き付ける。
内窯も七〇〇―一八〇〇度ほどの温度で焼
成。小規模、低火度焼成の鉛釉陶を焼く。伊
万里では錦窯を赤絵窯と称し、正保年間、柿
右衛門家文書に確認される。



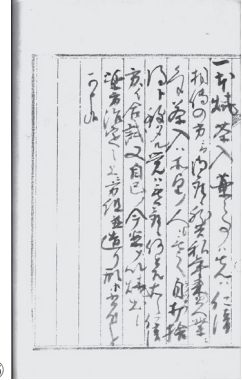
席窯・東京市村家における席窯 明治三六年頃 中村敦氏所蔵



65



67



66

66 一 本焼茶入薬之事ハ 先ハ仁清相傳の方ニて御座候然共 私年來の久業ニ候へ共 茶入ハ所望ノ人も無之 自 打捨 得ト致タル覚ハ無御座候 何とそ右の仁清方ニて合試 又自己ノ今案ヲ以焼出候薬方 作定の上ニ 方組並造り形等 才付進可申候

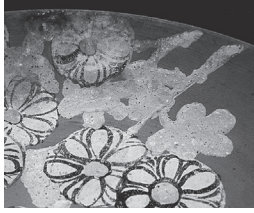
67 乾山一流の内かま薬ゑのく焼方ノ事

一 惣地土ノ訳ハ 前二相記申候通 土ハ何國ノ土ニても下地造り 上へハ可然ノ存候土ヲ塗り候て 焼候へば 如何様共 出来申事ニ御座候 土こしらへの事も 前ニ才付候通ニ御座候

一 内かま焼上のかげ薬 押小路焼内かま薬宜候 則 白粉百目へ

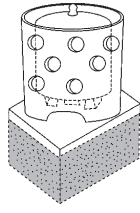
68 日岡石四十め 是昔ヨリノ本方也 併石ヲ小シひかへ四十めの所ヲ 三十五匁ニ致候へば 薬はやく解ケ坐席などにて焼候時ニハ 宜候事 勿論也 内窯ニて器物焼上ル節 掛薬の濕氣乾キ不申物ヲ最 初一番二つめ候分ハ 火氣未盛 候故 器物無破損候 二番目ヨリハ 窯内外共ニ火勢強ク かけ薬濕 有之候物ヲ つめ候へば 其器物破却致候間 二番目方の器ハ 能々多り 乾かせ

*久業・久しい業・つとめ。
 *茶入・乾山焼に茶入製作のなかつたことを説明する。所望のないこともあり、打ち捨ておいたなど、向後製作、自己の案が生ずる場合も書き記すと述べるが、乾山はロクロ技術に劣り、茶入・壺などの製作は不得手であったと推測する。
 仁清は瀬戸において修業を積む。瀬戸焼は鎌倉中期、貞応年間(一二三二―一二四)に加藤藤四郎景正が中国に渡り陶法を習得、以来、茶入製作では不動の地位を築くなど、仁清焼の茶入・壺類には瀬戸様式の技巧みざ、美しさが光る。茶の湯においては最も尊重される道具であるが、織田信長は「一國一城の手柄にも替えた」。
 一 乾山一流の内窯手立て―
 *内窯薬・繪具・焼方・内窯焼釉薬・繪具・焼成など、乾山長年の工夫発明 得意とした事項を中心とする。
 *本方(ほんたて)・・・伝統的な製法・技法。ここでは押小路焼内窯釉薬の手立てをいう。
 *坐席焼・席焼 貴人の御前などにおき絵付け・焼成ほかやきもの技術を披露することに始まるが、乾山時代には絵画における席描もあり、数寄者・趣味人らが集合、実技を披露し、座を築しむなどの娯楽が盛行した。乾山は席焼では薬の溶け具合を調節、日岡石を減らすなどの工夫をする。
 時代また意味も異なるが、初代仁清には慶安二年(一六四九)木下利當方にて鳳林承章に陶技を披露 明暦元年(二六五五)九條太閤二條関白に焼物型作、万治三年(一六六〇)後水尾院・鳳林承章らは「任清焼物共」取り寄せて觀覽するなどの記録が残る。

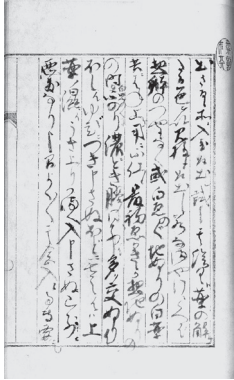


フノリ・ニカワ厚く…
乾山焼 色絵菊図土器皿
(部分) 鐵竹堂瀧澤記念館

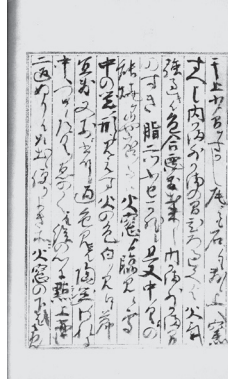
内窯の下地 筆者作成



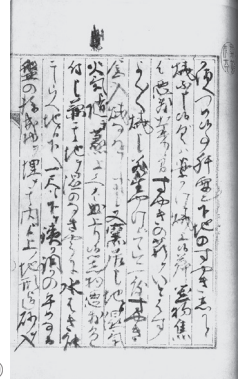
内窯設置・下地作り
(富本憲吉一九三〇年)



⑦



⑦



⑧

間 よくく其念入候事 專要二候

⑦ 出さるゝ所ニ入置 取出シ試申候 其繪具ト 藥の解
ケたる色ヲ以見極メ 取出し候 若なまやけニ候へば
惣寐のつやもなく 或白多のぐ地ぬりの白藥共ニはね
上ケ 用ニ不仕候 最初ゑかき候か 惣地ぬりの時
ふのり濃ニとき 膠 同前ニて多ク交 ぬり候て ほ
し候て ゆびニつき申さぬほどニ無之候てハ 上藥ノ濕
ニて うぎ上リ かまへ入申さぬ已前ニ 悪敷なり申候

⑦ 其上少間ヲすかし 瓦ニても石ニても敷候上へ窯す
へ申候 内かま外かまの間 ひろ過候へば 火氣強過キ
候て 色合悪敷出來申候 内かま外かま間のすぎ 脂
(指) ニつふせ可然候 且又中ノ具の能焼ケ候や否ノ事
ハ 火窓ヲ臨見候處 中の器ノ形も見えず 火の色白
ク見え候節宜敷 又前ニ付候通 色見とて陶器ノわれ
に 中へつめ候道具ノゑのくニて 繪の心に點シ 上藥
も二返ぬり候て取出候 便りよき所ニ火窓の下 はさみ

⑧ *かまへつめ候事肝要也 下地のすやき しかと焼不申
候具は 藥かけ焼上候節 器物焦候て悪敷出來候間 す
やきの薪ヲいとす よくく焼申候 若生やけニ候
ハ、今一度すやき念入候なをし用候 又窯居(据)申
候地方 濕氣火氣ニ隨テ蒸上候へば 出上り候器物
悪敷色付申候 兼其地ヲ濕のなきやうに水はき能こし
らへ 地方下へ一尺も下ケ 鉄か銅かの平めなる盤の
様成物ヲ埋メ 其内方上ノ地形迄砂ヲ入

焼け具合は、火窓から覗き、確認するが、
火の色が白く、器物の形の見えない時が窯よ
り取り出す適時である。合わねて色見によ
て絵具・釉薬の解け具合を見極めるが、生焼
けでは器物自体の艶はなく、絵具・釉薬に浮
き・剝離が生ずる。
白絵具の惣地塗るには、特にふのり・膠を
充分に、指に付着することのないようによく
干すことが肝要であるという。さらに上薬の
湿りなどにより、窯に入れる以前に不都合の
生ずることもあり、念入りの注意が必要で
ある。

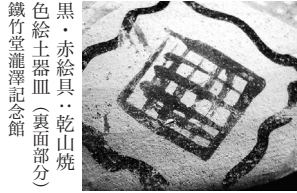
「内窯」の構造は内窯・外窯から成り、両
窯の間隔は指二本ほどの隙間を空ける。広
されば火氣の勢いは増し、器物の色相が悪
くなる。
焼け具合は、火窓から覗き、確認するが、
場所の水はけを考える。温度の上昇に伴い地
面の濕氣も上昇。濕氣は器物の色合いを悪
くし、艶もなくする。避けるためには先ず地面
を一尺ほど掘り下げ、鉄か銅盤を埋め込む。
その上に砂を被せ平らにするが、地面との隙
間を少し空け、瓦また石を敷き詰り、その上
に窯を設置する。

*窯の据え方・窯の設置には、第一に据える
場所の水はけを考える。温度の上昇に伴い地
面の濕氣も上昇。濕氣は器物の色合いを悪
くし、艶もなくする。避けるためには先ず地面
を一尺ほど掘り下げ、鉄か銅盤を埋め込む。
その上に砂を被せ平らにするが、地面との隙
間を少し空け、瓦また石を敷き詰り、その上
に窯を設置する。

*かまへつめ候・窯詰。乾山は内窯に用いる
土は何れの国の土でも可とし、製作、陶工の
居する所の土を用いることを好しとするが、
釉薬は押小路焼伝統の白粉一〇〇匁・日岡石
四〇匁を基本とする。
焼成は、始め窯内の火氣は弱く、次第に上
昇。器物の破損に繋がる濕氣に注意が必要と
述べるが、窯詰は肝要。とくに素焼をしつかり
行うに、釉薬の乾燥を充分に、時として焙る
などという。
*素焼・成形後、乾燥させた素地を焼成する
ことであるが、やきものに素焼は重要である
。生焼けでは焼成の折、焦げが生じ、絵具
が剥ける。薪を惜しまず念入りに焼くことを
勧めるが、合わせて窯の設置場所も大切に
説く。

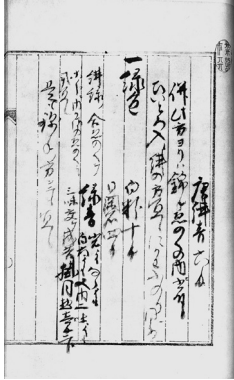
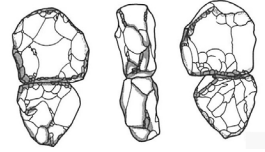


紺・緑・紫・黄絵具・乾山焼
色絵山焼 色絵梅蘭水仙図
火入(部分) 鐵竹堂瀧澤記念館

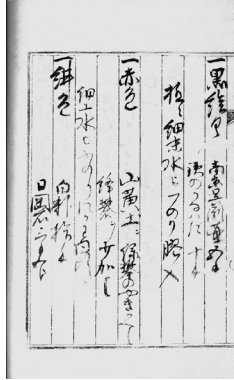


黒・赤絵具・乾山焼
色絵土器皿(裏面部分)
鐵竹堂瀧澤記念館

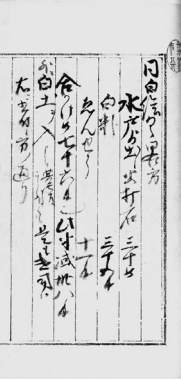
火打石・渋谷区
北青山遺跡出土
渋谷区教育委員会



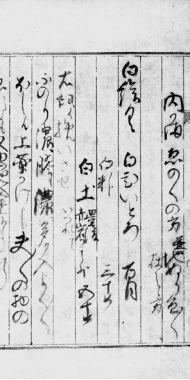
75



74



73



72

- 72 内かまゑのくの方並地ぬり色くく在之候方
*白繪具 白ひとろ 百目
白粉 三十め(佐・式拾目)
白土 豊後赤岩か其外いつれ二ても五十め
右白にて挽 いさせ ふのり濃ニ 膠も濃ニ多ク入
よくくほし候て 上薬かけ申候 夫くくの物のゑ形ニ
ても 又惣地へ塗候も同断
*同白繪具畧方
水戸方出候火打石 三十め
白粉 三十五匁
*緑んせう 十二匁
合かけめ七十六匁也 此半減廿八匁
外ニ白土ヲ入申候 豊後其外二ても 是も遣用ハ
右ニ土付候方ノ通り
- 73 黒繪具 南京呉洲藥 五匁
鉄のかなはだ(佐・鉄粉) 十匁
極々細末 水ヒ フのり膠入
- 74 赤色 山黄土ニ緑礬のやきかへし
絳礬ヲ少加申候
細工 水ヒ ふのりにかわ同断
- 75 紺色 白粉 拾匁
日岡石 三匁五分
唐紺青(佐・花紺青) 六匁
併 此方ヨリハ 錦手ゑのくの内ニ土付候ひいろ入候紺の方
宜候 にかわふのり同前
- 一 緑色* 白粉 十匁
日岡石 四匁(佐・三匁五分)
緑青 岩ニても ならニても 白六ニて
も 又内二味ニても 三味交テ成共 掛目惣若匁二分
紺緑ノ合ゑのく方等分ニ 内かまゑのくニても用宜候
是も錦手ノ方ニても宜候

一内窯・繪具、地塗り
*地ぬり・内窯焼の地ぬりは、素地物体に絵具・釉薬を塗るが、乾山焼の一つの特色となる。

中国華南地方・三彩陶磁器の技法が基本であるが、交趾焼とも称された。日本では押小路焼がはじめと伝承。一般には色絵具を多用する絵付け陶磁器の意にも使われたが、低火度焼成・鉛釉を基盤とし、長石に鉄・銅・マンガ・コバルトなどの呈色剤を混入、緑・黄・紫・藍色などの色釉が用いられた。

桃山期、押小路焼一文字屋助左衛門が唐人より陶法を伝授。創始は薬焼より古いとされるが(推定)、素地に花木などを彫り色釉を施す技法が基本となった。

乾山は孫兵衛伝の絵具に加え、独自の色絵具(白・黒・赤・紺・緑・紫・黄・桃色・薄柿色・薄浅葱色・薄明葱など)を工夫、紙箱同様の表現に成功する。得意とした書も書き入れ、素地・絵具・釉薬、さらに形状・内容・装飾とも結び合わせるなど、紙箱の風合も案出。助左衛門の緑者、内窯焼釉下色絵陶の熟練陶工孫兵衛の技を土台とした。

*白繪具・乾山工夫第一の絵具である。カオリン系の白絵土を中心に白粉・ビードロを入れるが、ビードロの入手できない場合、江戸では火打石・煨硝を代わりに用いるとする。

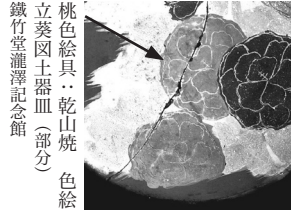
*火打石・互いに打合せて発火する石。石英の一種であるが、江戸時代、茨城県那珂郡山方町浜辺に水戸火打石が産出。ここでは関東で用いる原料として、日岡石の代わりに使われた。

*緑んせう・煨硝。硝石・硝酸カリウム。火薬の材料とされるが、鉱物の硝石は日本にはなく、加賀藩では蓬に蚕の糞、小水などを原料として煨硝を作製。上薬の顔料、融剤としてビードロの代用に使用した。

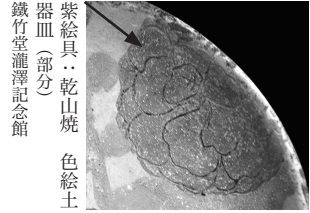
*緑色・岩緑青、なら緑青、岩白緑でも良いが、その内二種、三種をまぜてもよく、総体の量を一分二二分とする。紺・緑色の合わせ絵具を等分にして用いれば濃・淡、深みのある緑色が工夫できる。



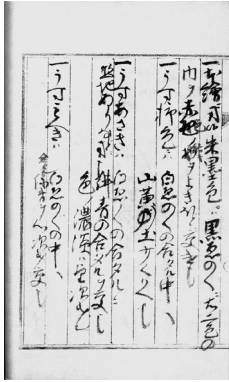
朱墨絵具・乾山焼「高古・陶隠」印



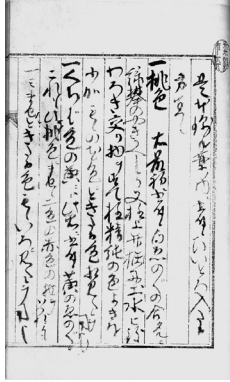
桃色絵具・乾山焼 色絵立葵図土器皿(部分) 鐵竹堂瀧澤記念館



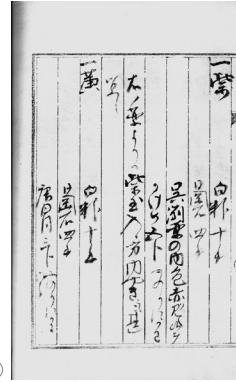
紫絵具・乾山焼 色絵土器皿(部分) 鐵竹堂瀧澤記念館



76



77



78

⑦⑥ 一 紫

- 白粉 十匁
- 日岡石 四匁(佐・三匁五分)
- 呉洲薬の内色赤ク見へ候ヲ かけめ五分 *ふのりにかわ
- 右ノ薬よりハ 紫玉入候方 内やきニも甚宜候
- 一 黄 * 十匁
- 白粉 十匁
- 日岡石 四匁(佐・三匁五分)
- 唐白目 三分 ぶのりにかわ同前

⑦⑦ 是本錦手薬ノ内ニ才付候ひいとろ入たる方宜候

- 一 桃色 * 右最初ニ才付候白芫のぐの合タルニ 緑礬のやきかへしか 又極上弁柄丹土水ヒ致 わろき交り物ヲすて 極精純の色よきを少加 もの花色ニときたる色相見へ候ヲ用申候
- 一 くらば色の黄ニハ 此右ニ才付候黄の芫のぐニこれも此桃色ニませ候二色の赤色の物ヲ いづれにても一ミませ候てときたる色 も、いろ二見へ候ヲ用申候

⑦⑧ 一本繪二用候朱墨色ニハ 黒芫のぐニ 右二色の内ヲ 赤色ノ能キヲ よきほどニ交遣申候

- 一 うす柿色ニハ 白芫のぐの合タル中へ 山黄土少くハへ申候
- 一 一 * うすあさきハ 白芫のぐの合タルニ 惣地ぬりなどニ用申候紺青の合タルヲ交申候 色ノ濃淡ハ望次第也(佐・うす紫、うす黄色ノ物塗りあり)
- 一 一 * うすもへきハ 白芫のぐの中へ 合タル緑青ヲ心次第交申候

*ふのり・膠(にかわ)・内窯惣地ぬりは、ふのり・にかわをとともに濃く溶き、塗り、よく乾燥させ、上薬(釉薬)を掛ける。絵付けの場合も同じであるが、白絵具の略式として、ビードロに代わり水戸火打石、煖硝を用いており、煖硝は密着させるための顔料と考える。江戸において適材とする顔料の入手できない場合の応用かと思われる。

*紫玉・紫色のビードロ。輸入品の可能性が高い。

*黄・本焼錦手絵具の内に既述、ここにはないが、内窯陶法の唐白目に、ビードロ入りをして調合する。

*桃色・調合した白絵具に、緑礬を焼返した絳礬を入れる、また水煎した極上弁柄丹土を少量加え、溶いた色が桃色を呈するものを用いるという。

*くらば色・黄絵具に同じく、絳礬、また極上弁柄丹土のいずれかを一味交ぜる。黄色絵具に、先の桃色絵具に用いた赤色顔料のいずれかを交ぜればよいという。

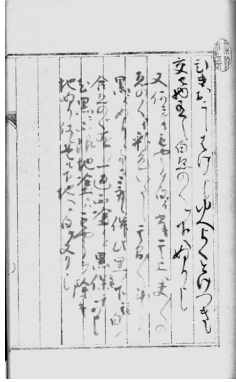
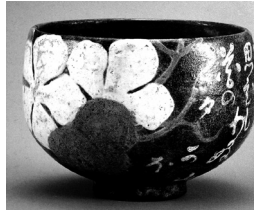
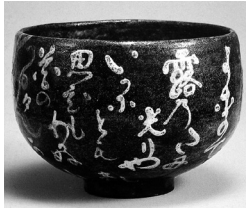
*朱墨色・絵画用朱墨色も黒絵具に絳礬、また極上弁柄丹土のいずれか色のよいものを一味交ぜればよいという。

*うす柿・合わせた白絵具に山黄土を少量交ぜる。

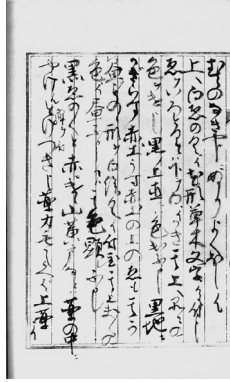
*うすあさき・薄浅葱。調合した白絵具に調合した紺青・惣地ぬりに用いるものを適宜交ぜる。濃淡は好み次第。

*うすもへき・薄明黄。薄浅葱と同様であるが、こちらは調合した白絵具に緑青を少し交ぜる。

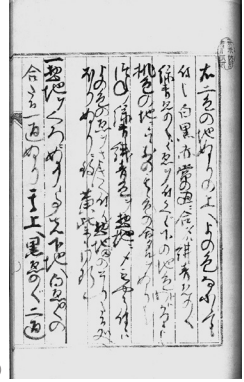
惣地黒塗り・白絵具による
絵付けと和歌書・乾山
焼 色絵夕顔図茶碗
大和文華館



81



80



79

79 右二色の地ぬりの上へ、よの色なにも付申候 白

黒赤 常の通ニ合タル紺青葱のぐ 緑青葱のくにてゑ

ヲ付候へば 下の地色トハわかり申候 桃色の地ニ候

ハ、前のもゝ色の合タルぬり申候 つねノ緑青紺

青色ヲ惣地ニメ もやう付候ハ よの色の葱ヲさきハ付

候て 惣地ののこりたる処へ ほりぬりニ致候 黄紫

も同断也

一 惣地ヲくる二ぬり候事 先下地へ白葱のくの合たる

一返ぬり 其上へ黒葱のぐニ返

80 むらのなきやうにぬり よくほし候て 上へ白葱の具

にて花形 草木文字ニても付申候 葱ヲいろとり候ハ

下ヲ白にてかき 其上へ品々の色ヲ遣申候 黒ノ上直

ニハ色遣不申候 黒地ニかぎらす 赤土うす赤土の上の

ゑも 其可レ屋ク(そのえがくべき)ものゝ形ヲ白繪具ニ

て付置 其上へ夫く(それ)の色にて屋不申候てハ 其色顯レ

不申候 黒葱のくと 赤ニ遣候

山黄戸^{山黄土}などハ 薬の中ニやけ候て とけつき申候 薬力

無之候へば 上薬ニて

81 ひきおこし はげ申候ゆへ よくとけつき候 交せ物

有之白葱のくヲ 下へぬり申候

又何ニても もやうヲ白にてせキ 其上へ夫く(そのえがく)にて彩

色いたし 其間く斗ヲ 黒にてぬり候事も御座候 併此黒

ノ下ニモ白ノ合葱のぐ薬ヲ一返不塗候てハ 黒保チ可(不可)申

候 尤黒ニ不限 地塗ニハ もやうヲ除キ 地ぬり仕候 是も下

*右二色・二色の地ぬりの上へ、他の色いず

れにても活用。白・黒・赤、紺・緑の合わせ

薬を用いて画を描けば、地色との区別がわか

り、緑青・紺青を惣地に塗る場合は、他の色

を先に施し、余の部分は掘り抜きするように

文様間をぬつて塗る。

*惣地に黒に塗る…全体を黒く塗る場合は、

先ず下地に白絵具を一度塗る。次いで黒絵具

を斑のないように二回塗り、よく乾かし、文

様とする部分の花・草・木、文字などを再度

白絵具を用いて描き、彩色する場合はその上

に色絵具を施す。

黒地・赤地、いずれにもせよ、直接その上

に色絵具を用いることはなく、必ずはじめに

白絵具を置き、その上に彩色を施す。仕上

りの色合いを良くするための工夫であるが、

山黄土を原料とする黒色、赤色は鉄分が主成

分である。鉄分は別して釉薬に溶け易く、色

落ち、剥げに繋がるが、密着性の高い白絵具

を下に塗ることによりそれを防ぎ、その間々

を黒に限らず地色とする絵具を用いて埋めて

ゆく。

白絵具による下地塗りの大切さというが、

その技法は乾山焼以前にはこれという手立て

もなく、乾山自らの処法であった。

黒地に書・画を描いた例に『源氏物語』「夕

顔図」茶碗がある。

黒色は背景の夜の闇を表現、浮かぶ白い夕

顔の花と緑色の蔓と葉、和歌は白絵具を用い

て書すが、物語の趣旨を充分に心得、明暗の

対照、色彩、陶法を一つに絡ませる。デザイ

ンとは何か。陶法は何が適するか。乾山の

構想がもつと、明確に現れた作品の一つであ

る。惣地塗りは、伝世する乾山作品には少な

く、むしろ猪八作品にみられる特色である。

*山黄土・山黄土。黄・浅葱、灰色をした堆

積物。鉄物の原料となる。中国北部の黄土が

よく知られる。

*かながいの金具、切金、蒔絵装飾の一種。

金具を施し細工をする技法であるが、その技

をやきものに応用。絵師・漆芸意匠家光琳の

助言・手助けのあったことを推測する。

月・花、如何のような文様であれ、金・銀の

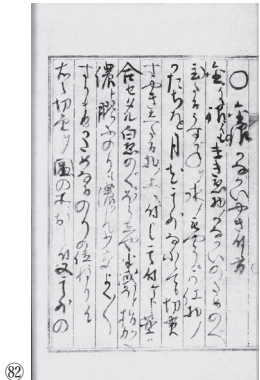
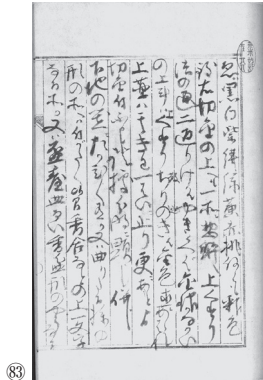
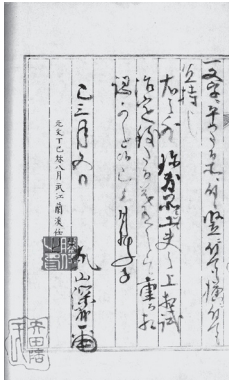
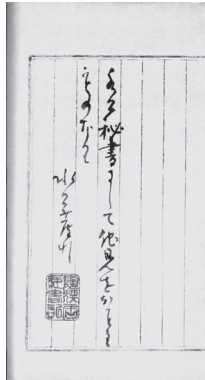
惣地塗り・乾山焼
和歌百合図額(角)皿 色絵



惣地塗り・乾山焼
色絵独葉香合 フリア
美術館



かながい(銀板)を付
ける・乾山焼 色絵
月波図香合



90 水上祕書にして他見をおそるゝものなり
水上蘆川 陶煙居蔵書記(朱文長方印)

95 (白紙五頁続)
乾山深省(花押) 爾字型
元文丁巳八月武江蘭溪任 勝任之印(白文方印)
矢田陪氏(朱文変形印)

84 一文字二平めたる所二付候 堅二付ても 横二付ても
宜持申候
右之外 珍敷品候ハ、工夫の上相試 作定致たる義
有之候ハ、重て相認可進候 已上□□□

83 又ハ黒 白紫 紺 緑 黄 赤 桃 何二ても彩色
致 右切金の上へも一所ニ 惣鉢へ 上くすり法の通
二返かけ候て やき候へば 金銀かなかいの上斗ハ
上くすりちりのき候て 金色直ニあらはれ 上薬ハ其き
わ一はい(いつぱい)ニ止り 更ニあと右切金付不申候
證據 分明ニ顯申候

82 ○金銀かながいやき付候方
金二ても銀二ても まきゑ物ノかなかいのため のべ置
たるうすがねヲ求メ もやう二可仕物ノかたちを月
花 其外なにゝても切貫 すやきしたる物ノ上へ付申候
其付ケ申候薬ハ 合セタル白ゑのぐニ ほうしや半減
ほと指加へ 濃キ膠 ふのりも濃クして少交 よくく
すりませ かためなるのりの位二ねり候て 右之切金ヲ
圖の所ニおし付 又其外ノ

81 元文丁巳三月五日、乾山の書した日付である
同年秋八月には武江蘭溪任・勝任の印、
また別に「矢田陪氏」の印、白紙五頁のあと
に水上蘆川、「陶煙居蔵書記」の蔵書印がある。
幾人かの手を経たことを伝えるが、受理
した人物は確証はないが論王寺宮家坊官進藤
周防守勝任ではなかったか。矢田陪氏は進藤
氏の同僚、矢田部(陪)豊前守と推定。両者
は揃って『多賀大社叢書』ほかに名を留める
が、水上蘆川はやきものに興味を持つ趣味
人、俳人と推測。詳しいことは不明である。

『陶工必用』裏表紙

延べ板をその文様に切り抜き、素焼上に貼り
付ける。接着剤には白絵具に細砂・膠・ふの
りを適量交ぜたものを用いるが、よく掃り、
かための糊ほどにとき、下絵の上に押し付け
てゆく。他の絵付があれればそれに彩色を施
し、切金とともに上薬(釉薬)を二度ほど掛
けるが、焼成後釉薬は切金周辺に散り、文様
が現れる。後から切金を付着させる必要のな
いことと理であるが、用いる器形には限りな
い、裝飾部位に高低のあるもの、湾曲した
ものなどは不適である。水平であること、面
の平らな一文字など、香合・盃台・皿・盆類
がよく、縦にも横にも付けられる。

* 惣鉢・証拠
* 證據・証拠
* 證明・ぶんみょう。明かなこと・はつきり
区別がつくこと。
* 一文字・器物の上部が水平なもの。

『陶工必用』裏表紙

二、『陶磁製方』

元文二年秋九月、乾山は下野国佐野へ招かれた。数寄者三家の席焼、内窯焼成のためであったが、乾山書状によれば前年には甥彦右衛門の江戸銀座屋敷において病氣療養。回復後間もない折の遠出であった。

招待した人物は、医者・庄屋大川顕道(藤兵衛)、越名河岸で酒・醤油の醸造、質店を経営する須藤杜川(理右衛門・一七〇一―一七九)、医者松村広休(彦九郎)であったが、三者は松村家を中心に、広休弟が須藤杜川、杜川姉または妹が顕道妻都与、顕道は杜川二男を養子とするなど、重縁に結ばれた関係にあった。大川家は唐沢城主佐野家家臣、顕道を六代とする鑄物奉行の出自。陶冶への関心を推測させるが、やきものへの執心は顕道手控が証左となる。先妻都与の没後、足利の瓦屋丸山家から後妻重を迎えるが、やがて丸山家では清右衛門貞憐息子の嫁として大川家からツルを娶り、丸山家には『陶磁製方』の写本、角皿一〇枚、太鼓型の木製菓子器が伝承。同書の写本は足利丸山家伝(貞憐・乾齋・佐野市某家伝(骨董商)・内窯焼之夏(文政二二年丑年末秋日写壺桂楼月弓)・緒言及び奥書なし、とした以上の四冊が残る(篠崎源三)。

『陶磁製方』は、席焼を指導、同地で記したものである。顕道はそれに先立ち享保一七年(一七三三)、入谷村住乾山から秘伝の薬法を受継。入谷窯も訪うたことを推測するが、同年五月には下谷の大火、乾山も病後のこと、ゆるりとした気持で佐野を訪れたように思われる。

(二) 江戸で纏めた『陶工必用』には乾山の意思が窺われる。が、『陶磁製方』には招かれた主旨、相手の立場、席焼であることなどを認識、誰のために著すかを心得た姿勢がみられる。下地は前もつて入谷村の久作から素焼・窯・材料などを調達、それらを用いて書・画を描き、釉薬を掛け、内窯焼成をする。落款はその折の一端を伝えるが、『陶工必用』

と比較をすれば、顔料名・材料の割合・分量に相違がある。朱註もなく、乾山の解説は小書であるが、京都の地名・人名、併せて「京兆」「紫翠」「陶工」など「みやこ」の陶匠尾形乾山を明示。「二藍」「濃緑」「鼠」など自己工夫の絵具を特記し、製陶上の基礎的知識を述べる。

(二) 歴史的な背景は少なく、仁清伝・孫兵衛伝・乾山伝を組み入れるが、京焼土、仁清焼、絵具・釉薬とその配合・手立など、総体としてやきもの製作の手引書的な形式である。

(三) 京都から下向した陶匠、乾山と乾山焼に対する興味に込める。

- ① 乾山焼の鳴滝開窯と仁清・孫兵衛との関わり
- ② 光琳文様として服飾・漆芸に流行を築いた兄光琳と乾山焼
- ③ 聖護院門境に活躍する乾山焼二代猪八のこと
- ④ 「一入より恟意」など樂家との繋がり及び交流など

仁清伝は二代仁清から乾山へ譲られたが、それらは調査・配合のみを記したものと推測。乾山の朱註・解説を以つて陶法書としての形式を整え、意義を深めるが、陶工にとつて土・絵具・釉薬の調査、配合こそが秘伝である。師の手際・扱い、微妙な動きや判断は口伝であった。佐野における一、二回の数寄者の席焼において、容易に習得できるものではなかつたろう。乾山の実技を実見、『陶磁製方』はその上からも貴重な手引と考えるが、現存作品には焼成状態の不十分なものも現れる。

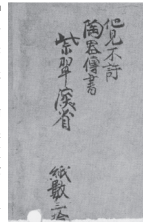
西行、芭蕉の如く乾山にとつても人生は旅、江戸の住まいは旅宿、逗留した佐野はその場限りの出会いであったか。顕道の手控に乾山が再び現れることはない。

『陶磁製方』は、江戸において書き始めたか。「正意手茶入項、灰の分量、江戸の宿にて書写の折失念、追つて書き付ける」とあるが、趣味者の陶芸、彼らが如何ほど仁清焼に興味をもっていたかは判らない。

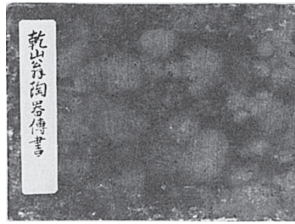
初代乾山尾形深省自筆

『陶磁製方』

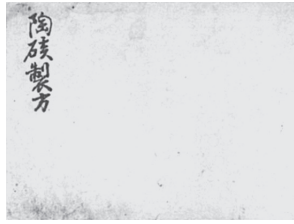
鐵竹堂瀧澤記念館



『他見不許 陶器傳書 紫翠深省 紙數三拾枚 (外表紙見返し)』



『乾山翁陶器傳書』(内表紙) 題箋は和漢書の表紙に貼り付ける紙。



『陶磁製方』内題

元文二年(一七三七)

乾山翁並 藥法
○地土の方 惣て陶器二造り候
一陶器の土の義ハ何國の土ニても 能試ミ用候
器物ニ成申度ニ御座候 必京都の土のミ限リタ
ル度ニテハ無之候 西國筋 中國 南海 東國ニテハ
尾州の瀬戸土別て相勝レ申候 勿論朝鮮 中華の土
弥以上品ニ御座候 夫故地土ニ於テハ 一方ニ不限度ニ
御座候 然共 愚拙數代京都の

素生の上赤城ノ西山常
鳴俊山ノ名 中年代ノ陶器
仕前ノ氣山号 燒始候陶器ノ名ニ
相記シ候 其節 私生國の産物故 京東山邊ノ土ヲ用
候 此方ニテハ暫ク京土ノ名ヲ用候
併 日本諸國ノ土 又ハ異國ノ土ニテモ 陶器ニ用 宜
キ土ハ悉ク用來リ候

一黒谷土 道具ノ品ニ依リ 上中下 又赤色ヲ用候
京黒谷土 道具ノ品ニ依リ 上中下 又赤色ヲ用候
一京山科藤尾石(江ノ土に關するこのような詳細はなし)
黒谷土目拾貫目ニ 藤尾石式貫目
右二色合テかけめ拾式貫目ヲませ合 水ヲ桶ニはい二入 右の土
ヲトキ 絹ノスイノウニテコシ 居サセテ 上水ヲステ 底ニ居タ
ル土ヲ 瓦カ板ニテモ其上ノヘスクイアゲ カハカシ 一所ニツクネ
ヨクモミ 又ハ板カムシロノ上ニテキテフミ 又ハ臼ニイレテツキ
其中ニアル土ノカタマリ 石 砂塵ヲエリステ 猶ヨクモミ候て陶
器造リ申候 此藤尾石交換誤ハ 此土至極細ニ候故 器二造 日ニ
干シタル時 器ノそこニ切レ出申候 是ハ土二候ラハ あまりニ
精密ナル故 却てきれ出申候 此藤尾石ヲませ候へばきれ出申
たとへば壁土ノ中 砂トスサ(筋)ト申テ ワラワキリタルモノノ入カ
ベヌリ候へば ヨク持コトハ候 スサト砂ト入不申候てハ

『陶磁製方』(陶磁器の造り方と手立の意、陶工としての基礎的知識)

① 本焼山窯並 藥法

○地土の方 惣て陶器二造り候
一 陶器の土の義ハ何國の土ニても 能試ミ用候
器物ニ成申度ニ御座候 必京都の土のミ限リタ
ル度ニテハ無之候 西國筋 中國 南海 東國ニテハ
尾州の瀬戸土別て相勝レ申候 勿論朝鮮 中華の土
弥以上品ニ御座候 夫故地土ニ於テハ 一方ニ不限度ニ
御座候 然共 愚拙數代京都の

② 素生ニテ候上 京城の西北ニ當テ 鳴瀧山ト申邊 私人ノ比方閑居仕 候所ヲ 乾山ト号 燒始候陶器ノ名ニ 相記シ候 其節 私生國の産物故 京東山邊ノ土ヲ用候 此方ニテハ暫ク京土ノ名ヲ用候 併 日本諸國ノ土 又ハ異國ノ土ニテモ 陶器ニ用 宜キ土ハ悉ク用來リ候

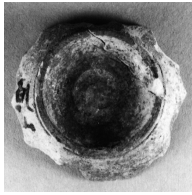
③ 一 京黒谷土 道具ノ品ニ依リ 上中下 又赤色ヲ用候

一 京山科藤尾石(江ノ土に關するこのような詳細はなし)
黒谷土目拾貫目ニ 藤尾石式貫目
右二色合テかけめ拾式貫目ヲませ合 水ヲ桶ニはい二入 右の土
ヲトキ 絹ノスイノウニテコシ 居サセテ 上水ヲステ 底ニ居タ
ル土ヲ 瓦カ板ニテモ其上ノヘスクイアゲ カハカシ 一所ニツクネ
ヨクモミ 又ハ板カムシロノ上ニテキテフミ 又ハ臼ニイレテツキ
其中ニアル土ノカタマリ 石 砂塵ヲエリステ 猶ヨクモミ候て陶
器造リ申候 此藤尾石交換誤ハ 此土至極細ニ候故 器二造 日ニ
干シタル時 器ノそこニ切レ出申候 是ハ土二候ラハ あまりニ
精密ナル故 却てきれ出申候 此藤尾石ヲませ候へばきれ出申
たとへば壁土ノ中 砂トスサ(筋)ト申テ ワラワキリタルモノノ入カ
ベヌリ候へば ヨク持コトハ候 スサト砂ト入不申候てハ

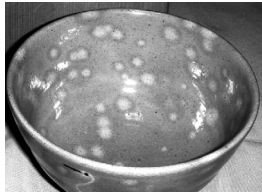
『陶磁製方』

同書は、江戸下向後、入谷村に住し作陶・作画・俳諧活動を楽しんでいた乾山を、やきものに興味をもつ佐野の素封家・医師大川頭道(藤兵衛)が、松村広休(彦九郎)・須藤柱川(理右衛門)とともに同道に招いた折、乾山自らが著した陶器の製法書である。受業者はやきもの趣味の頭道と考えるが、乾山はそれぞれ三家に滞在 俳諧・作陶 江戸・みやこの話に時を忘れたものと推測する。
陶法書は、乾山焼小伝・秘伝を要とし、一方に仁清伝の本窯焼地土・掛業・山窯絵具・錦手絵具、他方に孫兵衛伝の内窯焼地土・掛業・絵具などを纏めている。内容は、江戸において認めた『陶工必用』と変わりはないが、相異点は光琳の乾山窯参加のこと、乾山焼二代継承者尾形猪八の京都聖護院門境における活動 薬焼に關して四代一入から懸意であったことなどが述べられている。
本焼山窯・藥法

*生國の産物・乾山焼が京都の産物・土産物になったことに結びつくが、土産物となれば京焼に模倣の興ることは当然である。伝世する雑多な銘の作品群に繋がるが、創始者と模倣者、その相異は陶法と様式、銘の書方などに表れる。
*居サセ…水鍛した土。桶に土を入れ水を張って、底に溜まった土を居せ土という。
*藤尾石…基本とする黒谷土に交ぜる石。黒谷土は粒子が細かすぎ、亀裂が生ずるためその調整に用いられた。
極細な土は単味で用いられ成形後日に干し、高台などに切れ・割れが生ずる。家造りの壁塗りになどに繋ぎとして砂・薬・炭を入れる。○貫丸に、その五分の一の藤尾石二貫丸を交ぜる。桶につけ置き、絹の水囊にて漉し、上水を捨て下に溜まった土を瓦また板上に取り出して日に当てる。適度に固まった所で手で捏ねる、筵の上にとり足で踏む、白に入れて搗くなどするが、成形に適する土の粘り気を引き出すためである。



火替・乾山焼 推定御
本手写し茶碗陶片
法蔵寺



火替・現代京焼御本手



呉器・『万宝全書』



⑤
 一 黒谷赤土 五升 同
 一 遊行土 五升 同
 一 藤尾石 三升 同
 右合作り申候
 右いらぼ土 仁清傳之ノ傳之寫進候
 私とくと試タルハなく候
 ○唐津茶碗ノ土 是ハ旧からつ茶碗ノ夏也
 今唐津茶碗朝鮮ノ茂山焼ノ類也
 一 黒谷白土ふるひて 赤土ヲ少ませ色ヲ付け
 右ノ方ヨリハ 黒谷土ノ中 土ノうす赤キヲ一味ニテヨク候

④
 一 黒谷土 五升 同
 一 遊行土 五升 同
 一 藤尾石 三升 同
 右合作り申候
 右の方ハ御室焼物師暨々村仁清也 私へ相傳也 然共此土ノ方
 不勝候 近江ノしがらぎ出候土 別て宜御座候 是ハ藤尾石モ
 不入一味ニシ 土又ハふるい土ニテモ
 窓て之高麗茶碗 五器茶碗ニ作り焼候へば 面白キ火替 ウス赤色
 ウス青色 紅葉など、申候焼色出申候 毎度於乾山焼相試申候
 ○いらぼ茶碗ノ土
 一 黒谷赤土 五升 同
 一 遊行土 五升 同
 一 藤尾石 三升 同
 右合作り申候
 右いらぼ土 仁清傳之ノ傳之寫進候
 私とくと試タルハなく候
 ○唐津茶碗ノ土 是ハ旧からつ茶碗ノ夏也
 今唐津茶碗朝鮮ノ茂山焼ノ類也
 一 黒谷白土ふるひて 赤土ヲ少ませ色ヲ付け
 右ノ方ヨリハ 黒谷土ノ中 土ノうす赤キヲ一味ニテヨク候

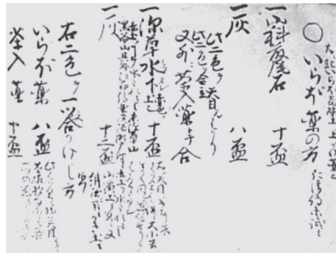
- ④ 壁土ツキカネ 又ハワレ出候と同シ断二候
 右の土にて 茶碗 茶入 皿 猪口 香爐 香合 花入
 コカシ入 水次 盃臺 菓子臺 一切の道具ツクリ出申候
 ○五器手土 高麗茶碗内二五器(呉器) 手ト申茶碗數品有
 大徳寺コキ土 アマゴキ(尼呉器) ユウゲキ(遊撃呉器)
 一 黒谷土 五升 同
 一 遊行土 五升 同
 一 藤尾石 三升 同
 右合作り申候
 右の方ハ御室焼物師暨々村仁清也 私へ相傳也 然共此土ノ方
 不勝候 近江ノしがらぎ出候土 別て宜御座候 是ハ藤尾石モ
 不入一味ニシ 土又ハふるい土ニテモ
 窓て之高麗茶碗 五器茶碗ニ作り焼候へば 面白キ火替 ウス赤色
 ウス青色 紅葉など、申候焼色出申候 毎度於乾山焼相試申候
 ○いらぼ茶碗ノ土
 一 黒谷赤土 五升 同
 一 遊行土 五升 同
 一 藤尾石 三升 同
 右合作り申候
 右いらぼ土 仁清傳之ノ傳之寫進候
 私とくと試タルハなく候
 ○唐津茶碗ノ土 是ハ旧からつ茶碗ノ夏也
 今唐津茶碗朝鮮ノ茂山焼ノ類也
 一 黒谷白土ふるひて 赤土ヲ少ませ色ヲ付け
 右ノ方ヨリハ 黒谷土ノ中 土ノうす赤キヲ一味ニテヨク候

水籤などの詳細はなく、京焼土の諸々、仁清焼など、佐野の数寄者にとつて余り近いものではなかつたか。
 *一切の道具・茶の湯に用いる茶道具・懐石道具をいう。仁清窯では茶碗・茶入・香炉・香合・花入・コガシ入・水次などの茶道具、皿・猪口・盃台・菓子台などの懐石道具を製作。好み道具を造らせた金森宗和の茶会記には、多くの向付が記録されている。
 乾山は、仁清伝の陶法の内、本窯では朝鮮関係として茶碗を主体に土を論じ、中国関係では茶入・天目茶を中心に、釉薬を主体に取りあげる。当時のやきもの嗜好・傾向がわかり、茶の湯が中心、それに基づく選択であったことが判断される。
 *大徳寺呉器・高麗茶碗の一種。朝鮮から通信使などが来朝の折、宿とした大徳寺に残された茶碗と伝承。枇杷色、高台が高く、見込みが深いなどの特徴がある。
 *尼呉器・大徳寺と同じく、鷹ヶ峯の尼寺に伝わる茶碗とされる。高台は余り高くないという。
 仁清は、高麗茶碗の模倣において五器手土として黒谷土・遊行土・藤尾石の三色を混合する。が、乾山は信楽土単味でも良く、藤尾石を入れる必要はないとする。いらぼを除き試してみたが、高麗茶碗・呉器茶碗など、火替・紅葉などの変化が現れると述べる。
 *火替・焼成時、酸化炎・還元炎など、火氣・煙・炎の作用によって起る現象。窯変。
 *茂山・中庭茂山・茂三(生没年不詳)。対馬藩茶道方とされ、対馬藩倭館内釜山窯における作陶が伝聞。寛文から貞享(二六六―一七八)頃の活動が伝えられる。が、釜山窯の陶工については史料も乏しく、朝鮮陶工による作陶も指摘される(泉澄一著「正徳・享保期の釜山窯と法文焼物」)。
 乾山は茶道具類にも精通しており、旧唐津茶碗に対し、今唐津を茂山焼の類いと述べるが、薄手の杉形・低い高台・見込みの細い刷毛目などに特色がある。

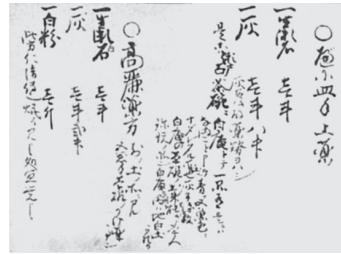
いらば・黄伊羅保茶碗
「常盤」
MIHOMUSEUM



伯庵茶碗・藤田美術館



⑩



⑨

⑨ * ○べに皿手上薬

- 一 生瀨石 壹斗
- 一 灰 壹斗八升

灰多キ故 藥勢ヨハシ 是等ハ瀬戸古茶碗ニ白庵トテ一品有 是ニハなまこと申テ 青ク又ハ黒色ニナダレタル所出ル也 灰多キが故 白庵の茶碗ノ出来能キハ 茶人珍玩ノ品也 白庵ヲ写ス時ハ地白土可然か

○高麗藥方 前ノ土ノ所ニアル五器手茶碗ノかけ藥事也

- 一 生瀨白石 壹斗
- 一 灰 壹斗式升
- 一 白粉 壹升

此方仁清傳也 焼て見申候処 宜寛申候

⑩ 左ニ記いらば茶碗土ノ上ノかけ藥也

○いらば藥方 仁清傳未試験候

- 一 山科藤尾石 十盃
- 一 灰 八盃
- 一 此二色ヲ天目ニてはかり 此二色ヲ合置 又外ニ茶入藥トテ合
- 一 深草水下 赤色ノ土也 十盃
- 一 右ノ天目ハ□□共はかり申候 併 大小共ニとかく同シ器ニてくすりヲはかり候事也 赤土ノヲ水たれと申候 京深草山 黒谷山 其外江劬信樂 尾張瀬戸 皆々赤土ヲ水たれと申候
- 一 灰 十二盃 山黄土も宜候 又紺屋ニ用候かき土も宜候

右二色ヲ一ツニ又合かけ申候方

* いらば藥 八盃 (江・十盃)

此はかり候物は天目ニてモ 茶碗 杓 椀 などに、も各一ツの器ニてはかり候事也

茶入藥 十盃 (江・八盃)

*べに皿手…べに皿は化粧用の紅を溶く皿。木灰には鉄分があり、発色は黄味をおびるが、本焼の釉薬(土薬)は生瀨石(瀬戸・美濃地方)で石粉(という)と灰が基本原料である。灰が多く、生瀨石が少なければ、釉薬の溶ける温度は低くなり流れ易くなる。これを弱い釉薬と解するが、古瀬戸茶碗の白庵手を例とし、なまこ手とも称している。茶人は土白く、釉薬に青また紫、黒いなどれの生ずるものを賞玩、模倣するには白い素地を用いるべきかと乾山はいう。

*白庵…幕府の医官曾谷伯庵(二五六八一—六三〇)。「陶工必用」にもあるが、伯庵所持の茶碗とされ、枇杷色・海鼠釉・竹の節高台などの特色がある。瀬戸か唐津焼か、また朝鮮産かなどの説がある。

*なまこ…透明灰釉を配合した青味を帯びた白濁釉。焼成によって藍・紫・緑色のなだれ、斑文が生じ、海鼠に似た色合からの呼称である。なまこ手茶人は瀬戸金華山窯茶入の一種である。

*天目…ここでは天目茶碗をいう。乾山は釉薬の調合、計量に際し、目安として天目茶碗を使用。柄杓なども応用するが、いづれにしても大小容器、同一品による計量が大切と

いう。

天目は天目山。中国浙江省・安徽省の境にある山名に因む。東西に別れた峯には目に昭明寺、西に禪源寺があり、山頂には目のような二つの湖があつたという。寺では献茶・飲茶用に天目茶碗を使用していたとされ、日本へは留学僧・渡来僧がもたらした。

*水下…みずたれ。鉄分を多く含む赤土。深草・黒谷・信樂・瀬戸地方などの呼称。

*かき土…鉄分を多く含む土。紺屋が染色に用いる柿色の土か。山黄土と同じ役割をするか。「陶工必用」には記されていないが、洲本の陶工小倉円平は「柿南京」の絵具に福良町中山にて採取する柿土を使用するといふ(環平焼と淡路のやきもの「青木重雄」)。

*いらば藥八盃(十盃)・茶入藥十盃(八盃)は「陶工必用」では分量が反対である。



瀬戸青葉・青織部向付陶片
土岐市美濃陶磁歴史館



刷毛目手茶碗・日本民芸館

一灰 三拾月
一灰 二拾月
一灰 一拾月
一灰 十
一灰 九
一灰 八
一灰 七
一灰 六
一灰 五
一灰 四
一灰 三
一灰 二
一灰 一

⑬

一灰 二百六十日
一灰 二百三十日
一灰 二百十日
一灰 六十日
一灰 三十日
一灰 十日
一灰 五日
一灰 二日

⑫

一灰 九日
一灰 八日
一灰 七日
一灰 六日
一灰 五日
一灰 四日
一灰 三日
一灰 二日
一灰 一日

⑪

⑪ 右合かけ候 猶口授

○はけめ 井戸手薬

一 藤尾ノ赤石 十盃 山科藤尾石ノ内ニ赤色ナルヲ用

一 灰 九盃

右二色合かけ申候

○瀬戸風ノ器ノ上ニ打候青葉の方

一 生瀬石 一升

一 灰 一升八合

ちうでい 二十め交(江・五匁) 惣薬ノ上へ打申候

しんちうでいの事也

(違色紙図) ケ様ノナリの皿類ハ 半分ハ白薬 半分この青薬ヲかけ分候 (小垂図) こかし人などハ惣薬ヲ一めんニかけ けいニ致度所へ青くすりヲ打申候

△ウスガキ色のいニモ 此青薬かけわけ又ハ打申候

⑫ 是方以下ハ山窯茶入かけ薬ノ方也

地土ハ先ハ白土ヲ用 猶口授

○杜若手ノ柿薬

一 深草水下 干タルヲ用 壹貫目

一 灰 三百六十目

此灰ハ 竹灰ニても 笹ノはいニてもヨシ 木ハイモヨシ

第一笹ト竹の灰ヲ茶入薬ニハヨシトス

一 鏡粉(江・金ハダ) 六十目

右三色ハ地薬也

○右之上薬 景薬氏申候

一 深草水下 拾五匁

一 灰 三拾目

一 ちうでい 壹匁

下え(へ) 右ノ地薬ヲかけ 其上へ茶入ノ景ノ在所 物 すぎ次第二打申候 景薬ヲパウツト申習シ候

乾山は試みて、仁清のよき点はよきとし、自らの不足も述べる。ものを造るには専門的な技術が必要である。陶法書は貴重。が、こ

とばでは説明できない種々があり、教えを受けても、「勘どころ」はすべて己れの判断にか

かる。表現はその人物の表徴であり、器は単に器ではない意である。

*青薬・瀬戸風の青薬とあるが、織部釉である

透明釉薬に酸化銅を少し交ぜ 緑色を発色させるが、ここではちうでい(真鍮の粉)

を用いている。ちうでい・真鍮は銅と亜鉛の合金。焼成して酸化銅、酸化亜鉛となるが、

銅は青緑色、亜鉛は釉薬を溶解させる役割を果たす。

乾山は皿には緑の掛け分け、こがし入(振り出し)には景色として用いるという。

*ちうでい…『陶工必用』では五匁。

*けい…景色。茶入など釉薬の見所となる

所。景薬は茶入の地薬の上に掛け、景色をつくる流れ易い釉薬である。乾山は景薬を施す

ことを「打(うつ)」と称し、瀬戸陶工の言い習わしと述べる。仁清の伝える所であつたらう。

*ウスガキ色…鳴海織部の系統。

山窯茶入掛け薬

本焼茶入釉薬であるが、素地は白土を使用。口授が必要という。

*杜若手…瀬戸茶入の一種であるが、肩から胴に流れる釉薬が八橋図に似るとした意とされる。土は薄赤色、地薬は柿色、それに黒・

藍色・黄色の景薬が掛かるという。

*灰…茶入の釉薬は水下に灰が基本。鉄分を主とするが、灰は石灰分の多い木灰より、珪

酸分を多く含む笹・竹灰が適するという。「竹灰ハ京都五條扇(薬)工多ク吹電 下二竹屑ヲ焚ク故ニ其灰ヲ用フ」(『京都陶磁器説并附

図)とある。

ここに異筆による付箋がある。重さの単位、匁と升目の換算であるが、940頁下段に掲載。『陶磁製方』巻末覚書および大川頭道手

控『陶器傳書』に比較。頭道の筆跡と判断する。



禾目天目茶碗
鍋島報效会



瀬戸茶入
春慶瓢箪
五島美術館

一 白粉 拾五匁
一 春慶薬 六匁
一 深草水 三匁
一 灰 三匁
一 春慶紫石 五匁
一 エフニ 三匁
一 白粉 三匁
一 金剛砂 三匁
一 渡村 三匁

⑭

一 茶入薬 拾五匁
一 水 十匁
一 エフニ 三匁
一 金ノるかす 三匁
一 灰 十匁
一 紺青 十匁
一 辨 十匁
一 水 十匁

⑮

- 柿薬ホカキ
 - しがらき水下 小
 - 深草 水下 大 二色合式貫五百目ニ
 - 灰 八百五拾目 交かけ申候
- のぎめ薬
 - 常ノ天目ニテはかり申候
- 信楽水下 五匁
- 灰 同断 七匁
- 白粉(江・少パン) 拾五匁
- 春慶薬ホカキ
 - 深草水下 六匁
 - 灰 三匁
 - 京北貴船紫石 三匁
 - ゴフン 少
 - 白粉(江・唐土) 少
 - 金剛砂 半匁
 - 鉄粉 少
- ⑮ ○茶入薬 是ハ何共銘ナシ 皆々仁清傳也 本ノまゝ、唇之
 - 水下 十匁
 - ゴフン 三匁
 - 金ノるかす 三匁
 - 是ハ金銀細工人ニたのミ 先年少々余候 金銀銅山のからみ様ナル物也
 - 灰 十五匁
- 一 紺青 花紺青共 唐紺青共申候 半匁
 - 右はかり候器ハ 天目又ハ盃類ニても 此品々ヲ同シ器ニてさへはかり候へば 多少ハ此方ノ心次第ニ出来候
 - 此外ノ薬ヲ何盆ノとモテ有所可習之
- 瀬戸薬 仁清ハ尾形瀬戸ニ永く居候て 茶入焼種古致候由被申聞候
 - 水下 壹升
 - 是ハ瀬戸ノ水下ヲ用タルナルヘシ

*柿薬・高火度焼成、鉄袖の一種。柿色・鉄色を呈し、瀬戸釉薬の特色の一つ。信楽水下、深草水下とあるが、水下は水落とも書し、発色が良く、鉄顔料の筆頭である。

*のぎめ・禾目・瀬戸茶入の一種。細い筆毛、兎の毛に似た釉薬の筋が現れ、その景が日本では桶の外殻にある突起・禾に喩えたところからの名称である。天目茶碗にも禾目天目・兎毫蓋(とうごさん)・天目がある。釉薬中の酸化鉄が溶けて筋状に流れる現象をいう。

*春慶・古瀬戸茶入の一種。瀬戸焼祖加藤藤四郎景正が晩年入道して春慶を名のり、美濃において焼成した茶入をいう。薄作、茶褐色の地薬に黄白味を帯びた景薬が掛かる。

*仁清の瀬戸修業・仁清は永く瀬戸に居り、茶入焼の稽古を積むとある。乾山はしばしば仁清から茶入製作の研鑽を耳にする。

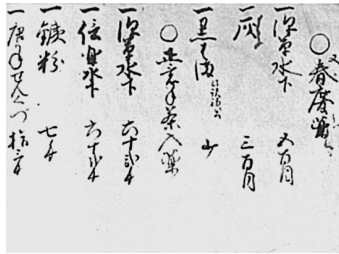
瀬戸は、茶入製作にすぐれた藤四郎以来、唐物写し・和物茶入の製作にその名を知られた。御室「御記」には「壺屋清右衛門」・「丹波焼清右衛門」とある。仁清は生国丹波、初期には丹波焼の陶工として出発したか。壺屋とあることから、ロクロ技術に長じた陶工であったことを示唆。瀬戸では茶入製作の修業に励み、京都では、粟田口焼陶工としてさらなる磨きをかけたものと考えられる。

意匠様式・色彩・形状、いずれにしても茶匠金森宗和の瀟洒・洗練された美意識を巧みに表現。茶の湯に適う道具造りは伝世する作品類が伝えるが、当時はもとより、仁清焼は後々までも別して宗和流茶人、数寄者・文化人に愛玩されるやきものとなる。

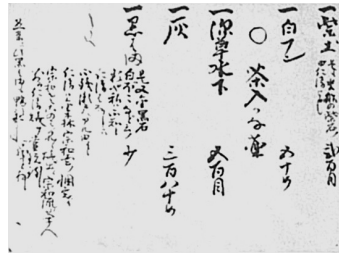
仁清焼と乾山焼との相異

仁清焼・本焼主体、茶道具製作を中心として写しもの、茶入(中国・壺・茶碗(高麗)が多く、ロクロ技に巧み、形状・施業・彩色にすぐれ、京焼様式の典型を築く。

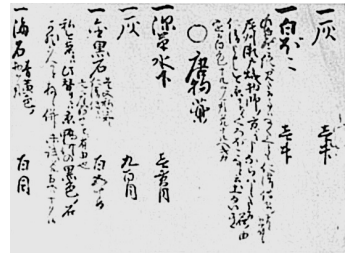
乾山焼・本焼・内焼を用いて、懐石道具が主体。伝統的な内窯絵具を用いて紙絹の書画を角皿・額皿などの陶面に移したこと、床の間の景物を畳の上に移したこと。文人趣味の漢詩・和歌など文芸を陶器に導入するなど、光琳意匠の転用も工夫の一つ。



16



17



18

- ① 灰 壹升
- 一 白ぼこ 壹升
- 此白ぼこ終二見たる事ハなく候へとも 仁清傳七ノ末、才付候尾州瀬戸焼物師ノ方ニテ申ならハしたる名ノ由 仁清被申候 今京ナトニてくろぼこなど云土る有定て白色ナルヲ用タルナルヘキカ
- ② 唐物薬
- 一 深草水下 壹貫目
- 一 灰 九百目
- 一 金黒石 百五十め
- 是又私不知候 仁清傳二ハ是も尾筋セと二有由也
- 私今案二ハ 此替リニハ京鴨河の黒色ノ石 可然候ハんかと存候 餅 未試タル夏ハナク候
- 一 海石 青黄色ノ物ヲ用候 百目
- ③ 紫土 (江・紫石) 是も貴船の紫石ノ由 式百目 仁清被申候
- 一 白フン 五十め
- ④ 茶入かな薬
- 一 深草水下 五百目
- 一 灰 三百八十め (江・三百目)
- 一 黒はま 少
- 是又金黒石 白ぼこなど云ノ類也 私ハ不知候
- 仁清はなしニハ不残瀬戸ニアル由ニて候 仁清ハ金森宗和老ノ愜意ニて 宗和老此ノミノ品々焼出候 宗和流ノ茶人別て仁清焼ヲ賞玩致候 愚案ニハ此黒はまも鴨川石□□可然かと存候
- ⑤ 又春慶薬
- 一 深草水下 五百目
- 一 灰 三百目
- 一 黒はま 此訳初二七 少
- ⑥ 正意手茶入薬

*白ぼこ…白手の土。黒ぼこは黒手・赤ぼこは赤手の土。瀬戸地方の呼び名であることされるが、京都住の乾山は知らないことと述べる。同地に在って瀬戸焼技術を習得した仁清は、しばしばその体験、瀬戸陶工のことは、習わしなほど乾山に語る。習静堂時代の思い出かも知れないが、初代仁清と乾山との確かな繋がりが見られる。

これらの原料も全て瀬戸にあるという。京焼でも「くろぼこ」と称する土を使用、陶工間には製陶用語として知られていたが、黒ぼこは、火山灰などが地表に堆積、腐植含量も多いことから表面は黒色、土壌のリン酸吸収力の強い土という。

*金黒石…二酸化マンガンをとされる。試したことはなく乾山は知らないというが、黒色顔料であれば代わりに鴨川石が使えるのではないかと述べる。

*鴨河黒石…黒色顔料。鉄・マンガンを含む自然石である。猪八は『陶器密法書(黒薬)』に鴨川紫石、今出川より上車坂の範囲にあるものを好しとしているが、初代薬長次郎が使い始めと伝承する。

*紫土…乾山は青黄色のものとするが、海岸にある珪石質の石と推定。珊瑚のことか。

*紫土…仁清は紫土とするが、貴船の紫石のことかと乾山はいう。

*白フン…白粉・唐土。鉛白ともいわれ、珪酸と反応しガラス化されて鉛釉となる。

*黒はま…金黒石・白ぼこ同様、仁清は瀬戸にあるというが、砂鉄のことである。磁鉄鉱とチタン鉄鉱からなり、黒く発色する天然顔料。釉薬の着色剤となる。

多く宗和好みの茶器を製作、姫宗和と称されたその美意識は、後世でも宗和流茶人の支柱となるが、仁清焼の作風を確認するための手筈である。

*正意手…正意(生没年不詳)は利休時代、また遠州時代の医者と伝承。堺に生まれ、京へ移り、瀬戸において茶人製作にその名を知られる。薄赤色の土、口作り、糸切り底に味わいがあることされる。



なまこ手・堤焼 甌

一 白粉 九拾目
 一 灰 九拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 朝日手茶入薬 百五拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 漆のからみ 拾目

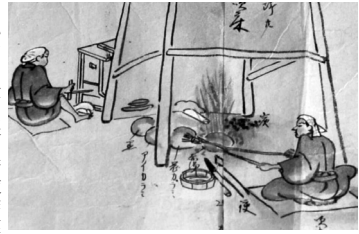
⑳

一 灰 九拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 漆のからみ 拾目
 一 漆のからみ 拾目

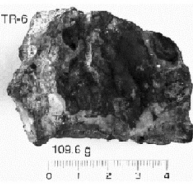
㉑

- 一 深草水下 六十式匁
- 一 信樂水下 六十式匁
- 一 鉄粉（江・金ハダ） 七匁
- 一 唐かねせんくづ 拾三匁
- 一 灰 灰ノ量目 江戸ノ宿ヲ寫候剋失念 セヲトシ申候跡ヲ付可進候 先ハ灰のませかげんハ余の薬ノ分量ニ習ふべし 已上（江・灰の記載なし）
- 一 〇なまこ手茶入薬 百九十四匁
- 一 水下 九拾目
- 一 灰 八匁
- 一 ちうでい 已上
- 一 〇又唐物薬 三十匁
- 一 紫土 是又紫石ナルヘシ 紫土ハ元黄土ヲヤキカヘシタルモノ也 シカレハ水下ト同物也 外ニ又何とそ有カ 先ハ紫石ノトキコユ
- 一 深草水下 百目
- 一 白粉 五匁
- 一 灰 九拾目
- 一 たはこのしんの灰 貳拾目
- 一 銀のからみ 拾匁 是ハ銅山銀山共ニ有之物也
- 一 〇朝日手茶入薬 百五拾目
- 一 深草水下 八十五匁
- 一 〇おも灰 是ハ爐中杯ニ年經タル灰ノ由 四十五匁（江・四拾目）
- 一 紫土 是も紫石可然カ

* 灰ノ量目・正意手茶入薬に關し、乾山は調合・灰の量目を書き落としたと述べる。
 江戸の宿にて書寫した折、失念、後に書き付けたるが、当書は佐野到着前、すでに江戸において書き始めたものか。正意手につき、『陶工必用』にも灰の項目はない。原書である仁清伝は如何であつたらうか。それも二代仁清の書写であれば、書き損じのあつたことなども推考される。
 灰は土・石を溶かし、釉薬とするためには不可欠の原料である。
 * なまこ手・瀬戸金華山窯茶入の一種。加藤藤四郎家三代作と伝承するが、美濃・金華山の土を用いたものと伝えられる。茶入下葉は柿色、上葉の黒釉がなまこ色に発色した所からの名称である。
 * 紫土・仁清伝「紫土」は「紫石」の誤記か。紫土であれば黄土の焼返しであり、多くの鉄分を含み、水下と同義である。土ではなく石、紫石であらうと乾山はいう。
 * 銀のからみ・銀の滓（かす）。からみは鍍（かん）。溶鍊の折りに生ずる滓。銀山にある。
 * 朝日手・古瀬戸茶入の一種。瀬戸焼初代加藤藤四郎春慶が隠居、美濃・朝日で焼成した薄手、釉調の優れた茶入をいう。
 * おも灰・重灰。年数を経たれた中の古い灰。
 （次頁より）
 * 金のるかす・鉄石を特殊な金属製の深皿・坩堝（るつぽ）を用いて精鍊したあとに残る滓（かす）をいう。コバルトやマンガンを含ま着色原料となる。
 * 本焼、素焼上に用いる繪具・釉下色繪具。京辺の陶工は山繪具というが、素焼後、上葉をかける前、書・画、裝飾に用いる繪具、高温焼成に耐える繪具である。着色原料は多く鉄・コバルト・マンガンを含む天然の土や石、また金属であるが、組み合わせ、分量の調節により、種々の彩色繪具、釉薬の着色剤がつくれる。
 繪具は本窯・内窯・錦窯用に大別される。

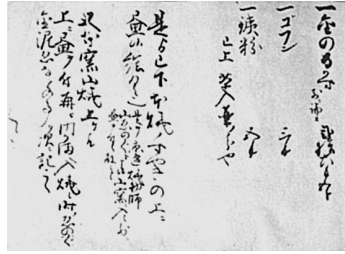


「吹く」佐渡銀山往時之稼行絵巻物 佐渡市教育委員会

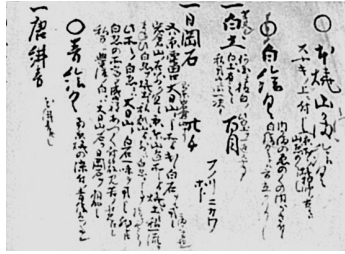


(b) TF-6
105.6 g
0 1 2 3 4
なかす・佐渡銀山「炬滓」
Nakanashi and Izawa
二〇一四年

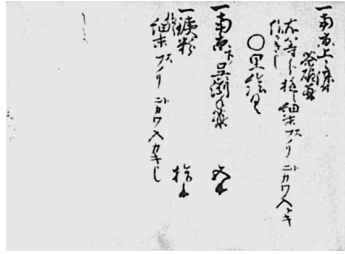
金・銀を精錬する「吹く」作業は、鉛とともに加熱・金・銀との鉛合金を作る。炉に残ったものを炬滓という。



21



22



23

① 金のるかす前二論ス 式拾六匁五分

一 ゴフン 三匁

一 鍍粉(江・金ハダ) 五匁

一 已上 茶入薬ノ分也

是乃已下本焼ノすやきの上ニ 昼候繪具也

是ヲ京邊焼物師山ゑのぐト申候 山窯ニ入候前二昼ヲ付候故ニて候

又本窯山焼上ケ候て上ニ屋ヲ付 再ヒ内かまへ入焼候時ノ

ゑのぐ 金泥ゑなどの事ヲ次ニ記之

② 本焼山かま繪具 スヤキノ上ニ付申候

○白繪具 内かまのゑの内の内ニかき付候

白土 白繪具トハ 方立かハリ申候

何國ニも極白ノ白土有之候 私用候モ不一決候

フノリニカワ等分

一 日岡石 廿匁

則ち東岩倉山ナリ

又ハ京栗田口大日山ト申所方出候白石ヲモ用候 こまかなる物也

岩倉山ノ石別て宜候 京東山邊所 之方焼出候 私一流ヲまねひ

白ゑヲ焼出候 私乾山方前二ハ 白ゑト申事指テ無之候 此所々ノ白

ゑニハ 大日山ト白石一味ヲ用申候 然レモ 白ゑの所 高ク成候程

あつく付候故 見苦ク相見え候 私方ハ豊後ノ白ニハ大日山ノ石か日

岡石ヲ相加申候

○青繪具(江・紺繪) 南京燒の染付ノ青繪色ノ事也

一 唐紺青 花紺青ト申候

一 南京上々染付 茶碗薬

右等分極々細末 フノリニカワ入トキ 繪かき申候

○里(黒の誤リ)繪具

一 南京下ノ呉洲手薬 五匁

一 鍍粉(鍍のかなた) 拾匁

細末フノリニカワ入カキ申候

一本焼山窯・繪具

*本焼山かま繪具・本焼・下絵付け用の繪具

(種下繪具)。鉄絵(弁柄・鬼板)、染付(呉須)、

紫黒(酸化マンガシ)、釉裏紅(緑青)があり、

焼成後の呈色は白・青・黒・柿色など。

*白繪具・本焼用白繪具。それまでも惣地ぬ

りはあるが、本格的に裝飾に用いた白繪具の

例は乏しく、調合と手立て、裝飾様式は、乾

山窯における一大特色を開始。やがて栗田

口大日山諸窯では模倣を開始。原料は栗田

口大日山(東岩倉山) 出土の白土を用いたが、

大日山白土単味では、白繪具は盛り上がり、

ハネが生じ、色も純白にはならない。古い手

立てもなく、乾山はそれに豊後白土か、日岡

石を加える手立てを考案。本窯用として焼返

した白土を用いることは素地との密着を考慮

した結果である。盛り上がりは押さえられ、

色も純白。白繪具の応用はやがて京焼諸窯に

波及するが、裝飾様式の一つとして定着。土

産物の製作などに活かされる。乾山発案の白

繪具には本窯、内窯の両用がある。

一 繪具の事

繪具は大別して次の二種に別けられる。

本窯山窯繪具(種下繪具)

内窯・錦窯繪具(種下・種上繪具)(金銀泥)

用途・用法によつては、

①素地の色付け(練り込み・色素地)

②釉薬の色付け

③低火度焼成(三彩・交趾・染焼など)

④下絵付け・高火度焼成

鉄(弁柄・鬼板など)・呈色は黒色

コバルト(呉須)・呈色は青色

銅(緑青)・呈色は緑色

マンガシ・呈色は紫・黒色

下絵付け・低火度焼成

白・黒・色繪具

④上絵付け・低火度焼成

顔料と媒溶剤(鉛・ソーダ)を混合する

以上のほか、金・銀・金属酸化物・混合物

などを組み合わせるなど、分量の割合・調合

如何により、種々の色繪具、釉薬の着色剤が

つくられる。

柿右衛門…色絵花鳥文蓋物
MOA美術館



緑髻・釜を用いて緑髻を焼成、赤色絵具・弁柄をつくる。成羽民俗資料館



○斜めどろり
白ヒイトロ 六
白打 四
一色掛 五
○赤色あめく
白打 六

25

○赤
一極白ノヒイトロ 六
一白粉 五
一スキホウシヤ 四
ニカワ斗少入
○赤 六
一深緑 七

24

②4 ○本焼山窯ノ器物焼上候

本薬かゝりたる物ノ上ニ彩色ヲ施シ候方 俗ニ錦手^{ネギテ}或ハ金焼^{キネヤキ}など申候 本焼ノ上ニ屋候器ニハ 惣地^{ソウヂ}ヘニカワニテモ 食ノトリ湯^{イカリユ}(お湯)ニても一返^{ヒトマゼ}すくぬりカハカセ 炙^{ヒキ}かき申候

○赤

是ハ仁清傳^{ニセイデン} 金珠ト申候

一 上々弁柄丹土(江・金珠) 壹匁

一 極白ノヒイトロ 貳匁

一 白粉 壹匁

一 スキホウシヤ 三分

一 ニカワ斗少入

○赤 是ハ乾山家法

一 緑髻^{キナヒ} 黄色ナルヲ用 水ニテ前(煎)シ 一フキフカセ 絹ニテコシ 滓ヲ捨 器中ニ居サセ 一晝夜置 明クル日上水ヲ捨 日ニホシカハカセ

②5 ○ヨクカハキタルヲ スヤキノ茶碗かちよく二入 内かまへ ツヨクヤ

キ申候 ヤキカケンハ常ノ内焼ノ通 色ミノ窓^{マド}火色^{ヒロイロ}のかけんヲ見候

事内やき同断 其時取出シサマシ申候 赤ク変申候 其後ヤキカヘシタル透ホウシヤヲマセ ヨクノスリ 極細末メ ニカワ斗少入繪カキ

焼申候 ホウシヤのマセカケンハ 定リタル分量ハ無之候 ヒタト幾度もヤキ コノロミ焼上 ツヤノイテ候カゲンヲヨシトスヘシフ

ノリハ不用 ニカワ斗少入

○紺色繪具

一 白ヒイトロ 五匁

一 白粉 貳匁

一 花紺青(江・唐紺青) 貳匁七分

フノリ ニカワ 但シニカワはかり(ばかり)も能覚候

○黄色急のく

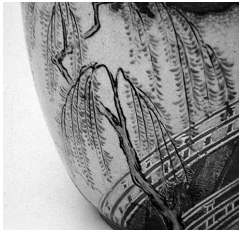
一 白ヒイトロ 拾匁(江・五匁)

一 錦手(金窯・繪具)

* 錦手・金焼、赤絵窯ともいうが、釉下色絵・孫兵衛伝とは相異、仁清焼陶器、伊万里焼磁器など、素焼をし、上薬を掛け本焼した器物の上に、彩色絵具を焼き付けるための窯である。低火度焼成、短時間のうちに絵具を溶着させる必要があり、先ず惣地に膠、また米の炊き汁などを糊のようにし、一度塗り、乾燥させ、その上に絵を画くと述べる。絵具の密着、筆の動きをよくする働きがある。

* 金珠・仁清時代までの赤色顔料である。弁柄丹土のこととされ、丹土はにつち、古くから赤色顔料として用いられた。縄文時代後期の土器の彩色、古墳時代の壁画にも使われたが、黄赤色を帯びた土、焼成によつて赤く変色、鉄釉、上絵具の着色顔料として用いられる。顔料としてその性能を高めたものが弁柄である。江戸時代後期には緑髻を焼成して酸化鉄としたが、弁柄はインド・ペーナル地方に産する赤土、多く染織に用いられた。金珠は、乾山時代すでに欠乏。猪八時代にはなかつたことが『陶器密法書』に記載されている。乾山も赤色には苦心したが、緑髻を焼返し赤色・緑髻に成して活用、緑髻は硫酸第一鉄。少量の銅を含み、焼くと赤く変色する。弁柄の代用となつたが、ここでは仁清伝、乾山家秘伝の両法を記す。

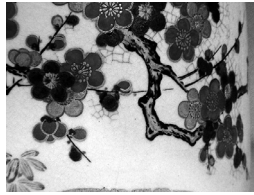
* 乾山家法・赤絵具は仁清伝、乾山家秘伝ともに述べるが、乾山は、赤色には緑髻を焼返し使用。方法は、黄味を帯びた緑髻を煮沸、さらし、絹篩いにかけて、水に浸し、一晝夜置く。水を捨てよく乾かし、素焼碗・猪口などに入れ、内窯にて赤くなるまで強く焼く。研砂の焼返しを加えて掃るが、ふのりは用いず、少量の膠を接着剤として混入する。艶の出方にも注意を要し、何度も試み、自らその適量を字び取れと教える。緑髻を焼き返して繪とさせることは伊万里焼、柿右衛門家の秘伝とされるが、乾山時代にはすでに伊万里の知るところとなつていたか。紫色にも仁清伝及び経験に基づく乾山工夫の紫色が記された。



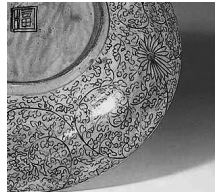
本焼の下地に用いる黒絵具・仁清焼 色絵柳橋図水指(部分) 湯木美術館

石川県立美術館

本焼の下地に用いる黒絵具・仁清焼 色絵梅花図平水指(部分)



本焼の下地に用いる黒絵具・九谷様式桜花散文平鉢(部分) 石川県立美術館



一 白粉 四分
 一 唐白目(江・記載なし) 三分五リン
 一 紫ひいとり 拾匁
 一 白粉 貳匁(江・三匁)
 一 紫色 紫玉なき時ノ方也
 一 白ひいとり 捨匁(江・四匁)
 一 南京下ノごす薬 四分(江・壹分)
 一 打くたき 水ニ入見申候へば 赤ク黄色ナル所有之候ヲ

27

一 白粉 四分
 一 唐白目(江・記載なし) 三分五リン
 一 紫ひいとり 拾匁
 一 白粉 貳匁(江・三匁)
 一 紫色 紫玉なき時ノ方也
 一 白ひいとり 捨匁(江・四匁)
 一 南京下ノごす薬 四分(江・壹分)
 一 打くたき 水ニ入見申候へば 赤ク黄色ナル所有之候ヲ

26

右図文末拡大図

- 一 本焼の下地ニ用候黒繪具ニ フノリハ少 ニカワヲツヨクして
- 一 緑色ノ繪具
- 一 もへぎひいとり 五匁
- 一 白粉 八分
- 一 岩緑青 六分
- 一 フノリ ニカワ 等分

一 取上 右の二色ニ交用候 多く合せ候時モ 同ク此割ニてまして合申候

○下二層ク黒繪具

一 本焼の下地ニ用候黒繪具ニ フノリハ少 ニカワヲツヨクして

*下二層ク黒繪具・素焼後、上葉を掛ける前に使う袖下黒繪具、乾山家の秘伝である。本焼、内焼とあるが、仁清伝の黒繪具は本焼用。呉須と鉄粉を交ぜたものに、少量のふり、多めの膠を混入する。用例として、当黒繪具を用いて木の葉のしべを描いた場合、上には必ず粗葉を塗り、絵具を止める必要がある。掛葉がなければ黒繪具は落色、消失してしまうからである。

土は鉄分を含む。黒繪具の成分も鉄分が主である。焼成により鉄分は土が吸収、黒繪具は消えて無くなる理であるが、粗葉を用いてそれを押さえ、同時に焼成後、下の黒繪具は線描として粗葉の下に透けて見える利点を具える。鉄分を含むもの同志、絵具が生地に融け込まぬための工夫であるが、仁清焼の巧みさがわかり、九谷焼も同じ技法を用いている。乾山はそれにも一工夫を試み、極品白緑にビードロを混入、上葉の止め無くして自由に絵筆の動かせる絵具を創案、白繪具と同様、この黒繪具の工夫こそ乾山の造りたかつたやきものへの一歩であったが、構想は光琳とともに練り、陶法は押小路焼孫兵衛の手ほどきを支えた。

仁清陶法は、乾山窯において初代仁清以来の真面目を貫く。二代仁清は茶人の好む伝統を継続、さらに琳派様式の意匠に取り組むなど、乾山窯の高火度焼成・色絵陶に全力を注ぐ。「乾山」書銘には二代仁清の筆も含まれると考える。

乾山焼の三つの柱、一つは茶人好みの古陶磁焼写、二つは流行となった光琳意匠の実現化、三つは既述の画譜様式のやきものであるが、陶法・技法は、すべてこれら三つの柱を支えるべく活用された。

乾山焼は土産ものになり、乾山活躍時代から模倣が始まる。江戸へ移り、関東へと波及するが、初代の薫陶を受けた二代猪八の作陶以後、乾山焼は形ばかりの模倣となる。陶法書が廻り、作陶者が現れる。が、作品を作者の表徴と考えれば、初代乾山を超える人間性、技術・才覚の至らなかつたことの証左となる。



本焼の上に用いる黒絵具…
乾山焼 色絵紅葉文水指
フリア美術館

本焼物ノ上ニ文字又ハ草木
人物鳥獸ヲ其ま、墨書同前
ニカク黒絵具…乾山焼 色
絵薔薇図茶碗 旧毘沙門堂



○二藍繪具ノ方
一 紺青合ふくト 緑青ノ合ふのくト等分
又ハ鉛々ノ物すぎニまかセ増減可有候歟 二色交 皆々あをき色故
ニあるト名付候 フノリ ニカワ等分
○濃緑ノ方
一 右ニ記スル緑青ノ合ふのくノ上へ
是ニハ 色能青キ岩白緑ヲ目分量ニ相加屋候 緑色至極濃ニ出候
フノリ ニカワ等分 是等之事 猶可致口授候
○金焼付の方
一切ノもやう何ニても其品候ヲ屋候 又ハ惣地ニぬり候て
なり共 又或ハかすり雲とり(雲どり)ニなり共 又細キ
しベつるなどのほそき類も 同皆々あかきやき申候 焼
上テ後スリヌカニテミガキ候

28

○私家傳 秘薬ニ候へ共 任御悃望ニ付進候
本焼物ノ上ニ文字又ハ草木人物鳥獸等ヲ其ま、墨ガキ同
前ニカキ 上ノかけ薬多のぐなしニ 直ニくろく焼上候方
此方ハ外ガ習得タル支ニてハなく候 自然ノ道理にて 毎度ノ功積
り寛タル方ニて候 されとも 中ノ主薬ノ白緑ノ善悪依テ極リカタ
(難)キ物ニて つやなき事も 又青ク色変スルコトも御座候 先ハ
珍敷 昔方ノ傳もなき事故 之付進候
青白黄何レノ色ニても
一 ひいとろ 拾匁
一 白粉 四匁(江・五匁)
一 白緑(江・主薬ハ岩白緑) 七匁
白緑 岩白緑と申候極品ヲ用候 悪キ白緑ハ ゴフンニナラ 緑青ヲ
加タル物ニて 用ニ不立候 併ヒ二本岩白緑も 色黒クナリカかね候品
も在之候 岩白緑ノ内茶色ニ見え候ヲ宜敷存候 花ヤカニ青キハ
不宜算申す

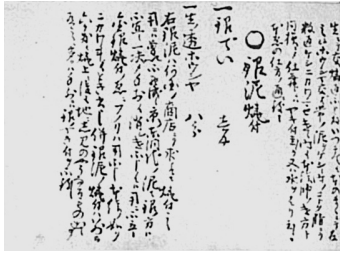
29

29 右極細末 フノリ ニカワ等分
○二藍繪具ノ方 是モ古來ノ傳ニハナキ支ニテ候
右ニ記ス所ノ
一 紺青合ふくト 緑青ノ合ふのくト等分
又ハ鉛々ノ物すぎニまかセ増減可有候歟 二色交 皆々あをき色故
ニあるト名付候 フノリ ニカワ等分
○濃緑ノ方
一 右ニ記スル緑青ノ合ふのくノ上へ
是ニハ 色能青キ岩白緑ヲ目分量ニ相加屋候 緑色至極濃ニ出候
フノリ ニカワ等分 是等之事 猶可致口授候
○金焼付の方
一切ノもやう何ニても其品候ヲ屋候 又ハ惣地ニぬり候て
なり共 又或ハかすり雲とり(雲どり)ニなり共 又細キ
しベつるなどのほそき類も 同皆々あかきやき申候 焼
上テ後スリヌカニテミガキ候

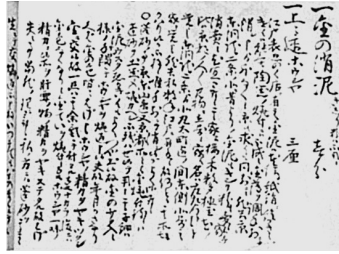
— 乾山陶法の秘伝・繪具 —
* 私家傳…乾山創案・工夫の土・絵具・釉薬
など。乾山焼以前にはなく、その自信、目指
した方向を決定づけた事柄である。
① 紙・絹上同様、陶面上に書・画、裝飾を
施すことを可能にした黒絵具、白絵具
② 古來なかつた紺青・緑青を合わせて作る
濃緑絵具ほか、種々のブレンド色絵具
③ 緑青の合わせ絵具に更に岩白緑を加えた
濃緑絵具など
これら全ては自然の道理に従つたもの、自
ら苦心し、功を積み、習得したと乾山は述
べるが、用いる素材によつてそれらは変化。一
例であるが、黒絵具でも主薬となる白緑の質
の善悪が問題となるなど、それ故、製作者の
不断の努力が望まれるという。
本焼物ノ上ニ文字、また草木・人物・鳥獸
などの図を紙・絹上同様に描くことは、過去
における伝承がない。絵具の工夫こそは乾山
窯の秘事となつたが、陶工であり、教養人・
文化人であつた乾山の造るやきものは、当然
従来とは異なる方向へと進む。受け身、従属
的、責任事の域を超えるが、仁清の陶技・陶
法、乾山の構想力、両者を超えるやきものは
今でも生まれてはいない。表現上の技術の
みではないからである。
乾山焼は形状にも特色があり、角皿・額皿・
短冊皿など、香合・茶碗・火入に加えて、床
の間の掛物をはじめ、巻物・砵物、かるた、
短冊、扁額などが、茶道具・懐石道具の形態・
意匠として畳の上に移された。
* 二藍繪具…乾山創案の「あをき」絵具。調
整した紺青と緑青絵具を好みに従ひ混合する
ことが、一例として木の葉の表裏を描き別けるこ
となどを可能にした絵具。
* 金焼付…陶器に用いる金泥・銀泥の焼付・
手立てをいう。乾山は金泥を各種文様、惣地
塗り、かすり・雲とり、草花の葉・蔓などに
活用。焼成後には糠を用いて磨き艶を出す
という。



銀泥のしみ…仁清焼
色絵藤花文茶壺(部分)
MOA美術館



③①



③②

③① 金の消泥 壹分(江・壹匁) きしり粉ハ不用候

一 上々透ホウシヤ 三厘(江・貳分)

江戸表 名の店ニ有之金泥ハ 本繪ノ紙糊ニ繪かき候ニ遣候てハ能候へ共 陶器ノ焼付ニハ不成候 金薄ヲ調 手前ニテ消シ申方外なく候 京ニテ求候ても同前二候 然共 京東洞院 二条ノ北二昔よりノ金泥モキシリ粉モ賣候家ニテ 消費候 尤宜御座候 其家ニハ桜ノ木数多植置 花ノ比ハ京都ノ人ノ見物ニ立寄候家ニテ 名ハ庄左エ門ト申候と覚申候 東洞院 二条ノ北丸太町迄(迄)ノ間東側北寄の家ト覚申候 然共私数年江戸ニ罷有候故 何とて其所モカリ候か不存候 唯手前ニテ消シ候がよく御座候

○蓬砂ノ事 京東山邊 又京都所々ニテ金焼付致候ハ 蓬砂ヲ土器ニ入焼カヘシ 不残ハゼ候ヲ用候 其子細ハ 金泥ウスクゑかき候てもよくつや出候故 金の少ク入候様ノ手段ニテ ホウシヤヲ焼返申候 夫故 年月かさなり候へば 金の色皆々はげ申候 ホウシヤノ精力ヲヤキツクシ金ニ交換候 一旦ハ其余氣ニテ付タル夏ナカラ後ニハ金色なくなり候 金ていヲ焼付候夏 ホウシヤ一味ノ精力ニ候所ヲ 肝要ノ物ノ精力ヲヤキステタル故 はげ失候事 当然ノ理ニ御座候 私ノ方ニハ蓬砂ヲ其ま、

③② 生ニテ交 焼返不申候故 いつまでも本のま、ニテ在之候 ホウシヤ交換て 常ノ泥ヲケシ候時ノコトク脂(指)ニテ数返ケシ ニカワマセ遣候時モ 本繪師ノ遣方ト様ニメ 仕舞ニハヤキ付置候か 又ハ水ヲはり置候か 本名の仕方ノ通りニ致候

○銀泥焼付

一 銀でい 壹匁

一 生ノ透ホウシヤ 八分

右銀泥ハ 何國ノ商店ニテ求候ても 焼付ノ用ニハ曾以不罷成候 京ノ東洞院ノ泥モ銀ノ方ハ不宜候 一決メ手前にて消シ遣不申候てハ 用ニ不立候 金銀焼付ノあるニ フノリハ用不申候 本繪ノ如クニカワ斗ニてととき申候 併 銀泥ノ焼付ハ 別て六ヶ敷候 焼上候後も 地ニしみのやうなるもの出候事有之候 多クハ手前ニハ銀ノやき付ヲ不致候

*江戸表名の店・乾山時代、学問・芸文の習得を志し、絵画を学ぶ子弟も増加。江戸の町にも絵具、画材などを扱い、やきもの材料を商う店が処々に現れる。

「陶磁製法」を受理した大川頭道は手控「陶器薄」に文具・漆工、やきものに關し「葉焼秘書」「百工秘術」「万宝全書」などの抜萃を書写している。乾山を佐野へ招くための準備には、谷村他から内窯、素焼製品を購入。材料・顔料・絵具他を商う江戸店名も記録する。が、兩國橋吉川町と二上町武町北がわ、日本橋四丁め東がわほか、ビードロ細工所などの所在も確認できる。

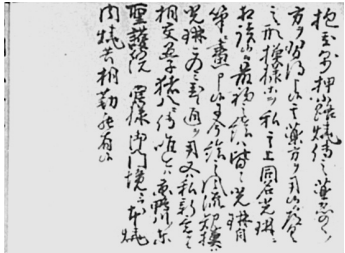
*金薄・金彩を施すためには金箔を貼り付ける。金泥を焼きつけるなどの方法がある。江戸に移りすでに数年が経過、乾山は町売りの金・銀に關し、多くは紙糊・絵画用であり、陶器の焼付には不適當であることを指摘。京都には東洞院二条北側に庄左エ門の商う店もあつたが、それも適するとは言えず、終局自ら調整することが最良という。礬砂と同様、指で数回つぶすことを教えるが、専門絵師の用いた通りにすることが好しという。

*キシリ粉・金欄手などの裝飾に用いた金粉の削り屑。錦窯で焼き上げた赤絵の上に膠を塗り乾燥、金泥・金箔を置き、それをヘラ先で引つ掻くが、その掻き取つた金彩の屑を、*蓬砂・礬砂。金泥の焼付には艶出し、接着剤として礬砂を用いるが、磁器では伊万里焼、陶器では仁清焼が早い。

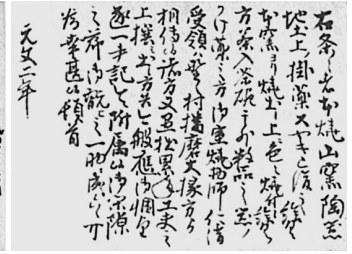
*銀泥・金彩と同じ技法。が、銀は酸化し易く、発色は鈍く、しみのように見えることがある。銀板を用いた月波図香合が伝世する(99頁)。金の焼き付けは、京焼でも行方が、高価な金を少なくするため、用いる礬砂を焼き返して使用する。金泥を薄く塗る工夫であるが、焼返しては礬砂の精力が弱く落ち、金彩は一旦は良くとも時を経て変色、剥げ落ちる。仁清・乾山は生礬砂を使用。金泥は厚く塗ることになるが、年を経て金彩の色合が変わりはない。銀泥は何処でも不適當であり、京都の庄左エ門店も不可であり、自分で消すことが第一という。



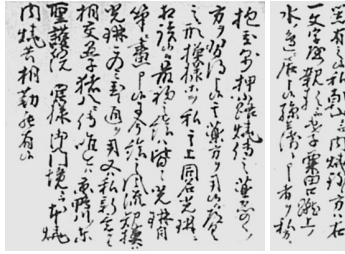
下図③ 日付・乾山銘全体頁



下図③ 全体頁



白紙



白紙

③② 己九月十日 乾山全休頁

③① 己九月十日 乾山全休頁

③② 右条々は 本焼山窯陶器 地土 上ノ掛薬 スヤキ已後の繪具 本窯ヨリ焼出候上二 色々焼付候繪具方 茶入 茶碗 其外数品の器ノかけ薬の方 御室焼物師仁清 受領ハ壱々村播磨大塚方方相傳候 諸方 又愚拙累年工夫の上ハ壱々村播磨大塚方方相傳候 諸方 又愚拙累年工夫の上撰ミ出候方共 今般應御側望 逐一尹記令附属候 御閑隙の節 御断ヒの一助二成候ハ、可爲幸甚候 頓首
元文二年

③③ 己九月十一日 乾山七十五翁 淡省(花押) 爾子型

*右条々々・本焼山窯地土・釉薬、素焼後の下絵付け・上絵付け、茶入・茶碗、その他乾山は仁清伝の陶法を受理、一世を風靡した仁清焼直属の窯であることを強調、特筆する。
*御閑隙の節御断ヒの一助・本焼山清伝、内焼孫兵衛伝、乾山積年の工夫による乾山伝の陶法を記し、御閑隙の節・御弄びの一助とするなど、言葉遣いも丁寧であり、趣味人、数寄者宛であったことを示唆。
—内窯焼陶器のこと—
*内窯焼・祖を唐人伝承の交趾焼とする押小路焼の陶法。余流は今以て続くとし、歴史は楽・粟田口・仁清・清水坂・菩薩池焼より古いと述べる。
*孫兵衛・内窯は低火度焼成、主に鉛釉陶を焼く窯。日本では桃山期天正年間(一五七三—一九二)押小路焼一文字屋助左衛門に始まるとする。乾山窯の工人孫兵衛は一文字屋の親族、弟子であり、乾山窯との歴史上の繋がり不詳。内窯は仁清焼二代清右衛門(生没年不詳)、内窯は孫兵衛(生没年不詳)の担当であり、画譜様式は、光琳及び渡邊氏の作画、画題・讀は乾山の選択及び筆として、成形・絵具・焼成は孫兵衛の指導による。
*光琳(一六五八—一七二六)・乾山実兄。絵師・漆芸・染織の意匠家であった。乾山窯創始に当たりともに構想を練り、表現内容・形式・様式ほか、初期においては絵付けを担当。風流 規模は乾山窯の商標として存続する。乾山焼は二代尾形猪八が踏襲、猪八は二代仁清の子であったが、血縁でなくとも生涯苦業をともにできる人物と見極め、養子に貰い受けたことであろう。一つに仁清家への報恩の道であったとも推考できる。
*猪八・乾山焼二代尾形猪八(生没年不詳。作品から延享年間の活動)。二代仁清・清右衛門の子。光琳庶子小西彦右衛門(二七〇〇—一七五二)親類書には「活弟尾形伊八郎」とあり、作品銘から延享頃の活躍を推定する。聖護院には九点の猪八作品が伝世。猪八独自の様式は惣地ぬり、楽焼に白絵を入れること、乾山様式の簡略化に窺われる。

③④ (白紙)
*うちがまきとまきとうきのこと
異朝の人ヨリ相傳候方の由承及候 最初京押小路高倉二一文字屋助左衛門ト申候者の家傳にて数代焼候 樂焼 其外粟田口 清水坂 又ハ御室仁清焼 京北菩薩池焼など方前二焼初メ候由 其余流今以交趾焼ヲ寫タル器物 花樹 生類等ヲ地紋二堀一掘 綠色 黄 紫の色繪ヲ付タル器有之候 私乾山にて内焼致候方ハ 右一文字屋ノ親類にて弟子 粟田口蹴上ノ水ノ邊二居中候孫兵衛ト申候者ヲ 私方ニ

③⑤ 抱置 則押小路焼傳の藥 ゑのくノ方ヲ習得 申候 其藥方ヲ用候て 道具の形 模様等ヲ 私 其上同名光琳 二相談候て 最初之繪ハ皆々光琳自筆ニ畫申候 干今繪之風流規模ハ光琳このミ置候通ヲ用 又ハ私新意ヲも相交 愚子猪八ニ傳 唯今ハ京鴨川ノ東聖護院宮様御門境にて本焼内焼共相助罷有候

③⑥ 抱置 則押小路焼傳の藥 ゑのくノ方ヲ習得 申候 其藥方ヲ用候て 道具の形 模様等ヲ 私 其上同名光琳 二相談候て 最初之繪ハ皆々光琳自筆ニ畫申候 干今繪之風流規模ハ光琳このミ置候通ヲ用 又ハ私新意ヲも相交 愚子猪八ニ傳 唯今ハ京鴨川ノ東聖護院宮様御門境にて本焼内焼共相助罷有候



右遺跡から出土した乾山焼
(猪八「乾山」銘が多い)

京都大学病院構内遺跡
A E 19区 聖護院窯跡



猪八 瑠璃釉一六弁菊花紋
章水指 聖護院



私より寫すや、人情薄き様ニ存候故、黒ノ方井付不申候。其上、樂焼師ハ一入ト申候者ヨリ、已來恫意ニ申談候故、猶以先方障りなり候事ハ、如何ニ存候人々私方ヘ黒焼ノ器ヲたのミ來候ヘ共、利休以來相傳ノ

○内窯器物二造り候土の事
一 内窯ニテ焼出候器物の土トテ、別ニハ無之候。本焼山かまノ器物ニ造り候土ヲ、其候用候故、更ニ井付候ニハ不及候。惣テ何國の土ニても内かまの器ニハ成申候。其土ノ性弱、本焼窯ニテハ潰候事も候故、本焼土ハ土ノ強柔吟味致試ミ焼候ヘ共、内かまハ火勢柔弱ニ候故、常の土器類同前ニ御座候。夫故何國ノ土ヲも用候。
○内窯焼上ノ掛藥ノ方
一 白粉 百目
一 日岡石 四十目、小かまならハ卅五目ニても
フノリ斗交かけ申候、最初の合様、藥ノ

○内窯焼上ノ掛藥ノ方
一 白粉 百目
一 日岡石 四十目、小かまならハ卅五目ニても
フノリ斗交かけ申候、最初の合様、藥ノ

○内窯器物二造り候土の事
一 内窯ニテ焼出候器物の土トテ、別ニハ無之候。本焼山かまノ器物ニ造り候土ヲ、其候用候故、更ニ井付候ニハ不及候。惣テ何國の土ニても内かまの器ニハ成申候。其土ノ性弱、本焼窯ニテハ潰候事も候故、本焼土ハ土ノ強柔吟味致試ミ焼候ヘ共、内かまハ火勢柔弱ニ候故、常の土器類同前ニ御座候。夫故何國ノ土ヲも用候。
○内窯焼上ノ掛藥ノ方
一 白粉 百目
一 日岡石 四十目、小かまならハ卅五目ニても
フノリ斗交かけ申候、最初の合様、藥ノ

○内窯焼上ノ掛藥ノ方
一 白粉 百目
一 日岡石 四十目、小かまならハ卅五目ニても
フノリ斗交かけ申候、最初の合様、藥ノ

○内窯焼上ノ掛藥ノ方
一 白粉 百目
一 日岡石 四十目、小かまならハ卅五目ニても
フノリ斗交かけ申候、最初の合様、藥ノ

*聖護院宮様・猪八時代は公寛法親王弟中御門天皇第三皇子忠善法親王が門跡。第二皇子は公遵法親王、公寛の後継者である。乾山と公寛、猪八と忠善法親王の繋がりか。
*内窯・土、掛藥、繪具。
*内窯焼の土・内窯は火勢も弱く本窯用は勿論のこと、大方の土は使用可能である。内窯用として特別の土は無く、本窯は火勢も強く、土の性を吟味する必要がある。
*内窯焼上ノ掛藥・掛藥は上藥。単に釉薬ともいう。内窯では鉛釉が主体であり、白粉(鉛白・日岡石(珪酸))を合わせたものが基本である。鉛が珪酸を溶かしガラスとするが、器物の表面を覆う皮膜をつくり、皮膜は器物の強度を増し、汚れを防ぎ、色や艶を与える。着色顔料に反応し色釉になるが、酸化銅では緑色・酸化鉄では褐色・酸化コバルトでは藍色・マンガンは紫色。
高火度焼成には、
長石釉(乳濁性・貫入、志野焼など)
石灰釉(透明性・光沢があり、染付釉とも)
灰釉(草木灰が主原料、木灰・薬灰など)他
低火度焼成には、
鉛釉(透明・光沢、上絵具の材料ともなる)
鉛釉(乳濁性・錫白釉)
ソーダ釉(世界最古、炭酸ナトリウム)
*京樂焼ノ家・京都樂本家に伝わる赤・白釉薬をいう。乾山は樂焼に関する詳細を避けるが、樂焼は桃山時代、千利休(五二一九)の創意に基づき生まれた茶陶である。中国華南地方、軟三彩の技法を基にするが、低火度焼成、軟質陶器、茶碗製作を第一とした。手捏ね、黒・赤主体の釉薬、一碗ことを窯に入れ焼成。伝統は今日へと続く。
乾山は樂家とは四代当主一人(二六四〇—九六)以来懸念であった。一人の養子宗入(二六六四—一七一六)は父宗謙末弟三右衛門の子であり、乾山とは従兄弟であったが、元禄四年(一六九二)五代樂家を継承、宝永五年(一七〇八)剃髮・隱居をする。乾山との交流は不明であるが、往來はあつたものと推測する。人情の薄い事態を避けることは当然の思いであつたらう。

○内窯焼上ノ掛藥ノ方
一 白粉 百目
一 日岡石 四十目、小かまならハ卅五目ニても
フノリ斗交かけ申候、最初の合様、藥ノ

○内窯焼上ノ掛藥ノ方
一 白粉 百目
一 日岡石 四十目、小かまならハ卅五目ニても
フノリ斗交かけ申候、最初の合様、藥ノ



三色合掛目七十六匁
 居フリニカワ分
 ひあま白土焼十後も〇上り
 ひあま本エ上調合粉家焼
 〇黒繪具ノ方
 南京染付呉洲藥 五匁
 一 鉄粉(江・鉄のかなた) 十匁 極々細末 水ヒ
 フノリ ニカワ等分
 一 本焼繪具ノ黒ト同事也
 〇赤 かき色也
 一 山黄土ニ
 弁柄丹土カ 緑ハンノ焼返シ 絳ハンヲ 少加 色ニマシ候
 アカキ

③

〇内窯のくノ方
 白磁 百目
 白粉 式拾目
 白土 五十目
 右極細末石白ニテ水挽ニメ居サセ フノリニカワ等分
 フリニカワ分
 〇又白磁のくノ方
 白土 五十目
 水戸磁石 三十匁
 炎硝 十一匁
 少土器ニテアタ、め塩氣ヲトリ

④

家ノ外ニテ御求候事 不勝事二候 其佞樂焼方ニテ正真
 フ求被申候様ニと申候て 于今黒焼不仕候

④ 〇内窯のくノ方

一 白磁のくノ方

白硝子(ビードロ)

白粉

白土

〇又白磁のくノ方

燧か 水戸磁(燧)石

炎硝

少土器ニテアタ、め塩氣ヲトリ

卅五匁

三十匁

十一匁

此半減白土ヲ三十八匁入 合石白ニテヒ

キ居 フノリ ニカワ等分ニ

此両方ハ 白繪焼上候後はね上り候故 年來工夫ノ上調合

致候 窯焼候剋口伝無之てハ不叶事ニ御座候 少ニても

火勢タリ不申候てハ はね上り申候

〇黒繪具ノ方

一 南京染付呉洲藥 五匁

一 鉄粉(江・鉄のかなた) 十匁 極々細末 水ヒ

フノリ ニカワ等分

一 本焼繪具ノ黒ト同事也

〇赤 かき色也

一 山黄土ニ

弁柄丹土カ 緑ハンノ焼返シ 絳ハンヲ 少加 色ニマシ候

アカキ

*黒焼・染焼・黒茶碗のことである。製作の
 依頼は乾山窯にもあるというが、乾山は染焼
 ならば利休以来の歴とした伝統をもつ本家に
 頼み、歴史のある家柄、製品や様式にはその
 家のみの決まりがある。模倣することは避け
 るべきと乾山は述べるが、発掘調査では僅か
 ながら鳴瀧窯址から染焼陶片が出た。陶
 工として試作の経験はあつたのかと考へる
 が、天保頃には乾山一〇〇回忌として鳴瀧山
 の土を用いて追福香合を造るとした作品、箱
 書きも伝世。同所には他者の出入りも認めら
 れ、確かなことは解らない。

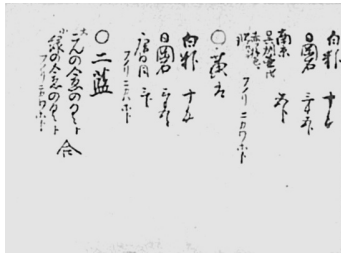
一内窯繪具一
 *内窯繪具…低火度焼成、鉛を主成分とした
 繪具。週れば奈良三彩に至り、孫兵衛伝とな
 るが、乾山は新たに白・黒・黄・紫繪具には
 ビードロを活用、短時間のうちに溶着、透明
 感のある繪具を工夫する。惣地塗り、書・画
 を描く画譜様式の繪具として活用した。

*白繪具…白繪具は、乾山以前には調合はも
 とより、使用方法、裝飾様式などの前例はな
 く、「自家第一の秘事」であつた。乾山焼以
 来東山諸窯では即それを模倣するが、焼成後
 一様に、白繪具はハネ上がり、盛り上がるな
 ど好ましくない。

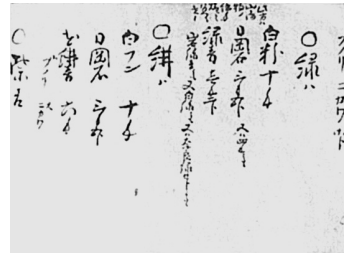
仁清伝にはビードロ入り・錦窯、ビードロ
 なし・白化粧の二法がある。が、同じく不適
 乾山は豊後の極白土を加えることを工夫す
 るが、白繪具は火勢によつて変化が起る。少
 しでも火が不十分であればハネ上がりなど、窯
 焚き、火勢の調節には口伝を要した。

*火打石…石英質の石。江戸期 水戸火打石
 は茨城県那珂郡山方町浜辺から産出。
 *塩氣…硝石は硝酸カリウム。火薬の原料で
 ある。ビードロのない場合に使用するが、土
 器に入れ、温め含まれる塩分を取るといふ。
 水戸火打石は珪石であり、日岡石と同じ役割
 をする。

*はね上り…割られる。亀裂の生ずること。
 素地との密着が悪く、収縮率に問題がある。
 *黒繪具…呉須に鉄粉を交ぜるが、本焼・内
 焼ともに使用できる。乾山は加えて独自の黒



④③



④②

④②

フノリニカワ等分

○緑*

(上) 此方ハ 山かま物ノ錦手焼ニも宜候て遣候

白粉 十匁

日岡石 三匁五分 又ハ四匁ニても

緑青 壹匁二分

岩緑青ニても 又白緑ニても 又ハ奈良緑セウニても

○紺*

白フン 十匁

日岡石 三匁五分

花紺青(江・唐紺青) 六匁

フノリ ニカワ

○紫*

白粉 十匁

日岡石 三匁五分(江・四匁)

南京 五分

呉州薬ノ内 赤ク柿色ニ見え候ヲ用 フノリ ニカワ等分

○黄は 十匁

白粉 十匁

日岡石 三匁五分(江・四匁)

唐白目 三分

フノリ ニカワ等分

○二藍*

大こんの合ゑのくト

小緑の合ゑのくト

フノリ ニカワ等分

合

絵具を考案する。

*緑・緑色も、黒絵具同様、本焼上絵具・錦手としても使用できる。顔料は岩緑青、白緑青、奈良緑青、いずれを用いてもよいという。

*紺・花紺青・唐紺青は、発色の鮮やかなスマルト(回青)をいう。染付のうちでも上絵付けには発色のよい花紺青を使用する。

*紫・ビードロは使われておらず、呈色剤である南京呉須は赤く柿色にみえるものが適するという。

呉須は、中国景德鎮窯では青料と称し、黒緑色、光沢のあるものを上等とする。

探索者は浙江省紹興・金華の山の中に入り採取するというが、ここでは黒黄色、円く大形のものを選択、余分な土を取り去り、窯の底に砂を敷き、その砂中に埋めて三日ほど熱し、水燻して初めて売りものになるという(『陶図説』)。強火に耐えきれないものは下等品として選別。そこには専門の絵具屋があり、全ては彼らの裁量に任せられる。良否は光沢と色によつて決まるとされ、発色が葦(いら)の葉に似る葦采邊は清く鮮やか色合

いとなることから、精良の器物に用いられるという。

絵具は如何ようのものであれ、必ずよくよく搗り、極めて細末にする必要がある。特に磁器では鮮やかな発色が求められ、専門の工人がどろどろになるまで搗り続けるなど一ヵ月をかけるという。

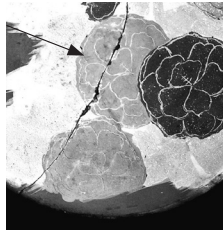
*黄・顔料は唐白目である。唐白目は酸化アンチモンの通称、日本では伊予白目が知られる。

*二藍・乾山独自の工夫であるが、調合した紺絵具に、調合した緑絵具を交ぜ、ふのり・膠を等分に入れる。

一般には白素地にコバルトなど青色絵具を用いて絵付け、その上に透明釉薬を掛けて還元焼成したものを藍絵というが、乾山は紺色・緑色絵具を合わせ、新たに二藍絵具を考案出した。



惣白地・乾山焼 烏丸垂相
光廣卿和歌短冊冊
静嘉堂文庫美術館



桃色絵具・乾山焼
色絵立葵図土器皿 (部分)
鐵竹堂瀧澤記念館

○濃緑ハ
常ノ通リ二合タル緑糸のくニ 上タノ白緑ヲ少交用候へば 色濃ク燒
申候 交かけんハ 御試被成候上ニテ 御定可被成候
内燒物惣地塗り藥ノ方共也
是ハ私頃年合候方共也

44

一 桃色地 右ノ白糸のぐニ弁柄丹土ノ上タヲ少
フノリ ニカワ等分 交申候 又緑ハンノヤキカヘシ(絳
ノ如シ
一 鼠色地ハ 右白糸のく藥へ黒ノ合糸のくヲ交候
フノリ ニカワ等分 交かけんハ好ム所ニ可任

45

44

○濃緑ハ
常ノ通リ二合タル緑糸のくニ 上タノ白緑ヲ少交用候へば 色濃ク燒
申候 交かけんハ 御試被成候上ニテ 御定可被成候
内燒物惣地塗り藥ノ方共也
是ハ私頃年合候方共也

45

一 惣白地ハ 右ニ才付候白糸のくヲ スヤキ後惣
フノリ ニカワ等分 地へぬり申候
一 鼠色地ハ 右白糸のく藥へ黒ノ合糸のくヲ交候
フノリ ニカワ等分 交かけんハ好ム所ニ可任
尤可有濃淡也

- 一 桃色地 右ノ白糸のぐニ弁柄丹土ノ上タヲ少
フノリ ニカワ等分 交申候 又緑ハンノヤキカヘシ(絳
ノ如シ
- 一 鼠色地ハ 右白糸のく藥へ黒ノ合糸のくヲ交候
フノリ ニカワ等分 交かけんハ好ム所ニ可任
- 一 うす柿地ハ右の白糸のくノ内へ山黄土少交申候
フノリ ニカワ等分 但丹土も緑ハンも不入ガヨク候
此うすかさきハ 糸のうちニも遣申候
- 一 うすもへき地ハ 右の白糸のくノ内へ緑青ノ合
フノリ ニカワ等分 糸のくヲ交候 交カケンハ見合
- 一 うすあざぎハ 右の白糸のぐニ紺ノ合糸のく
フノリ ニカワ等分 ヲ少交申候

*濃緑・常の調合した緑色絵具に、少量の上タ白緑を交せる。白緑は岩緑青、天然の炭酸銅であるが、和絵具の原料であり、色加減は試して判断せよ。

*惣地塗り・素地に緑・黄・紫などの鉛釉を惣掛けする技法である。交趾焼に代表されるが、押小路焼孫兵衛から伝授され、乾山は永年の経験により合わせ方に工夫を凝らす。伝世作品は少ないが、猪八作品に見られる。

鉛は珪酸を溶かし、透明、光沢のある釉薬となる。色釉はそれに着色剤を入れてつくるが、酸化銅を交ぜ緑色、酸化鉄を入れ褐色を呈する。坩堝に入れて溶融、急冷、粉末にして白玉(フリット)にすれば、溶媒剤となり、上絵具の材料として用いられる。

白絵具を基準として、素焼後施す乾山焼の惣地塗りには、
白一色による惣白地

白絵具に黒を交ぜた鼠色地
弁柄丹土・絳礬を交ぜた桃色地
山黄土を交ぜた薄柿色地
緑青を交ぜた薄萌黄色地
紺絵具を交ぜた薄浅葱色地
などがある。
白絵具を混ぜない薄紫色・薄黄色・樺色もある。

「元文丁巳年重陽後二日」
乾山焼 色絵松桜図鮑貝形
皿 鐵竹堂瀧澤記念館



右井付候分ハ 皆々内窯焼 樂燒等の方 累年習得候分
又ハ自己工夫ヲ以焼出候方共 不殘毫末逐一令唇記
元文二年己未 九月十二日 乾山焼 鐵竹堂主人 瀧澤

47

又カバ色トモ可申候歟
白粉五匁 日岡石 式匁七分
弁柄丹土 三匁
右三色ヲヨクスリ フノリニカワ等分ニませ 惣地ヘ
ヌリ 上ニヌヲ先白ニて何にてもヌカキ 其上ヲ色々
ヌのくニていろとり申候

46

46

うす紫うす黄色ノ惣ぬりハ

白ヌのぐニ交候ニ不及 もやうヲよのヌのくニてヌか
きたる間ヲ 右二色ノ合ヌのくニてぬり埋メ申候 惣
地ヘハ白ヌのくヲ一二返もぬり候て置候 フノリニカワ
等分

一

又カバ色トモ可申候歟

白粉五匁 日岡石 式匁七分

弁柄丹土 三匁

右三色ヲヨクスリ フノリニカワ等分ニませ 惣地ヘ
ヌリ 上ニヌヲ先白ニて何にてもヌカキ 其上ヲ色々
ヌのくニていろとり申候

一

惣地黒地ぬりハ

スヤキ物ノ上へ白ヌのぐヲ一ヘンヌリ 其上へ黒ノ合
ヌのぐヲ二返むらのなきやうによくヌリ候て ヨク干
候て 可老屈形ヲ白繪具ニて一返かき候て 其上へ
夫ノの形ニ應テ色々ヌのくヲ用 彩色申候 文字
ハ白ニて老候が宜候

47

右井付候分ハ 皆々内窯焼 樂燒等の方 累年習得候分

又ハ自己工夫ヲ以焼出候方共 不殘毫末逐一令唇記

候畢

元文二年己未

九月十二日

京兆 乾山陶工
紫翠老人

濃省(花押) 爾字型

*うす紫・うす黄色の惣ぬりハ…白繪具を交ぜ
る必要はないが、代わりに素地に一、二回白
繪具を塗る。他の繪具を用いて文様を描き、
その間々、惣地をうす紫・うす黄色繪具で埋
める。

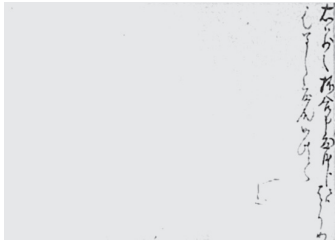
*カバ色・樺色。赤味を帯びた黄色。素地に
惣塗りするが、文様を入れる場合は、先ず白
繪具を置き、その上に塗を描き彩色をする。
*惣地黒地ぬりハ…黒惣地塗りには最も乾山ら
しい特色が窺われる。

①素焼後、先ず白繪具を繪体に一度塗る。
②次いで黒の合わせ繪具を斑なく二度塗
り、よく乾かす。文様なりを白繪具を用い
て描く。

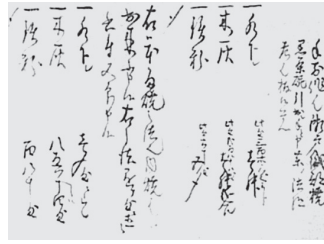
④文様は色繪具を用いてその上に彩色。
この場合、地は黒色である。対照を考慮、文
字は白繪具が良いと述べるが、作例として
『源氏物語』「夕顔巻」・夕顔図茶碗が伝世
する。

黒地には既述の通り下に白繪具が塗られて
いる。色に深みが加わり、闇夜を表現。花は
白色、花芯は黄色、葉・蔓は緑色。同じく下
には白繪具を置くが、画題・構図・構成・陶
法が巧みに融合、文芸を理解、それを陶にお
いて表現するなど、陶工・工人の域を超えた
構想であり、色彩、形状、陶技・陶法を合わ
せた趣向は、伝書の記述そのままに現れる。
デザインとは何か。陶画とは何か。江戸にお
ける繪画活動も影響を与えたものと考えらる。
*京兆・「みやこ」出自の自負を込めたもの。
「紫翠」は比叡山・鴨川を表徴、山紫水明を
誇る京都の美景、乾山の心情を反映する。
*乾山陶工…累年の積み重ねにより習得した
陶工としての誇りを表示。実践、習練の末に、
至り得た乾山独自の陶技・陶法を表明する。
前半では本焼山窯・療法など、後半には内
焼・楽焼の手立てのほか、土、繪具を中心
に、自己工夫を以てて焼き出したそれらの全
てを、逐一書き記し伝えるという。

『陶磁製方』 卷末・付箋



49

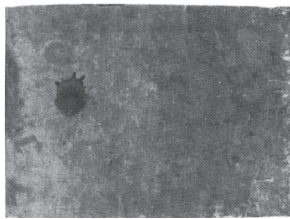


48

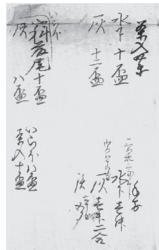
『陶磁製方』 卷末に残る覚書である。手控と比較、大川頭道筆と判断するが、楽焼・黒薬の調合、製法など、乾山が伝書に避けた事項を記す。試みとあるが、作品は何も残らず、自ら作陶することは如何であつたか。比較として瀬戸引き出し黒の処法も述べるが、楽焼黒も瀬戸黒茶碗も、焼成中、時を見計らい、窯から引き出し急激に冷却。その温度差が漆黒色、艶の美しさを引き出すなど、同技法は色見の折に生じた発見に始まるという。

- 48 京都本家樂焼 黒薬之法
- 一 京加茂川黒石 百匁
- 一 ヒイトロ 五十匁
- 但シ白二ても青二而も
- 〆 式色

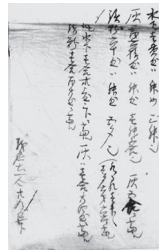
- 右能細末いたしふりの二而解キ五七偏あつくかけ候 それゆへ内釜之火加減二而ハ中く焼不申二付 火随分強クふいごにてやき申候
- 49 手前作にて 瀬戸織部焼 黒茶碗引
- 出シ手と申薬ノ法様 考候て拵候覚
- 一 水下レ 此匁三百卅三匁三分 壹升
- 一 木ノ灰 此匁式百八十八匁 壹升式合
- 一 鉄粉 此匁六十匁 五匁
- 右ハ本かま焼之法也 内焼ニテハ出来不申候
- 右之法懸ケ匁ニ直候才付又印申候
- 一 水下レ 壹匁二候ハ八
- 一 木灰 八百六十四匁
- 一 鉄粉 百八十匁
- 50 右ハ少々杯合申度時分ニハはかりめにていたし度故如此二候



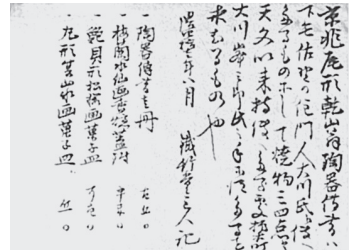
裏表紙



53



52



51

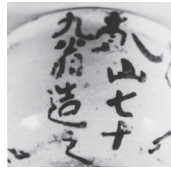
上段覚書に次ぐ筆記である。銘記があり、明治四一年八月、瀧澤家鐵竹堂主人筆。『陶磁製方』は下毛佐野の住人大川氏に伝承、栃木町大川峯三郎の手を経て同家に入ったことが分明する。三点のやきもの、三枚の素焼皿が付随、全ては瀧澤家の所蔵である。

- 51 京兆尾形乾山翁陶器伝書ハ 下毛佐野の住門人大川氏へ伝へたるものにして 焼物三四点と元文以来持伝へたる処 栃木町大川峯三郎氏之手に得たるを求むるもの也
- 明治四拾壹年八月 鐵竹堂主人記
- 一 陶器伝書壹冊 左丘〇
- 一 梅蘭水仙画香炉蓋附 予禾〇
- 一 鮑貝形松栴画菓子皿 耳左〇
- 一 丸形夏山水画菓子皿 丘〇

- 52 水下レ壹貫匁ハ 升め 三升也
- 灰三百六拾匁ハ 升匁 壹升五合也
- 53 (付箋張込書付)
- 茶入藥 手前
- 三百卅三匁三分
- 水下一刻 水下一刻
- 式百八十八匁
- 灰十二匁 灰壹升二合 六十匁
- 鉄 五匁
- いらほ
- 山科藤尾十盃 いらほ八盃
- 灰 八盃 茶八十盃

1、乾山 江戸作品

1、乾山 江戸作品
 1、色絵馬図茶碗
 出光美術館



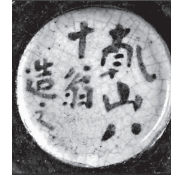
2、色絵薔薇図茶碗
 旧毘沙門堂



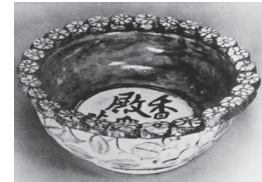
3、色絵独楽香合
 フリス美術館



4、色絵月波図香合



5、色絵栗鉢

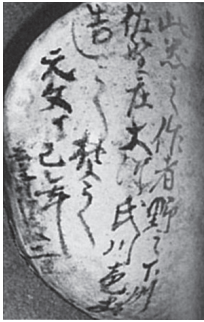


6、色絵和歌十鉢・体短冊皿
 東京国立博物館



2、乾山 佐野作品

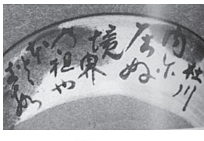
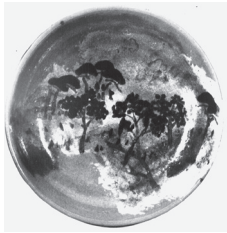
1、色絵松桜図鮑貝形皿
 鐵竹堂瀧澤記念館



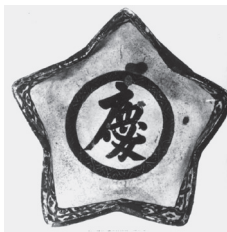
2、色絵梅蘭水仙図火入
 鐵竹堂瀧澤記念館



3、色絵夏木立図皿
 鐵竹堂瀧澤記念館



4、色絵桔梗形鉢



享保頃より江戸には各窯業地から陶工が移住。乾山も洗練された京焼陶法を江戸の工人に伝えるが、上図は最晩年、乾山の江戸・佐野における作品である。年代・年齢・製作場所などを銘記。京都押小路焼の伝統、低火度焼成の陶法を基盤とし、入谷窯の素地、他窯の既成素地などを応用、独自の色彩感覚に基づき案出した色絵具を活用する。琳派様式の絵付け、得意の書など、長年にわたり培った陶工の技量を發揮。江戸では寛永寺領内入谷村の窯、次郎兵衛、久作などの陶工名も残り、専門的な環境のもと製作した。

栃木・佐野では、同地の数寄者を中心とした席焼である。社交、娯楽の一端であったが、譜・落款などにより、その交流、集いの趣きなどが推測できる。乾山は陶技を披露。書面を描くなど、筆を執る。が、地方における趣味者の集まり、焼成作業は難航した。絵具の溶解、釉薬のむら、焼け損じなどの失敗がみられる。頭道の手控には同折の窯焚き記録は皆無である。『陶磁製方』も受理したが、本焼陶法も含むなど、果たしてその理解・活用は如何であったか。刊行物からの抜萃・書写など、文化人として情報、知識の蓄積を楽しんだものではなかったか。

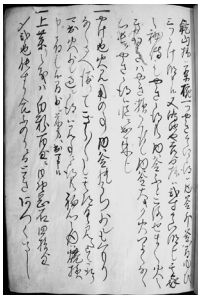
乾山晩年の作陶は京都時代の集大成である。江戸では画人としても活動したが、磨いた色彩感覚、デザイン面の白さが現れる。

『陶器傳書』 大川頭道
— 乾山関係の記述 —

元文二年九月、乾山を佐野へ招請、席焼をした作品、陶法書『陶磁製方』とともに残る大川頭道の手控(五三葉、一八、〇^マ×一八、〇^マ)である。題箋には「陶器傳書」とあり、乾山関係の記述、出版物からの抜萃・書写など、頭道のやきものへの興味が確認される。筆跡は『陶磁製方』中の付箋、巻末覚書と同じであるが、同書には乾山を招き催した席焼、陶法書受理に関する記載はなく、当折の様子などは不明である。

左図は『陶器傳書』の乾山関係事項である(以下同じ)。

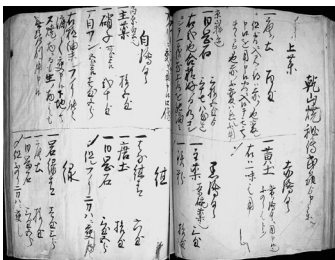
⑮ 乾山杯ハ 茶碗一つやきくらひ二候得ハ 内釜外釜ノ間 ヲゆび三つたけ明申候 又鴻池や吉右衛門杯ハ式すくらひ明申候 其家の秘伝にて やき候得共 内釜ふところせまく 火のきつきは やき様が御座候 内釜大キク 火つよくな 心長くやき候ハ 慥ニ出来申候(略)



⑮

⑳ 乾山焼秘傳武刃申來ル
上藥

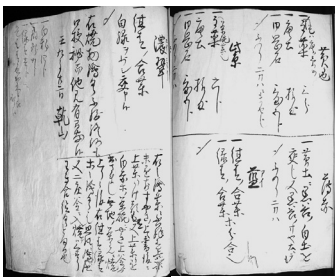
- 一 唐ノ土 百匁
- 但し火ニ入見候得ハ 赤ク色変シ申候を用申候 火ニ入候テモ其まゝニ而 色赤ノ不變ハ悪シ不用
- 京山科邊
- 一 日岡石 三十五匁^上
- 右式色 合様好ニ而 水コシニシテ一夜置 上水を能滴ミフノリニ交申候 口傳
- 赤繪具
- 一 黄土 常ノ繪具ニ用申候也ふのりニテトク 右ハ一味ニて用
- 黒繪具
- 一 主藥 茶碗藥也 三匁
- 一 鑊粉 拾匁
- 白繪具
- 高原白土也
- 一 主藥 拾五匁
- 一 硝子 卅匁上ニ式十匁
- 一 白フン 卅匁上ニ式五匁
- 右極細末シ フノリ能々澆シて交入申候 下地はス焼ノ物



⑳

二てモ 生ノ物ニてモ 無差別用申候

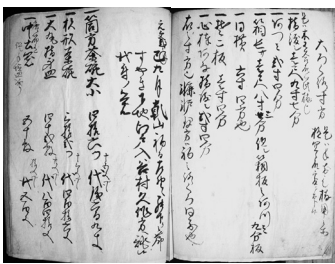
- 紺
- 一 はな紺青 六匁
- 一 唐土 拾匁
- 一 日岡石 三匁五分
- 但シフノリニカハニ交申候
- 緑
- 一 岩緑青 壹匁三分
- 一 唐土 拾匁
- 一 日岡石 三匁五分
- 但ふのりニカワニ交申候
- 黄色
- 是ハ唐のしろめ
- 一 主藥 三分
- 一 唐土 拾匁
- 一 日岡石 三匁五分
- ふのりニカハニませ申候
- 茶碗藥也
- 一 主藥 六分
- 一 唐土 拾匁
- 一 日岡石 三匁五分
- 薄赤
- 一 黄土ニ黒谷ノ白土を交申候



⑳

又黒谷ノサヤ土ニテモ 無差別用申候

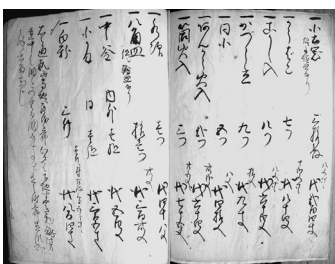
- ふのりニカワ
- 藍
- 紺青ノ合藥
- 一 紺青ノ合藥等分合也
- 濃翠^{濃翠}
- 紺青ノ合藥
- 白緑ヲ少シ交申候
- 右焼物繪具不殘終 何も口授秘而他見有間敷候
- 壬九月廿二日 乾山
- ④ 元文貳年巴九月乾山初而左野へ罷り下り候節
- すやき下地 江戸入谷村久作方
- ハ詠候 代付ノ寛
- 一 筒方茶碗大小四拾六つ
- 一 十五文つ、代錢六十九文
- 一 杉形茶碗三拾式つ十三文
- 一 づ、代四百拾六文
- 一 大丸指見皿四十式枚廿文
- 一 づ、代八百四拾文
- 底ニ筋有
- 一 中土器 五十枚拾文づ、代五百文 但し手塩皿成り



④

④⑤

- 一 小土器 三拾枚八文づ、代式百四十文 但し手塩皿なり
- 一 こうばこ 七つ十式文づ、代八十四文
- 一 こかし入 八つ八文づ、代六十四文
- 一 かづら立 九つ拾文代九十文
- 一 同小 五つ八文代四拾文
- 一 あんかう火入 式つ卅式文代六十四文
- 一 筒火入三つ 廿五文
- 一 水次 壹つ代四十八文
- 一 八角皿 拾壹つ 卅文
- 一 代三百卅文 但し繪皿なり
- 一 中釜 内外壹組 代五百文
- 一 小かま 同壹組代三百五十五文
- 一 白粉三升 壹升ニ付古銀三匁五分つ、代八百四十文
- 一 右の通乾山當地へ罷越候節 江戸ニて下地すやき物候 此方連中ニて調候 又重而調度事も有之時節 直段知れかねニ 之留申候



④⑤

— 出版物の書写 —

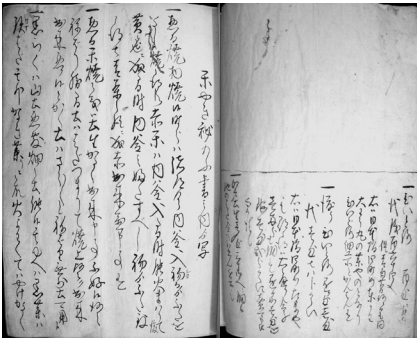
『陶器傳書』には、茶碗・高台
 図に始まり、樂やき惣上藥・秘傳
 黒藥之法・茶わん下地ノ事・江戸
 繪貝屋・茶碗壹個焼内釜外釜寸法
 (右ハ淺草にて書來写候也)・江戸の
 材料店・樂やき秘のふ書之内より
 写・乾山杯は茶碗一つやき候二・
 磁器藥ノ秘術・乾山燒秘傳武刃
 申來ル・百工秘術之書ヲ写・燒物
 之傳・(和漢諸道具古今知見鈔から
 の抜萃)・轆轤之事・乾山初而左
 野へ罷下り候節・京都にて時繪筆
 調候覚・御室燒本山窯かけ藥(標
 題のみ)・ほくろをぬき候くすり・
 染物二用候こん屋のりの仕用・
 簾角ざし布等青色付様、などを
 記述。
 江戸在の製陶材料・顔料・絵具
 店の名とその所在を記録し、窯の
 ためには淺草にも足をのぼした
 か、問い合わせたか。
 やきもの愛好家にとり必須の書
 であつた『樂燒秘囊』・『百工秘
 術』・『和漢諸道具古今知見鈔』な
 どからの抜萃・書写をするが、享
 保一七年には乾山燒秘伝が江戸よ
 り届く。乾山は口授の大切さを述
 べており、それがやがて頭道から
 佐野訪問の招請を受けることに繋
 がつたか。

一、『樂燒秘囊』

①7 樂やき秘のふ書の内右写

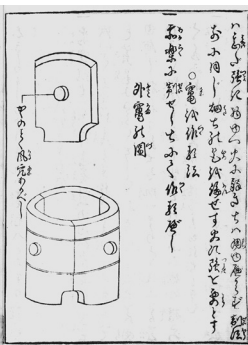
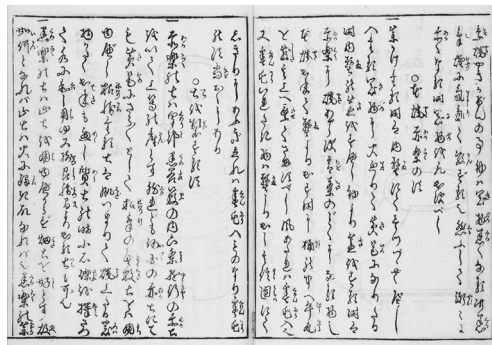
- 一 惣而燒物候時分ハ 諸道具内釜
 へ入 初めちふたをいたし燒候得共
 赤樂ハ内釜へ入たる時 能火目まはり
 て後 黄色二成る時 内釜のふたすべ
 し 初ちふた致候得は 青茶の様二成
 赤出來兼申事有
- 一 惣而樂燒の義ハ土生かるく出來申
 事 不好候 何もねばり勝たる土ハ
 はだつまりて燒上堅ク出來 出來悪ク
 候 とかく土ハさらくとねばり無少
 土可用ト
- 一 黒らくハ山土悪敷 畑の土能候
 其ゆへハ黒樂ハ鉄はだ 其外堅き藥り
 二有故 火よわくテハやけかた
 (以下略)

『陶器傳書』大川頭道 『樂燒秘囊』
 抜萃書写



①7

『樂燒秘囊』中田潜龍子著 享保一八年序
 元文元年刊(二七三六) 国立文学研究所



本燒赤樂の法

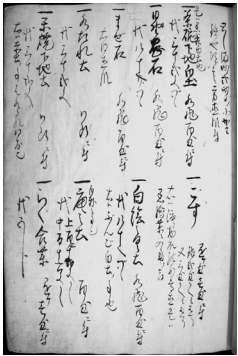
一 藥かけたる時は 内窯にて沓つづ、やくべし
 入たる器物に火廻りて 黄色になりたる時 内窯の
 蓋をすべし 初より蓋をする時は 赤樂に燒あがら
 ず 青茶のごとくになる物也 本燒出來て窯より出
 す時に 桶の中へ平瓦を敷 其上へ乗てさますべし
 風あたれハ雲屯入也 又雲屯入れたき物ハ 窯ヨ
 リ出し 其儘扇扇にしてしきりにあふきたれハ 雲屯
 入ものなり 雲屯の法尚おくにあり

土を製する法

一 赤樂の土ハ 皇都黒谷敷の内六条の赤土を以て
 上等の座とす 然れども何国の赤土にても黄色に
 さらくとして粘氣の無数土をハ用ゆべし 粘勝た
 る土は肌つまりて燒上たる器物かたく 出來も悪し
 質土の時に石礫を擇さつて水に和し用ゆ 又攝州
 勝間より出る土も可也

①5 左図は、『陶器傳書』中江戸における材料・
 絵具店などの所在を記したものである。とし

①7 日本橋四丁め東かわ・大わう丸の樂やのと
 なり・ひいどろの細工所とかんはん有、日本橋
 四丁めたまやにて尋候得ハ
 當世樂燒之藥無相違出來申候所相認申候是
 ハ兩國橋吉川町鴻池や吉右衛門秘傳也 右之
 法但考ヲ以直二燒見ヲ書ス
 などとある。



①5

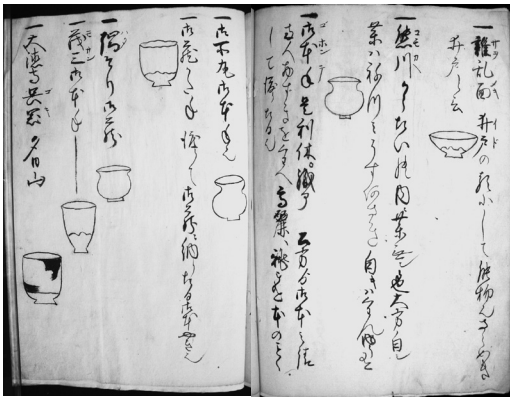
三、『和漢諸道具古今知見鈔』

『万宝全書』巻八

④

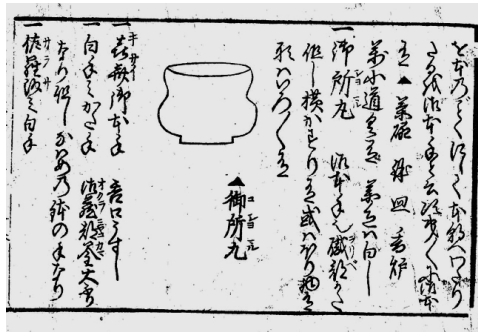
- 一 雜亂面 井戸の類にして能物也
- 一 さしぬき井戸と云
- 一 熊川からたいの内ニ 藥無シ 色大方
- 一 白シ 藥ハねずミ うすいあさき
- 一 白キハくわんゆう有
- 一 御本手是利休。織部 二方御本ノ法
- 一 兩人物すきをくわへ 高麗へ誂被遣
- 一 本のごとくシテ渡たる也
- 一 御所丸御本手也
- 一 御蔵かた手 渡りて御蔵ニ納りたる
- 一 御本やき也
- 一 端そり御蔵
- 一 茂三御本手
- 一 大徳寺具器 夕日山

『陶器傳書』大川顯道
『和漢諸道具古今知見鈔』抜萃書写



④

合冊本『万宝全書』中『和漢諸道具古今知見鈔』
元禄七年刊(二六九四) 国立文学研究所



熊川 高臺の内に藥なし 土色大かた白し
藥ハ鼠薄淺黄色なり 白きに環瑠アリ
咸鏡道 熊川の上手也
後熊川 後わたり也 高臺の内に藥かかる
滑熊川 はたそりもあり こもがへのぬめ
り有物なり 熊川 端反
御本手 利休織部本なり 是ハ兩人共に
公方より御本を受 物好成加へ 高麗へ誂
へ遣されしを 本のごとくにして 本朝へ
わたりたるを御本手と云 次第く御本
有 茶碗 鉢 皿 香炉 萬に道具有 藥
色ハ白し
御所丸 御本手也 織部かた 但し横かす
り有 或ハほり物有 形ハいろく有
御所丸
崑齋御本手 呑口うすし
白手のかた手 御蔵都釜大ふりなり 但し
なハめの鉢の手なり
佐羅紗の白手
御蔵かた手 御本平也 渡りて御蔵ニ納りた
る物也 燒の堅物也 御本燒 御蔵手
端反御蔵 茶碗の端反たる物也 端反御蔵
玄悦御本手 御室茶碗のうつしなり
茂三御本手 形有之にしてりきみあり
白手 近代ノ渡り也 利休織部ト理同シ
大徳寺具器 來朝の唐人大徳寺二旅館せし
時接待せし茶碗具器なり 高臺の内ニすち
有
寛永の手鑑ニ云五十年に及ぶ物也 代金三
十枚より十兩壹枚迄これあり 大徳寺渡り
と云也 夕日山茶碗ノ合恰 高三寸八分
口三寸二分 香臺一寸 重目六十九匁
高麗茶碗 大徳寺具器 紅葉手アリ 上品
之形 大概如此
夕日山の茶碗の藥かたち かくのこし

三、「陶器密法書」

『陶器密法書』は、明治二三年（一八九〇）塩田力蔵が国会図書館蔵書を書写。同二六年北村彌一郎が『大日本窯業協会雑誌』に連載。大正一五年（一九二六）塩田力蔵が『書画骨董雑誌』に掲載し、昭和一七年（一九四二）鈴木半茶が校刊した。今日、内容を同じくするものに『本電并内電乾山秘法』（東京美術研究所「静勝文庫」蔵印、脇本楽之軒）、『乾山秘書』（堤焼・針生乾馬）、『乾山樂焼秘書』（根岸家青山文庫・国会図書館）があり、先出の乾山自筆「陶工必用」「陶磁製方」とは内容・構成、書者・書法に異なりがある。

『陶器密法書』の奥書には「乾山」とある。初代乾山は書状・書物（かきもの）には常に「深省」「乾山深省」と記す。当書にはそれがなく、初代筆ではないと断ずる第一の理由であるが、内容にも仁清伝、孫兵衛伝はなく、樂焼陶法を主体として、香合製作など実践に即した成形上の手立などを詳述。すでに指摘されているが、書中「同名」とあるところから先代の存在を示唆、巻末の乾山名に照合し、乾山焼二代尾形猪八の陶法であることが理解される。

「密法」とあるが、秘密の方法、秘術・秘伝の意である。密教を伝えた空海は、修業の日々に仏像を造るなどの実践を重んじた。文章を用いて伝えることはむずかしい。他者を見習うことにも限度がある。仏像を造り、曼陀羅を描き、心象、世界観を視覚化する。本質は当人が自らを以て行う内に現れるが、陶法書は製作の手引書に過ぎない。やきもの製作も自ら工夫し、創案することが基本である。文中しばしば筆者も工夫・勘弁なることを論ずるが、おそらく初代乾山の教えも然りであつたと考える。密法書の題名は誰がつけたのか。写本のいづれにも使われていない。（二）当書には萬古焼三世三阿による跋文がある。冒頭の「御室乾山」は、乾山及び御室焼、又は地名をいうか。初代と同じく江戸下向とあること

は、聖護院宮忠誓法親王、その兄輪王寺宮公遵法親王との関わりを表すものか。晩年には清吾との縁も生ずるが、今日残る猪八陶法書は関東に限定、猪八―清吾―弄山―三阿への道を辿り、伝播の本居を江戸萬古におくことができるか否か。

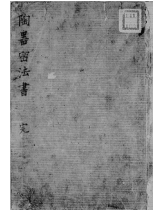
（二）一方、すみだ川焼祖佐原菊塙は浅草古美術商芳村観阿から猪八自筆伝書を譲られた。菊塙はそれに先立ち小西家から「光悦より空中よりの陶法伝書」を受理したが、それら両書の行方は不明。菊塙所持の猪八伝書は自筆か否か、『陶器密法書』の原本ではなかったか。貌庵「乾山世代書」に現れる入谷村二代次郎兵衛から三代宮崎富之助―抱一―貌庵―三浦乾也所持の陶法書（初代乾山口述二代筆記）とは相異する。このたびその初代口述二代筆記に関係する樂焼陶法書をみつけ出した。内容は佐野の頭道手控に大方一致。乾也所持の陶法書、さらに江戸において初代乾山の伝えた陶法が確認できる。

（三）当書には光琳、渡邊氏の絵手本とある。どのような手本であつたのか。初代は猪八に手本を残して江戸へ下るか。乾山の甥彦右衛門宛書状には、銀座仲間への伝言として京都乾山焼と共に江戸乾山焼も宜敷（よろしく）とした言がある。彦右衛門は親類書に従兄弟として伊八の名を残す。彦右衛門は千如心齋茶事において萬古焼祖沼波弄山と同席するが、弄山への乾山焼の仲介、さらに猪八弟子清吾との関わりは如何であつたか。萬古焼森家陶法書中には「江戸より」とした調合例がある。仙台堤焼針生家蔵『乾山秘書』巻末には「萬古三阿至玄」の名がある。内容は弄山伝と同一。一連の陶法書の書写元を萬古堂と推測する理由である。

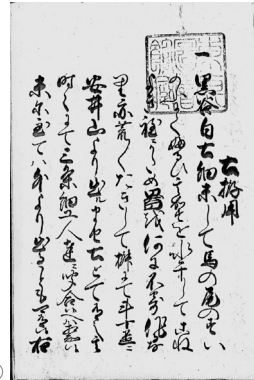
（四）猪八乾山焼は自家製もあるが、多くは内窯。本窯ものは少なく、大方は素地は素地屋、絵付けは絵師など、窯焚きは粟田口焼・東山諸窯の窯焚人に任せる方法をとつたものと考えられる。

二代乾山尾形猪八伝書

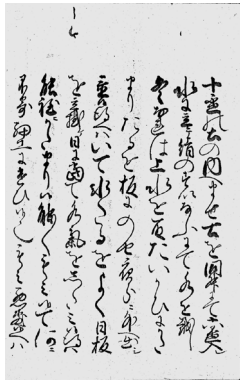
『陶器密法書』写本 国会図書館



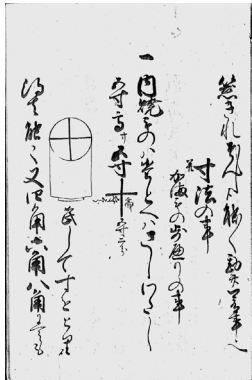
『陶器密法書』表紙



①



②



③

『陶器密法書』

① 土拵用 (上の四方印は「東京図書館蔵」)

一 黒谷白土 細末して 馬の尾のすいのうにてふるい
 其かすを水干して こね よき程にかため 器を何に
 不寄作るなり 亦荒くた(碎)きして 柵にて斗十盃
 二 安井山より出ルませ土とて有之 其時々にて
 三条細工人達に間合候得ば 相知候 末に至てハ 外
 より出ること可有候 右

② 十盃の土の内へ ませ土を同柵にて六盃入レ 水に
 立テ 絹のすいなふ(水囊)にて水を越し(漉) 冬なれば
 上水を取 たいかひ(大概)にかたまりたるを 板にのせ
 夜分二外へ出シ置候へハ いて氷たるを よく日 板
 を立掛ケ日に當て 水氣をしたミ候得ハ 能程二かたま
 り候 能くもミ候て 何ニ不寄細工に遣ひ候也 も
 ミ悪敷候へハ

③ 器きれそんじメ 能く勘弁可有事也
 寸法の事 並 かまもの歩への事

一 内焼ものハ たとへば さしわたし五寸 高さ五寸
 さしわたし五寸二分 高さ五寸二分
 (図) 如此して 寸をとり候得は之能 又四角八角に
 ても

—土拵用—
 *すいのう…水囊、篩(ふるい)。
 *斗…計の意。ばかりとも読むが、くずし
 方が「計」に似る所からの応用。

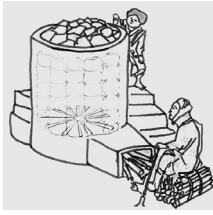
*安井山…蓮華光院、土は遊行土と同じ。
 *三条細工人…粟田口焼の職人、工人。
 乾山窯の細工人孫兵衛は粟田口蹴上比丘尼
 坂に住し、一文字屋の親族、当時は粟田口焼
 工人であつたと推測する。押小路焼は延宝
 六年(一六七八)清水焼・しる谷に借窯をし、
 本焼にも携わが(森田久右衛門日記)、元
 禄年間には茶道具製作も行い(古今和漢諸道
 具見知鈔)、孫兵衛は本焼にも通曉していた。

仁清も瀬戸修業後、京都に上り、粟田口窯に
 身を置いたものと考えるが、すぐれた技術に
 「みやこ」の美意識が重ねられる。見識ある
 茶の湯者・数寄者との所縁に恵まれ、宗和と
 の出会いによつては御室仁和寺門前に窯を設
 けるまでになるが、孫兵衛の乾山焼への参加
 についても、同じ粟田口焼所縁の陶工同志
 乾山の意図を知る二代仁清の助言あつてのこ
 とではなかつたか。

五条とあるのは東山五条坂諸窯の細工人。
 粟田口のほか乾山は五条坂からも資材・原料
 などの融通を受けると推定、別して洛中への
 移転後には京焼借窯(本焼)体制への参加な
 ど、相互の助け合いが想定される。

近年、京都大学病院遺跡からは乾山焼二代
 猪八の工房跡、内窯の部位、素焼・内焼・本
 焼陶片などが出土した。本焼窯の形跡はな
 く、おそらく本窯は東山・粟田口焼などへ借
 窯をしたものと推定する。

—寸法の事—
 *寸法…成形後の分減(ぶべ)りを教え、作
 業の手順を記述する。乾山焼初代伝書に異な
 り、『陶器密法書』は、素焼から絵具・釉薬、
 内窯焼成に至る手順、方法に関する注意が多
 い。工人は親方のそばに居て身をもつて技術
 を学ぶ。積み重ねにより技を磨くが、こゝは、
 書物は知識を与える。江戸期 文化は町人層
 へと浸透した。学びたい・教えたい、知識欲
 と顕示欲、その精神が支えとなつて学問・技
 芸・武道が切り売られされる。

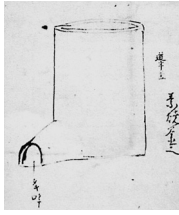


素焼窯…『陶磁器説』参照
筆者作成



素焼窯…『画工秘伝新書』
明治一七年刊(二八八四)

素焼窯…萬古焼・森有節
家陶法書 天保三年
朝日町歴史民族資料館



素焼窯…『楽焼秘囊』
享保一八年序 元文元年刊



丸きものハ重かけ 間く
にすやきもの われをひしとつめ 扱籠の口にて二時
斗りそろくと火をたき かまの内へ急二火の入りぬ様
二たく也 扱二時斗りも焼テのち 松葉 柴以てたき候
へハ 火興へ入り 上へも火勢登り よく白ケ見ゆると
き かまの下なるおき(熾)をかき出しかまの中成器の
上へのセ置也

一 黒谷出赤土 粉ニはたき 少シ荒キすいのふにて
ふるひ 茶碗など手つくね 亦ハろくろにても作り
それくの名物なり 又は好みの品を作るなり 寸法ハ
黒樂は本焼物二寸法の割同前也 赤樂物ハ内焼物の寸法
二同前也 赤樂は黄土を能く 水干して

三扁程ぬり 色好ミ有時は 少シ白キ土を入レ色うす
くし 又色こく好ミ有時は焼紫土を少シ入レ 又深草ニ
水たれといふ土有り これを入レ候 めいくはつめい
(発明)に依て如何様とも工風可有候也

一 香合など数多く作りたき事
一 あるへし 土にて其形 何に不寄作り上ケ 油をぬり
其上 土打ちセ 能押 そと(そつと) ぬき出し干乾し す
やきして其形の内にあらはれ候へハ 土を其内へおし
込 少シ間を置 土ヲ以テ少は付候得ハ 右の土二付テ
出所 即形そなわり候 能く勘弁二て出来ル事也
形ト種トノ事 たとへハ(例えは)

一 黒赤樂土の事
一 黒赤樂土の事
一 黒赤樂土の事

丸きものハ重かけ 間く
にすやきもの われをひしとつめ 扱籠の口にて二時
斗りそろくと火をたき かまの内へ急二火の入りぬ様
二たく也 扱二時斗りも焼テのち 松葉 柴以てたき候
へハ 火興へ入り 上へも火勢登り よく白ケ見ゆると
き かまの下なるおき(熾)をかき出しかまの中成器の
上へのセ置也

一 黒谷出赤土 粉ニはたき 少シ荒キすいのふにて
ふるひ 茶碗など手つくね 亦ハろくろにても作り
それくの名物なり 又は好みの品を作るなり 寸法ハ
黒樂は本焼物二寸法の割同前也 赤樂物ハ内焼物の寸法
二同前也 赤樂は黄土を能く 水干して

三扁程ぬり 色好ミ有時は 少シ白キ土を入レ色うす
くし 又色こく好ミ有時は焼紫土を少シ入レ 又深草ニ
水たれといふ土有り これを入レ候 めいくはつめい
(発明)に依て如何様とも工風可有候也

一 香合など数多く作りたき事
一 あるへし 土にて其形 何に不寄作り上ケ 油をぬり
其上 土打ちセ 能押 そと(そつと) ぬき出し干乾し す
やきして其形の内にあらはれ候へハ 土を其内へおし
込 少シ間を置 土ヲ以テ少は付候得ハ 右の土二付テ
出所 即形そなわり候 能く勘弁二て出来ル事也
形ト種トノ事 たとへハ(例えは)

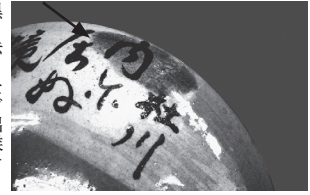
一 黒赤樂土の事
一 黒赤樂土の事
一 黒赤樂土の事

利休没後、光悦焼をはじめ、数寄者・茶人、
脇窯と称し玉水焼 大樋焼などの楽焼模倣が
始まった。江戸中期には『楽焼秘囊』(中田
潜龍子著・享保一八年序)の出版もあり、土・
窯・焼成などの成形・技法・製作過程の詳細
が示された。楽焼陶法の基本は、透明釉薬に
着色剤を加える釉法にある。規模の大きな本
窯焼成に比し、窯も屋内に設置できる小さな
もの。焼成時間も短時間で済み、武家、富
町人の文化活動の盛行するなか、「席焼」な
どが流行、やきもの趣味、アマチュア文化人
らに親しまれてゆく。伝書・陶法書の求めら
れた要因でもあるが、乾山も「陶工必用」内
かま焼上のかけ薬」には坐席焼における釉薬
調合の手加減を記述。が、楽焼関係は記さず
と述べる。一方、「陶磁製方」には「京楽焼
ノ家ニテ焼出候様成赤白樂」など赤・白樂の
調合があり、地方の数寄者・趣味人の求めに
は応ぜざるをえなかつたと考える。猪八時代
には最早その必要もなくなつたのか、楽焼は
特殊ではなく、堂々と書記して憚らなかつた
ものと見受けられる。

一 香合など数多く作りたき事
一 あるへし 土にて其形 何に不寄作り上ケ 油をぬり
其上 土打ちセ 能押 そと(そつと) ぬき出し干乾し す
やきして其形の内にあらはれ候へハ 土を其内へおし
込 少シ間を置 土ヲ以テ少は付候得ハ 右の土二付テ
出所 即形そなわり候 能く勘弁二て出来ル事也
形ト種トノ事 たとへハ(例えは)

一 黒赤樂土の事
一 黒赤樂土の事
一 黒赤樂土の事

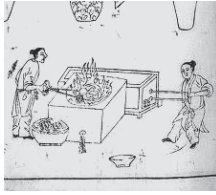
* 松葉・柴・素焼では火勢、火の調整もあり、
終盤には松葉・柴なども用いるが、火気は奥
へ伝わり、上へと昇る。窯中、器物が白く見
える時分、焚き口の澳(おき)を器物に被せ
るが、よくよく焼成 湿気を取る。
一 黒・赤樂の土の事
* 黒・赤樂・楽茶碗は、黒・赤樂とも黒谷赤
土を砕き、目の粗い水囊にて篩い使用する。
手づくね、またロクロを用いることもあり、
寸法は、黒樂では本焼用素焼物と同じく一割
五分増、赤樂では他の内焼物と同寸に成形す
る。土色は好みに合わせ、上に黄土、白土を
塗り、濃色には紫土の焼返し・深草水下を加
えるなどの工夫をする。



黒ミ赤ミなど出候テ
乾山焼 色絵夏木立図
皿(裏面)
鐵竹堂瀧澤記念館



光悦・赤楽茶碗「雪峯」
崑山記念館



ふいご図
『天工開物』(部分)

て火色として黒ミ赤ミなど出候
テかま入ルがよし
赤楽藥
白粉 百目
一日の岡石 三十五目か又ハ六匁
右ノ十目引也 玉なしにてもよし
光悦樂ときは

右ノ先色ミをして 其上ニて右玉のさし引ニて いろく
にかわる事也 五仙山(五位山)より出ル石を入レ候得
は黄ミなる かる石を細末して石のかわりに入ハ
つ々としたるはた(肌)に成る 銘々の了簡ニて替也
勘弁才覚次第 面白キ事出来もの也

此方の家のことニて無きゆへ荒増記
黒楽藥
鴨川石 百五十目
一玉 百目
一ふのりにてとき 老扁塗 雨天なれば火にかけあふ
り(燈)日干乾シ 一返ツ、以上四扁 如此懸る也
茶碗高臺きは(際)の薬おとし 之焼也 尤下地のあら

はれぬ程おとしたるよし 高臺たたみすりへハ 未
薬掛ケさる先ニ 右鴨川石斗りふのりニてとき 茶碗の
口とたゝみすりへ一返ぬり 其上へ 候薬を掛ケる也
高臺の輪のきわも薬たまる物也 それを落シたるがよ

①⑨ て火色として黒ミ赤ミなど出候テあしく候 とかく能干

テかま入ルがよし
赤楽藥

- 一 白粉 百目
- 一 一日の岡石 三十五目か又ハ六匁
- 一 玉 十目

②⑩ 右ノ十目引也 玉なしにてもよし 光悦樂ときは

②① 一玉 二十匁も入
右先色ミをして 其上ニて右玉のさし引ニて いろく
にかわる事也 五仙山(五位山)より出ル石を入レ候得
は黄ミなる かる石を細末して石のかわりに入ハ
つ々としたるはた(肌)に成る 銘々の了簡ニて替也
勘弁才覚次第 面白キ事出来もの也

②② 此方の家のことニて無きゆへ荒増記

紫色也
鴨川石 百五十目
一玉 百目
一ふのりにてとき 老扁塗 雨天なれば火にかけあふ
り(燈)日干乾シ 一返ツ、以上四扁 如此懸る也
茶碗高臺きは(際)の薬おとし 之焼也 尤下地のあら

②③ はれぬ程おとしたるよし 高臺たたみすりへハ 未
薬掛ケさる先ニ 右鴨川石斗りふのりニてとき 茶碗の
口とたゝみすりへ一返ぬり 其上へ 候薬を掛ケる也
高臺の輪のきわも薬たまる物也 それを落シたるがよ

— 赤楽藥 —
* 光悦樂・楽焼きに關し、光悦の赤楽など、
すでに一つの伝統となり、模倣されていたこ
とを伝える。茶の湯の發展、経済力を得た町
人の参加、地方における文化人の活動が積極
化していたことがわかる。

* 五仙山・五位山の誤りであろう。五位山は
京都市右京区花園野町にある法金剛院の後
方にある低い丘である。
「在法金剛院境内 号五位山 又称内山」
〔山城名勝志〕とあり、光悦の赤楽茶碗は同
山の石を交ぜれば黄味を帯びた色に仕上ると
いう。

* かる石・日岡石に代わりかる石を交ぜる
が、ふつふつとするなど茶碗の肌合いを考慮
してのことか。かる石は、火山から噴出した
溶岩が、急冷されることによつてガスが抜
け、岩石が海綿状になったものである。
日岡石は京都山科日ノ岡に産する珪砂で
あるが、楽焼釉は基本的に白粉(唐土・鉛白)
と白玉(ビードロ・ガラス粉)、それに日岡石
を配合してつく。

— 黒楽藥 —
* 鴨川石・京都の鴨川上流に産する自然石。
乾山は紫色というが、当書では今出川より
上、車坂までの内に出るものを好しとして、
楽焼黒釉の原料となり、樂家では初代長次郎
によつて使われ始めたとする。

黒楽は、天正年間(一五七三—一七六)利休
のわび茶理念に基づき、樂長次郎家が始めた
やきものである。茶碗製作を第一としてお
り、手捏ね素地に楽焼釉を施し、内窯焼成を
する。特に黒茶碗は引き出し黒と称し、焼成
中その如何を判断、窯から引き出し、急冷す
ることによる黒の発色に特徴がある。

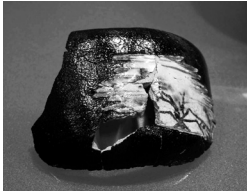
ここでは鴨川石に玉(ビードロ)を交ぜ、
ふのりを用いて溶いた釉薬を四回ほど塗る。
雨天であれば火にあぶり、乾かすほど塗る。
高台、及び口造りは、前もつて鴨川石の
みをふのりにて溶き一度塗り、その上に合
せ薬を四回ほど塗る。丹念にその都度乾か
し、湿りを避ける。
高台脇に溜まつた釉薬は落としておくが、



鴨川石・樂美術館



黒樂二白絵入ル事・猪八 宝珠園黒樂茶碗 聖護院



黒樂二白絵入ル事・猪八 山居図黒樂茶碗陶片 京都公家屋敷遺跡出土 京都市埋蔵文化財研究所

より宜敷出来る也 鴨川石の事左二記ス
 鴨川紫石 今出川より上ハ車坂迄の内を能トする也
 たかの川ニハ壹口(手か)も無キもの也 随分紫いろこぎ 和らこぎ石ノ中ニ 白キものあるを あしぎと
 するべし 只色の紫色成るがよし 鉄の杵にてあらくく
 だき

其上を石白ニかけ 三扁斗りセイこう口ふるひ 随分
 細ニして ひいとろも右同断 せむこうふるひなり
 藥掛け様 右に記ス通り也
 黒樂(樂)ニ白繪入ル事
 心(必)々 人ニ他言無用也 併 其方 入ル事にも相成
 かくべつ御勝手ニも相成事二候はゞ 口授尤 二候
 白繪拵様 左記ス

一 信樂上白土 十五瓦
 一 唐土 五瓦
 一 白玉 二拾目
 右能すりて ふのりニてとき 繪様の下ニぬるなり

石式色能すり ふのりニてとき 上ハぬりに之其上
 へ 三条山焼白樂くわん入らすと云樂有をもちぬ のり

27 より宜敷出来る也 鴨川石の事左二記ス

一 鴨川紫石 今出川より上ハ車坂迄の内を能トする也
 たかの川ニハ壹口(手か)も無キもの也 随分紫いろこぎ
 和らこぎ石ノ中ニ 白キものあるを あしぎとするべし
 只色の紫色成るがよし 鉄の杵にてあらくくだき

28 其上を石白ニかけ 三扁斗りセイこう口ふるひ 随分
 細ニして ひいとろも右同断 せむこうふるひなり
 藥掛け様 右に記ス通り也

29 一 信樂上白土 十五瓦
 一 唐土 五瓦
 一 白玉 二拾目
 右能すりて ふのりニてとき 繪様の下ニぬるなり

30 一 豊後土白土 二ても 一色
 備前燒ケ山白石 十瓦
 是を上とする也
 日の岡大白石 三瓦五分
 右式色能すり ふのりニてとき 上ハぬりに之其上
 へ 三条山焼白樂くわん入らすと云樂有をもちぬ のり

*鴨川石・既述したが、乾山も釉薬に鴨川紫石を使用、猪八は黒樂製作に用いている。京都鴨川、今出川から車坂間の石を良しとしており、高野川にはなく、色は紫一色のものに限るという。

仁清伝には、茶入・春慶楽に洛北貴船川産、貴船紫石の使用がみられる。

一 黒樂二白繪入ル事
 *黒樂二白繪入ル事・猪八の得意とした技法である。「他言無用」とあるが、聖護院には黒樂に白繪を入れた茶碗が伝世。宝珠文様があり、発掘された公家屋敷跡からの出土陶片には山居図が描かれている。

用いる白繪具には二種があり、凹凸部に別けて記すが、凹部分は地塗り用・火に弱い白土、凸は絵付け部分用・火に強い白土とある。初代乾山は、信樂白土、豊後赤岩白土、備前八木山白土などの使用も記す。

黒樂に白繪を入れる技法は複雑である。はじめに、ふのりを交ぜた白繪具にて惣地塗りをする。その上に紺青、黒繪具、いずれの繪具にても良いが文様を描き、そして上葉(釉薬)を掛ける。
 詳しくは、上葉は本焼用、三条粟田口焼では「くわんにゅう入らす」と称しており、それにふのりを交ぜてよく溶き、器物に掛ける。

貫入いらずとは亀裂の入らない釉薬である。さらにその上に内焼用釉薬を一度塗り、紺青繪具、黒繪具を用いて絵付けをする。繪具の調査は別に記すところがあるが、鉄繪具には鉄粉をまぜ、紺青は交ぜものをせず単味がよく、ふのりを交ぜる。

*三条山焼白樂くわん入らす・三条粟田口焼において用いる本焼用上葉である。
 「白樂」は白繪具ではなく、透明釉薬・上葉のことである。火に強く、ひび割れの出ない釉薬である。



鉄粉・鍛冶図 師宣『和
国諸職絵つき』貞享二
年 早稲田大学図書館

光琳絵手本(上)と猪八
藍絵松竹梅図茶碗
円照寺 杜若図茶碗蓋



一 黒繪鉄粉 百目
一 南京薬 十匁
右鉄粉ハ カミソリかち(鍛冶) 又ハ外この打物等 細
工致し候時 鉄を火に入レ槌ニて打候節 はらくとち
り候鉄のかは也 能水干して白ニてひき、右のゴス(呉
須)モ入 能細ニすり ふのりニてとき 内焼物繪

一 紺青 一味也
又 あんなん(安南) 雲屋臺 松竹梅など申

一 紺青 壹匁五厘
随分青キ所を水干して 斗リ 能く細ニすり
ふのりかき也

一 黒繪ハ右二記ス山竈 同前
一 白粉 百目
一 白玉 四十匁
一 白粉 四十匁

③④ 一 黒繪鉄粉 百目

一 南京薬 十匁 但し黒胡須の事也
右鉄粉ハ カミソリかち(鍛冶) 又ハ外この打物等 細
工致し候時 鉄を火に入レ槌ニて打候節 はらくとち
り候鉄のかは也 能水干して白ニてひき、右のゴス(呉
須)モ入 能細ニすり ふのりニてとき 内焼物繪

③⑤ 二も此繪の具ニて 墨色こきうすき 墨色くま(限)

一 自由ニ書事也 繪は残し置之に 石琳(光琳) 又
ハ渡邊氏被書下繪本 其外詠主 物好次第 此方同名
より繪の風に才可申事 右同 青繪

一 紺青 一味也
又 あんなん(安南) 雲屋臺 松竹梅など申

③⑥ 一 紺青 壹匁五厘

随分青キ所を水干して 斗リ 能く細ニすり
ふのりかき也

一 又白繪ニて 梅 其外艸花竹木等を書くことを同名
致し被置風ト 人々好ミ可有事 右地ぬり白繪を以テ
書也 内焼繪具

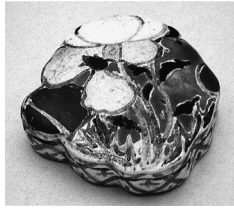
一 黒繪ハ右二記ス山竈 同前
一 白粉 百目
一 白玉 四十匁
一 白粉 四十匁

*墨色(黒繪具) 仁清伝では鉄に黒呉須を混入。が、乾山宛案の黒繪具は岩白緑が主業。白絵具同様、絵師の用いる本絵具に等しく、陶面に絵圖の描写・表現を可能にした絵具。鉄粉は、灰釉を基本とするが、着色剤に鉄粉を用い、黄色・藍色・褐色・黒色・天目釉などが作られる。京都では黒染など鴨川石から鉄分を採取することもあるが、溶融温度は高く、高火度焼成が必要となる。中国では漢代に始まり、日本では茶の湯の盛行に伴って天目茶碗・茶入、庶民のやきもの・雜器に多用された。

*石琳・光琳の誤記であろう。光琳に關しては、『陶磁製方』に、乾山焼創始に当たり、兄光琳とも相談。最初の絵は光琳自筆とするなど、規模・風流は今に残ると記述。乾山焼は陶器の絵付けに絵圖的表現を試みるが、やきものの域を超え、新企画として人氣を得る。絵師であり、染織、漆芸など工芸意匠家であった光琳の参加は大きく、さらに専門絵師渡邊素信の協力を得るなど、作画・様式上の準備を調える。

一方、やきものは火との勝負である。焼成には熟練陶工二代仁清、孫兵衛の技術が加わり、光琳・素信の絵付け・乾山の書による雅れるなど、画讀様式が考えられた。茶の湯者には国内外の写しもの・懷石道具、流行を追う人々には光琳雛形の意匠・文様を取り入れるなど、白絵具を用いて草花を描くことは、今なお好まれ続け、二代乾山猪八はそれを継承。乾山からは光琳、渡邊氏(素信)の描く手本を受理。乾山の江戸下向後、聖護院門境に本焼・内焼ともに勤めていた。

*古南京物・古染付の意である。
*青コス…呉須。染付など代表的な青色絵具、上絵付けでは黒色絵具の顔料となる。乾山は南京茶碗薬とも称するが、中国渡来の天然呉須、唐呉須・コバルトをいう。黒呉須は南京下の呉須。鉄絵具の顔料。内焼繪具



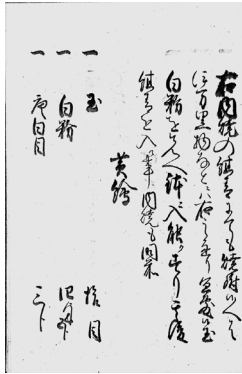
黄繪具・猪八 色絵芥子
図香合
モントリオール美術館



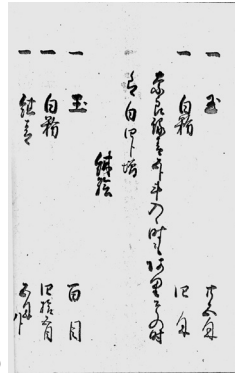
伊万里物・猪八 色絵伊
万里地春草図猪口



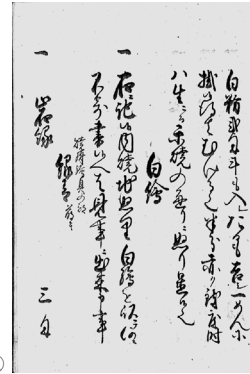
伊万里物・猪八 色絵伊
万里地絵替り輪皿



④③



④②



④①

- 一 赤繪 赤繪
- 一 赤薬下地二ぬり候 黄土斗 水氣なく ふのり斗りにてとき 尤うす(薄) ふのりよく候 白粉少シ 黄土拾匁のところへ
- ④① 白粉式匁斗も入したるも吉シ 一めに掛候得はむける也 半分赤ク致度時ハ 生にて樂焼の通り二ぬり置候也
- 一 右二記 候内焼地ぬり 白繪を以テ 何二不寄書候へは 見事二出来申事
- 一 岩緑 三匁
- 一 玉 廿五匁
- 一 白粉 四匁
- 一 白粉 四拾五目
- 一 紺青 百目
- 一 紺青 五匁八分
- ④③ 右内焼の紺青にても 焼附候へは 伊万里物など二ハ右の通り宜敷候 玉 白粉を先へ鉢二入 能クすり 其後紺青を人ル事 内焼も同前

黄繪



赤繪(袖下)・猪八作
品にみられる「乾山・
深省」印

一 赤繪 一 赤繪は、一般に赤繪具を基調としたところからの名称である。錦窯を用いて焼き付けからの名標である。伊万里焼を赤繪と稱し、用語の始まりは酒井田柿右衛門家の文書に確認できる。技法の始まりは中国宋代磁州窯の赤繪とされるが、ここではその赤繪とは異なり、袖下、赤薬下地に塗る黄土である。黄土に少々白粉、ふのりを交ぜ、素地に塗る。が、生掛けの場合はいよとして、素焼上では一遍に塗れば剥げが生ずる。片身分けの場合には生掛けにするという。

一 白繪 一 白繪は、如何ようの器物であれ、内窯地塗り用の白繪具が適する。

一 焼附画具の部 一 ここからは伊万里焼素地上に用いるなど、上繪具に関する事項である。

* 焼附画具 一 上繪付けに用いる繪具は、大方内焼用繪具と同じである。ビードロを入れるか否か。ビードロは伝統的な内窯繪具には用いないが、焼成時間の短縮、繪具の密着性を高めるなど、上繪付け繪具特有の調合である。

一 緑青萌キ 一 緑青萌キ

一 岩緑か奈良緑青か、その使用によって白粉の分量が変わる。

一 紺繪 一 * 紺繪具 一 内焼繪具であるが、伊万里焼の素地にも適し、製し方は、鉢に白玉・白粉を先に入れ、よく搦りつぶし、その後紺青を入れるという。

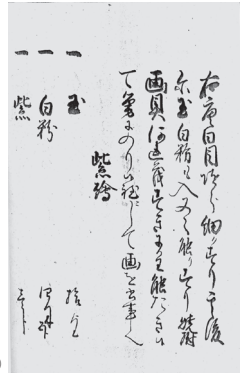
一 黄繪 一 * 唐白目 一 唐白目はよくよく搦り、白玉・白粉と合わせて尚よく搦り、にかかわるよく炊き、筆に含ませ絵の描き易い状態にする。



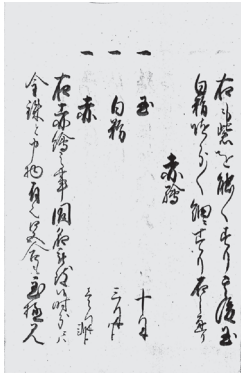
紫絵具・猪八 交趾写し
小鉢(建水)
大英博物館



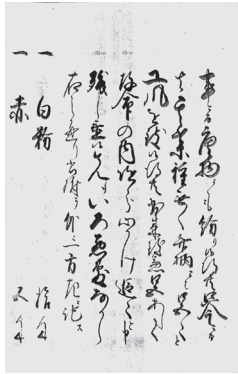
赤絵具・猪八 赤絵花唐
草文香合
モントリオール美術館



44



45



46

- 一 玉 拾目
- 一 白粉 四匁五分
- 一 唐白目* 三分

44 右唐白目 随分細クすり 其後に玉 白粉も入 又々能クすり 焼附画具 何れもすぎにかは能たき候て 筆にのり候程ニして 画を之事也

- 一 玉 拾匁
- 一 白粉 四匁五分
- 一 紫 壹分

45 右も紫を能くすり 其後玉 白粉 随分く細ニすり 右の通り

- 一 玉 十匁
- 一 白粉 三匁八分
- 一 赤 壹匁貳分

右赤繪の事 同名被致候時分ニハ 金銖と申物有之の色合も至極見

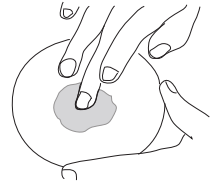
46 事ニテ 唐物ニも粉り候得共 只今ニては其藥種無く 弁柄ニて色々と工風を致候得共 出来 致兼 色あしく 存命の内 随分心かけ追々と申残し置候 先ツいろ 悪敷ながら 右の通り才附テ 外ニ一方 左ニ記ス

- 一 白粉 拾匁
- 一 赤 五匁

—紫繪—
顔料は同じくよくよく搗ることが必須である。

—赤繪—
*金銖・金珠は、赤色絵具の原料である。唐物にも紛れるほどの色合になるというが、「同名いたされ候時分」とあり、初代乾山、廻つて仁清時代に使われていたことを示唆している。

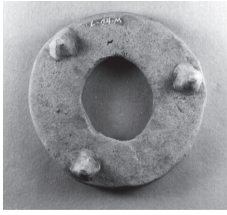
が、『陶工必用』にはすでに入手は困難とあり、乾山時代には入手もむずかしく、代わつて弁柄を使用。が、容易に気に入る色合にはならず、ここでも二種の調合例を示すが、ピードロを入れた場合、入れない場合に分けられる。入れないものは孫兵衛伝、入れたものは仁清伝・上絵具に始まり、乾山焼では白絵具・黒絵具、黄・紫など一部の色絵具に例がある。
膠を入れることは他の手立と同じである。



ゆひにてすりつふす也
指で「金箔を消す」
筆者作成



金焼附…猪八 色絵杉図
土器皿 畠山記念館
数少ない猪八造金彩作品



五徳(トナシ)…乾山焼
鳴滝陶片 石水博物館

遺方ノ画具の通り にかはにてとき候也 工風可致矣
金焼附
金はく(箔) 京万壽寺通 室町西へ入候北 つほ(壺)
やと申所ニ有り 金の代銀 時にち相違も有 焼物ニ
遣申金はく 此の壺やかきり 外のはあしく 金伯

47

随分はた(皿)のよき清水焼のうすひらたき鉢へ入レ
水少シ入レ ゆひにてすりつふす也 これをはく*
けすといふ也 寺町通り経師や衆ニたのミ けしても
ろ(ら) ふもよし 又清水焼の焼付繪 りり繪 間料い
か程と極メ やとひ候て けしてもらふも吉シ 金伯
高値成物故

48

先へ遣す事ハ無用也 さてすきホウ砂を 常の新キ
土器へ入レ 火二かけ 焼返し候へハ ふハくとほセ
のことくニ成 随分く焼返し ふつくとなり候を
おとのせぬ程ふかし 金目壹匁ニ 右のホウ砂ヲ二分
する分(随分)細ニすり入ル也 尤にかわにてとき か
く(晝也 口へに(口紅)などには一篇引 かわ

49

き候時 又一篇ぬり うすく三篇もぬり もの二さわ
らぬ様二籠へ入レ 焼様は左ニ記ス
焼附物焼方
一 大きなるものハかまニ立て掛ケ並 茶碗などは
(図) かくのことく *ことく(五徳)といふ物(こし(らへ) 茶碗内
繪などあるときワ そこへ當ルところ 此通りニして 随分

遺方ノ画具の通り にかはにてとき候也 工風可致矣

金焼附

一 金てい 壹匁

一 すきほうしや 二分

*金はく(箔) 京万壽寺通 室町西へ入候北 つほ(壺)

やと申所ニ有り 金の代銀 時にち相違も有 焼物ニ

遣申金はく 此の壺やかきり 外のはあしく 金伯

48 随分はた(皿)のよき清水焼のうすひらたき鉢へ入レ

水少シ入レ ゆひにてすりつふす也 これをはく*

けすといふ也 寺町通り経師や衆ニたのミ けしても

ろ(ら) ふもよし 又清水焼の焼付繪 りり繪 間料い

か程と極メ やとひ候て けしてもらふも吉シ 金伯

高値成物故

49 先へ遣す事ハ無用也 さてすきホウ砂を 常の新キ

土器へ入レ 火二かけ 焼返し候へハ ふハくとほセ

のことくニ成 随分く焼返し ふつくとなり候を

おとのせぬ程ふかし 金目壹匁ニ 右のホウ砂ヲ二分

する分(随分)細ニすり入ル也 尤にかわにてとき か

く(晝也 口へに(口紅)などには一篇引 かわ

き候時 又一篇ぬり うすく三篇もぬり もの二さわ

らぬ様二籠へ入レ 焼様は左ニ記ス

焼附物焼方

一 大きなるものハかまニ立て掛ケ並 茶碗などは

(図) かくのことく *ことく(五徳)といふ物(こし(らへ) 茶碗内

繪などあるときワ そこへ當ルところ 此通りニして 随分

金焼附

*金はく…金箔は高価である。やきもの用に
京都市万壽寺通り室町西へ入ル北、壺やと
称する店のものに限るといふ。初代乾山も記
述したが、はじめに箔を消す必要があり、清
水焼など薄く平たい鉢に金箔を入れ、少し水
を加え、指で掃りつぶして泥状にする。今で
は金銭を払い、寺町通りの経師屋衆、清水焼
の絵付け職人に頼むこともできるが、高価な
もの、金箔の代金などは先払いはしない方が
よいと注意をする。

原料から絵具のこと、細工から焼成など、
伝書には京都の地名・店名がしばしばみられ
る。筆者が同地に通ずる人物であることを伝
えるが、初代乾山と同じ用語、絵具・技法
の説明など、種々の共通点・接点が見い出さ
れる。が、当伝書には仁清陶法・本焼関係、
孫兵衛陶法・伝統的な内窯陶法・記載はなく、
時代の相違、興味の衰退、内窯陶法を求める
活発な動きなどが考えられる。

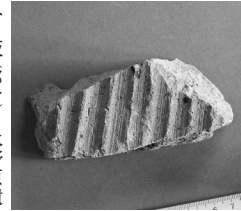
*はくを消す…金箔の項の続きである。自
ら「箔を消す」場合は、清水焼など磁器の平
鉢に入れ、水を加え、指で掃り潰すが、猪八
時代には寺町の経師屋衆、また五条坂のやき
もの職人に頼み、消してもらうことも可能で
あったことがわかる。

*すきホウ砂…生の硼砂。焼返して用いる
が、金一匁に融剤として硼砂二分とあり、接
着剤として膠を交せる。乾山は生硼砂を使用。
焼附物焼方

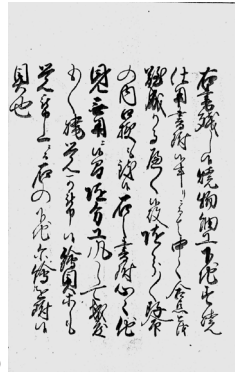
*焼方…察語めには、器物の大小、形状に
従つて異なる道具が使われる。歪み、張り付
き防止には、トナシ(土鎮)を使用。板状・
大きな器物は、立て掛ける、皿・碗など重ね入
れには五徳型の土鎮を用いる。

*五徳…一般に鉄瓶・釜などを支える三脚・
四脚の丸い台である。鉄製・陶製、台には先
を尖らせた目を付けるが、やきものでは器物
と同じ粘土で造り、一度限りの使用。耐火度
の高い赤土であれば何度の使用も可能であ
る。重ね焼きの折、器物の間に挟むが、立て
掛ける板状の器物には、先を尖らせた土橋を
作り、ふらつかぬように乗せる。

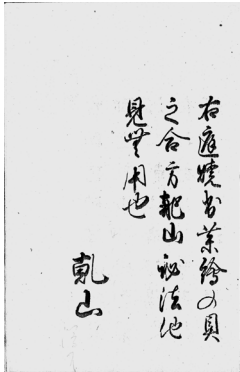
へこ板(部分)・水野原遺跡
新宿区(大西3-55)



51



52



53

⑤1 (図) ことく(五徳)の目さきほそくとからし 模様をよけ たんく(だんだん)竈の内のり ふたにさわらぬ程の高サ二つめとなりどうし(隣同志)つき合ぬ様二いこ(動)かして見て ふわくとせぬ様二入レ 外竈のふちをとんくと にきりこふし(握り拳)てたゝき見候へハ ふらつき候ても こけぬことしれ申候ケ様(斯様)の事共才残し不申とも知れき(た)ることながら たんくしゆれん(だんだん手練)のうへハ 工風付く物なれともあら増ヲ才残し候

(図) 又立かけ候て焼候ものも へたて(隔て)に ケ様二とかりたる土橋ヲこしらへ 立掛ケタルへたてに入ル也 是も我等存命の内遺候へこ板(へこ板)のわれ可有事也 とかく勘弁して焼事也

⑤2 右書残し候焼物細工 下地 素焼仕用 書附候斗リニては 中々合点も難成かるべく候故 随分く存命の内口授も致候 右の書附 心(必)々他見無用ニ候間 随分工風して 幾度もく焼 覚可被申候 繪具等も覚被申上ニて 右の下地に繪を附候具也

右庭焼書 薬 繪の具之合方
乾山秘法 他見無用也
乾山

五徳は模様を避けて置くが、詰めた後には外側の窯をトントンと叩き、倒れぬことを確認する。
*土橋：陶板に幾筋もの三角錐の粘土紐をはり付け、土鎮としたもの。器物を立て掛け、隔てとして用いる。
*庭焼書：庭焼・席焼は、一般に公家・武家・富裕町人の邸内などに設けた内窯・低火度焼成のやきもの製作をい。陶工を招き、自らも楽しむなど、広義には御用窯も含めるが、当伝書には細工・下地・繪具・釉薬・素焼・内焼・本焼などを記し、存命であればいづれも口授。何より自ら試み、習得することが大事、陶法書の諸事はその上での教えであると述べる。
同書は、乾山焼における商標、特色となった様式、釉薬・繪具の秘伝が主体。内容、巻末の跋によつて、二代乾山尾形猪八の陶法書であると判断するが、猪八は門人清吾のため同書を自書。清吾はそれを京都において知己となった萬古焼祖沼波吾左衛門へ譲渡するが、真偽の程は別として、猪八は江戸へ下向、晩年には京都へ戻り、陶法書を自書、清吾に授けたものと解される。
沼波吾左衛門・弄山は伊勢桑名の富商である。茶の湯、やきものに執心。京都に滞在、表千家七代千如心斎(一七〇六―五二)に茶の湯を学び、その折、清吾との交流も生じ、同書を乞うが、初代乾山甥小西彦右衛門とも千如心斎の朝茶事に同席。数寄者として茶焼を始め、やがて本格的な製陶へと進むなど、ことによると彦右衛門の仲介によつて乾山焼への興味が促されたか。宝暦年間(一七五一―六四)には江戸向島小梅村別邸に窯を築き、萬古焼と称したことが伝えられる。伝書の活用、乾山焼との関わりは如何であったか。964、965頁に寸考を掲載したが、ロクロ目跡などから窯や窯道具は京焼形式を用いたものと考察。萬古焼を扱う萬古堂は江戸今川橋にあり、多くの趣味者が入り、三世三阿時代には佐野宗達なる人物がおり、『乾山秘書』に「萬古三阿至玄」にやきものを習うと記す。

『陶器密法書』 卷末(二) 萬古堂三世淺茅生隱士三阿による跋文



右陶器傳法之書者
御室乾山工風之藥
法也乾山者洛陽之
住以磁器為業其精
工氣象風流自以為

樂可謂神手也晚年
蒙於準后宮之命赴
東武善住根岸製陶
器後又歸洛而終焉
有弟子清吾者又妙
手也乾山筆法來自
書以授清吾矣又萬

古之祖姓沼波稱吾
左衛門号弄山十ノ
如心齋之門人好茶
道於洛之旅亭與清
吾交厚臨干離別之
期懇望乾山自筆之
書而以還弄山業益

進矣尚加工風而終
閑萬古一流之業普
最鳴于世矣至乎既
三世也今將依尊命
難然止而寫自書傳
法之冊以奉呈上於
爰撮其事記于卷末

畢矣

寛政四壬子夏月



萬古堂三世
淺茅生隱士三阿誌

54 山水有清音(丸印)

右陶器傳法之書者 御室乾山工風之藥法也
乾山者洛陽之住 以磁器為業 其精工
氣象風流 自以為樂 可謂神手也
晚年蒙於準后宮之命 赴東武
善住根岸 製陶器 後又歸洛而終焉
有弟子清吾者 又妙手也 乾山筆法
自書 以授清吾矣

55 晚年蒙於準后宮之命 赴東武

善住根岸 製陶器 後又歸洛而終焉
有弟子清吾者 又妙手也 乾山筆法
自書 以授清吾矣

56 又萬古之祖 姓沼波 稱吾左衛門号弄山

千ノ如心齋之門人 好茶道
於洛之旅亭 與清吾交厚 臨干離別之期
懇望乾山自筆之書 而以還

57 弄山業益進矣 尚加工風

而終閑萬古一流之業 普最鳴于世矣
至予既三世也 今將依尊命難然止
而寫自書傳法之冊 以奉呈上
於爰撮其事 記于卷末畢矣

58 寛政四壬子夏五月 (方印) 淺茅堂

萬古堂三世

淺茅生隱士三阿誌(花押)

『陶器密法書』卷末の跋文である。

漢文体、当書を入手した経緯を記すが、「萬古堂三世淺茅生隱士三阿誌」とあり、寛政四年(一七九二)の記述である。三阿は萬古堂三世、号淺茅生、三阿と称し、このたび「至玄」(『乾山秘書』)の名を見つけ出したが、梅山居・三阿亭などと呼ばれた俳人であり、江戸の陶器問屋萬古堂三世、今戸に住しやきもの造り、俳人大島蓼太へ織部写しの風炉用小板を焼いて贈るなどの記録が残る(『墨水遊覧誌』)。

「乾山」は初代と二代が混淆か。京都の人、独自の風流を以つて一流を築き、晩年には輪王寺宮の命を蒙り江戸へ下向。根岸に住して陶器を製するが、再び帰洛。弟子には清吾なる人物がいたという。清吾は妙手、乾山は自ら陶法書を認め与えるが、京都において千如心齋に茶の湯を学ぶ沼波弄山と邂逅、同書は乞われて弄山の手に渡る。書中にはしばしば存命ならばとした言がある。老齡を証するが、老匠に学ぶ清吾とは如何なる人物であつたらう。内窯主体。陶工か、趣味人か。京都であれば三世呉介、猪八の縁者か、尚古齋・三代目乾山を名のつた宮田弥兵衛との関わりは如何であろうか。

跋文には、寛政四年五月、尊命によって当伝書を書写、謹呈するとある。黙し難くともあり、尊命とは誰であろうか。追記によれば文化四年(一八〇七)九月、当書は喜之なる人物が書写。が、喜之の詳しいことは解らない。

弄山は竹川竹齋の曾祖父政榮娘八百を妻とした。八百は寛政二二年(一八〇〇)に没するが、二男一女があり、二人の男子五郎兵衛惟長・満蔵寛長は揃つてやきものを好しとはせず、満蔵は他家を相続。沼波家は五郎兵衛が継承し、三阿はその子息と考える。跋文を認めた寛政四年、祖母はいまだ健在。萬古堂三世三阿は今戸に住し、やきもの製作に従事。堤焼針生乾馬家蔵『乾山秘書』卷末には佐野宗達真義なる人物が、「傳心庵」及び「萬古三阿至玄」に陶法を習うとある。淺茅生隱士三阿、『密法書』の跋文に結びつく。

如心齋会記(寛保二年)・萬古焼森家伝書(天保三年)

沼波弄山が、小西彦右衛門とともに表千家如心齋朝茶事「寛々斎追善十三回忌」に参加した折の茶会記である。寛々斎を偲ぶ道具組であり、各々に所縁のある人物が招かれ、弄山も若年時の師を寛々斎としていた。

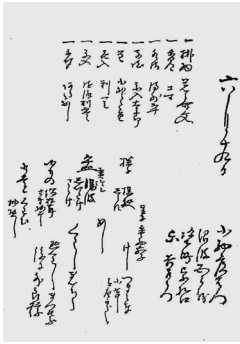
六月十九日

客は、小西彦右衛門・沼波五兵衛・塗師宗哲・樂吉左衛門

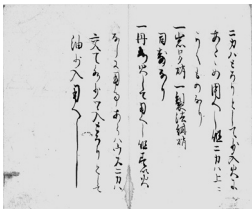
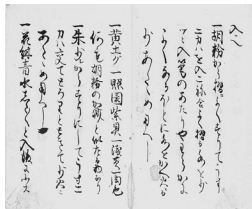
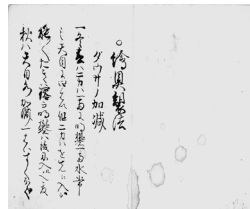
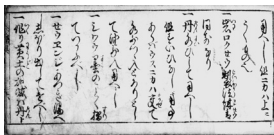
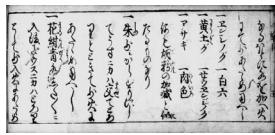
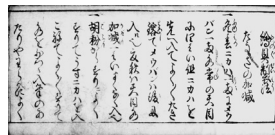
茶席は、

- 一 掛物 寛々斎文
 - 一 香合 コマ
 - 一 水指 備前平
 - 一 茶碗 宗入太郎
 - 一 茶釜 阿弥陀堂
 - 一 花入 利一重
 - 一 茶入 随流斎
 - 一 茶杓 ありとおし
- 懷石(精進)は、
揚魁・茄子・つまみな・小芋・青唐からべし・湯波・しいたけ・ささげ・くわい・柚べし・塩松茸・さき梅干・めしなど
菓子は、饅頭、惣菓子まつ葉、後に外郎粽などが供された。

表千家如心齋会記 寛保二年(一七四二)「寛々斎追善十三回忌」



(左図上)『万物絵本大全調法記』(卷之上) 下村房供画 元禄六年(一六九三)刊
(左図下)森家蔵陶法書
天保三年(一八三二)朝日町歴史資料館



繪具製法

だうさの加減

一 冬春ニカハ一匁にメイパン

一 夏秋ハ水常の天目目四杯

但ニカハ先へ入てよく

くたき鎔てメウパンハ後

に入ル也

減一はいすくなく入也

一 胡粉からすり二よくすり

てうすニカハ入こねてよく

くすりて水を少しつゝ

入筆のあたりやわらかによ

くなるほどに水を加へ火に

て少あたゝめ用へし

(二 エンジノグー一匁)

一 黄土グー一セウ エンジノグ

一 アサギ一肉色

何も胡粉の加減と似たるも

のなり

一 朱少シからすりにしてう

すニカハ交てとろりととき

て少火にあたゝめ用へし

一 花紺青水したゝ二入後

にウスニカハとろりとして

少入火にあたゝめ用へし

但ニカハ上二うくもの也

一 岩口クセウ製法紺青同前

なり

一 丹水ひして用へし但すい

ひなしニ用事あらバウスニ

カハ交て水少つゝ入とろり

として油少入用へし

右図上は『万物絵本大全調法記』「繪具製法」である。下図は萬古焼陶法書に書写された同文である。絵付けの参考としたか、しばしば後世の伝書には出版物からの抜萃がみられる。

沼波弄山は、茶の湯・やきものに執心。京都にあつて表千家寛々斎、如心齋の門を潜る。乾山焼工人清吾とも出会い、乾山焼陶法書を受理するが、弄山の萬古焼開窯に繋がるその背景、教養、やきものへの関心を寸考。

茶の湯者、銀座役人小西彦右衛門らとの交わり、それも縁となるなど乾山焼への関心を深めたものではなかつたか。

寛保二年六月十九日、沼波五兵衛(五郎兵衛・弄山)は如心齋の朝茶事に招かれる。会記によれば先代寛々斎追善十三回忌、相伴客は小西彦右衛門、沼波五兵衛(五左衛門)、塗師宗哲(中村宗哲)、樂吉左衛門と想定する。彦右衛門(方淑)は銀座役人、光琳庶子・乾山の甥であつた。茶の湯執心は

如心齋らの制定した「七事式」にも参加(小西家文書)、実母「さん」は寛々斎門人町田秋波(一六五九-一七三三)の妻

という関係にあつた。清吾との出会いもあるが、弄山と乾山焼との関わりは、茶事に同席、親しさを増した彦右衛門の仲

介なども想定されよう。彦右衛門は親類書覚に「従弟尾形伊八郎(小西家文書)」と記す。一方、乾山の書状には京都同様、江戸乾山焼もよろしくとあるなど、彦右衛門と乾山及び

二代猪八、沼波と乾山焼の橋渡しには小西彦右衛門の姿が浮かぶ。

上段図萬古焼の陶法書は森家に伝承。一五、九×一〇、五寸、二三丁、「天保三辰九月中頃二改ル也」とあり、途絶えていた萬古焼を復興した森有節(一八〇八-一八二二)千秋兄弟の時代に当たる。乾山・猪八の活躍後、欽古堂亀祐が「陶器指南」(文政一三年刊・一八三〇)を刊行する。当書はその後

間もない折の陶法書である。上段に図示したが、書中、繪具の調査・製し方に加え、絵手本『万物絵本大全調法記』(元禄六年刊)の抜萃・書写があり、絵付け陶器への興味が分明。

弄山は京都において「陶器密法書」を受理。乾山焼の陶法、様式、猪八乾山の風趣は如何に萬古焼に活かされたのか。弄山

の目指したやきものほどどのようなものであつたのか。次にそれを一考したい。

1、二代乾山猪八



赤絵唐草文陶片
京大病院構内遺跡
出土



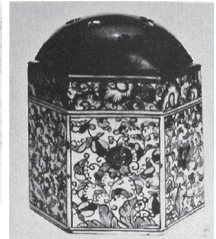
『佐羅紗便覧』
安永七年刊(一七七八)
同手の文様は猪八作品にも描かれていた。手本としたか。

2、猪八模倣・乾山銘作品

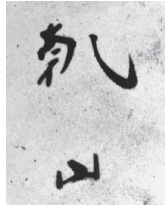
左図の乾山銘は「陶工乾山代敷考」に伊(猪)八乾山とする盃台にある銘である。模倣と考えるが、赤絵の唐草・青緑の点があり、古萬古類に属するものと推考する。



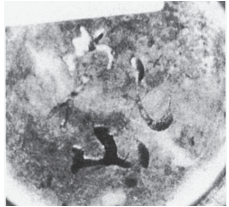
猪八模倣盃台の銘



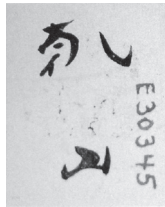
猪八 色絵唐草文香炉
フリア美術館



猪八模倣 色絵唐草文六角火入 落東遺芳館



猪八 色絵唐草文火入
ビーボデー・エセックス博物館



猪八模倣
色絵唐草文六角盃代
ビーボデー・エセックス博物館



猪八 絵高麗(唐草文) 杓立



猪八模倣
色絵唐草文盛盞瓶
ロイヤル・オンタリオ博物館



乾山焼は尾形深省江戸下向後、享保中頃尾形猪八が二代を継承。京都聖護院門境内窯を築き、工房を設ける。初代の乾山様式を踏襲。やがて猪八独自の様式を考案するが、聖護院には猪八作品九点が伝世。一六弁菊花紋章を施した黒惣地塗り釜・瑠璃釉惣地塗り水指、藍絵松竹梅図茶碗・碗台・片身替り茶碗など、一六弁菊花紋章は聖護院との関わりを証し、猪八の活動環境を推考させる。交趾・赤絵・藍絵・オランダ様式などの水指・火入・香炉・平鉢・酒器などもあり、特に赤絵は更紗文様を主体としており、近年発掘された聖護院窯跡(京都大病院遺跡)からは同文様を施した陶片が出土した。

併せてここに猪八模倣の作品があり(拙著『尾形乾山全作品とその系譜』、その銘を掲載(野村重治著「陶工乾山代敷考」)。猪八乾山にも同様の火入、盃台などがある。猪八類似の銘、赤絵唐草には青緑の点があり、古萬古焼の装飾に類似する。同手の銘、文様は種々伝世し、多く更紗文様。これも古萬古焼に相通。さらに書銘を用いたものを左頁上段に図示したが、

乾山模にハ此通書銘も御坐候とあるなど、弄山に『陶器密法書』を譲渡した清吾なる人物の関わりも浮上する。清吾は師から妙手と賞された。丁寧な成形と丹念な絵付け・彩色など、猪八模倣の作品群は、鉄分の多い粘土に特色があり、粒子は粗く、京焼土とは相異なるものもある。萬古焼との関わりを推考するが、現状からは未だ明らかには為し得ない。

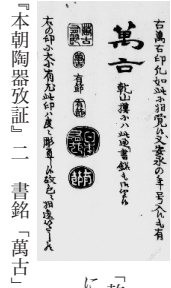
3、萬(万) 古焼・沼波弄山(古萬古)



古萬古
オランダ写手焙
桑名市博物館



右手焙書銘
「萬古」



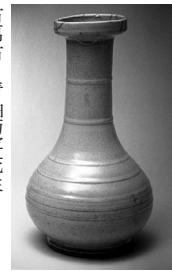
「乾山模
にハ(略)」



「本朝陶器攷証」二 書銘「萬古」

古萬古 色絵盛蓋瓶

古萬古 色絵窓山水文御社酒器
底部に墨書「安永丑年」(一七八二)
朝日町歴史博物館寄託



古萬古 青釉菊写花生
岡田文化財団



古萬古 鉄釉瑠璃釉流御社酒器
「萬古不易」(印)
朝日町歴史博物館寄託



古萬古 赤絵振文酒器
岡田文化財団 天明四年箱書



古萬古 交趾写笠牛香合
岡田文化財団

下図 綉絵茶碗は、
二〇〇五年、朝日
町小向村窯跡遺物
中からも同じ器体
が発見された。



古萬古 彫三鳥写筒茶碗
岡田文化財団



古萬古 安南写鉢
岡田文化財団



古萬古 南蛮写耳付水指
岡田文化財団



古萬古 綉絵鯉文茶碗
朝日町歴史博物館

萬古焼に関しては満岡忠成、井上喜久男の論考がある。桑名地方では古く須恵器・灰釉陶器を製し、江戸期、延宝頃には尾張の陶工らが桑名焼を生産していた(『森田久右衛門日記』延宝六年・一六七八)。享保一七年(一七三二)には廃窯となるが、江戸の萬古焼は元文又宝暦の頃、富商沼波弄山(一七一九―一七九)が開窯したと伝承する。

弄山は天正・慶長頃から続く桑名の豪商。名を重長、通称五郎兵衛・五左衛門、寸方齋を号とし、同地船馬町に本宅を構え、江戸神田今川橋北詰に陶器問屋を経営した。若年より茶の湯、楽焼を好み、宝暦年間(一七五二―一七六四)、江戸向島小梅の別荘に本窯・内窯を築窯する。手代安達新兵衛、陶工柿沼文則(笛次郎)らが活躍、今日その作品を古萬古と呼ぶが、安永・天明年間(一七七一―一七八九)を最盛期とし、印「萬古」によつて遠い昔、古のいろいろ、「萬古不易」によつて不変・永遠性、古物の模写を表示するなど、製品には楽焼・唐津・高取・織部焼などの和物、赤絵・染付・青磁・交趾焼の唐物、高麗ものでは彫三鳥、鳥ものでは安南・南蛮焼、阿蘭陀様式などの写しものが伝世する。緑青を着色剤とした青磁、瑠璃釉、また赤絵に特色があり、鮮明な伊万里焼、落ち着いた仁清焼に比して、赤色はいくらか暗色。文様も異国的な更紗、オランダ風の絵付けなど、乾山焼の影響は、京焼における古典の意識とその表現、陶法における窯と窯道具、手ロクロなどの製作道具に認められる。

天保三年(一八三二)、弄山の没後、伊勢に途絶えていた萬古焼が復興する。森有節・千秋兄弟によるが、「有節萬古」「再興萬古」と称されるなど、製品は茶道具類から時代を反映、急須・涼炉などの細工物・煎茶道具が主流となる。

安政二年(一八五五)、竹川竹斎(一八〇九―一八八二)は南勢射和村の自邸に築窯、「射和萬古」も始まるが、諸国からは工人が集合。三浦乾也養父井田吉六もその陶工の一人であった。

以下は、右『陶器密法書』
卷末(二)追記、釉薬の調
合・土の配合を記したもの
である。

⑤9	山紫 神(信)樂石 アク 白玉 コス(ゴス)	十目 五匁 五匁 三分	⑥3	紺青 緑青 アク 石	五匁五分 式匁五分 八拾目 百目	⑥7	豊後土 大日石 ヲランタ白下引ヨワ焼 豊後土 引ヨワ焼 日之岡石 織部青	百目 六拾目 拾匁 六拾匁
⑥0	山青磁 神樂石 アク 白ロク 紺青	拾匁 拾匁 五分 五分	⑥4	ヨワ 神樂石 アク 生瀬石 アク	六合 壹升 壹升三合	⑥8	山口坂白弱石 並瀬戸青 シンチウ粉 瀬戸黒 水タレ 柿 水タレ	壹升 壹升 拾五匁 拾五匁 壹升 三升
⑥1	山青磁 神樂石 アク 青玉 紺青	百目 百目 五拾目 五匁	⑥5	キヨリ 唐之土 紺青 石 キヨ 白玉 唐之土	フイコニモナル 百目 式拾五匁 式拾五匁 百目 式拾目	⑦0	仁清茶碗繪写 紅利子(梨)地下引之法 白繪土 石 唐之土 黄土 弁柄	七十目 三匁 四匁 六匁 五分
⑥2	山青磁薄筆 青玉 アク 白緑 紺青 大日石	五匁 四匁 五分 五分 十目	⑥6	キ青磁 唐之土 日之岡石 白緑 紺青	百目 三拾七匁 三匁 目無印	⑦1	右赤樂素焼器之上江かけ樂ニして上樂二篇 少シ右下引斗にてなまし不懸候ハ、黄土きぬ ふるひ	
⑥3	玉 大日石 アク 紺青 緑青 平るり	三拾目 百目 五分 式匁五分 壹匁	⑦2	キ青樂 唐之土 生瀬石 中デイ 花筆 煤 ホウシヤ ヲランタ白下引焼	拾匁 六匁 四匁 四匁 四分 四分 四分 四分	⑦7	右者 是迄附渡傳書焼失ニ付 其段及言 上候ニ付 御手元之御書写被仰付候者也 干時文化四丁卯年 三月 赤胡須替ニ相成候法 唐後土 拾匁 豊後土 六匁 日之岡石 四匁 一 弁柄 四分 右者 卯ノ四月三阿坊江福岡次左衛門承り 候法 白繪右之法之内弁柄ヲ挽候而 白繪ニ相成申候由 同人被申候 文化四卯年九月写之 喜之(花押)	

三阿跋文の後方に残る記述である。
寛政四年(一七九二)浅茅堂誌から一五年が経過。
釉薬・土の調合を追加し、次のように記している。

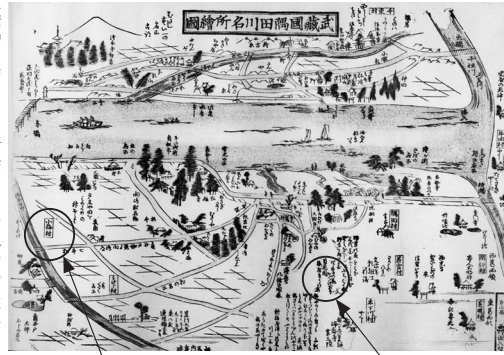
右者 是迄附渡傳書焼失ニ付 其段及言
上候ニ付 御手元之御書写被仰付候者也
干時文化四丁卯年 三月
文化四年(一八〇七)三月、書写した陶法書を焼失、
再写を許され、追記したか。詳しいことは不明である
が、釉薬の調合・土の配合、さらに続き、
右者 卯ノ四月三阿坊江 福岡次左衛門承候法
白繪右之法之内弁柄ヲ挽候而 白繪ニ相成申候由
同人被申候
文化四卯年九月写之 喜之(花押) とある。

文化四年九月、喜之なる人物が書写。書法、筆癖、
字配りなどから、追記を含め、同書全文を喜之の筆写
と判断するが、文末には白繪具の調合に関し、弁柄を
除くとある。白繪具に弁柄は不用である。その訂正で
あるが、喜之とは誰なのか。三阿との関わり、また福
岡次左衛門の詳細も伝わらない。
弄山は清吾から乾山焼陶法書を譲られた。萬古焼に
それがどのように活かされているのか。

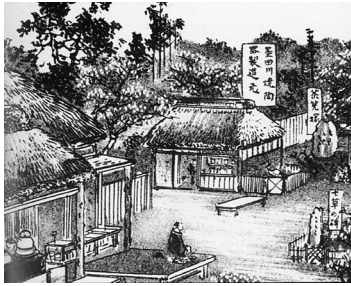
江戸萬古窯は弄山没後、三阿が三代を継承、その後
は不明。「古萬古」と称される弄山時代は古陶磁写し
を中心として、
唐物・青磁・赤絵・染付・交趾焼など
高麗・島もの・三嶋・安南・南蛮など
その他阿蘭陀焼。和物写しでは織部・高取・唐津、
さらに楽焼などがある。

京焼様式は色絵の技法、絵具類に活かされた。手口
ク口、窯と窯道具なども京焼技法と考えられるが、清
吾の作陶を見学したか、身をもって見聞した多くのこ
とが、萬古焼開窯の準備になったものと考ええる。

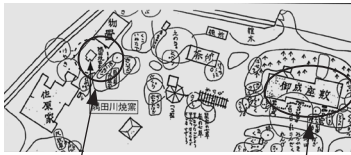
四、乾山・猪八陶法書の伝播
(二) すみだ川焼・佐原菊塙



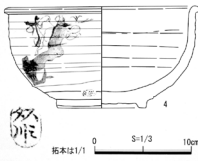
隅田川花屋敷
「百花園」
小梅村
萬古窯



武蔵国隅田川名所絵図 一八一〇年頃
『江戸の花屋敷』二〇〇八年
隅田川焼陶器製造元
『江戸の花屋敷』二〇〇八年



大正初期・園案内図
『江戸の花屋敷』二〇〇八年
隅田川焼窯
御成屋敷



隅田川焼 色絵梅図鉢
若宮町遺跡から出土 新宿区

隅田川焼 色絵梅図茶碗
ピーボディ・エセックス博物館



隅田川焼 色絵都鳥香合
『江戸の花屋敷』



隅田川焼 色絵都鳥香合
『江戸の花屋敷』



乾山焼関係陶法書を手に、江戸において最も早い時期に個人窯を開いた人物に佐原菊塙(二七六二—一八三〇)が居る。

文政三年(一八二〇)五月向島梅屋敷「百花園」(元幕臣多賀氏所領三〇〇坪)に「隅田川焼」(東鑑)を開窯したが、光琳百回忌に臨み、酒井抱一(二七六一—一八二九)の命を以って京都へ上り、光琳庶子の養子先小西彦右衛門家から「光悦ヨリ空中ヨリ乾山伝来の陶器製法」(「光悦傳來乾山陶器製書」二冊)を受理。即、滞在中に清水あこや町にある陶工尾形周平(二七八—一八三九)の門を叩き、江戸では数寄者・古美術商芳村觀阿(一七六五—一八四八)から「伊八乾山ノ藥法ノ直書」を譲られたことに端を発する(「陶器密法書」の原本か)。隅田川の周辺は早くから百姓らが副業として瓦・焙烙・火鉢などを生産していた。百花園にすみだ川焼が生まれ、名物の萩の筆とともに都鳥香合が土産物となる。

「空中より」「光悦傳來乾山陶器製書」に關しては筆者、内容も明らかにならない。何故乾山所持の伝書が小西家にあつたものか。また「伊八直書伝書」に關し、猪八とする根拠、自筆とする判断はどこにあつたのか。『陶器密法書』は萬古焼三世三阿の後に如何なつたか。菊塙へ渡るか。原本「密法書」以外に猪八自筆伝書が存在したのか。百花園は明治四三年洪水、大正一二年関東大震災、昭和二〇年には東京大空襲に遭遇、すべて消失したことも考えられる。

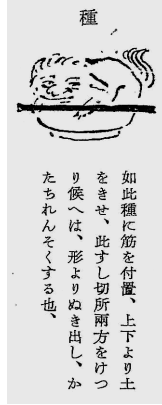
文政三年、菊塙の帰郷には尾形周平が同行した。開窯には清水六兵衛ら京焼陶工の協力もあり、冊子「すみだ川花やしき」を刊行。四方の山も遠く、山土に代わり、土は長流五〇里隅田川中洲の土を使用、が、乾山も述べたように江武の土は脆く耐火度が低い。内窯製品を主体とし、窯場には大形の手廻しロクロ、小形ロクロ、型物成形の道具、石臼などがあつたという。茶碗・香合などを作製、文様は近在の業平橋、「伊勢物語」東下りの伝説・和歌を借りて、名にしおはばいざこと問はむ都鳥 我が思ふ人はありやなしやと都鳥を選択。百花園の草花も意匠となるが、白化粧の掛け分け、片身替りの裝飾に乾山様式が見い出される。絵付けには酒井抱一も通い、貌庵の書した「世代書」には四代乾山として名を連ねた。文政七年(一八二四)正月には五代の名跡を貌庵へ譲るが、菊塙の周囲、絵師・道具商・学者など、文事・芸事に親しむ人々も多く、「角田川・スミタ川」(印章)のやきものは、江戸名所・名物の一つとして親しまれてゆく。五代目頃には素焼に絵付けを施す「席焼」などを工夫、素地は近在の今戸焼が担当、出版物にも掲載された。

(二) 猪八陶法書 写本

1、『本竈并内竈乾山秘法』 東京美術研究所旧蔵



これを持って、ゆかまさるやうにそつと引ぬき、干板の面眞すく成る板の上のせ、形をぬくかよし、

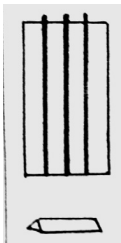
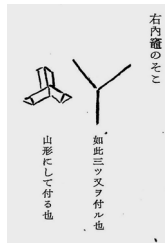


如此種に筋を付置、上下より土をきせ、此すし切所兩方をけつり候へば、形よりぬき出し、かたちれんそくする也、

『本竈并内竈乾山秘法』の奥書には次のように記されている。

右書残し候焼物細工、下地土す焼仕用書附候斗りにては、中々合點も難成かるべく候故随分く存命の内口授も可致候、右の書附心々他見無用ニ候間、随分工風して幾度もく焼、竟可被申候、繪の具等も竟被申候上にて右の下地に書を附く具也

右庭燒 土薬 繪具の合方
乾山秘法 他見無用也 乾山



『本竈并内竈乾山秘法』は、縦七寸(二三、一サ)、横四寸五分(一四、八五サ)、三三葉。奥書、内題はなく、書写年代も不明である。脇本葉之軒・東京美術研究所旧蔵とされる。

内容は『陶器密法書』に同じであるが、蔵書印に「静勝文庫」とあり、文化文政期、掛川藩五代藩守太田備後守資始(二七九九—一八三四)の文庫と推定。所蔵の経緯は不明である。土のこと、産地と入手場所、絵具屋・箔屋・三条・五条の陶工、京都周辺の地名や店名、人名などがあり、上巻には「土拵用・寸法の支(并本かまもの歩へりのこと)・素焼の事・黒赤樂土の事・生類作り物の方・内焼(地ぬり)・白・赤樂地ぬりのこと・本焼(白ぬり)・内焼白樂の支・赤樂藥・黒樂藥」。下巻には「萌黄繪・上萌キノ方・紫繪・黄繪・赤繪・白繪・焼附畫具の部・緑青(萌キ)・紺繪・黄繪・紫繪・赤繪・金燒附・焼附物焼方」など。上段の一四図はその挿入図である。

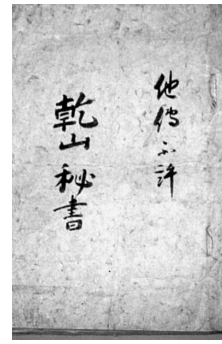
乾山焼は、時代を追って親しまれた。商標となつた画讀様式を簡略化したものの、内竈陶法色絵作品を主としたが、折から武家、富裕町人の文化・芸能活動への参加を力に、連歌・俳諧、茶会が盛行。集会・寄合には席画・席焼(庭焼)など、自ら絵を描く、やきものを造るなどの風流遊戯が流行する。絵師・やきもの師らは招かれて大名邸・富裕町人の屋敷へと参上。絵筆をとる、絵付け・窯焚きをするなど、生業であつた作画・作陶作業が娯樂の一つに加えられ、あちらこちらへと伝播する。樂焼の語には、

- 一、古い伝統に支えられた京都樂家の茶陶様式
- 二、乾山焼の代表となつた孫兵衛伝・釉下色絵付けの様式
- 三、席焼・庭焼など趣味の作陶

などの意が含まれる。手捏ねによる成形、既成素地を応用するなど、それに裝飾を施し楽しむが、限定された絵具、釉薬、庭内に設けた内竈によつて数時間ほどで焼き上がる。即興的、性急な江戸の文化人らの好みに合致。同じくして手引書・指導書なども多く出廻り、地方における茶人・俳人、富裕町人らは知識を蓄え、道具を誂え、作画・作陶に挑戦する。

乾山を佐野へ招請、同地の素封家大川頭道らの集いもその一つ、下準備には入谷村から土・顔料・素地を揃え、窯・窯道具、燃料などを調達。職人も商人も力を添えるが、晩年の乾山、その後を含め、「山」を名のり、やきもの造りを楽しむ人々があり、芸は趣味人の域を出ないが、長山・応山・山・山・山・山・山などの名が残る。「乾山」を名のるのではなく、様式の模倣を試みたものでもない。

猪八陶法書 写本
2、他傳不許『乾山秘書』 針生乾馬家



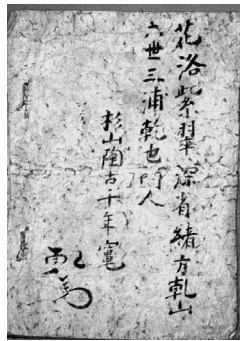
①



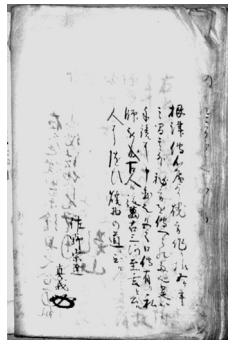
⑨

『乾山秘書』の奥書である。
 ⑩ 右書残し候焼物細工 下地土 寸焼仕用
 書附候斗りにてハ 中々下点も難成るべ
 く候故 随分ノ存命の内 口授も可致候
 右の書附 必々他見無用ニ候間 随分工
 風して幾度も焼 寛可被申候 繪の具
 等も寛被申候上にて 右の下地に面ヲ附候
 具也
 右焼爐 土 藥 繪具の合方
 乾山
 乾山秘法 他見無用也
 根津傳心庵より焼方 作り様 五ヶ年の
 間 其外秘方を傳へられたる也 是ハ手続

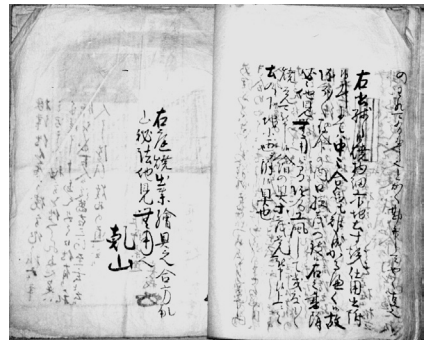
⑪ 杉山陶古千年竈 乾馬
 に申置也 色々口傳有り 私師被成古人候
 後 萬古三阿至玄と云ル人に法ひ 焼物の
 道ニ至ル 佐野宗達真義(花押)
 花洛紫翠深省緒方乾山六世三浦乾也門人



⑫



⑬



⑭

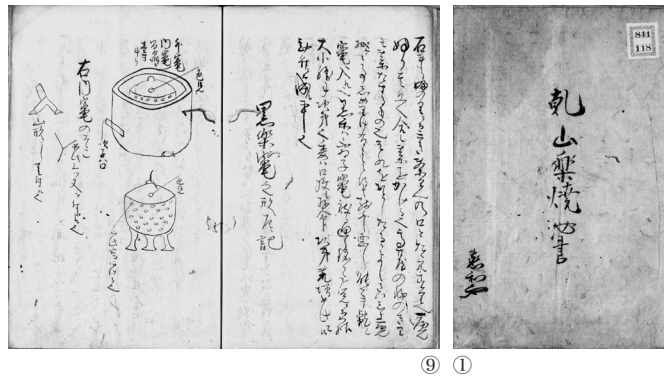


『陶器写』 筆者・成立
 年不明 針生家藏
 右図は『万宝全書』の
 茶碗図書写である。同図
 は大川頭道『陶器傳書』
 にもあり、陶工・作陶家
 には興味のある全書で
 あったと思われる。

慶応元年(一八六五)、乾也は突然伊達藩を改易と
 なる。困窮し、秦野窯・逸見窯・小菅窯・飯能窯
 などに関与、深川では輸出向けの絵付け仕事も請け
 負ったという。明治八年(一八七五)、向島長命寺畔
 に自窯を築き、没年までの一四年間をやきもの造り
 に没頭するが、生活に追われ、材料費も滞るなど、
 遂に貌庵からの伝書一式を松沢某に質入する。乾山
 陶法一冊(但初代乾山口述二代筆記・同和歌懷紙一幅・
 同辞世和歌並偈一葉・譲り状三通であり、三年後大
 槻如電が受け出すが、和歌懷紙・譲り状一通を残し、
 すべては関東大震災によつて焼失したと推定。
 乾也は、伊達藩に招かれた折、同地の産業調査・
 堤焼の復興にも関与した。堤焼庄子源七郎義忠・
 乾馬(一八二二―九五)との出会いとなるが、堤焼
 は元禄期、江戸の陶工上村万右衛門を招き、茶器・
 雜器を製したことが始まりという。地名から杉山焼
 と呼ばれたが、乾馬は弘化元年(一八四四)以来安
 代縫殿之助に陶法を学び、安政五年(一八五八)乾
 也からは乾馬(午藏生)の名のりを受ける。初代乾
 馬には子はなく、針生家は弟祐藏が再興し今日に至
 るが、乾馬は俳諧を嗜み、明治三年作陶伝習のため
 江戸に向かう。乾也とも再会するが、陶法書『乾山
 秘書』巻末には佐野宗達真義なる人物の名と花押が
 ある。伝心庵のもと五年間を作陶修業、師の没後、
 萬古三阿至玄に法を学ぶとあり、佐野宗達は「萬古
 三阿至玄」を師とするが、三阿から陶法を学び、当
 書を書写したのか。萬古三阿至玄となれば『陶器
 密法書』の跋文を書いた人物である。乾馬の奥書は
 用紙も異なり、後の付け足し、文字も本文筆者とは
 相違する。乾也所持の初代口述二代筆記であれば内
 容も異なるはずである。(佐野宗達は「御教寄屋坊主」
 にその名がある。当書の入手経路は佐野宗達関係か、俳
 諧仲間との交流によるものか)

猪八陶法書 写本

3、『乾山樂焼秘書』 根岸家旧蔵



⑨ 『乾山樂焼秘書』の奥書である。
 ⑩ 右書残し候焼物細工 下地土 寸焼仕用 書附候斗リニてハ 中々合点も難成かるべく候故 随分く存命の内 口授も可致候 右の書附 必々他見無用ニ候間 随分工 風して幾度もく焼 覚可被申候 繪の具 等も覚被申候上ニて 右の下地に画ヲ附候 具也

右庭焼 土 藥 繪具の合方
 乾山秘法 他見無用也 乾山



表紙には『乾山樂焼涵書』とあり(涵は「秘」、名(慈和か)と花押(不明)がある。写本筆者は不明であるが、乾山焼内窯陶法を纏めたものである。内容・形式はともに『陶器密法書』、『本電并内竈乾山秘法』、針生家蔵『乾山秘書』に同じくするが、埼玉県大里郡吉見村字青山(かみやま) 青山文庫、根岸武香(一八三九—一九〇二)旧蔵、昭和三年国会図書館に委託、のち同六年寄贈された。江戸末期明治初期、根岸邸内には三浦乾也(一八二一—一八九)とその門弟奥村乾升(升太郎・根岸住の陶工)によって内窯が築かれた。武香は陶磁器の愛好家であり、古美術研究、蒐集にも熱心と伝承。父友山以来、同家には文人墨客が集い、文芸サロンの様相を呈していたという(同書の入手に関係するか)。

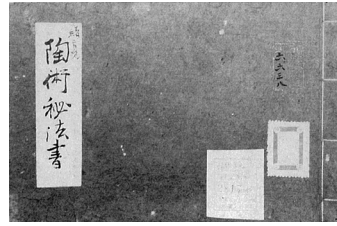
同書は乾也所持の写本と伝承。そうであれば入谷窯初代口述二代筆記の陶法書である。が、内容は『陶器密法書』に同じくし、二代乾山猪八が清吾のために書いた書ということになり、乾也の所持したものではない。

天保七年(一八三六)、乾也は師とする五代目乾山西村貌庵(みくわ)から乾山陶法(初代口述二代筆記)一冊と「乾」字許状(他を与えられた。貌庵は文政七年(一八二四)四代目乾山酒井抱一から「乾山名前譲状・伝書一冊・懸物一幅(略)」を譲り受け、天保七年、井田吉六・関根辨二郎・三浦乾也ら三人に「乾」字許状を与え、「乾山世代書」(善養寺)を著した。

- 一 初代乾山紫翠深省(右者准后宮様京師より御召連被成候)
- 一 弟子二代目乾山次郎兵衛(入谷出生之人)
- 一 弟子三代目宮崎富之助(同人谷村)
- 一 四代目雨華庵抱一上人
- 一 五代目歌仙庵貌庵宗先(金竜山中住居)

以上、江戸における世代であるが(二代目次郎兵衛・三代目宮崎富之助とある)、貌庵には作品はなく、貌庵二男玄々斎が樂焼を始め、井田吉六へ入門。吉六(一七九一—一八六二)は乾也の養父、乾山焼模倣には菊流水図手焙が残る(於野之下州佐野庄松柳堂青英亭而雍州乾山陶隱深省造 吉六摸之)。吉六の樂焼を手伝い乾也にも貌庵との縁が生ずるが、乾山風の笠翁細工を始まりとし、安政三年(一八五六)には仙台伊達藩における開成丸造船に関与、晩年になり向島長命寺に自らの窯を築く。若年時には深川八幡宮の石井家に婿入り、広め書には「茶具一式 置ものるひ 文ぼう道具 提物 笠翁細工その外任御好の器物 席上焼入御覧升 深川富ヶ岡社地乾山正統石井乾也」とある。席焼、乾山正統と記しており、武家の注文、大名家の席焼に招かれてゆく。

(三) 初代口述二代筆記・乾也伝 写本
1、緒方流『陶術秘法書』 彦根城博物館



一 藍青の法、白緑青の法、
一 右石見極の法、
一 竹筴の法、
一 入浴の法、
一 白緑青の法、
一 白緑青の法、
一 花紺青の法

一 唐土 百目
一 日野岡 拾八目
一 白玉 七目
一 地薬の法 百目
一 白緑青の法 百目
一 日野岡 拾八目
一 白玉 七目

一 唐土 百目
一 日野岡 拾八目
一 白玉 七目
一 地薬の法 百目
一 白緑青の法 百目
一 日野岡 拾八目
一 白玉 七目

② ①

⑩

一 藍青の法、
一 右石見極の法、
一 竹筴の法、
一 入浴の法、
一 白緑青の法、
一 白緑青の法、
一 花紺青の法

一 唐土 百目
一 日野岡 拾八目
一 白玉 七目
一 地薬の法 百目
一 白緑青の法 百目
一 日野岡 拾八目
一 白玉 七目

⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

① 緒方流陶術秘法 上薬之法

- 一 唐土 百目
- 一 日野岡 拾八目
- 一 白玉 拾八目
- 一 地薬之法 百目

- ② 一 白繪土 百目
- 一 日野岡 六拾目
- 一 白玉 五拾目
- 一 唐土 八拾目

- 一 青薬之法 六分
- 一 緑青 七分
- 一 唐土 壹匁五分
- 一 白玉 壹分

- ⑩ 一 藍呉洲ハきめよく光り有所宜 右品を素焼之器に入れ能焼 水を器に入是へ取 夫方入鉢にて細末致置相用
- 一 白緑青製法
- 一 黒く相成候を用

- ⑨ 一 花紺青
- ⑧ 一 むらに薬解候間是を能々色を付左之圖色之とく二相成候ハ、宜しく 色見之穴方覗く事

- ⑦ 一 右乾山青緑焼法并真製 上薬之義 此度貴殿御執心二付傳受致候 尤家元秘伝之書附二候
- ⑥ 一 改正割印

- ⑤ 一 請相渡候間 以来他見被致間敷候 右之件如真 又相違有間敷附件 又御叟傳受は追々御出情次第 相傳可申者也
- ④ 一 嘉永元年
- ③ 一 四月緒方流陶工乾也
- ② 一 印・花押

近江国彦根藩藩主、江戸末期の幕府大老井伊直弼(二八二五―一六〇)は久しく部屋住の身であった。算術研究、茶の湯は片桐宗猷に学び、石州流の茶人としても知られるが、従弟に宛てた書状によれば、やきものは天保一三年(二八四二)には薬焼による茶道具などを製していたことがわかる(『大日本維新史料類纂之部井伊家史料』東京大学史料編纂所)。現存する薬焼は多くその当時のものとされる。

三浦乾也との出会いは弘化三年(二八四六)江戸において始まった(兄宛直弼書状)。嘉永元年(二八四八)四月、乾也からは『陶術秘法(書)』を受理したが、大名間には席焼が流行。乾也はしばしば武家に招かれ、製陶を指導、焼成の任にあたるなど、同三年直弼は乾也の席焼に参加、藩医上田成伴宛ての書状によれば(北村寿四郎著『湖東焼の研究』一九二五年刊)、(ルビ筆者)

当地に而 乾山の跡をつぎ乾也と申 至而輕き焼物を致候
大名 招き之節 杯も處々へ參り 席焼を致申候
誠に手ぎは成事にて 此品も先比同席中へ參候節之席焼に有之候

とある。乾山焼の継承者、手ぎわも良くやきもの製作・焼成に当たるが、大名家ではしばしば席焼を行い、直弼も楽しみにそれらに参加したことが知られる。緒方流『陶術秘法書』は、直弼による乾也所持、陶法秘術の写本である。基盤は「初代口述二代筆記」。「上薬之法・地薬之法・青薬之法・黄薬之法・赤薬之法・白薬・黒薬之法・紺青薬之法・唐土見極の事・白玉見極の事・白繪土製法の事・青緑製法の事・唐白目製法・藍呉洲製法・白緑青製法・花紺青・水釉薬・絵具の調合を中心に、席焼、またその失敗などを鑑み、伝書では直弼の興味に従って顔料・素材の見極めと品質管理、製法と焼成の火加減などを述べる。直弼には居相術・山鹿流兵学・槍術などの免許状・秘伝書も残る。



(上) 直弼蔵 薬焼窯内窯・色見穴蓋・土鎮 彦根城博物館
(中) 直弼 薬焼 薬屋香合 買川玄悦記念彦根美術館
(下) 直弼 薬焼 五徳形蓋置 彦根城博物館

五、陶法書の比較
内窯掛葉（上薬）・絵具の調合中心

乾也伝		猪八伝	初代乾山伝		
緒方流 『楽焼傳授書』 『陶術秘法書』		『陶器密法書』	(初代口述二代筆記) 『内窰秘書』	大川手控 『陶器傳書』	押小路伝 『陶工必用』
唐土 百目 日岡石 三十五目 白玉 十匁	唐土 二百目 日岡石 二十八目 白玉 十八目	唐土 百目 日岡石 三十五目	白粉 百目 日岡石 四十目	唐土 (白粉) 百匁 日岡石 三十五匁 三十七八匁	白粉 百目 日岡石 四十目
唐土 十目 黒呉須 四匁 白玉 一匁	藍呉須 一匁 唐土 三分 白玉 三分 白緑青 二分	鉄粉 百目 南京葉(呉須) 十匁	カナハタ 十匁 南京呉洲 三匁	鉄粉 十匁 茶碗葉(呉須) 三匁	金ハタ 十匁 南京呉洲 五匁 日岡石 四匁 (乾山一流にはびいどろ入り有)
唐土 八匁 日岡石 十五匁 白岡石 二匁 緑青 六匁 (青としている)	唐土 七分 白玉 一匁五分 緑青 六分 (青としている)	白粉 百目 日岡石 三十六匁 緑青 二十目 (薄黄としている)	白粉 十匁 日岡石 二匁五分余 (萌黄としている)	唐土 十匁 日岡石 三匁五分 岩緑青 一匁三分	白粉 十匁 日岡石 四匁 緑青 一匁二分
唐土 十五匁 白玉 十五匁 花紺青 十匁	唐土 五分五厘 白玉 一匁 花紺青 一匁	白粉 四十匁 白玉 百目 紺青 六十匁 (青としている)	白粉 十匁 日岡石 四匁 花紺青 六匁	唐土 十匁 日岡石 三匁五分 花紺青 六匁	白粉 十匁 日岡石 四匁 唐紺青 六匁
黄土 八匁 唐土 二匁 白岡石 二匁 弁柄 一匁	黄土 十目 唐土 五分 白玉 二分 ヘンカラ 六分	黄土 十匁 白粉 二匁	土朱 一味	黄土	山黄土 一味
唐土 五十目 日岡石 百目 白岡石 三十目 白絵土 百目	唐土 一匁五分 唐土 二分五分 唐白目 一分 紅カラ 一分	白粉 四十目 白玉 百目 唐白目 三匁	白粉 五分(匁) 日岡石 五分(匁) 唐白目 一匁(匁)	唐土 十匁 日岡石 三匁五分 唐のしろめ 三分	白粉 十匁 日岡石 四匁 唐白目 三分 (別にビードロ入り有)
白玉 三十目 唐土 百目 日岡石 三十目 白絵土 百目	白玉 五十目 唐土 八十目 日岡石 六十目 白絵土(白土) 百目	白粉 四十二匁 白玉 百目 紫ゴス 十匁	白粉 二匁 紫ビードロ 十匁 白ビードロ 十匁 白粉 二匁 豊後土 五匁 (白粉・煙硝・水戸火打石の白絵具もある)	唐土 十匁 日岡石 三匁五分 茶碗葉(呉須) 六分	白粉 十匁 日岡石 四匁 南京呉洲 五分 (別にビードロ入り有)
唐土 三十目 日岡石 百目 白岡石 三十目 要セズ)	唐土 三十目 日岡石 百目 白岡石 三十目 要セズ)	白粉 百目 白玉 三十目 信楽白土 百目	硝子(びいどろ) 三十匁上に二十匁 白フン五分上二 一匁五分 高原白土 十五匁	唐土 十匁 日岡石 三匁五分 茶碗葉(呉須) 六分	白ひいどろ 百目 白粉 三十匁 白土 豊後土 五十匁 薄浅黄・薄萌黄・薄紫
唐土 三十目 日岡石 百目 白岡石 三十目 要セズ)	唐土 三十目 日岡石 百目 白岡石 三十目 要セズ)	白粉 百目 白玉 三十目 信楽白土 百目	硝子(びいどろ) 三十匁上に二十匁 白フン五分上二 一匁五分 高原白土 十五匁	唐土 十匁 日岡石 三匁五分 茶碗葉(呉須) 六分	白ひいどろ 百目 白粉 三十匁 白土 豊後土 五十匁 薄浅黄・薄萌黄・薄紫
唐土 三十目 日岡石 百目 白岡石 三十目 要セズ)	唐土 三十目 日岡石 百目 白岡石 三十目 要セズ)	白粉 百目 白玉 三十目 信楽白土 百目	硝子(びいどろ) 三十匁上に二十匁 白フン五分上二 一匁五分 高原白土 十五匁	唐土 十匁 日岡石 三匁五分 茶碗葉(呉須) 六分	白ひいどろ 百目 白粉 三十匁 白土 豊後土 五十匁 薄浅黄・薄萌黄・薄紫

—凡例— 乾山・乾山風陶器、内窯陶法の掛葉・絵具の比較である。技術の継統と否、世代の相異などを考察。
①『陶工必用』『押小路伝』の順序・絵具・種類を基礎とする。
②比較のために調合原料の配列を変更。
③数字は漢数字に置き換えた。
原料名は初代乾山書に従ったが、陶法書には書写故の異字・誤字・誤写が認められる。

陶法書の比較・考察
内窯掛葉（上葉）・絵具の調合中心

1、乾山伝：

伝統的な内窯掛葉・絵具の調合である。孫兵衛伝を基本とし、絵画的表現を試みた乾山独自の構想に基づくが、絵師の用いる和絵具の風趣、味わいが陶器に活かされる。紙絹同様、器態は平面・角皿が主体。孫兵衛伝の内窯絵具にはビードロ（白玉）が入らない。仁清焼など本窯上絵具とは相異、光沢は押さえられ、盛り上がりもなく、ガラス状の粘着感もみられない。乾山は白・黒・一部の色絵具にはビードロを用いるが、一流とする絵具には白・黒・二藍・濃緑・鼠・桃・朽ち葉・朱墨・薄柿・薄浅葱・薄明黄色などがある。孫兵衛・乾山伝は二冊の自筆陶法書、大川頭道手控、初代口述二代筆記に現れる。2、猪八伝：

猪八伝は、押小路伝・乾山伝が基本である。が、半分の調合にはビードロが入り、猪八独自の交趾様式、色絵具の惣地塗りには不可欠の顔料であった。その効果は絵具の密着、色彩効果に発揮される。3、乾也伝：

初代口述二代筆記の伝書が基盤。乾山・猪八の調合に由来、「乾也伝」としたが、調合の省略に特徴がある。顔料、分量の割合に相違はあるが、乾也伝井伊直弼筆『陶術秘法書』、六世乾山筆『楽焼傳授書』は基本的に同じである。大半の調合にビードロを用いるが、絵具の安定、素焼素地にも簡単に密着するなど、失敗を防ぐ工夫であり、別して素人・趣味人、席焼には適していた。

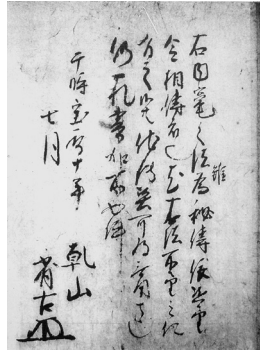
乾山は、内窯焼では孫兵衛伝ビードロなしに始まり、独自の工夫として白・黒・黄・紫にビードロを入れる。猪八はそれを継承、乾山の「描く」とした手法は、「塗る」手法へと転換されるが、失敗の少ないビードロ入りは、やがて内窯用絵具の標準として伝えられてゆく。

初代口述二代筆記陶法書・その他の乾山焼関係陶法書

乾山没して京都では二代猪八が活躍。江戸では入谷村二代乾山次郎兵衛（乾山世代書）が名跡を継ぐ。

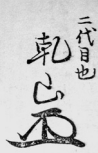
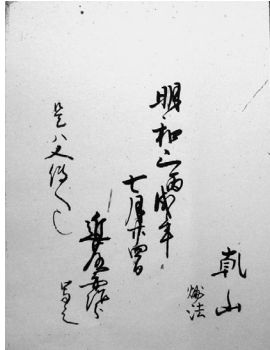
この頃から多く手書による陶法書が現れるが、大半は楽焼陶法であり、国書総目録には四〇種ほどの「楽焼」書名が認められる。『楽焼秘囊』に基づき、「百工秘術」を参考にしたものを筆頭に、絵具・釉薬の調合、樂家に関する系図・情報、乾山焼関係の内容を具えることに特徴があり、その一冊に『楽焼秘傳・好古樂記』がある。

同書は『楽焼秘囊』類似の陶法書・「色樂代銀積」・「百工



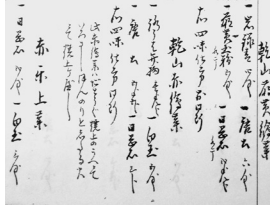
『宝曆十年乾山省古（花押）』
『楽焼秘傳好古樂記』小林源兵衛著
東京都立中央図書館・加賀文庫

『乾山焼法 明和三年丙戌年』近藤安治郎写
『楽焼秘傳 好古樂記』小林源兵衛著
東京都立中央図書館・加賀文庫



『二代目也』
『楽焼秘傳』国会図書館

『乾山焼法 明和三年丙戌年』近藤安治郎写
『楽焼秘傳 好古樂記』小林源兵衛著
東京都立中央図書館・加賀文庫



秘術』類似の「土器秘傳書」・「内窰秘書」の四部から成り、筆致も異なり、合冊本形式である。著者は小林源兵衛。「好古」なる人物は俳諧・書画に親しみ、やきものは樂吉左衛門隠宅手代紋右衛門より伝を得るとあり、奥書は二カ所にみられる。

① 右内窰之法雖為秘傳 依懇望令相傳者也 尤右法所望之仁有之候共 作傳堅可為無用事也 仍一札書加所如件 干時宝曆十年七月乾山省古（花押）

② 乾山焼法（二代の筆か） 明和三年丙戌年七月廿四日 近藤安治郎写之 是ハ又傳之也（傍線筆者）

とあり、宝曆一〇年（二七六〇）の奥書は『古画備考』に照合、年代・書体・花押から二代乾山、名は「乾山世代書」に照らし次郎兵衛と判断するが、明和三年（二七六六）は二代目乾山から弟子宮崎富之助へと三代の譲られた年である（『古画備考』）。書写した

近藤安治郎は不明であるが、乾山陶法書の拡がりを示唆。内容も内窯用掛葉一種、絵具・金泥を含め一九種。うち掛葉及び基礎的絵具七種（黒・緑・紺・赤・黄・紫・白）は孫兵衛・乾山伝に同一。混合絵具（鼠・薄浅黄・桃色）も乾山一流に同じくする。内容がほぼ同一とあれば初代口述二代筆記に結びつくが、同書は関東大震災によつて焼失、確認は不可能である。

が、乾也受理の同書は、猪八ではなく、内容からも初代乾山の陶法であることが判明。長年の疑問であったが、乾也が何ゆえそれを「緒方流乾也」としたか。孫兵衛伝にはビードロが入らず、席焼によつて腕を磨く乾也には不向きな陶法であった。

内窯焼・趣味焼は、江戸後期から明治期へと人気を高める。関係陶法書も多々著されたが、大方は乾山陶法・色彩・調合が土台となり、乾山焼の解釈に興味の陶器としての評価が加えられる源となる。

おわりに

命の限りを自覚、人は今までとは異なる事柄に心を留める。

乾山も前年には大病、同年五月には寛永寺本坊を焼く大火に遭遇、求めに応じ陶法書を認め、佐野への遠出を決心したか。歩んできた道をふり返り、積み重ねた日々を確かめる。書くことが嫌いであれば、陶工が陶法書など認める気持にはならないであろう。文人を志した乾山の文字は力強く、熱意が籠り、行間には伝えたいというやさしさが滲み出る。

陶法を知る、が、それがどのように作品に結びつくのか。

技の背後には思いが潜む。仁清陶はそれだけで美しく、存在感がある。

乾山陶は見る者、扱う者に参加を求める。作品には余裕があり、人を招き入れる力がある。模倣をしても似せることのできない部分であるが、同じことを志しても、決して結果は同じものには至らない。乾山焼は乾山であるが故に生まれたやきものである。秘伝は人間乾山にあり、伝えたくとも事物に表現できるものではなかったろう。模倣をする。それはその人物の許容力、解釈による乾山風陶器である。

陶工はやきものを造る。造り続けて己れを知り、歩みを確認。心のあり方、あろうと思う所が写し出され、「無」が「有」となる瞬間を自ら掴む。

遠い昔、三年間の京都市立芸術大学の留学は夢のように過ぎ去った。土を探して歩き廻り、こつこつと掘って袋に詰める。窯場を訪れ、陶匠の技に見入り、窯・土・顔料、今日に至る万端のご苦労また喜びを伺った。師を想い、今なお炎に向かう友を思う。ご教導くださった多くの皆さま方に感謝の一語。ひしとありがたさを胸裡に刻む。

関東大震災により焼失。不可能と思われる乾也所持の陶法書「初

代口述二代筆記」を突き止めた。合冊本『樂焼秘傳』に「乾山省古」とあり、内容は二冊の乾山自筆陶法書・大川顕道手控『陶器傳書』に同じもの。銘と花押型は『古画備考』に照合し「二代目乾山」、貌庵筆「乾山世代書」により「次郎兵衛」の名を確認。結果、同書は猪八陶法書・萬古焼浅茅堂三阿の跋文のある『陶器密法書』、『密法書』と内容を同じくする『本竈并内竈乾山秘法』、『乾山秘書』、『乾山樂焼秘書』とは相異。江戸における乾山自らの内竈陶法であると判断する。

また針生家蔵『乾山秘書』巻末には「佐野宗達真義」なる人物の跋文を認めたが、宗達の名は「御数寄屋坊主組頭・同御坊主衆大概」に「佐野宗達・ねづ」（『文化武鑑』六）とある。師とする伝心庵没後、やきものを萬古三阿至玄に法うとあるが、萬古三阿となれば京都において清吾から『陶器密法書』を受理した沼波弄山孫、『密法書』の跋文を書いた人物である。萬古堂三世、今戸に住しやきもの製作に従事。俳人として「三阿亭・三阿法師」などとその名を知られ、芭蕉復古を提唱した大島蓼太へ織部写し「ももしき」の瓦（敷瓦）を製して贈るとある（『墨水遊覽誌』）。

時移り、針生乾馬も俳諧を嗜み、俳名は「千年竈其徳」。明治三年陶器伝習のため江戸へ出府したが、『乾山秘書』の入手には宗達関係、情報に精通したそれら俳諧人との交わりに因るものではなかったか。乾馬自筆の奥書は宗達跋文の後頁にある。別紙を貼り付け記しているが、表題「他傳不許 乾山秘書」とは同筆。が、本文及び宗達跋文とは書体が相異。内容も乾也所持「初代口述二代筆記」を写したものではない。

これら猪八関係陶法書の書写同一は何を意味するのであろう。伝播には萬古堂三世三阿至玄の関わりを推考する。

『陶工必用』に関しては、受理者として輪王寺宮家坊官進藤氏、後に矢田陪(部)氏の受理を推測。また大川顕道手控『陶器傳書』には乾山焼内窯陶法のほか、『柴焼秘囊』『百工秘術』『万宝全書』など刊本からの抜萃書写のあることを確認した。

参考文献

- 有田町史編纂委員会『有田町史』(陶業編二)有田町一九八五年刊
 Wilson, Richard. *The Art of Ogata Kenzan: Persona and Production in Japanese Ceramics*. New York: Weatherhill, 1991.
 リチャード ウィルソン・小笠原佐江子『尾形乾山―全作品とその系譜』雄山閣出版一九九二年刊・『乾山焼入門』雄山閣出版一九九九年刊
 内田博之編『江戸の花屋敷：百花園学入門』向島百花園創設二〇〇周年記念』東京都公園協会二〇〇八年刊
 宇野三吾『乾山の伝書『陶工必用』について』(世界陶磁全集六)中央公論社一九七五年刊
 大西政太郎『陶芸の伝統技法』理工学社一九七八年刊
 尾崎洵盛『陶説注解』雄山閣出版一九八一年刊
 加藤唐九郎校註『茶器弁玉集：全』(小野賢一郎編『陶器全集』)陶器全集刊行會一九三四年刊
 河原正彦『乾山』(日本の美術一五四号)至文堂一九七九年刊
 Clunas, Craig. *Pictures and Visibility in Early Modern China*. London: Reaktion Books, 1997.
 京都国立博物館編『京焼―みやこの意匠と技―』二〇〇六年刊
 五島美術館編『乾山の絵画』一九八二年刊・『光悦：桃山の古典』二〇一三年刊
 小檜山一良『地中の京焼』リーフレット京都』二四三号京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館二〇〇九年刊
 左海祥二郎編『昔の茶懐石―如心斎の茶会記から』『同門』四三二号二〇〇七年刊
 宋應星撰 三枝博音解説 藪内清訳注『天工開物』十一組出版部一九四三年刊
- 篠崎源三『佐野乾山』窯芸美術陶磁文化研究所一九四二年刊
 鈴木半茶『乾山陶器釉法伝書研究』窯芸美術陶磁文化研究所一九四二年刊
 田賀井秀夫『乾山陶法の秘伝―入門・乾山自筆『陶工必用』』全国出版一九八〇年刊
 富本憲吉『柴焼工程』采文閣一九三〇年刊・『乾山の『陶工必用』について』『大和文華』一三号一九五四年刊
 Nakanishi, Tetsuya and Izawa Eiji. "Evolution of Silver-smelting Technology of Japan in the Middle of the Sixteenth Century," *ISIJ International* 54:5 (2014, 1093-1097).
 野村重治『陶工乾山代數考』『書画骨董雑誌』五五号一九一二年刊
 西山松之助『家元の研究』(西山松之助著作集第一卷)吉川弘文館一九八二年刊
 満岡忠成他『陶工必用―乾山自筆陶法伝書』便利堂一九六三年刊
 MOA美術館編『光悦と能：華麗なる謡本の世界』一九九九年刊
 脇本楽之軒『乾山陶法書・続・終』『画説』六〇・六二・六六・一九四一―四二年刊

